

北緯略測図

1993.10

所在地 南陽市宮内字庖瘡神堂外

築城者 不明

築城時期 慶長期

参考文献 『東置賜郡史（下）』『南陽市史（上）』および編集資料00『東北の熊野』

概要

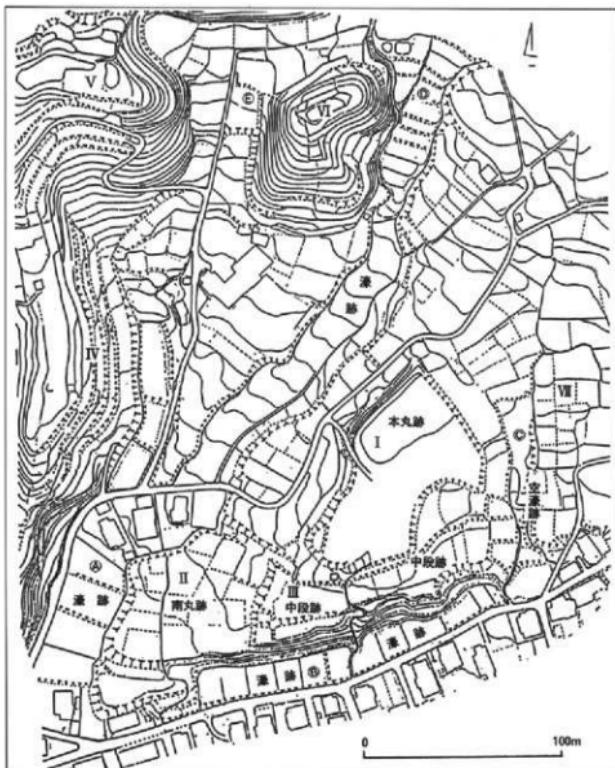
宮内熊野神社の奥（北）、菖蒲沢という集落で、いかにも古城らしい跡形を残している。いま、果樹園・水田・畑地・住宅地になっている。東側は慶海山（昔は館、いま公園）その北は果樹園で、標高370mの高日向山麓まで続く。西側も山王山（標高300m）から尾根が、北館の奥まで連なる。本城は、この北側のゆるやかな斜面と、丘地を利用して築かれたものである。標高は、町の在所が250mに対し、本丸が286mある。図面は、昭和58年市教育委員会が測量作成したものと、昭和50年頃発見された江戸中期に描かれたものと思われる、宮沢城絵図の双方を掲げる。二つを照合しながら見ると、築城のあらましがよくわかる。先ず、城絵図によって構えをみると。

城の本丸への道は二つ。大手丸から南丸、そして本丸に通するもの、も一つは、大手丸から中段そして本丸へ通するものである。水堀は、本丸を囲む巾2間（3.6m）のものと、城全体を囲む巾15m～28mのものとあったが、絵図作成時はすでに水田になっていたことがわかる。本丸の広さは北東から西南へ70間余（約126m）、西南から南東へ70間余（約126m）、南東から北東へ40間余（約72m）と記されている。本丸の北よりに井戸、南の方に桜が三本植えてあり、これは慶長3年に植樹と伝え、絵図にも示されている。三桜城はこれから名という。本丸と水堀の間に築土手（築土圍）外側は険しい切岸となっている。本丸から蘿屋敷跡へ通する道があり、巾2間半（約4.5m）の深い空堀がある。次には、南陽市測量の図面と現状を見てみる。

便宜上、それぞれの曲輪群に第I～VIIまでの番号をつけ、他はA～Eまで付した。第Iは本丸で、その南の曲輪は一段低く果樹園、第IIは南丸。第IIIは中段跡で畠と果樹園、第IVは図面のように階段状曲輪で、いま桐树林、ここを「南館」とみた。地名はこの北側を含めイモガミ堂。第Vは寺屋敷絵図にある蓬萊院跡である。第VIは絵図には記されておらず、濠の状況から宮沢城の範囲内の巷とみ、仮に北の丸とした。東西60m、南北90m、頂上は椿円形で長軸20m、単軸9mある。中腹に帯状の曲輪が5～6本、通路は西北からの七曲がりである。Dの位置は泥田らしく、いまヨシが生えている。第VIIは蘿屋敷で一段高い。ABは水田、Cは果樹園である。この城は南斜面を利用しているために、測量図にみられる通り、たとえ水堀でも南と北は何メートルと高さが違っている。

築城者は不明だが、いつ頃から大津郷次や美作守・土佐守にわたって在城かも不明、慶長3年（1598）尾崎重誉が城主になり、間もなく福島へ移ったという。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗）



宮沢城略測図（南陽市教育委員会作製 昭和 58 年 3 月）

1983.10



宮沢城（三棱城）絵図（赤湯 薩野宮治所蔵）

所在地 南陽市金山字平館

築城者 不明

築城時期 不明

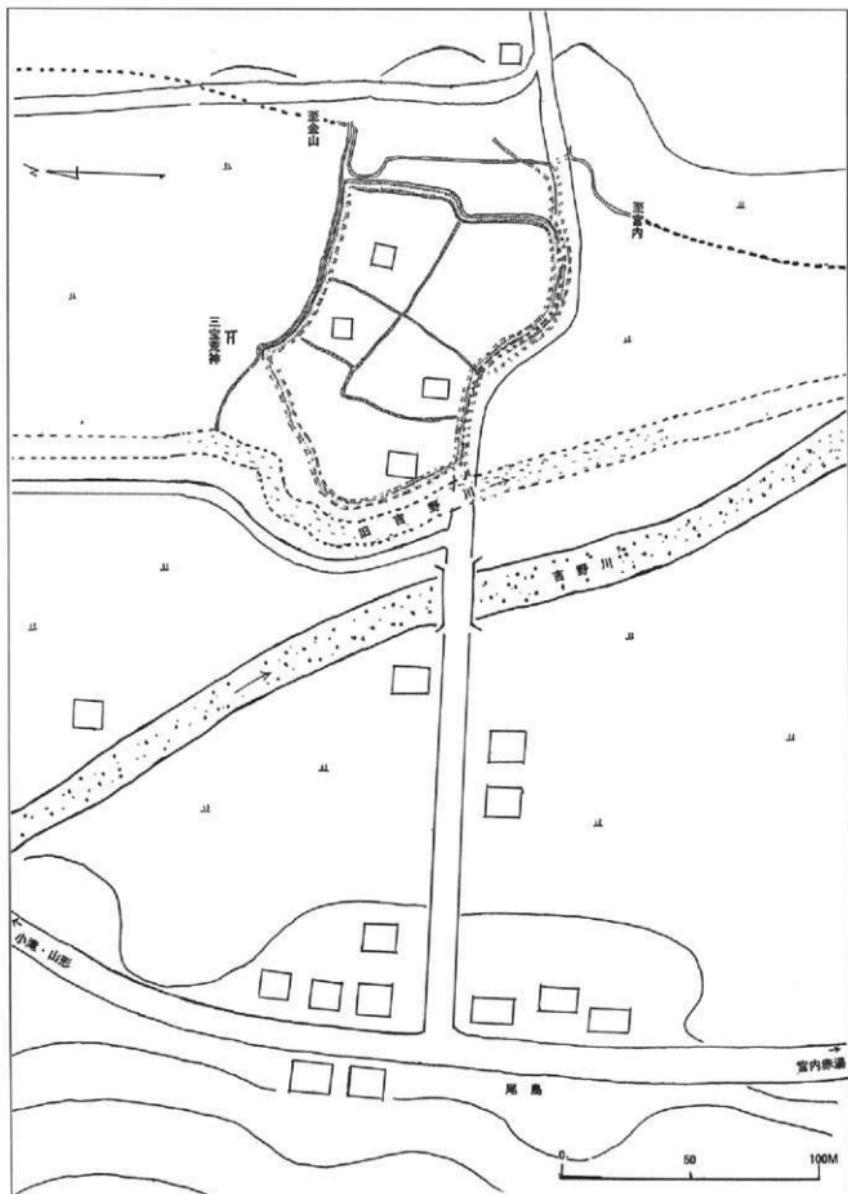
参考文献 『東置賜郡史 (下)』『南陽市史 (上)』『宮内町の文化財』

概要

「平館」は、地名としてそのまま呼ばれている。宮内と金山の境界地、小滝街道から東へ280m 吉野川のほとりに位置する平地に築かれた平城(館)である。標高 259.5m、近くの水田と比べ差高1m 程しかない。館の広さは記録なく、明治8年の字限図によると約5反5畝、5,400 平方メートルとなる。吉野川の古記録に、元和(1615~1624)・元禄(1688~1704)年中吉野川は大洪水で、河流・地形が一変したとある、と伝えられる。これによると、館付近の吉野川の流れは、当時はもっと東側を流れており、いま上流の方の川跡をたどれる地形になっている。また、「旧小滝街道」は、館の南方で吉野川を渡り、館の東側山脈を通って北上したという。この2点を基本として、明治8年字限図をもとに、現場地形と照合、館の縄張図を作成した。

これによると、館の形は不整四角形で長軸 150m、単軸 80m と小規模である。館の三方を水堀とし、うち西側は吉野川を充て、他の水堀は市が広いところで數 m はあったようである。この水堀の水源は、東の山崎であった。今の灌漑用水は、吉野川の上流から取水した堰の水が加わっている。館は、水堀の内側に土塁を築いて防衛に役立てたようである。また通路は、旧小滝街道から分かれ、大手口から館内に入れた。搦手は、この道路の北端付近と思える。館の鬼門方向に、神社等をさがしてみたが、発見できず、北側に記されている「三宝荒神」について由緒を調査したが確かでなかった。この館の築城について東置賜郡史(下)は、「鉱山及び小滝の守りとして云々」と述べている。南陽市の山地一帯は、中世から江戸時代にかけて鉱山のさかんな地であった。中には、平安末期に試掘といふところもある。山崎の吉野・川樋・大洞・金山・宮内秋葉山付近は歴史が古く、鉱夫の居住地である千軒長屋など多くあったという。吉野地方は、金・銀・銅・船・亜鉛などの採鉱に恵まれ昭和48年まで続けられていた。小滝口は、旧米沢領と最上領の境地とて、重要視していた。ここには「小滝館」その背後に「男館」「女館」も配し、取締っていた。慶長3年(1598)上杉氏越後より会津へ国替え時、家臣色部與三郎がここへ3・4年住み米沢へ引揚げたという。よって館名も「色部家館」の名が残っている。色部氏が米沢へ移って後、この館は火災で鳥有に帰したという。この館の付近に地名として官代林・厘敷等が残っている。本館の近くには、南に丸山館、西に慶海山館・宮沢城・北館がある。中でも宮沢城は同年代で、上杉氏の国替時、城館主の兼務等もあったと伝えられ、深いかかわりがあった。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



平館（金山城・色部家館）推測図

1993.10

所在地 南陽市蒲生田字館の内

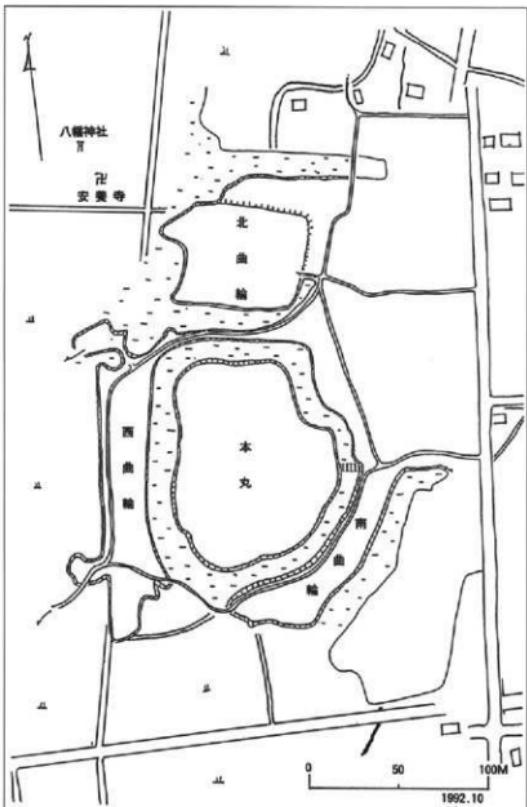
築城者 蒲生右近大夫貢穂

築城時期 永正期

参考文献 『東置賜郡史』(下)『南陽市史』(上)『沖郷村史』

概要

旧小滝街道沿い、現国道113号線の裏道となる。吉野川の扇状地で土地肥沃、いま水田・果樹地帯の中に館跡がある。昔、このあたりを吉野川が流れていった、と伝え、北は高く、南が低い。近くに河川跡の名残、湖沼を多く残す。標高230m、繩張り長軸350m、単軸230mある。館の北面100mに、築城者貢穂の菩提を弔う安養寺がある。享禄2年(1529)開山。大正末期の耕地整理で大方消滅したが、本丸、水堀は一部果樹園や水田で残る。明治8年字限図・現場・土地所有者の協力で図面作成する。郭は大きく5つに区分できる。本丸・北曲輪・西曲輪・南曲輪・根小屋である。根小屋を除いて、ほとんど水堀に囲まれていた。本丸は、蛤形で水堀、巾10~20m、本丸の南北120m、東西90mほどある。通路は東根小屋からで堀を渡る。掲手は西曲輪の南角と思われる。北曲輪は長四角で、長軸70m、単軸60mある。他の南・西の曲輪は細長く本丸を囲む。城主は二説あり、東置賜郡史は文禄(1592~1596)の頃、蒲生飛彈守氏郷の旗城。沖郷村史は安養寺記録により、蒲生右近大夫貢穂が文永2年(1522)ここへ住み、子貢穂は蒲生と改む。丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗)



蒲生田館跡測図

1992.10

所在地 南陽市宮内中向山

築城者 不明

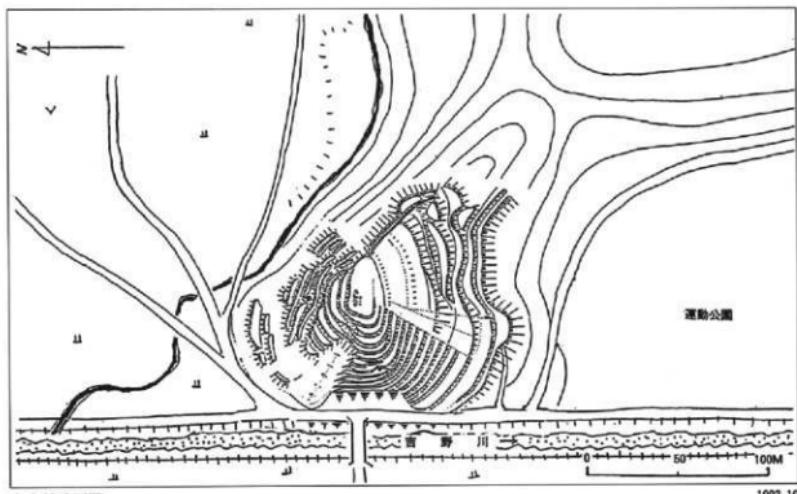
築城時期 不明

概要

向山は、宮内の東に目立つ秋葉山(361.3m)の麓、西丘陵斜面をいう。本館跡はこの一角の小山で、西麓を吉野川が流れている。標高288.5mで、対岸の平地との差高は38.5mと高い山城である。網張り図を見ると、特に西側の防衛に力を入れ築いたことがわかる。不整三角形で南北の長軸150m、単軸100mと小規模である。地形を利用した構えで、吉野川を水堀として役立てているようである。

昭和20年代から開拓が進み、丘陵地の各所を畑や果樹園に開いた。また、開拓に伴う農林道路の外、近くの向山運動公園等の新設で、道路の整備から館跡の土砂は削りとられつつある現状。残された遺構で表面化した。大手虎口は、西のいま果樹園通路と見た、南から七曲りに入る。樹形は開拓で消滅している。主郭は平坦で47m、15mの長四角か、これを囲んで階段状帶曲輪が目立つ。西に井戸曲輪が一つ、北に小さな土塁は樹形かも知れない。北麓は泥田で水堀跡を見るこの奥に底無しの湧水が二ヶ所あり、水量豊富ときく。主郭の西側に長さ6m巾2m高さ1mの石積みがある。子どもの頭大でまるい。防御用の石と思われる。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗)



丸山館略測図

所在地 南陽市大橋字館ノ内

築城者 伊達政宗（儀山）

築城時期 広永5年（1398）

参考文献 『日本史辞典』『米沢大年表』『大橋史料』

概要

大橋城の要害性。大橋城は、屋代川の溢流氾濫により堆積形成された帶状台地に、館堀をうがち城域を区画した。その城域も、3ヘクタールに及んでいる。またその堀幅も約16メートルを測る箱堀となっていた。また南堀（旧屋代川）約30メートルを天然の要害とした。また大橋城の立地する帶状台地を、はさむ南北城は、谷地と地名される通り、沼沢状湿地であり渡渉の容易性を拒否していた要害のひとつである。旧屋代川I南堀が東西にのびるが、西編IIに至るの経路は、南から、くの字状に折れる。このくの字状堀は、大手出丸Bを構成するために掘られた。本丸Aと出丸Bとは木橋を架し渡ったものと推測するものであるし、この大手は公式門である。また日常通用門には、第一の搦手虎口として西堀の北端付近の少しく張り出しのつけ根Cに、乾門（イヌイモン）が置かれ、防備とともに偉容をそえる櫓台など有ったものと考えられる。また北堀IIIの東端ちかくには、北門口と呼ぶ第二の搦手虎口Dをもうけた。此処よりは葦葦とともに湿地となるに駐留状跡を配して要害としながら、油小林方面への通がれ路であり、また隠くし路でもあった。本丸Aと出丸Bとは、南堀と西堀を結ぶ、くの字状堀によって分けられるが、このくの字状堀の掘り上げの土量をもって、出丸の東端Eと本丸の西南角に盛土され、樹形門FF'が置かれた。この本丸と出丸の双方向より監視、検問、横矢の備えがなされていたとみられる。大橋城はへいたんにして、ほとんど高低差はない。濠の深かみによってまたその土量を積むことによって要害性を構成していった。大橋城の東南、巽（たつみ）にあたる堀なりを、いまもカッパ渕と俗地名でよんでいる。また米沢地名選（文化元年）は、大橋城について、古瀬いまなおふかし三万石とのべている。概観するには大橋城は、武闘的城館の性格はうすく、むしろ政治支配的性格を色濃くし、特に格式を重視し築城され、城池面積の広大さとともに、出丸の構成がその偉儀をしめしている。

大橋城址の現況。近世からの食料増産の要請に応じ館堀のほとんどを水田に替えしめたが、また昭和35年国道13号バイパスにより西堀の大部分を失ったことに加えその後減反政策により畠地と化し、今日往時をしのぶ遺構も消滅の一途をたどりつつあるは、誠に惜しきがりである。

大橋城成立の経緯。伊達氏8代宗達、9代政宗儀山は、南北朝争乱に乗じ置賜に侵入して、長井氏を逐ったが、以降においても止まるところなく、近隣の諸城を侵かし奥羽の静謐を荼だしていた。

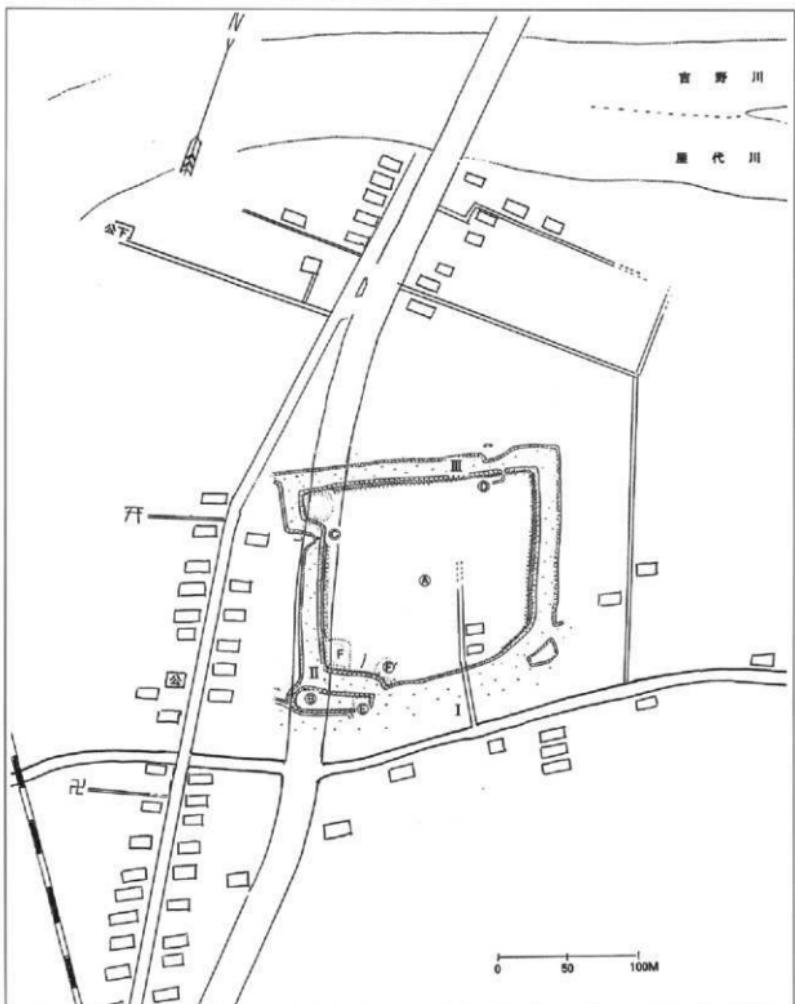
時に足利將軍家三代義満と鎌倉公方二代氏満との間に確執があった。ゆえに將軍家は、公方家の勢力の強化を危険なものとし、牽制するため、伊達氏の東國における擾乱挑撃を黙認していた。鎌倉公方は東国を治世經營するの責に任じられていた。ゆえに將軍家は、公方家の東国經營の粗獷の責任を問うという展開があった。鎌倉公方氏満は、伊達氏の暴を鎮撫するため、すなわち広永5年（1398）上野国片岡郡湯目郷より、臣下の從5位下、湯目修理亮資綱をして、その目付けに任じ、鎌倉公方の代官として下向せしめ、大橋城に居城せしめた。大橋城は、鎌倉公方氏満の下命するところにより、伊達氏9代政宗（儀山）に策かせたものである。

（丹野虎次郎）

湯目氏は、資綱、資重の二世代間鎌倉公方の代官の任に在ったが、三世重房に至って、伊達氏に臣従した。四世重清、五世重範、六世重澄、七世重久に至って、天文の乱に功ありと賞されて津久茂館を併せ領した。八世重康、九世景康の、天正十九年（1591）伊達氏の移封に従がい、陸前佐沼城にうつり任地とした。のち津田氏となつた。湯目氏は193年間大橋城に在城した。後廃城となる。

注 上野国片岡郡湯目郷は、・・・ 現 群馬県高崎市

陸前佐沼城は、・・・ 現 宮城県登米郡迫町



大橋城略測図

1988.12

矢の目館

213-031

所在地 南陽市郡山字沢無下

築城者 不明

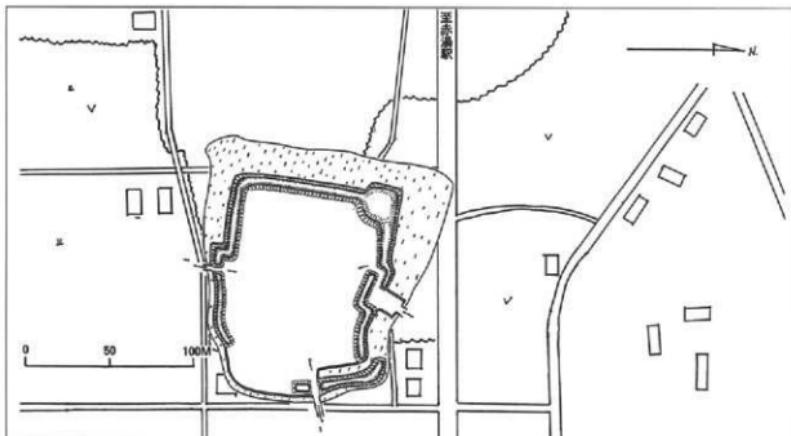
築城時期 战国期

参考文献 『冲鷺村史』『赤湯町史』

概要

赤湯駅近く、小松街道沿いの平地にある。標高 219m、戦後の耕地整理や宅地造成で、館の遺構は、水堀の一部と土塁の一部を残して全壊してしまった。明治 8 年字限図、現場の照合、さらに館内居住者古老の協力によって、絵図面を書いた。これによると、形は不整四角形で回りを水堀や土塁を築いている。この水堀は巾 4m から 30m と広いところもある。特に西側と西北を広くしている。本館の特徴は、この水堀のつくりかたであろう。館内の広さは、長軸 134m、単軸 95m である。この水堀の外に的場があったといい、北東の鬼門の方向に、一早不動を祀っている。この館の通路は大手虎口が東北の方向にある。左右に土塁が築かれているが、図に示されていないものの、どこかで樹形の役目があったものと思われる。北からは裏木戸、土塁の築き方が違い、館内は見れないし、樹形かと思われる。南は搦手にならうか。また、大手口の北に水堀のあるのは、馬浴やし場で馬を洗ったという。横の土塁は宅地造成前まであったと。西角の大きな土塁は、物見かも知れない。沖鷺村史・赤湯町史に、伊達の家臣矢の目市三郎の館跡とある。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



矢の目館略測図

1993.10

ごとんあと
御殿跡 213-032

所在地 南陽市大橋字御殿跡

築城者 不明

築城時期 室町前期

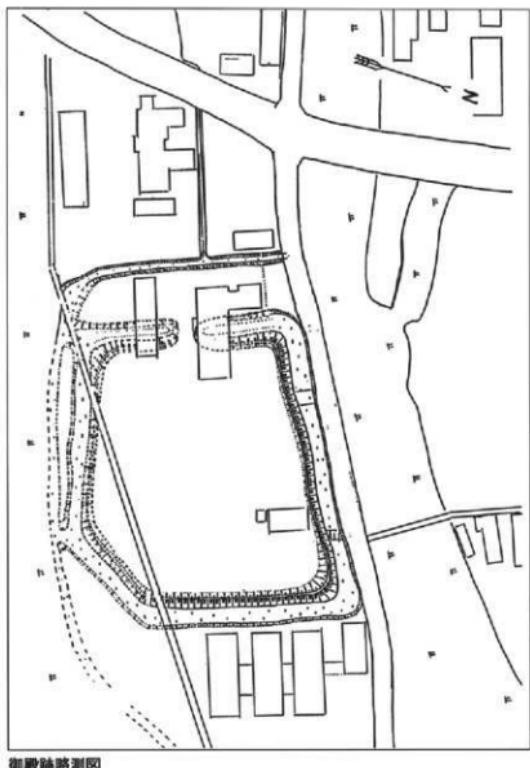
史 料 層塔の類とみられる笠状石、字限図、享保御塙絵図

参考文献 『大橋史料』『字限図』

概 要

大橋御殿跡は、旧、屋代川の溢流氾濫により、堆積形成された帯状台地の左岸に築かれた。大橋城とは、30米程の旧、屋代川を隔てるのみである。長軸約95米単軸約75米、その城池面積は、70アール余である。館堀を周囲に巡らし、堀巾は5メートルを前後している。また吉野川大橋堰よりの堰堀が御殿跡南辺の一部と西側に廻り二重の水堀にもみられるが、後世のものと考える。御殿跡は、名の示す通り、武備を専らとしたものではなく、大橋城の大殿の隠居城であったとする説が支持できる。御殿跡の成立期については、証とするものは無いが、大橋城主初代湯目修理亮資綱の後半から、二代資重の代あたりと目されるところである。また御殿跡について、南陽市図書館所蔵の享保絵図によれば、御殿跡芝原、御殿？と記されている。また御殿跡の西、北熊屋敷など御殿跡に付帯するものであったと考えられる。また御殿跡の南、②附近の水田約15アールほどの俗地名「身隠し」は掘手とみられる。御殿跡からの出土物については、横68cm 縦62cm 高33cmの笠状石のもので層塔に類すると思われる。凝灰岩製一個があるが、特定されていない。現在御殿跡は宅地および畠地となっている。また南側部分は昭和20年耕地整理により破壊をうけた。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門)



御殿跡略測図

0 50M

1998.12

所在地 南陽市柵塚字館ノ山・館ノ越

築城者 不明

築城時期 平安期

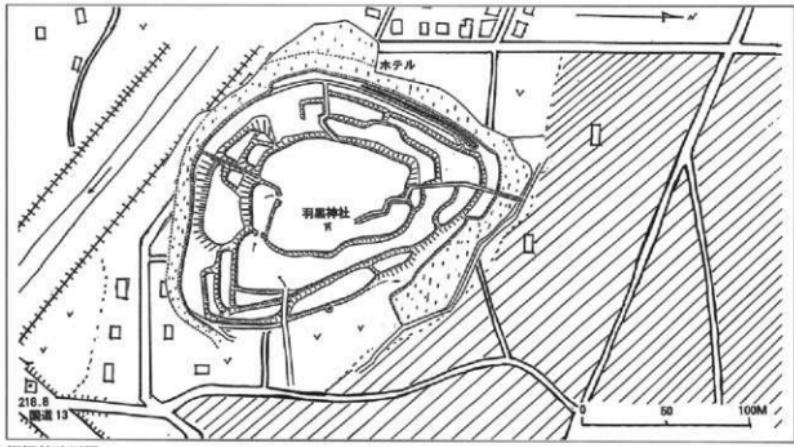
参考文献 『赤湯町史』『南陽市史 (上)』

概要

館跡は、国道13号線を北上、長岡を過ぎて吉野川の橋から左に見える小高い森である。長岡館とは500m しか離れていない。南は近く吉野川、東・北東が耕地で、他は住宅街、丘の一部に温泉ホテルも建てられている。標高は、耕地が216m に対して丘の頂上まで差高10m 程ある。館跡は、宅地・耕地の間発造成で、造構は東と北側曲輪の一部・南東角水堀の一部しかない。明治8年字限図と現地、および土地の古老の話で柵張図を作成した。これによると、周囲を巾8m~30m の水堀で囲み、通路は東西南北の四方にあたらしく、いま東と北に残され、卵形の丘城である。

館跡の主郭には、いま羽黒神社を祀り、この主郭は長軸95m 単軸70m の卵形である。ここを中心と地形を利用しながら、四方に階段状に曲輪を配しているのが特徴である。西側水堀の内側に、長さ80m の土塁を築いている。また、各通路には枡形が見え、東の井戸はまだ残っている。南の水堀跡は、いま小杉林で跡形はしのばれる。館の柵張りは長軸240m、単軸185m ある。赤湯町史に、平安期の中頃、藤原公清の孫佐藤右兵衛介が城を築き、祈禱しその後羽黒神社分霊、とある。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗)



柵塚館略測図

ながおかだて
長岡館 213-037

所在地 南陽市長岡字小生堂

築城者 不明

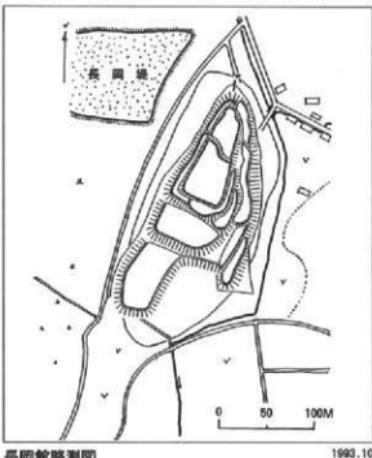
築城時期 不明

参考文献 『赤湯町史』『南陽市史（上）』

概 要

福荷森古墳の近く、元県立赤湯園芸高等学校敷地が鉢跡。昭和17年公民学校敷地造成で丘は削られ、造構は全壊した。字限図と現場を照合、図面を作成した。不整三角形で、三段の曲輪がわかる。赤湯町史に、回りに水堀の跡、とあるも、堀はあったか断定できず。標高225m、差高6m、長軸270m、単軸40mである。東側に曲輪の一部を認める。赤湯町史に、正和2年（1113）の頃、湯野目肥前守が居住したと伝える、とある。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



長岡館略測図

1993.10

うえのやまとだて
上野山館 213-038

所在地 南陽市赤湯字上野山

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『赤湯町史』

概 要

館跡は、赤湯烏帽子山公園である。標高は麗の温泉街が220mに対し、広場は240m、見晴山が270mとある。この見晴山は物見らしく、赤湯・宮内・沖郷と遠望がきく。主郭は広場で長軸120m、単軸70mの楕円形。土地の古老によると100余年前に畠地を、長い間かけて広くしたとのこと。大手虎口は西側の七曲り、途中樹形らしいところもある。物見にも曲輪あり搦手もある。南側石段は、掘切跡とみたい。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



上野山館略測図

1993.10

にいろねじよと 〔にいろねじよ〕
二色根館 (二色根城) 213-040

所在地 南陽市二色根字館ノ山

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『赤湯町史』『東置賜郡史 (下)』『南陽市史 (上)』

概要

館跡は、二色根街道の北側、館の山・薬師山といわれる山体に築づかれ、西側の山麓は三間通りから、小流経由の最上ルート、東側は最上街道(現、旧13号国道)に通じる要所に築かれたものである。

標高341m、遺構は東西440m、南北140mの山頂から尾根に沿って分布しており、掘切・土塁・空掘で区画された館ノ山は、50m×80mの長方形の主郭、そこから東側の土塁を経た東西と北面には、縦堀と帯曲輪で区画し、階段形テラスを多様に配した小規模な曲輪群と物見台を形成している第Ⅰ曲輪群がある。

次には、この館ノ山よりさらに一段低い東側の薬師山には、環状に配置された歓状の横堀を特徴とする第Ⅱ曲輪群が構成している。

本館は、このようにⅠ、Ⅱの連郭式である。先ず、第Ⅰの郭群からみる。この根小屋は、南傾斜七曲り道の龍の地とみる。ここは、三段程の広い曲輪があり、南面しているので生活しやすい。ここから館に登る道を大手虎口と見た。館に近づくと、両側に土塁があって、樹形となり道はわかれれる。これを進むと、井戸がある。根小屋と本郭で使っていたろう。ここの方にある「茶筅の松」と、この井戸「わん井 (わんせい)」(水のかれた井戸)の名が古書にあって、「茶筅の松・井戸」ともいうようだ。いま、この井戸の近くから、水を引いて使っている。井戸から左(西)へ進むと、西虎口からの通路と合流するが、西側2本の空堀があり、右上に茶筅の松の古木があり、樹形もある。東へ進んでも、土塁・樹形が複雑で攻進をはばむ。主壁は土塁を築いており、平坦地。

北からの虎口は、途中の曲輪を越えて進入する。さらにここは連続樹形があって厳しい防備である。この北側は階段テラスがあつて山の神の郭へ行く。北側には、長さ50mにも及ぶ土塁があり、北側の沢を狸沢(たぬきざわ)といい防備に都合がよい。西側に張り出した舌状曲輪は、いま雜木林となり荒れている。この山神の曲輪から東の堀切端まで120mだが、卷尺では凹凸多く148mもある。物見台(山)であろう。この横の堀切は深く、曲輪、土塁を備えている。

第Ⅱの曲輪群までは尾根伝いに東へ進む。二方に土塁を固めており、北側への防備である。北東側はいま果樹園に開拓されている。この館について、「天正8年(1580)の頃、伊達政宗の近臣栗野喜左エ門の居た館跡」の一方「二色根屋は栗野次郎藤原義広の居城」など書いてある。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗)



二色根館略測図

0

100M

1989.12

所在地 南陽市小滝字山の川・外

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『東置賜郡史（下）』『南陽市史（上）（中）』

概要

小滝は南陽市北端に位置した集落で、白鷺山の南面一帯が属している。地理的にも、中世・江戸期を通して、最上（村山）・置賜（米沢）領の国境地であった。交通路も細越街道・小滝街道と合して最上へ向かうために、小滝館は防衛措置として築かれた。当然、その役目を帯びて築かれたものが本館である。その役割は、更に前線に小白府物見をおさ、これを小滝館の六夜様物見（標高 636m）から本陣、状況によっては後方の萩・金山へと伝えていた。

本館の縄張りは、一口に小滝集落の西側全域にわたると言えそうだ。その距離は、直線で 900m に及んでいる。北は袖小屋、中間はじんの上（十二神の上）・山の川、南は後^{（しおり）}山、西は西沢へとなる。その形は、正三角形である。このように広範囲な築城により、その構えを六区分される。第Ⅰ群は北袖小屋からじんの上、第Ⅱ群は南の薬師堂、第Ⅲ群は山の川東側主郭、第Ⅳ群は西側主郭、第Ⅴ群は鉄砲構え、第Ⅵは六夜様である。

第Ⅰの袖小屋は館の北端で、北に長い細越街道をひかえており、対する防衛として広く曲輪を配している。その南や正面を守備すべく、薬師仏を守護する十二神将の名にあやかってか、「十二神の上」を根小屋に定めたかに見える。ここは平坦で、水利もよい。この薬師堂はここのが主郭、径 40m の方形で南に階段式帶曲輪を配し、その南側通路を虎口とし、樹形を置く。更にその西には、地形を利用した階段状腰曲輪を構えている。薬師堂の南を階段状テラスを配している。この曲輪の西は 1m 高く径 45m 方形である。その西は開拓で不明。

第Ⅱ群は南薬師堂を中心とした郭群である。この縄張りは長軸 200m、単軸 100m、その中央が通路となっている。この道は中央の小滝街道と伝える。両側をはさみこむような曲輪を配置、薬師堂が主郭らしく、帶曲輪・階段状テラス・腰曲輪・樹形も見られるが、道路改修で崩されたという。第Ⅲ・第Ⅳ群は、直接戦闘のための構え、陣地といえる。それぞれ縦空堀、階段状帶曲輪・舌状曲輪と多く、その上、この郭群を 4 本の深い縦空堀で区画している。第Ⅲ群では南側に 3 条の空堀を配した外、虎口を連続樹形を構えている。主屋は 30m × 12m 楕円形、第Ⅳ群も主屋は 50m × 10m 帯状で標高 550m、差高 100m である。この南凹地をどう尻といい、上流から一挙にここへ水を流したと伝える。第Ⅴ群は弓取・鉄砲構えで曲輪を配し、ここが搦手となる。時代の変遷で築城を変えたことだろう。第Ⅵ群は物見で、第Ⅲで連絡するとつたえる。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



小金井館略測図

1993.10

めったて
女館 213-043

所在地 南陽市小滝字西沢女館

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『南陽市史（上）』『南陽市史編集資料（19）』

概要

館跡は、小滝西側の山並み一山に位置する。この連山は、標高500m以上で県道からは見えにくく、小滝後山から水林へ通ずる柴板峠の手前、北側の山で女館・男館と並んでいる。東側が僅かに高く女館であり、北側に奥深い隠れ沢がある。山を東に越すと、小滝館の鉄砲構えとなる。つまり、小滝館の西端搦手から、この女館や隠れ沢に遁れることができる位置であり、その昔、追われた武士がこの沢に隠れ住んだ、とも伝える。

女館の標高651m、山頂の主郭を中心に麓の方へ、四方にわたって連続腰曲輪を構えているのがこの館の特徴といえる。主郭は15m×12mの精円形で、東側山麓に根小屋がある。ここは、見張り・土塁を配して体制を整えており、標高530mある。小滝から柴板峠の街道は標高470m、この根小屋までは差高60mとなる。根小屋から主郭までは、急斜面で定まった通路もない。腰曲輪の間をぬって登ることとなり、この館の曲輪の配置は北東の隠れ沢の方向にある。連続腰曲輪の外2本の帶曲輪、更に西麓には6本の掘切を配しているのも、隠れ沢を想定しての構えといえる。根小屋は湧水が1ヶ所ある。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗）

めったて
男館 213-044

所在地 南陽市小滝字西沢男館

築城者 不明

築城時期 不明

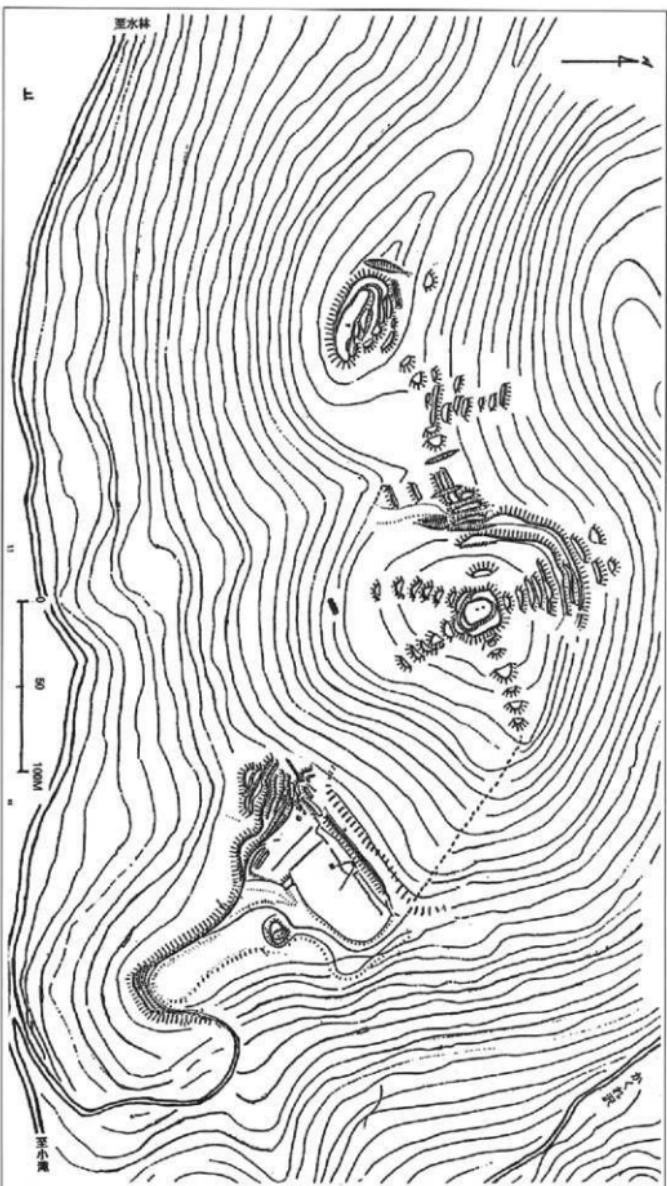
参考文献 『南陽市史（上）』『南陽市史編集資料（19）』

概要

この館跡は、小滝後山から西沢を経て水林へ通ずる柴板峠の途中、北側の山である。女館と並び、男館は女館の南西に位置し、主郭は僅か150mしか離れていない。もともと、この二館は一つで複数とも思える。しかし男と女と二つ名から、あえて区分した。繩張り図面をみると、二館を区分するかのように、女館の西麓に縦堀を築いており、通常はここに搦手が認められるも、ここにはない。

男館の標高は649mで、隣女館との境界付近は600mとなっている。男館の根小屋は、双方間の掘切から南へ下ったところで、本図面には記されていない。一面を畠地に開拓、土中の石を集め、さも石壁のように積み重ねていたために陥った。曲輪の配置は、北側の谷間をめがけている。この谷と女館東側の谷間をあわせて隠れ沢と呼ぶ。小滝館の落ちのびや、外の落人はここへのがれ、一時をしのいだという。この館の主郭は、女館が精円形に対して、バナナ状、40m×8mの不整形で、地面は凹凸が多い。西北には土塁・掘切を備え、侵入を防いでいる。山の尾根は標高630mを保ちながら西北へと続くが、山が急峻で侵入困難である。市史資料に、最上戦時女男館立籠る記事がある。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗）



男館・女館略測圖

1991.5

おじらふとものみ
小白府物見 213-042

所在地 南陽市小滝字通口

築城者 不明

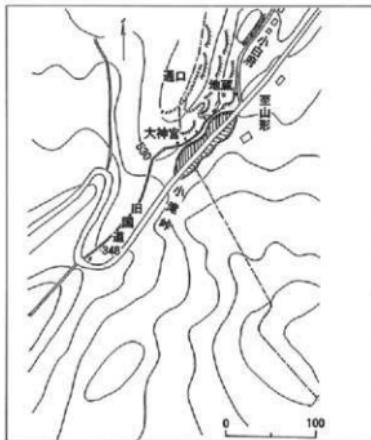
築城時期 不明

参考文献 『上山市史（上）』

概 要

地元では、この物見跡のことを、峠・境・地蔵様と呼ぶ。小滝街道の「小滝越」で南陽市・上山市の境界、その名も通口。米沢・最上の最前線として、足を運び作図した。小滝館西の六夜様物見とのかかわりで見る。いま地蔵堂、江戸の道すじの石碑もある。根小屋位置の判断も厳しい、東か西か。古い土壁だけは見える。図のとおりである。東側、晴れた朝の蔵王の峯は絶景、眺望もきく。里の馬匹の声もきこえそうな、標高 540m の地。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



小白府物見略測図

1993.10

たかくらやまものみ
高倉山物見 213-045

所在地 南陽市荻字高倉山

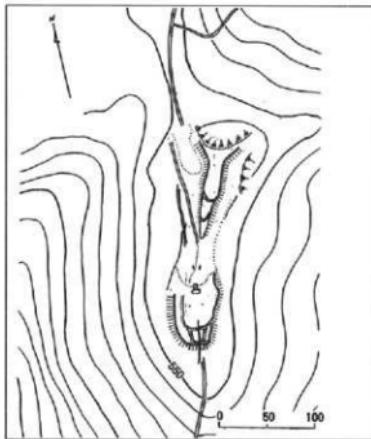
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

居残沢と酒町の間にある高い山、標高 569m で、高倉とは神座を示す語とか、吉野川下から見るこの山は鐘状形である。麓との差高は 209m。その昔の街道は、酒町から西の沢に入り、この山をめがけて登り、居残沢へ下ったという。頂上の主郭は平坦で曲輪もある。頂上にいま、古峯・秋葉・虚空蔵の祠と合祭殿がある。曲輪は主郭と南側、その北にも三段ある。ここは狼火台とみた。小滝館・荻館への受発信地だったろう。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



高倉山物見略測図

1992.4

所在地 南陽市荻字館の山

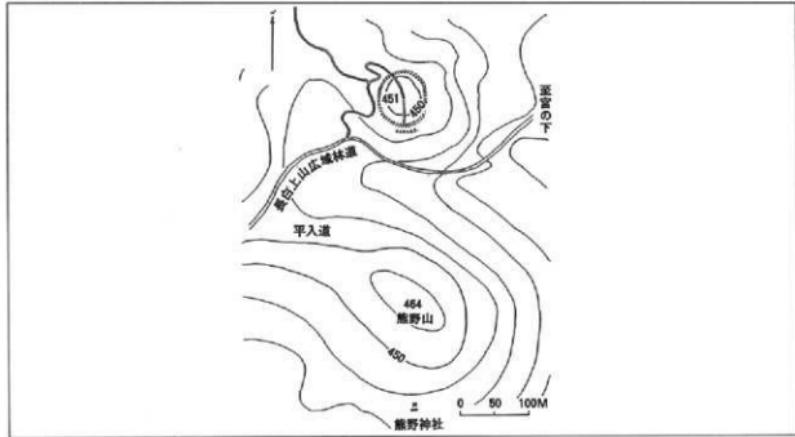
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

館跡は、荻熊野神社を祀る熊野山の西にある山である。いま、この二つの山の間を、広域林道が長井市まで通じている。館の主郭標高451m、下の住居地との差高は100mある。頂上の主郭は不整円形の径40m程で稍平坦、その周りを巾2~3mの空堀をめぐらし、南の一部をあけ、その下を空堀でおおう形である。北側は、土橋・通路、曲輪が南北にのび、平坦である。ここは、南面眺望よく、湧水もあり根小屋とみた。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



熊野館略測図

1992.5

しもおぎだて 〔おぎだて〕
下荻館 (荻館) 213-047

所在地 南陽市下荻字館の山・下見山

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『南陽市史(上)』『南陽市史編集資料(19)』

概 要

この館跡は、下荻集落の西南山並み、中腹に三角形に尖った杉林の山一帯にある。館名を連記したが、古書によると元禄15年(1702)前は荻村、以後は下荻村とした文書が多いも不明。ここでは双方の呼び名とした。

館跡の網張りは、下見山から館の山まで東西約500m、南北100mにわたっている。この館は、小滝口の小滝館の第二の砦ともなり小滝街道の重要な守備地と察する。しかも、中世の小滝街道は、この館の東、下見山麓を南北に通じていた。大手虎口は、この旧小滝街道からの通路であったろう。ここから急斜面を七曲りに登っていくと、第Ⅰの郭群に達する。この標高は440mで、差高は90mと高い。この館の郭群は、およそ三区分できる。一つは大手虎口からの第一の砦をIとし、次は中央の本丸位置をIIとし、次は最後部の山奥掘手に相当する位置をIIIとする。標高はIIの位置で520m、第一との差高80mある。第IIIの標高は600m、差高80mで山麓虎口大手口からの差高が260mとある。この館は広さ高さからみても大規模で、しかも急峻な山を利用し、強固に構えたことであろう。

第Ⅰの郭群についてみると、Aの位置に物見台があつて見張りⅠの主壁に知らせる仕組みにみえる。Aは土塁を備え防禦体制ができるおり、aの曲輪は階段状腰曲輪、その中でハは樹形と防備は固い。さらに西へ進むと、縱堀切CDと2本続き、山の尾根を西へ進むと土塁の陣地がある。Bの位置に土塁を北に備え、北の斜面に対する構えである。更に西へ進むと連続腰曲輪を経て第Ⅱ群に達する。

第Ⅱ図で見るとおり、いかにも山城らしく防備を整えている。北の谷間に張り出す階段状腰曲輪は見事という程である。また、Fの位置にある連続腰曲輪、そして隋所に見える東の曲輪とのつながりは、何をどう想定してつくられたものだろうか。ただ、ここで附言しておきたいのは、Fの曲輪群の西一帯の状況が空白である。実はこの附近一帯40m程が地滑りか、崖崩れ遺跡は見れなかった。この第Ⅱの郭群への虎口入口が、北の谷底にある虎口である。通路は、口から更に北東に隘路が100m程続き、北側の斜面に腰曲輪を数段構えている。この通路虎口を進み、ニに登ると樹形を備えている。進入は多くの曲輪をのり越えねばならない。この主壁は8×30m隋円形である。西には、Eの6条の堀切がある。最後第Ⅲの郭群である。堀切から尾根を80m登り、辿り着くと再び堀切、そして連続腰曲輪となる。最後の決戦場は10m×40mで長四角形の広場であり、ホガ指手となる。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



下荻館略測図

1991.11

所在地 南陽市下荻字杉の庭

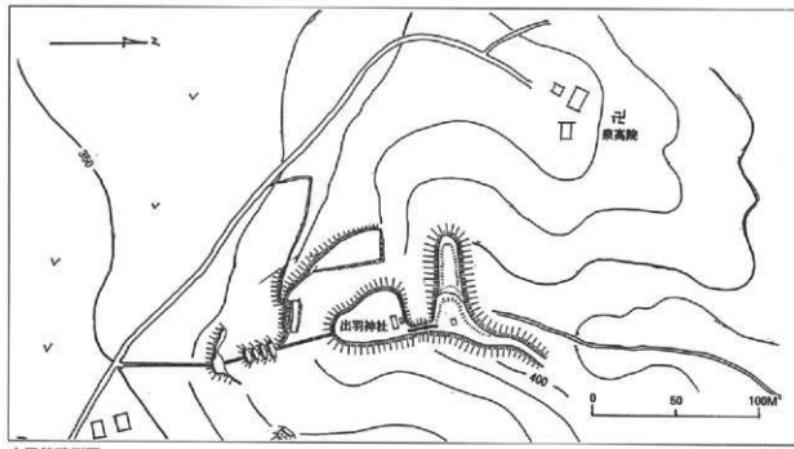
築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『南陽市史（中）』『南陽市史編集資料（19）』

概要

館跡は、小滝街道沿いで荻小学校南西側の小高い森、出羽神社が鎮座する山である。東に吉野川、南に西山川という谷川、館の背後は山の尾根が続くところである。北東に僅か150m離れて経塙山物見をおく。南陽市史編集資料19に、元禄8年（1695）当地南蔵院文書、羽黒（出羽）神社の項の中に、先達館、小屋館とありこの位置とわかる。標高400m、差高50m、城域は長軸190m 単軸50mの不整橢円形である。御坂を登って広場に出羽神社拝殿、一段高く本殿がある。その上差高10m距離20mに、通称奥の院がある。この広場20m×20mの不整四角形、その西にも細長い曲輪があり、この付近が主郭のようだ。出羽神社の創設は、佐藤庄司元治子孫清信が弘安3年（1280）ここへ住み、8年後正応2年（1289）神社創設という。館跡の西に慶長元年（1596）開基の龍谷山泉高院（曹洞宗）がある。当時の大手虎口はどこか、不詳。御坂の途上に小曲輪あり、連続腰曲輪か不詳。虎口は寺参道、途中から南蔵院墓地、御坂とも見える。館の東麓を小滝街道が走り、ここから館へは急斜面で登れない。近くに経塙山物見の外、薬師山物見・下荻館がある。（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗）



小屋館略測図

1992.4

やくしやまものみ (えぱしゃまものみ)
薬師山物見 (鳥帽子山物見)

213-049

所在地 南陽市下荻字鳥帽子岩

築城者 不明

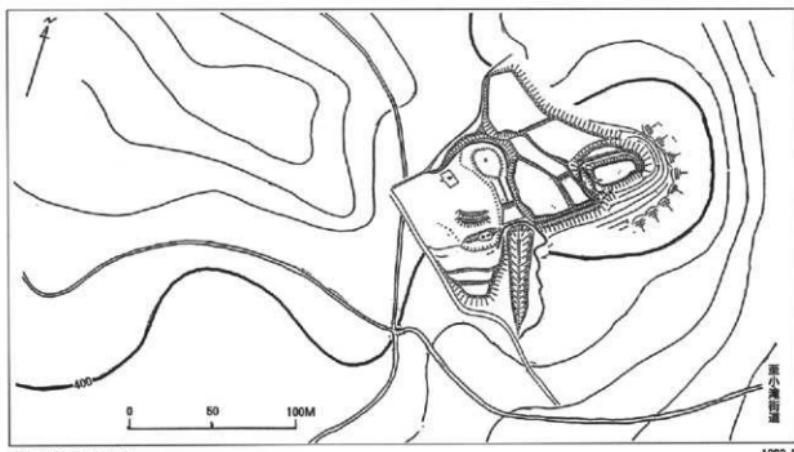
築城時期 不明

参考文献 『南陽市史編集資料 (19)』

概 要

物見跡は、下荻集落西側の小高い山で、お薬師様と呼ぶところ。頂上に薬師岩と鳥帽子岩が2mほど離れて並んでいる。地名の由来は、この岩かも知れない。物見の南、東の麓にあたる位置を、その昔の中世小瀬街道が通されている。郭群は南と北に築かれ、北が主郭の標高400m、平坦地で、10m×24mの精円形、北の奥に虚空蔵・薬師・弁財天の石祠がある。前記の二巨岩と刈田・古峯・影光山の石塔が建立されている。本丸より70m程南に離れて、南丸となる。途中階段状に、池へ向って低く築かれ、本丸の西にも曲輪を築いている。池の水利は明治26年(1893)開拓のために工事の記録がある。南丸は、いま不整四角形で40m×50mあり平坦地、その中の一部墓地。他に東を向いた曲輪が2本、長さ20mの土壘、その真中に巨岩が一つおかれている。物見の虎口は、今は閉されており南中央と思われる。ここを進むと西側の砦(南丸)が警備、東側は土壘をおいて裏は見えない。さらに曲輪横から本壘に上る。ここに倒影がある。東側は斜面、耕地の開拓で築かれたものであろう。西の道は南丸への通路で、他は農道と思える。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



薬師山物見略測図

けいかいざんものみ 《もんじゅやまとものみ》
経塊山物見 (文珠山物見)

213-050

所在地 南陽市下荻字前掛

築城者 不明

築城時期 不明

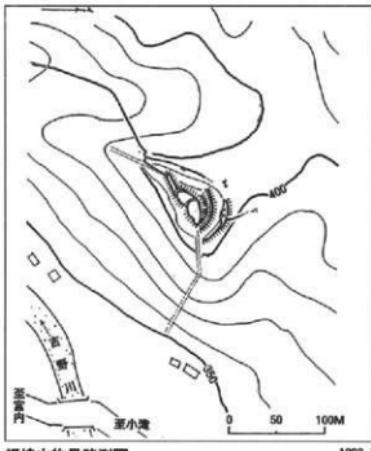
参考文献 『南陽市史 (上)』

『南陽市史編集資料 (19)』

概 要

小流街道沿いで、荻小学校の南にある小高い山、頂上の広場（主郭）に文珠堂の石祠を祀り、文珠山と呼ぶ。経塊山物見は、文書に記載正しいだろう。主墨は8m×16mの楕円形、標高420mで籠との差高70mある。西方小籠館とは150mほど、その物見である。北に対する物見だろう。虎口は北の曲輪を通り東からの通路となる。南側2段の曲輪は、館との連けいか、山の傾斜はゆるい。洞穴は、戦後野菜貯蔵庫に掘ったそうだ。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



1992.4

すじものみ 《すじこやすかんのん》
筋物見 (筋子安觀音)

213-051

所在地 南陽市荻字筋

築城者 不明

築城時期 不明

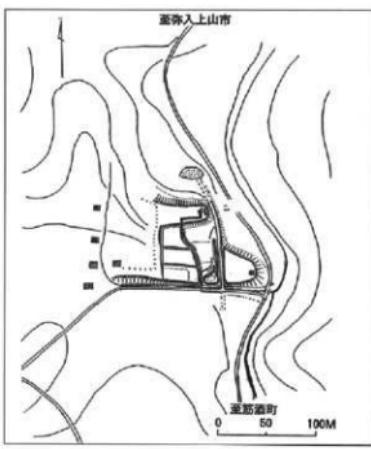
参考文献 『南陽市史 (中)』

『南陽市史編集資料 (19)』

概 要

筋の地名は、鉱山の鉱脈から名付けたと伝える。その昔は金銀の採鉱がさかんで、その跡は経10mも落ちこんでいる。ここは上山市との境い目、中山城の搦手道、狸森からの間道もありここに物見をおいた。この道をさえぎる位置である。北も子安觀音堂山上に土塁を築き、その南の土壁は一段高く造構が見える。東側の曲輪は墓地と畠地で、昔のようすは見えない。三段の曲輪は根小屋、標高450mの地、流れる川は水堀に見える。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



1990.7

みたけやまものみ
御嶽山物見 213-052

所在地 南陽市金山字御嶽山

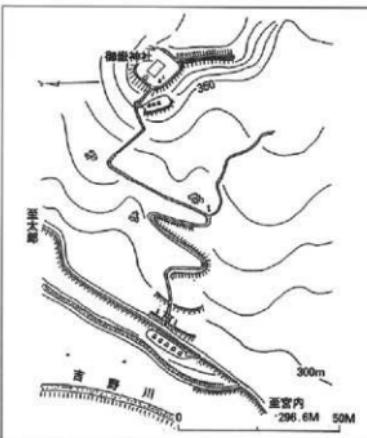
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

物見跡は、小滝街道沿いの原橋東の小高い森、標高380m 差高80m、急斜面で所々に岩山が露出している。虎口附近は山峠狭く、道の北側は土塁を思わせ、南は谷をおいて岩山で、身を隠しやすい。途中、急な谷間に落かれた石段は崩れ、長く続く。山頂に御嶽神社を祀り、郭は平坦15m×10mの長四角、南側に細長く峻しい尾根、握手とみる。主郭から見る遠望、下伏館・金座も見え眺めよい。2m 下の曲輪に板碑・青面金剛碑など。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



1989.10

かねぎだて
金座館 213-053

所在地 南陽市金山字四ヶ谷

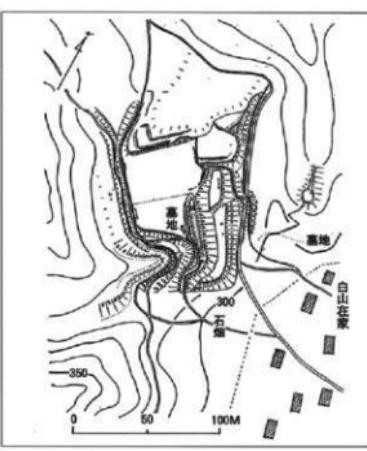
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

金山の川西、石畠と白山在家西側に隣接する山に位置する。昔、金採掘地で名付けたと伝える。主郭の標高362m、差高72mである。郭張りは、経170mの不整形である。曲輪は、7つに区分され、北側に白山物見を築いている。東側が水路、急斜面でありいま御坂を登って浅間神社を祀る。主壁はこの社の西、35m×45m長方形の位置と思われる。虎口は神社側と白山在家側とあり、白山在家側は主壁近くで樹形がある。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



1990.9

てんぐやまとて
天狗山館 213-054

所在地 南陽市金山字鬼ヶ座

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

金山石畠西、山並みに三角形の杉古木立つ山が館跡である。主郭にあたる頂上の標高 368m で、こ
こに古峯神社を祀っている。差高 88m、直線 130m に対してで急斜面だ。曲輪は 4 本、空掘で主壁を
めぐらしている。戦前までの堀は、もっと深かったそうだ。虎口は南地藏堂前、七曲り道と空堀を過
ぎると西（左）に、高さ 1m 程の奇怪な石が建立、「天狗石」といい、修驗とかかわりありそうだ。す
ぐ北に、金座館がある。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



天狗山館略測図

1990.9

じぞういかものみ　(たてぎやまものみ)
地蔵岩物見　(櫛木山物見) 213-055

所在地 南陽市金山字内立木

築城者 不明

築城時期 不明

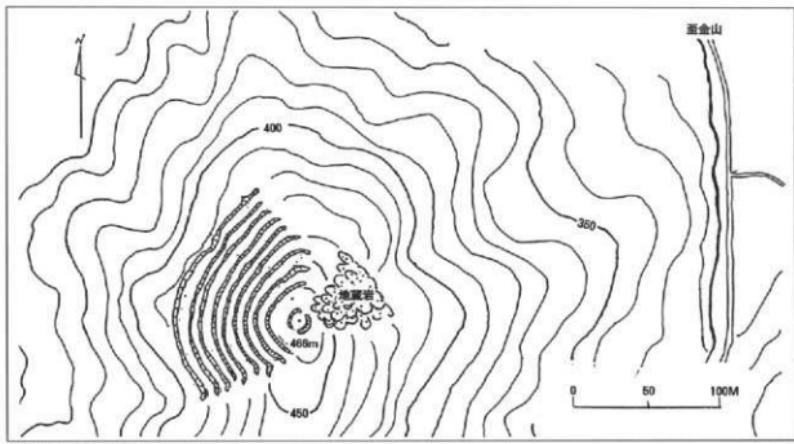
概　要

この物見跡は、金山小入沢口から川樋への街道沿い、小入沢の西に立つ急峻な山である。その名も地蔵に似た岩から名付けたことや、昔、武士がこの山へ立籠った據からの名とも伝える。

頂上の主郭は、標高466m、山麓の谷川から比高156mある。この山は頂上へ近づくにつれ岩が露出し、近くに地蔵岩があり、特に東・北からは登るに困難である。主郭は径15m×12m 楕円形、この中に天然岩を利用しながら石積み、高さ1m、内径2m×3m程の凹地の籠り場がある。外壁の厚さ1mもあり、小銃は貫けない。床部2ヶ所にいろいろ状の石穴もあり、狼火か暖をとったろうか。外壁の内部は黒焦げし、冬越しも可能と見る。

この主郭物見台は高所とて、見晴しもよい。狼火は西の天狗山、南は平館まで交信できそうに見える。ここへの侵入、攻撃は容易でない。矢合戦、石合戦の場をも想定する。主郭の北側斜面に階段状曲輪が9段、下にいくにつれ長く築かれている。この斜面も急で谷底まで250mと続き、天然の要塞を思わせる。主郭の南は尾根が長く続く。この物見は、中山川樋と小滝口、および鉱山の見張りか。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



地蔵岩物見略測図

所在地 南陽市川棚字禿山

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『東置賜郡史(下)』『南陽市史(上)』『赤湯町史』

概要

本館跡は、国道113号線沿い川棚集落の西側、名の通り虚空の形に見える山である。標高452m、比高差160mの山頂を中心に、20.5m×10m不整長方形の主郭を築いている。その遺構は長軸450m、単軸100m、円錐形の山城である。その東郭群と西郭群および中間の七曲り大手虎口に大別できる。

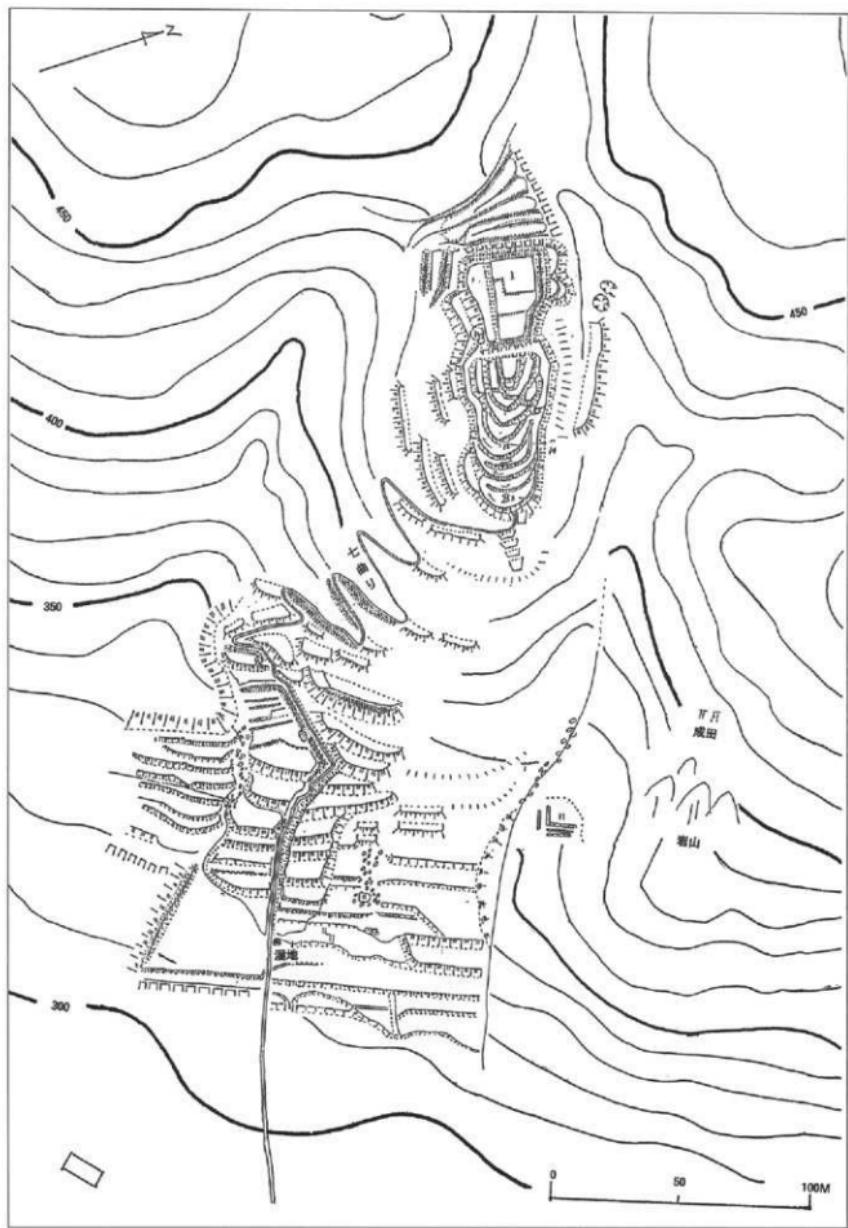
東郭群は館の東、山麓にあたる位置である。先ず下段の平地は根小屋と呼ばれ、いまブドー園に開拓され、一部階段状テラスは見えるも、開拓後かは不明。大手虎口は、およそこの郭群の中央を、地形を利用しながら蛇行している。通路を中心に北は土質が温氣を帯び、麓は北端100m×5mにわたって湿地である。対して南側は、礫地帯で礫を積んだ曲輪が多く、南端は七曲り近くから湧水を二箇所出し、地下をとおって麓に流れている。曲輪は、階段状テラスを主要曲輪としながら、疊の多少によって築き方が異っている。北側は、ゆるやかな谷、中に稻荷堂の曲輪をつくり、岩山が続く。麓に湧水もあり、根小屋の用水かもしれない。

七曲り道は石積の石畳をはじめ曲輪にも石積箇所が多く、急斜面を利用して構えである。通路を登るにつれて、西曲輪群近くになると山を回るように横に走る。攻防の戦いで、防禦しやすい地形と曲輪の配置と思われる。

西郭群は主郭にあたる位置である。通路がこの郭群に達すると、段差が大きい。山の稜線に沿って南北と曲輪を築き、階段状腰曲輪にして山頂に近づいている。しかも、この曲輪は連続樹形の構造である。この曲輪の最下段には、觀音菩薩・虚空蔵菩薩両堂を建立しているが、その由来等については不明である。この曲輪の下通路には、連続腰曲輪を配し、北側谷から侵入に備えている。この主郭への通路虎口は三箇所ある。第一は大手口の階段状腰曲輪を第二はこの途中から、急斜面ながら谷間の凹部を利用することである。これに備えて南斜面に腰曲輪を配し、外に、それぞれ多く樹形を備えている。この虎口は二口あるが、頂上近くでは更に20m、30mの土石壁を構築し、備えている。また、この郭群の中に山神の石祠を建立しているが、由緒は不明。

この郭群は大別すると二区分でき、東は階段状腰曲輪群をおき、西には四区分のテラスを配し、その境界を深い掘切を東西と2本配し、その三方を土壁で固めており、最西端は人工沼があるが、以前のようすは不明。西郭群の南西は、標高519mの稻葉山に達するが、握手と思われる。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



虚空藏山館略測図

1990.4

所在地 南陽市小岩沢字岩部山ほか

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『赤湯町史』『南陽市史(上)』『上山市史(上)』

概要

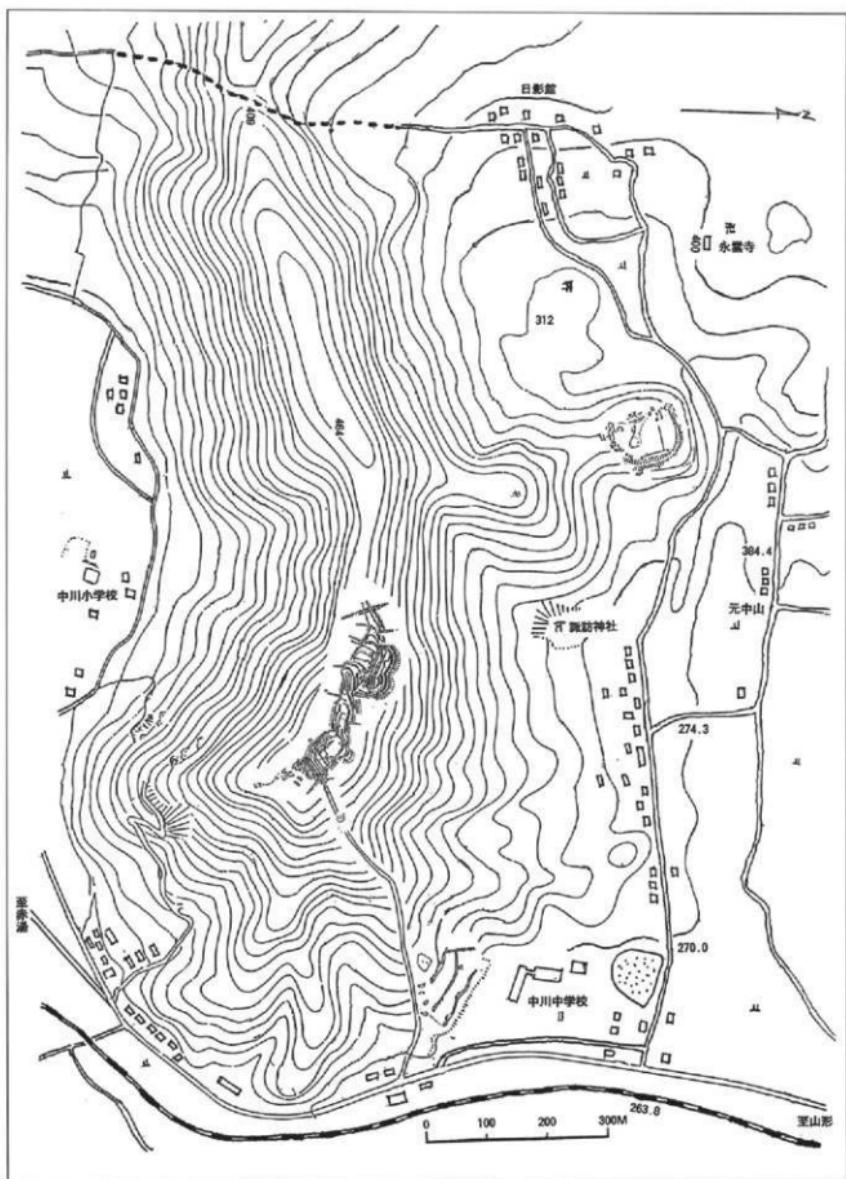
本館跡は、JR 中川駅の北西に聳える標高 506m の山頂から、一部北斜面にかけて分布している。その城域は東小岩沢、西元中山日影、南川樋、北元中山と旧三ヶ村にまたがり、東西 1.7 粁南北 0.7 粋と規模は大きい。その遺構は、東西 2 箇所に分かれているが、加えて北の 3 郭群に分けられる。

東郭群は、国道 113 号線の中川児童館附近を虎口として西にのびた一山の一区画である。どの郭群も、北および東への構えに力をいれている。米沢崩の先端中山城を意識したのではと思われる。この郭群は、山頂の主郭は 50m × 30m 長方形につくられ、東・北に土塁を築き、ここは眺望がよい。東斜面には階段状テラス・畝状横掘・8 箇の腰曲輪と多様に配置している。また、南・北側共に長い長い帯曲輪をめぐらし、西郭群へつないでいる。この郭群の南側は、岩壁の露出した急斜面、麓近くには、天保年間(1830~1844)建立の岩部三十三觀が、山一帯の岩山に刻まれている。北側斜面は岩山多くの山體の稜線が長い。この麓を中腹まで東西と、割石を利用して帯曲輪を 3 本築き、上部の曲輪から中央部にかけて通路があったが、途切れその方向は不明である。また、50m にわたって石垣も築かれている。この東郭群の西側は、平坦な尾根に沿って舌状テラスを配し、西郭群と接続している。北と南にそれぞれ畝状縱掘を築いている。

西郭群は、北に二重の空堀、南には縦堀をもって区画し、その内部を横方向の階段状テラスを東西と南北方向に連続させる特徴として築いている。この中で北側の外空堀、その内側を曲輪で固め、東側の二重空堀の間に虎口を設けている。ここは、さきに記した中川中学校裏からの帶曲輪と結んだかは、一部消滅のため確かでない。しかし、この虎口を登れば、間もなく樹形を設け、侵入を防いでいる。この西郭群の皆頂上は、東郭群に比べて約 40m 程低く、なだらかに西に続いている。その端とみられる位置に深い堀切があり、さらにその西に 30m × 80m の馬場と呼ぶ場所がゆるやかに下る。その麓は、川樋と日影・中山への間道となる。

北郭群は、西郭口の北虎口から北へ尾根伝いに 450m 進んだ位置にある郭群である。一名道庵屋敷、横田道庵の庭園とも伝える。名のとおり巨岩多く、石庭園らしく、一応は曲輪、樹形も備え、山神の祠もある。ここから尾根伝いには、西郭群への通路がある。この屋敷から平地を東へ進むと、諏訪神社があり、清水が湧き、近くを古屋敷と呼んでいる。この館の竈兵にこの水が役立ったか不詳。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



岩部山麓略測図

1991.12

りかげだて
日影館 213-058

所在地 南陽市元中山字日影

築城者 不明

築城時期 不明

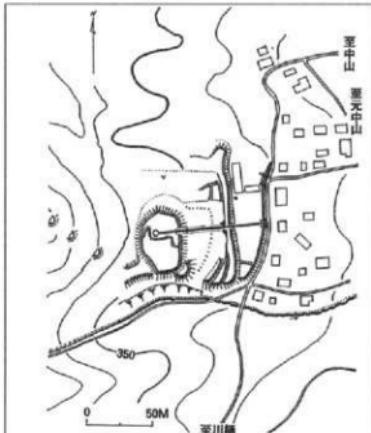
参考文献 『赤湯町史』『南陽市史(上)』

概 要

本館跡は、元中山の西南、鷹戸山の間の小盆地が日影、集落西南の小高い丘にある。主郭にいま松尾神社を祀り、削設は古く不詳。別当は建長2年(1250)開山の成就院である。主郭は30m×40mの長方形だが二つに曲輪が区切られ、一段低くなっている。桑畠だったのか、今は荒地で西へ2m程の土橋がある。山へ登ると斜面50mにわたり、20m~4mの小曲輪をつらねている。主郭の北40m

に湧水があり、神社前は問道。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗)



日影館略測図

1990.10

かわといだて
川樋館 213-059

所在地 南陽市川樋字寺浦

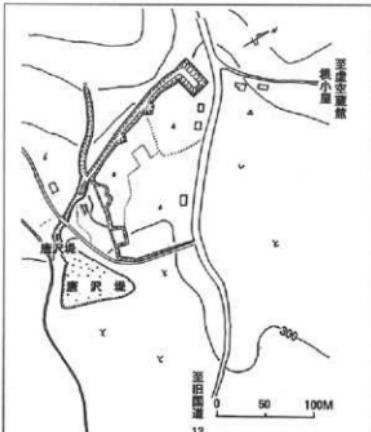
築城者 不明

築城時期 暫国期

概 要

館跡は、川樋からの金山小入沢街道沿い、南側に位置する。東の唐沢堤に注ぐ谷川を水掘として築いた平城。長軸210m、短軸100mの不整長四角。造構は館の西南、川に沿った曲輪、および階段状テラスと見られるものだけが残り、杉林の中にある。この曲輪が川岸に面し、3m以上の差高、畠地(主郭か)の標高310m。この小入沢街道から、北へ小径あり、ここは虚空蔵館根小屋へ通じ中山城への問道とも伝える。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗)



川樋館略測図

1990.2

たてだいらだて (ひらいじょう)
館平館 (平井城) 213-060

所在地 南陽市川檍字館平

築城者 不明

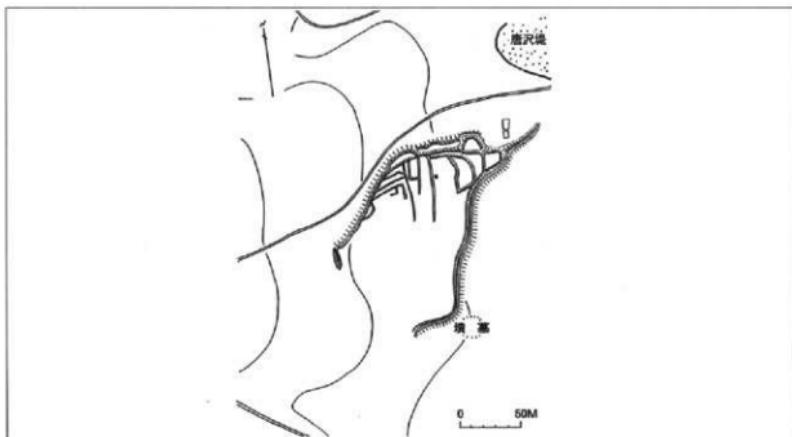
築城時期 戦国期

参考文献 『赤湯町史』

概 要

館跡は、赤湯から北上、旧国道川檍集落、小入沢街道手前西側（左）山の斜面に位置する。唐沢堤の南斜面一帯である。標高 360m 遺構では不整三角形で長軸 170m、単軸 80m の小規模な山城。赤湯町史によると、伊達の臣竹田喜五衛門が居住、伊達移封時（天正 19—1591）土着、昭和 11 年館跡に武田農園開墾記念碑建立とある。いま館跡は開拓し果樹園で、遺構は僅か区域外のみに見える。階段状テラス、堀切外一部。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



館平館略測図

1994.12

所在地 南陽市川橋字中野森

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『東置賜郡史(下)』『赤湯町史』

概要

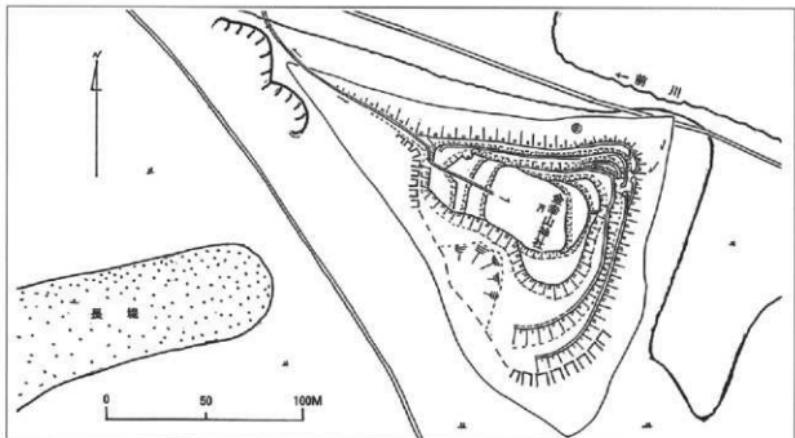
館跡は、国道13号線を北上し、島上坂から盆地、東(右)山並から離れて立つ小森の丘域である。

標高320m、比高40m、の小高い丘。東西200m、東辺の南北185mと小規模である。

囲いの水田は低く湿地帯を、昭和40年圃場整備し、南の沼を残して乾田化した。昭和30年代、国道13号線バイパス道造成の事業で、館の南東および北西角から採土する。館跡は、大正・昭和期に南斜面を開拓、果樹園として一部の造構は消失した。

館の主郭は30m×42mの不整四角形で平坦地、いま金華山神社を祀る。創設由緒不明である。西側は階段状テラス、東側麓を2本の帯曲輪、その上部は階段状腰曲輪を配置している。北側は帶曲輪をまわし、東北部の一部は階段状腰曲輪状に築き、樹形を備えている。館の北側麓に古井戸があり、館の用水として使用したことと思う。また、昔の大手口と思われる西からの通路は、いま神社参道である。東置賜郡史(下)に、方4町の墨で栗野十郎藤原義広の後胤、栗野十郎左衛門尉宗次重頃が父の隠館である。此10町四方が間には地震がないといい伝えである。「米沢事跡考」と書かれている。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 明)



中野森館略測図

1990.2

所在地 南陽市中川字川樋

築城者 不明

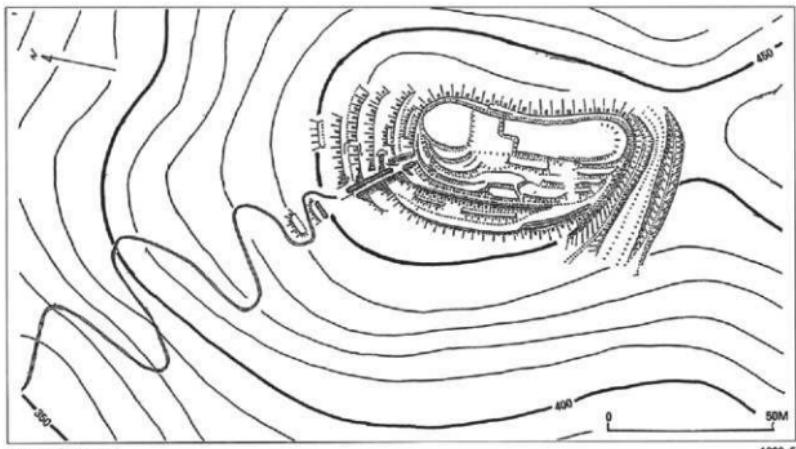
築城時期 不明

概 要

国道バイパス川樋集落東側の山並みは、標高400m～800mと高い。近くに目立つ山は、中央大洞山(737.2m)、その南(右)が高ツムジ山(693m)である。本館跡は、高ツムジ山の西(手前)に位置する小高い、標高470m、差高110mある山、城域は長軸200m、単軸50mという細長い三角形である。この山は一見裾野の稜線がゆるやかに見えるが、中腹から頂上にかけては角礫多く急斜面が続く。主郭は長軸88m 単軸14mの楕円形である。主郭の中央が低く南北が高い。この距離は16m、中央凹部が28m、南は44mと長い。北が他より2m程高く、物見台らしい。主郭の北と西側斜面は階段状テラスを、更に西側は2条の石塁を混えた横掘を築き、南へ進むにつれ土塁を高くしている。地形が南にいくにつれ斜面がゆるやかで、その対策と思える。

主郭の南に巾10mにもおよぶ縱掘切が2本ある。土橋をつくり、橋手を高ツムジ山の方向へ向かわせたらしい。大手虎口の道路は山の麓が途絶えている。道の角礫が崩れたためらしい。主郭に近づくと、道路の両側を石塁で固め、外に連続樹形などを配したのは、本館の特徴、西虎口に近く井戸もある。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



大洞山館略測図

1990.5

なつがりじょく
夏刈館（夏刈城） 381-001

所在地 高畠町大字夏茂元夏刈字館之内

築城者 不明

築城時期 室町期

参考文献 『黒井堰史』

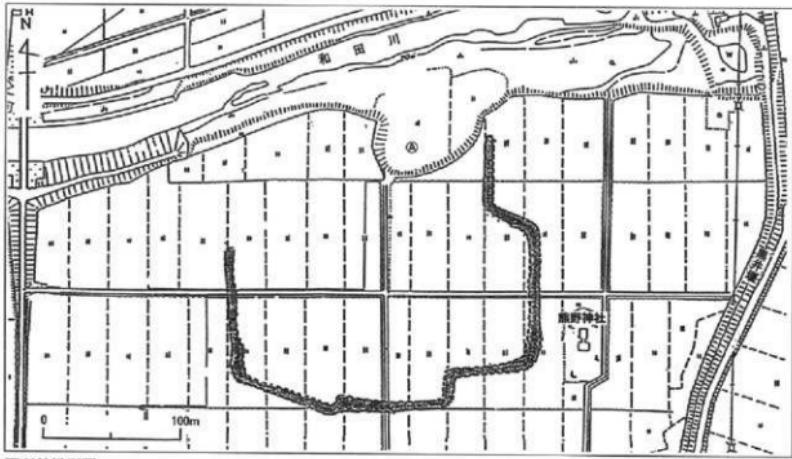
概要

赤湯町史に「幅 5 間の堀形が南北に 30 間、東西に 25 間ほど折れ曲がって残っているのみで字館ノ内に西に接する部分は崩れている」とあるが、現況は既に昭和 5 年から 10 年にかけての耕地整理によって失われ更に 40 年代以降の構造改善事業により完全に滅失している。

明治 26 年字切図によれば、和田川の大きなくびれ A の東から連続して、田、畑、萱野が堀形を作りながら約 200m 程南に伸び、更に西にほぼ直角に曲がり、約 250m 行った所で北に折れ曲がっている。その所々に川があり「方二丁の館跡」という口承や「寛政 9 年黒井堰絵図」(1797) に見るその形とはほぼ符合する。(破線がその位置を示す) 和田川のくびれは河川改修時にも手が加えられていないので今のような形で天然の要害であったと思われる。

「館内・夏刈館」と「六角・寺内・資福寺」はその境を一にしていることから、夏刈館と資福寺は密接な関係にあったといえる。古書に「伊達氏夏館」とある如く、輝宗の資福寺参詣は繁かったと思われ、虎哉と政宗の師弟関係をみると夏刈館の存在は重要であったと考えられる。正慶年間(1332~)永井左衛門の居城文明 3 年(1471)までと伝えるが定かではない。天文 7 年(1538)御段鉄古帳に「屋代庄なつかり 17 貫 350 文」とある。

(山崎 正 青木敏雄)



夏刈館推測図

1990.10

なかせだて
中瀬館 881-002

所在地 高島町大字夏茂元夏刈字中瀬

築城者 中瀬和泉

築城時期 戦国期

参考文献 『高島町史』

概 要

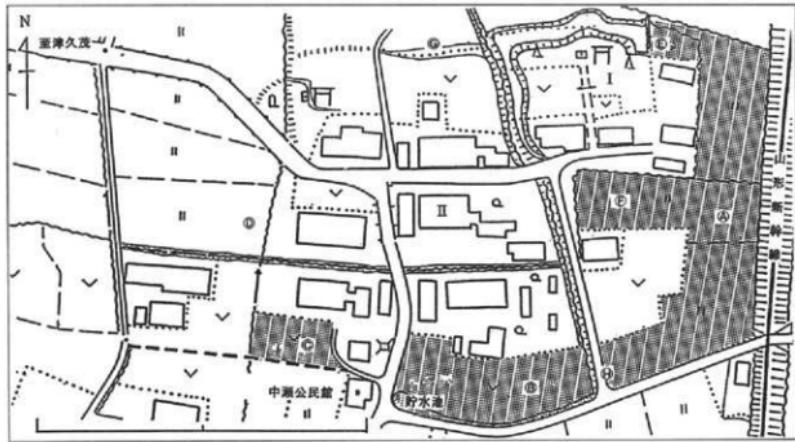
造構からいえば、Iが主郭といえそうだが、周辺の、堀跡と想定されるA、及び最近まで堀として残っていたB、C、地形上Dを含めれば、方2丁の規模となり、従って、本丸（居館）はII辺りとも考えられる。

Iの北から西にかけての鍵形は、北面がやや深く今も水を湛えている。東方Eの湿地はAに続いているので、山形新幹線路床で途切れていはいるがもっと広かったと思われる。

Fの堀（跡）が入り込んでいることも、IIを本丸とする根拠にもなろう。そうなれば、Iは丑寅にあたり、星敷神の存在もうなづける。北の堀形Gは凹んでおり、更に西の段差に続いている。そこで、Hが大手、虎口となろう。

中瀬という集落名は、明応年間（1492～）伊達氏の家臣「中瀬和泉」に由来する。天文22年（1553）晴宗公采地下隠録に「や代なかせのいつも在け」とある。中瀬館は、一本柳館、川沼館に続き、更に西に、筑茂館、大橋館、夏刈館と、和田川に沿った、いわば、河川防備の一つとしての位置づけにあるが、他と同様、戦略的な施設をもつ城館とは思えないで、幾つかの在宅をもつ地頭領主の居館と考えられる。

（山崎 正 青木敏雄）



中瀬館略測図

しふくじなで 〈しふくじあと〉
資福寺館 〔資福寺跡〕 381-003

所在地 高畠町大字夏茂元夏刈字寺内、他

築城者 (長井時秀)

築城時期 錬倉後期

参考文献 『高畠町史』『山形県史資料篇 15 上』

概要

弘安年中 (1278) 屋代庄地頭大江長井 3 代時秀の創建と伝える。伊達政宗岩出山移封と共に移る。現在、仙台に臨済宗慈雲山資福寺として存続している。開山は、錬倉建長寺紹規(西規)といい、出羽における禪門の中心となり、鉄庵、無涯らの傑僧を輩出した。後、この地は伊達氏領となるが、長井氏と同様、帰依寺、学問寺として手厚く保護した。中でも、貞山政宗の師となった宗乙(虎成)によりその名声は高まつた。上杉治憲も幕域の年貢を免除するなど庇護した。

寺であるが、2 丁四方の二重に土塁をめぐらした東北有数の規模であったという。天文 22 年 (1553) 晴宗公采地下賜録に「寺額の諸公事棟役設錢役免除」とある。

明治 26 年字切図と照合してみると、地籍が官有地、萱野、田畑、畠形、池、道形など一筆毎の形が現況(遺構)と重ねると、それぞれ全体の区画、畠形、土塁などとほぼ一致している。方 2 丁と伝えられる範囲も、字切図、現況とかなり確実に重なるし、要所々々のポイントの遺構をうかがうことができる。中世における名寺であり、遺構そのものが城館址と変わらぬ点で重要な遺跡と考えられる。

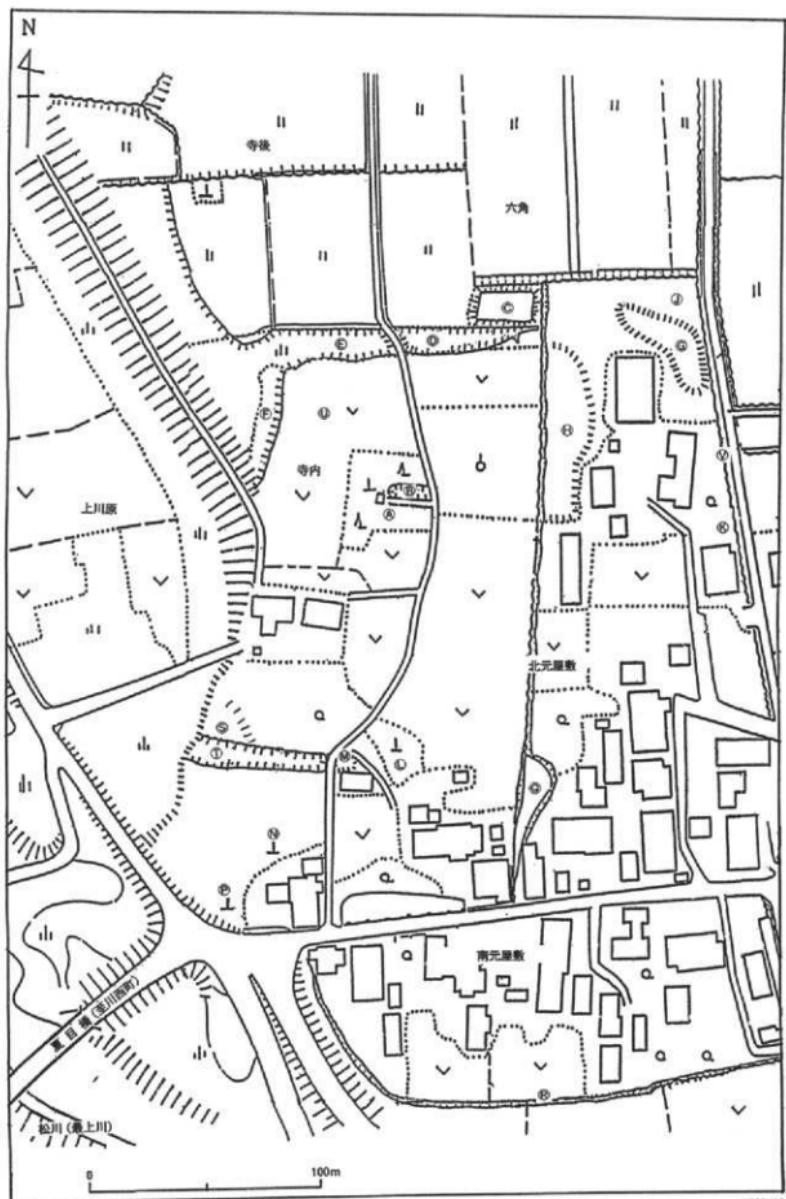
A 伊達持宗が比叡山仏師に刻ませ本尊としたと伝える觀音堂、本堂跡か、B 蓮池跡、近年近藤が植えられていた内堀跡か、C 土塁跡、周辺を含め確実な形で残っている。D 堀跡、現況は萱野であるが幅 3m 以上、東方は湿地になっている。E 畠形、現在は路畠であるが D と連続していた。F 畠形跡、現況は田であるが、河川(堤防)改修前は点線内が堀であった。G 土塁跡、方 2 丁の丑寅あたり、H、J はそれぞれ低湿地で路畠になっているが外堀跡であろう。

K 字六角、北新屋敷境内にあり、寺域の東門があったと伝えられている。L 寺域内から多数の錬倉期板碑が出土している。紀年銘は不明であるがここに 3 基が建ち、10 数基が倒れたまま置かれている。これは寺域に倒れ、また、埋まっていたのを集めたものである。M は土塁跡の小山、石祠が建つ。

N 伊達家の墓所で、輝宗と、殉死した達藤基信、儀山政宗夫妻の 4 基がある。P 字寺内と隣接する六角から移された六面幢(町指定文化財)と數基の板碑。元の地は寺の正門前といわれ地名として残った。Q 二重の堀の内堀跡とみられ素掘りの形がそのまま残っている。

R 外堀の延長か、幅 2~3m の堀跡として残っている。堀際の墓地に寺跡から出土したといわれる徳治元年 (1306) 銘の「来迎弥陀三尊板碑」(町指定文化財)がある。S 鐘堂跡、永仁 4 年 (1296) 鑄造の鐘があったが伊達氏岩出山移封の折亀岡文殊寺(大聖寺)に寄進した。しかし昭和 26 年に改鑄された。T 寺域と墓地の境をなす幅 6~10m 程の堀跡。U 井戸跡。V 外堀跡、字境で現在は改修され U 字溝が入れられている。

(山崎 正 青木敏雄)



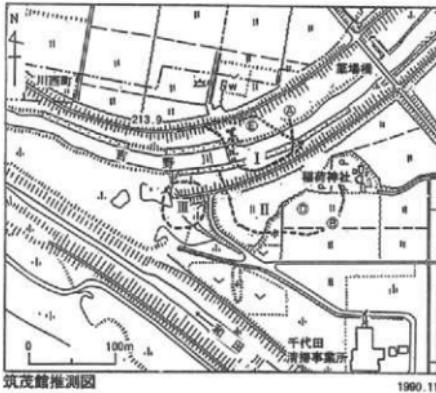
資福寺館略測図

1992.11

かわぬまだて
筑茂館 381-004
所在地 高畠町大字夏茂元津久茂
字館之内
築城者 湯目丹波重久
築城時期 戦国期
参考文献 『東置賜郡史』『黒井堰
史』

概 要

A、B、Cの破線は「寛政 9年
(1797) 黒井堰絵図面」に比定し
た。また、古者の記憶による攝形
で、Iは二重の堀に囲まれた主
郭、IIは外堀内の2の曲輪、IIIは



3の曲輪と想定できる。現在は福荷神社の西Dを「館内」とよんでいるが、明治 21 年字切図では破線
の E 辺りに充てている。河床の大移動とそれに伴う工事のため、古者の記憶等に残る遺構は現存しな
い。「伊達正統世次考」には「天文 22 年 (1553) 湯目丹波重久筑茂郷の領主」とある。

(山崎 正 青木敏雄)

かわぬまだて
川沼館 381-005
所在地 高畠町大字川沼字屋敷廻
築城者 不明
築城時期 戦国期
参考文献 『高畠町史』
概 要

天授 6 年 (1380) 伊達氏置賜侵攻の際落城
した二色根城主栗野政久の一族が落ち延びて
居館 A を定めたと伝える。字屋敷廻を縦横
にめぐる堀は南を流れる和田川から取水
し、幅は 2 間以上、深さもかなりだったとい
う。大永 8 年 (1528) 安久津八幡例祭物取
収並支払帳に「二百四拾文川沼和泉在家、百六
拾文川沼田制下継殿」とあることから、川沼
を安堵されていた地頭領主の在宅屋敷で、堀
は蓄水のためと考えられ、他に隙立った遺構は見当らない。



(山崎 正 青木敏雄)

ひらかたじょう

深沼西館 381-006

所在地 高畠町大字深沼字西館

築城者 (結城治部八右衛門)

築城時期 戦国期

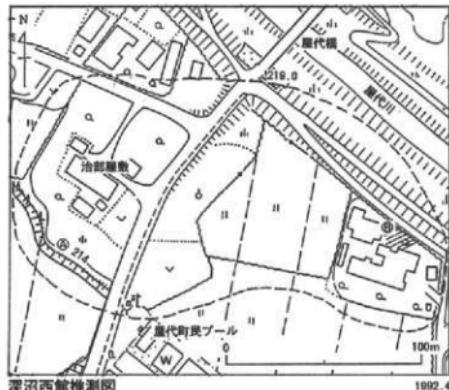
参考文献 『東置賜郡史』『高畠町史』『屋代村史』

概要

天文年間(1532~)に高畠城主に50貫の知行で仕え、後、大谷地を拓き治部垣頭であった結城八右衛門の居館と伝えているが、昭和50年代からの屋代川大改修及び耕地整理により遺構の殆どが失われた。

僅かにAの断差とBの土壙、鉢輪跡が庭園の一部になって残存するのみである。破線内が明治21年字切図及び口承によって鉢輪跡と想定される。晴宗公采地下賜録に「や代きたかた」、結城家文書に「屋代のうち北方政宗様へご奉公」とある。

(山崎 正 青木敏雄)



ひらかたじょう

平方城 381-007

所在地 高畠町大字一本柳字平方

築城者 不明

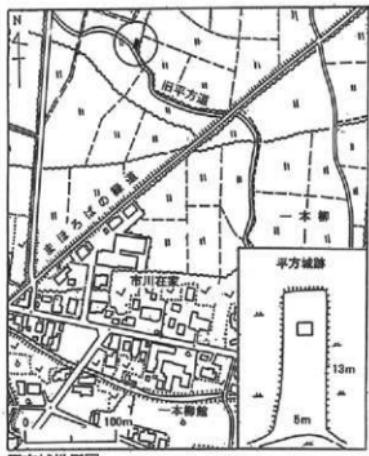
築城時期 不明

参考文献 『東置賜郡史』

概要

大永8年(1528)安久津八幡文書等に出てくる「市川在家」の北方にあり。古来より「弥三郎婆」なる伝説あり、永承年間(1046~)平方城に安部貞任の一族波会弥太郎平安信が住し5千貫を領すと伝えている。一本柳館から深沼西館に通じる旧平方道沿いの割合地盤の堅い所に5m×13m、約16坪の高場があり、その地が平方城跡とされ、「市川在家の者共が勧請」したという白山明神の石堂が建っている。

付近に鎌倉期の瘤頭型双立板碑がある。



(山崎 正 青木敏雄)

所在地 高畠町大字深沼字熊野

築城者 (熊坂宇衛門)

築城時期 慶国期

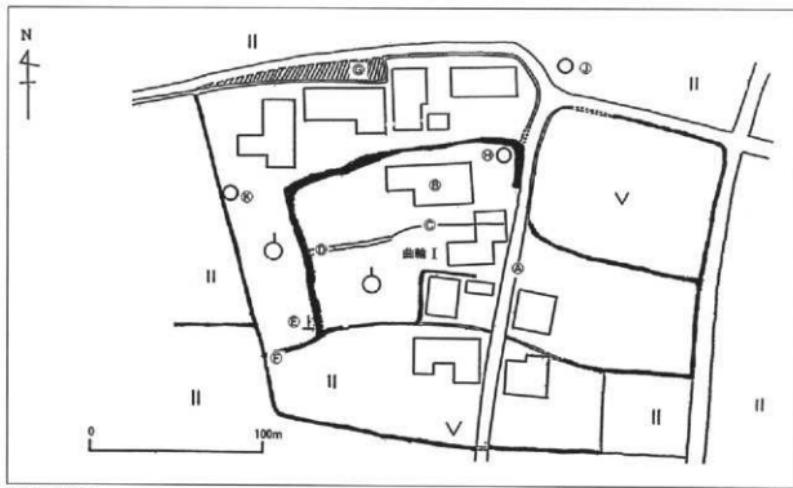
参考文献 『高畠町史』『高畠町伝説集』

概要

屋代川南側の平地に位置し、伊達氏の家臣熊坂宇衛門の居館と伝えている。館跡は高畠城西方の構えのようでもあるが、さしたる戦略的な構築は見られない。周囲は一帯の水田で、館跡とされる所には幅1~2間の水掘が二重（東と南は三重）に周っている。館跡は内堀に囲まれた曲輪Iが東西66m、南北24m、ほぼ長方形で、広さは1,600m²（約480坪）程、大手は東Aとみられるがさしたる起伏はない。現本田長一氏宅Bが居館跡と伝え、その南に堀跡Cと堀の痕跡Dが残っている。

屋敷周りの外堀は、東西130m、南北100m、北西と北東に少し張り出しているので、総面積は約15,000m²（1町5反）一部（細二重線）はU字溝が入れられているが以前はすべて（館）堀であった。南西の内堀外側の墓地に古五輪塔2基Eと近世の万年塔がある。その西の水落Fは戦後かなり深い淀になっていたという。外堀の内北西50mの間Gは昭和63年に埋めたが幅は広い所で3間程あった。その他、丑寅の角に屋敷神Hと地蔵堂J、西堀端に板碑Kがある。現在堀にはすべて水が流れおり、明治21年字切図と一致する。熊坂氏は伊達氏岩出山移住に随伴し伊達郡高子を領したという。

（山崎 正 青木敏雄）



熊坂館略測図

1990.11

いっぽんやなぎだて 《はまだだて》
一本柳館 (浜田館) 381-009

所在地 高畠町大字一本柳字館之内

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『高畠町史』『山形県史資料篇 15 上』

概 要

一本柳館は和田川沿いの平地にあり、伊達氏の宿老屋代郷惣成敗戦浜田伊豆、大和守の居館で、その本丸 A 宅には、長屋門、大和守着用の鎧下着等が残っている。館をめぐる土塁の内、北側に「土手跡」 B が一部残存する。(破線は土塁跡、明治 22 年字切図及び 45 年絵図による)

この辺りは「北御門」とよばれ、7 間×8 間程で、北口(櫻口)櫻荷の石堂が建っている。ここは館屋敷の鬼門にあたり浜田氏の氏神だったという。明治 45 年絵図にある「御座敷井戸」 C 「御台所井戸」 D は最近埋められたが、場所は石などで示されている。

「樹形」と伝える場所 E が東側にあり、街道口から西へクランク状の形がうかがえる。その東方を「大手」 F とよんでいる。また、本丸跡 A 西側一帯の水田 G は堀跡で、施設は若干高くなっている。館屋敷をめぐる土塁は、北は道祖神川 H、西は川沼堰 J に沿って構築され、和田川 K と共にこれらの川堰を館堀として活用していたのであろう。屋敷割は樹形から本丸まで整然と配置されていた。(絵図)「安久津八幡例祭物取扱並支払帳(大永 8 年 1528)」に「市川在家物取 1 貫文」「浜田常陸 120 文筑後 80 文」とありこれら浜田一族は一本柳近隣の地頭領主であったが、天正 19 年(1591)岩出山に去り、一族権口氏らが残った。

(山崎 正 青木敏雄)



一本柳館略測図

1988.8

所在地 高畠町大字竹森字森山、前田

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『高畠町史』

概要

居館、後櫓（竹森山）よりなる。山の北側は湿地帯で、南方は、亀岡館、戸塚山館が遠望できる。一本柳館、熊坂館等と応じ、統治上の要をなしたと考えられる。

後櫓は標高 281.5m、東西に 450m、南北 250m、地表からの高さ 70m の小さな盆地上の独立丘陵である。遠方が見えると同時に四方から注目されるという側面ももつ。

北側は大谷地という広い湿地帯であるが、北山麓は幾条、10 段余もの小さな帶曲輪群Ⅱが続いている。しかし、何れも山頂の主郭Ⅰにはつながってはいない。これは 1 千町歩にも及ぶ背後の大湿地帯は、天然の要害ではあるが、居館からは敵勢が見えないから背後からの不意打ちに対する防御施設ともいえよう。

その内、東方の 3 段の曲輪Ⅲは段差が大きく難攻を強いられるであろう。東南面は墓地に、南面は国道 113 号建設のため削られたので原形は不明である。

主郭Ⅰには、東、西、南の三方から登り、南道はつづら折になっている。東の虎口 A からはほぼ直線的に登ることができ、主郭Ⅰを段状の帶曲輪Ⅳが幾重にも巻いているが、どれも小規模、狭隘で作戦的には、兵をとどめ、或は隠すことはできない。

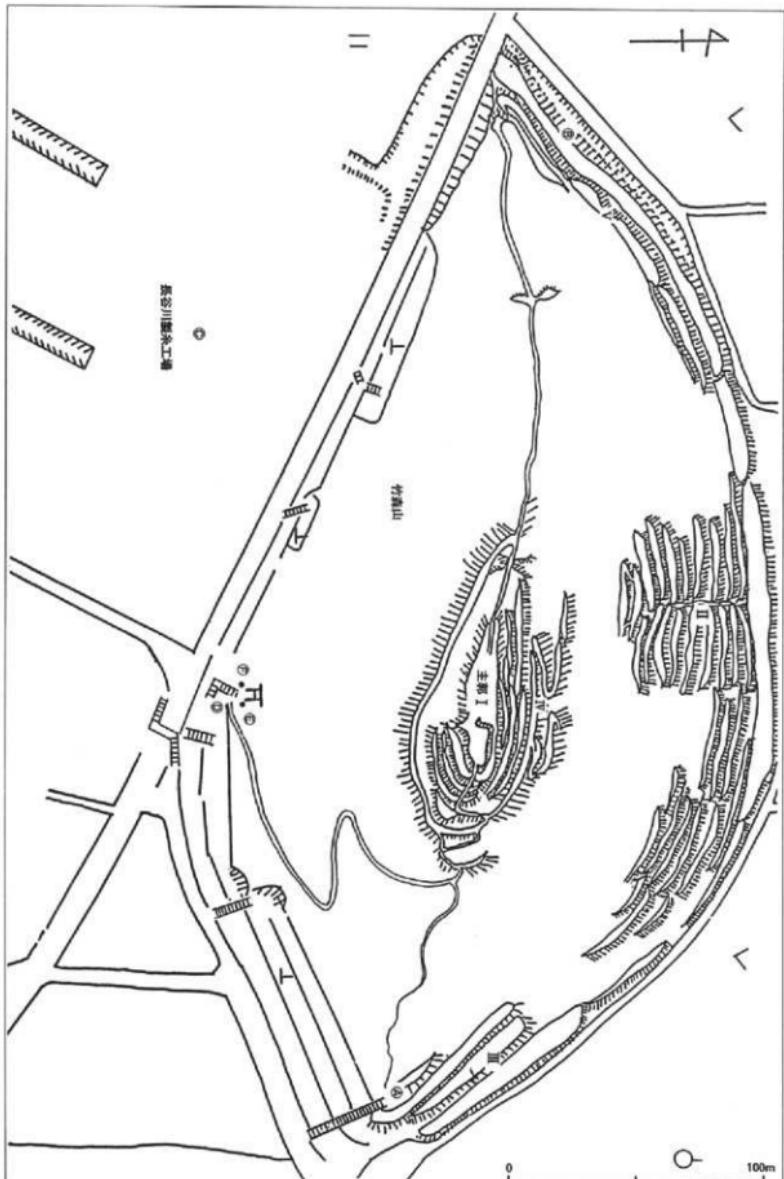
主郭Ⅰも狭く、せいぜい 60×20m (約 1 反 2 畝) 位である。西側の道はなだらかで登りやすく、段状の帶曲輪Ⅴの端に登り口がある。しかし、ここには防御上の何の施設もない。その下にやや幅広の堀跡 B があるが、或いは南山麓を巻いていたのかもしれない。とするならば、これは湿地ではない土の堅い西からの備えとなろう。

さて、明応 3 年 (1494) 厘代城（当時高畠城の呼称）に在った伊達宗家が、配下の竹森丹波（竹森館主）に命じ、館内に滞在していた父尚宗を不意に襲った（竹森の合戦）が、尚宗は逃れ、雜野目松川の合戦を経て、会津芦名氏の援軍を得て反撃、厘代城を攻めた。種宗敗れ、伊達郡柴川城に退いた。その際竹森丹波は尚宗配下に殺されたと伝えている。

竹森合戦の時は、居館での不意の襲撃であったから、後櫓は戦場ではなかったと思われる。このような立地条件と構造は他の山城（伊達諸将の皆）には見られないで、その時代の典型的な築城様式とは断じ難い。後櫓に続く南側の居館 C は、現在、明治 15 年創業の長谷川製糸工場の敷地になっているが、畠敷前の水堀は後年掘り上げたものであり（明治 22 年字切図では宅地境）現長谷川氏居宅辺りは水堀がめぐらされていた。

字前田地内、山麓南東寄りの道端に、弘安 6 年 (1283) 銘の鎌倉期の置賜型板碑 D があったが、後、白鹿神社 E の石段脇に移された。この神社は伊達氏の家臣が近江國から勧請したといわれ、その御神木アベマキ F と弘安板碑は共に県指定文化財になっている。

（山崎 正 青木敏雄）



竹森館略測圖

にいえだて (にいえじょう)
新江館 (新江城) 381-011

所在地 高畠町大字深沼字新江

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『山形県の地名』

概 要

新江堀沿いに、幅5m程の館堀に囲まれた居館があったという。A、Bに掘の痕跡あり。Aには土塁跡が見られる。C、Dは戦前に埋めた内堀跡と伝えている。Dは一段と低く湿地になっている。北西の字西館と隣接しており、深沼西館が新江館を包含していたか不明であるが、西館治部堀主に対し、新江は右京堀主とされている。天文3年(1534)鹿俣宗事件安堵状に「ふかぬまのうきやうさいけ」新江館略測図

江崎津家文書に「新井江崎津右京大部三千貫」とあり。



1993.11

(山崎 正 青木敏雄)

さんじょのめきただて
三条月北館 381-012

所在地 高畠町大字一本柳字五町

八反場

築城者 不明

築城時期 不明

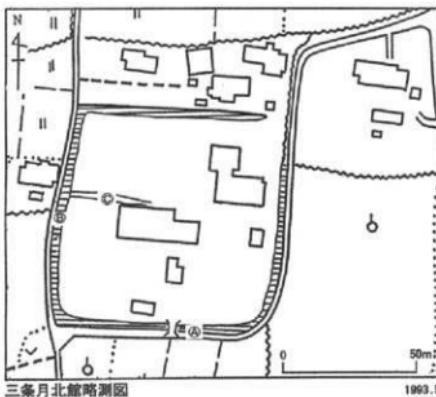
参考文献 『山形県史資料編 15上』

概 要

屋敷堀は約80m四方、幅2~3mの館堀がめぐらされている。南が定口とみられ、掘Aには今も菱の実が見られるところから、何事かへの備えのあととも考えられる。現況は昔と殆ど変わらず、

西Bは湿地状で、屋敷北へ「入れ角」跡のように窪地Cが残っている。家名は「北館」で、天文22年(1553)晴宗公采地下賜録に「屋代庄きたかた、のた六郎」とあるが、きたかたは堀をはさんで隣地にあり、古屋敷、前田もあるので、有力な在郷領主の居館ではなかったかと思われる。

(山崎 正 青木敏雄)



1993.5

たてのこしだて
館の越館

381-013

所在地 高畠町大字安久津字町裏

築城者 片倉小十郎

築城時期 戦国期

参考文献 『東置賜郡史』『山形県史資料編 15 上』

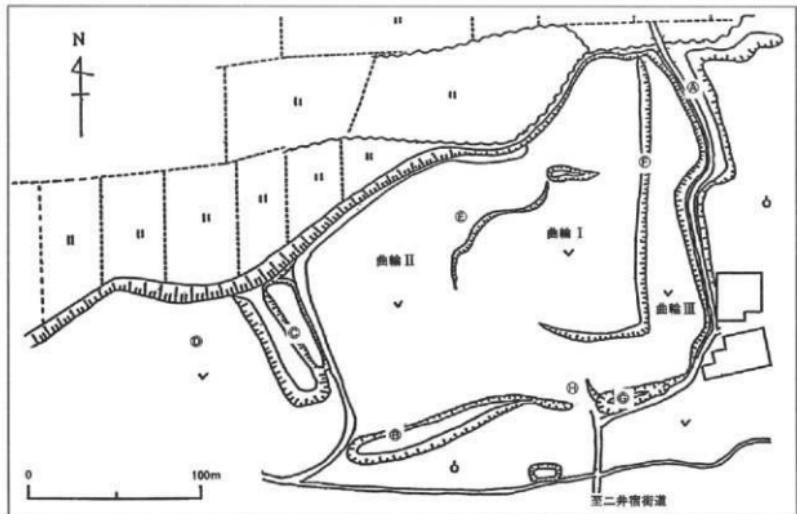
概 要

屋代川に迫る河岸段丘上にあり。但し屋代川は動いており洪水を繰返していたが、氾濫した水は肥えた土を堆積させた（肥土—安久津）から、近辺には神領安久津八幡を支える神田や地頭領主在家集落も多かったのではないかと思われる。「伊達家臣図」に「八幡總裁片倉小十郎の館跡あり」とある。

この地のすぐ東は、①「川童淵」②「ままの下」で、その地名が示す通り、①深い淵、②段丘の下が続いているのである。段丘の高さは5m程度で、200m四方（約4町歩）の館跡の東Aは谷状に切れで南北に道があり南と西側は帶曲輪状の土塁B、Cが区域を仕切っている。更にその西には墓地（最近移転）Dがあり自然の形で南西へ約350mの段丘が続き平地化されている。主郭とみられる曲輪Iの南西から北にかけて段階Eと、東の雛形の土塁Fが曲輪Iを囲み、また、それぞれ曲輪IIとIIIを区切っている。土塁GとBの間が虎口Hで樹形の形跡もみえる。全体の構造は簡略であるが、土塁C、B、Gの、或は堀が南の備えを補っていたのかもしれない。

伊達稙宗、晴宗親子の天文の乱では、晴宗は稙宗党であった神宮寺から安久津八幡別当職を取上げ自党的金蔵院に与えた。天正16年（1588）安久津で伊達氏対佐竹芦名氏の間に争乱あり、片倉小十郎らの鉄砲隊が芦名氏らの軍勢を追い払ったという。

（山崎 正 青木敏雄）



館の越館略測図

1990.2

所在地 高畠町大字二井宿字下宿

築城者 不明

築城時期 南北朝期

参考文献 『高畠町史』

概要

二井宿は遠い昔から陸奥仙台との国境にあり、また、屋代川を通り、上山橋下を経て最上山形に到る米沢からの官道筋にあったため、歴史的にも文化的にも重要な位置を占めていた。

志田館は、屋代川、大滝川が分岐する辺り、志田山の東南に張り出した峯の頂きにあり、東西南北がほぼ見渡せる格好の地に構築されている。

東面して開いたそれぞれの稜線上に、北郭Ⅱと南郭Ⅲがあり、双方を西側の主郭Ⅰがつないでいる構造である。北郭には階段状に6、南郭には小さな10の腰曲輪群（段）が連なっている。北郭と南郭は中腹の連絡道で結ばれ、道は北郭からづら折れ状に下り、虎口Aに到っている。虎口付近は平坦で、山を囲むような形で屋代川が流れ、大滝川を分岐しているので天然の防御形態をなしている。

主郭Ⅰと麓の屋代川までの標高差は約100mあり、南方から登る道はなく、急で、川べりには、とげのあるサイカチの大木が繁茂していたが現在は少ない。主郭の入口となる南郭上階の虎口側面には明らかに人工による石垣Bが道の両側にある。

山頂（371m）の主郭Ⅰは南北に70m、東西に20m程の広さであるが、東面及び西面は急な斜面を呈している。北端に堅穴Cがあり、落葉と雨水が溜まればある程度の水の用は足せる。そこから別峯の山頂に向かって掘切Dが3個所ある。

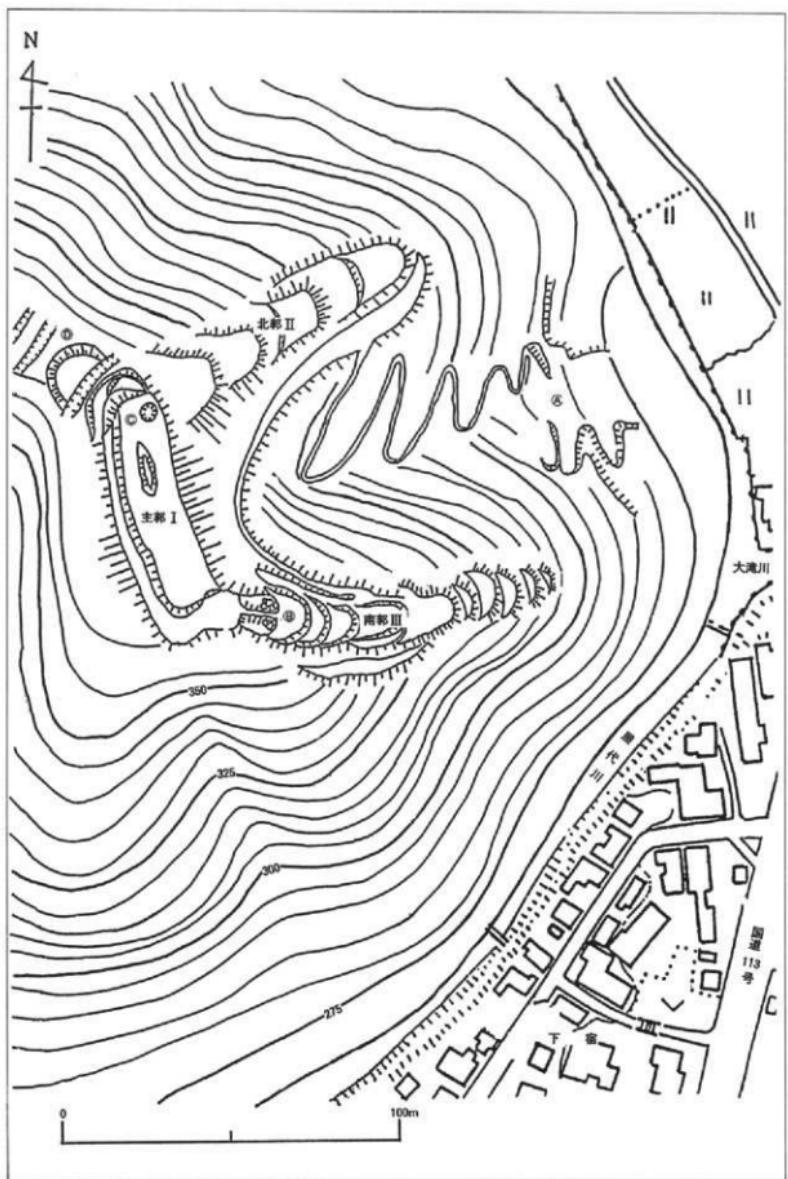
東南約1,000mに貝吹山（553m）と称する物見があり、主郭Ⅰの南端から見通せる。腰曲輪状の段は総じて小さく、兵を駐屯させることはできないが、南郭に10も続いているのは如何なることか。

天授6年（1380）伊達氏置賜侵攻の時すでに長井氏の砦として存在していたとみられ、屋代嶺（新宿柵）で合戦があった。元亀2年（1571）伊達輝宗が、新宿（志田館）に陣し、ここから最上氏に対し、北条莊中山に出馬している。城主は、大畠吉兵衛、達藤盛利、志田義治ら諸説があるが同一人かとも思われる。

山麓の何れ方向にも根小屋とみられる所はない。「元亀2年輝宗新宿ニ陣ス」の場所は旧11月の駐屯地として主郭は常識的に考えられず、貝吹山の北側になだらかな平場があるが特定はできない。

諸説、記録が、新宿柵（屋代館）と混同されているが、長井氏、最上氏、伊達氏、上杉氏それぞれに攻防があり、最終的には、慶長5年（1600）関ヶ原の戦いの前哨戦が、伊達、上杉（直江）の間で行われている。

（山崎 正 青木敏雄）



志田館略測図

1990.11

所在地 高畠町大字二井宿字上宿

築城者 不明

築城時期 南北朝期

参考文献 『高畠町史』『七ヶ宿町史』『奥羽宿駅街道の時代的変遷』

概要

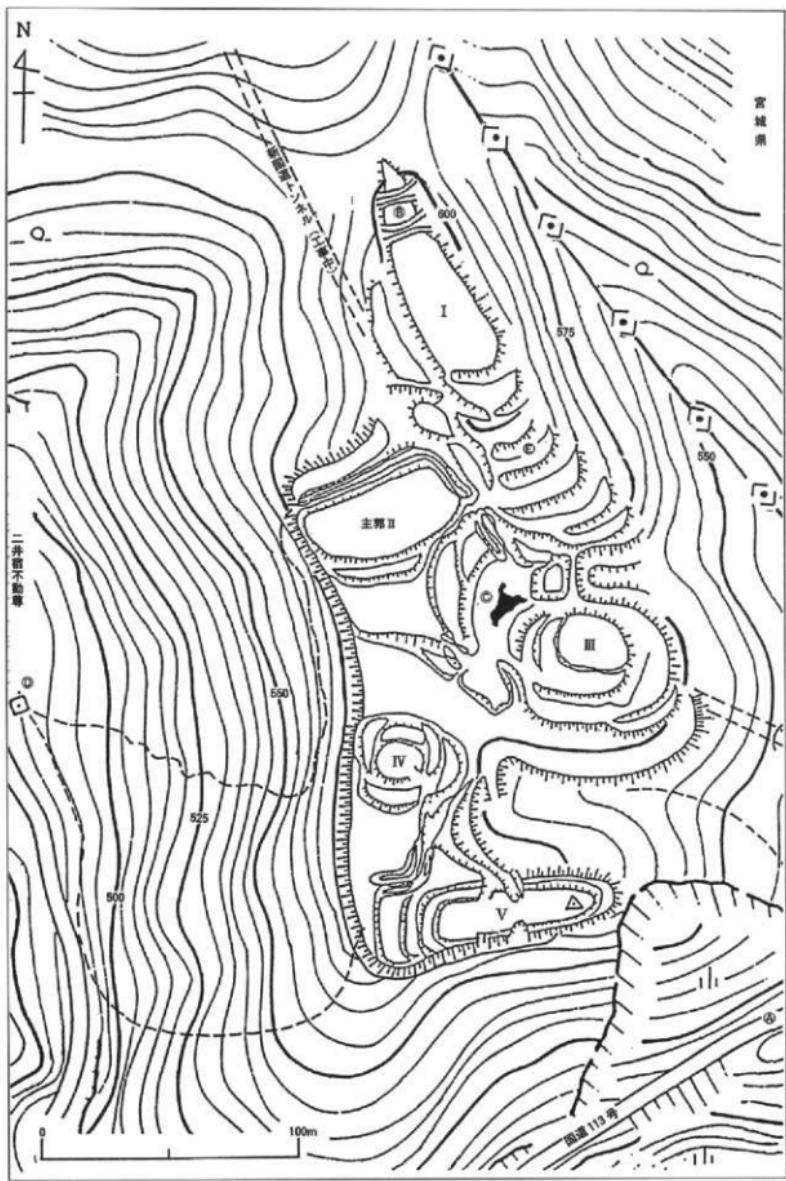
宮城県と県境を接する標高 607m に存在し、現国道 113 号あくと合わせ橋 A とは 90m 程の差がある。それぞれ方形もしくは半円形の腰曲輪を重ね餅状に配するのが特徴で、北より I～V 曲輪の 5 形態に分けられる。各曲輪は交互に配した腰曲輪で接続しており、虎口と土橋を伴っている。主郭は II の曲輪と考えられ、II、III、IV を結ぶ曲輪の間が他の曲輪と比較して一段と低く、更に広面を呈していることを考慮すれば、有事の際に密かに兵を集合させる機能としては理想的である。また、曲輪 I の峯通りに 2 本の堀切 B を配し北の備えとしている。曲輪 III 下の窪地に池 C があり常に雨水が溜っている。曲輪 II から、つづら折りに下れば、D の二井宿不動尊に到るがここには十分な湧き水がある。この傍一帯は馬場とよばれ、曲輪 II から高畠方面が、曲輪 III から湯原方面が見通せる。

さて、大手、主虎口を何処とみるかは、地形、構造上なかなか断じ難い。同じように主郭を III とみても不自然ではなく、背後に適切な施設をもたない II を主郭とみるならば、それは長井氏の立場といえようし、一時湯原を領した上杉氏の場合、或は伊達氏にも同じような見方もできる。I の直下、数段の堀切状の施設 E にも護られた池のある C 地点を要に、防備の都合で見通しの良き I、II、III を活用したのではなかろうか。

天授 6 年 (1380) 伊達氏侵攻の折、屋代峠で長井氏との合戦があったという記録 (七ヶ宿文書) があるところから、初期の重ね餅型の曲輪としても、当地としては南北朝遺構とみるのが妥当と考えられる。曲輪 V の下は急な崖で大滝川に深く落ち込んでいる。また、南東のあくと合わせ沢を含み、近世において道らしきものが整備される以前は、二井宿峠を越えた高畠側は急峻な地形が続いており、緩やかな湯原側と違いこの位置への砦の配置は当を得ているといえる。

湯原が、最上領、蒲生領、上杉領、再び伊達領、それに対する新宿が長井領、伊達領、蒲生領、上杉領であったため、屋代館は国境警備上重要な位置にあったと考えられる。屋代館は高所にあり冬期は峠道も積雪多量のため通行不可能であるから、春から秋までの間、上杉、伊達それぞれの領期において屯所を置き、足軽 1~2 人が配されていたという。因みに、関ヶ原合戦の折この砦をめぐり国境東の玉の木原で伊達、上杉両氏が戦っている。それより先、伊達氏置賜侵攻の折、すでに屋代館は存在し、長井領としての砦であったと思われる。七ヶ宿の「関文書」(「奥羽宿駅街道の時代的変遷」飯沼寅治) に「関、渡部某、儀山 (政宗) 出羽永井御合戦の際間道を導き御利運に罷成候得共屋代峠で討死」「安永風土記」(角川本「地名・宮城県」) に「9 代政宗は滑津古里駿で越冬し屋代峠を越えて長井に侵攻した」とある。その他「米沢地名選・新宿櫛」(文化元年 1804) には「伊達氏の遠藤吉兵衛盛利住す、伊達氏の前より愛を領しけるが伊達氏去って直江に臣たり、慶長の末直江に辞して又伊達に住う」また「湯原あくと合沢絵図」(享和 5 年 1688 宮城県図書館・七ヶ宿町史)「屋代峠もの見」と記されている。

(山崎 正 青木敏雄)



星代館跡測図

1988.6

所在地 高畠町大字小其塚字館後

築城者 不明

築城時期 慶長期

参考文献 『山形県史資料篇 15 上』

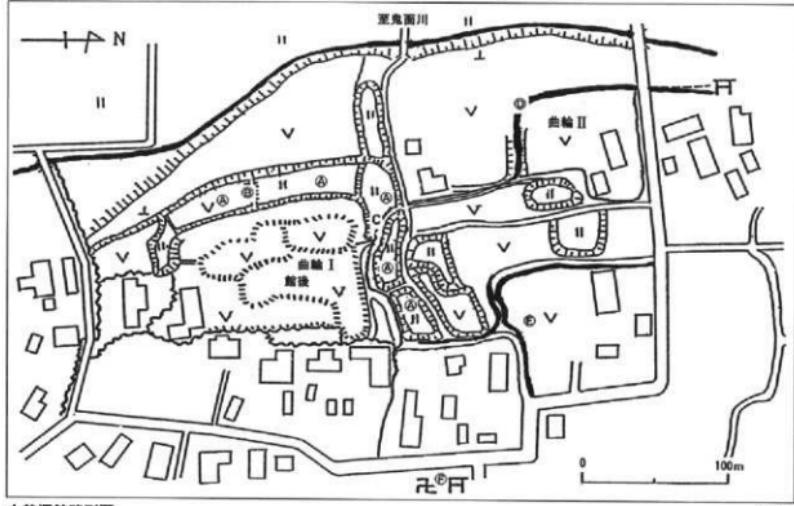
概 要

西方に鬼面川を望む 200×300m の不等辺四角形段丘上にある。字「館後」は「たてのうち」とよび、この一角の南寄り、一段高い所を指している。ここを本丸 I の曲輪とすると、その南と北を巻いて一段低い部分に田形と堀 A が残っているが、それは内堀であろう。B は土橋で、C が虎口とみられる。明治 20 年代の字切図では全部田になっている。北寄りには現在でも幅 2m (一部) のかなり深い堀 D がめぐらされているが、この辺りは II の曲輪と考えられる。

小其塚は鬼面川右岸にあり「御塚塚」ともよんだ。ここには「おその」という美女の「女人蛇体」伝説が残っている。ということは、墨れ川と肥沃な土地につながる話である。

鬼面川は墨れ川で常に河川敷が移動していたらしいが、その段丘上の高場（ままの上）に館があり、肥沃な土地柄で、付近に「前田」の地名もあることから、居館としては立地条件の整った適地であったと思われる。「おその」の塚は館後に接する「塚田」 E にある。

天文 7 年御段鉄古帳（1538）に「おその塚」とあるのが初見、地頭領主として宮崎弥七郎らの名が見える。付近 F に鎌倉期板碑がある。
(山崎 正 青木敏雄)



小其塚館略測図

1980.9

おかのだいだて
岡之台館

381-017

所在地 高島町大字糠野目字岡之台

築城者 不明

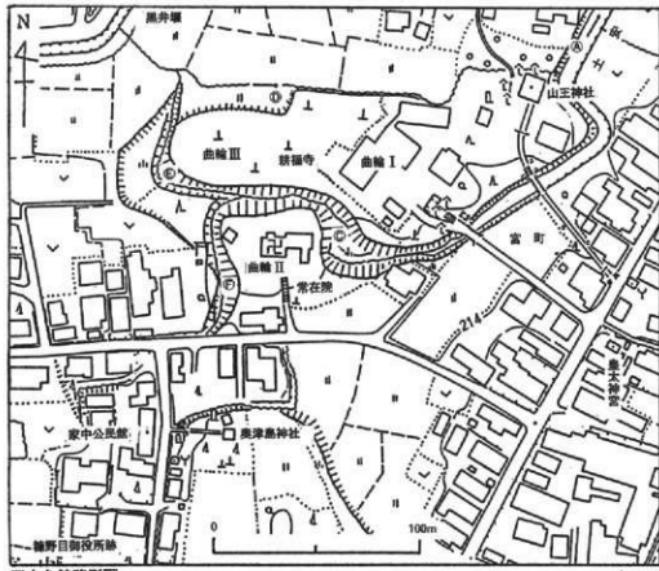
築城時期 〈室町期〉

参考文献 『高島町史』『山形県史資料編 15 上』

概 要

諸説に伝承として載る「糠野目館」「糠野目東館」の場所は特定できないが、識者が早くから指摘していたこの地は地形上からみて館跡そのものである。前面に深い川、周りに堀形の水田を配した段丘上にあり、北東の松川（最上川）続きの曲輪Iの北端、山王神社北辺Aと土安川とは数m以上の段差がある。曲輪Iの耕福寺（応永18年1411創建）と曲輪II常在院の間Cは深い掘川となっているが土橋などの連絡路は存在しない。曲輪IIIの墓地北は小さい段差Dで台地と城を画している。西側の掘川E、Fも天然の防御帯を思わせる地形であるが、この館の性格を、微税などの支配に任ずる在郷領主の居館とみれば、戦乱に対するとりたてての構築は必要である。因みに、天文22年（1553）晴宗公采地下賄錄に「宮目屋敷手作三千仁百刈」及び「六百文ぬかのへ宮の在家三千刈」とあるが、領主の直接支配田である「手作三千刈」（3町歩）を有する、つまり「宮の在家」（岡之台の目の前）の肥沃な耕地をもつ高場の岡之台に居館を構えたことは十分に考えられる。この館の南にも高場、字家中があり、近世には上杉氏支配の「糠野目御役所」が置かれていた。支配者の居住地として適地であったのであろう。

（山崎 正 青木敏雄）



1992.4

いいづかだて
飯塚館 381-018

所在地 高畠町大字糠野目字飯塚

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『山形県史資料編 15 上』『出羽諸城の研究』

概 要

飯塚館は、縄文時代の住居跡が発見された南原遺跡の北高場にあり、2~3町歩の広さを有する。東はすぐ松川(最上川)で、兵を集め、置くには適地といえる。内堀 A を配した中央の高場を曲輪 I (本丸) とすれば B が虎口となろう。そこには、土壙をめぐらした堀を土橋で渡る樹形の形がみえる。

虎口より一段高い道の両側の曲輪 II 及び本丸東の曲輪 III、更に、本丸北の土壙と堀をへだてた曲輪 IV が家臣団の居住区と考えられる。

曲輪 I と IV の間には田形状の荒地 C があり、境は土壙状の山 D として残っている。曲輪 I と III をへだてる施設はないが、III の東方、外堀とみられる E との間にはかなりの段差がある。

内堀 F と曲輪 I は格段の段差があるところから、F 及び A、C は相当深かったのではなかろうか。北方 G の掘川も幅広く、低くなった段差は段丘状に更に北に伸びている。

一方、南東の誕生川 H は天然の要害といえ、松川の合戦(後記)で、松川西岸に陣したのは伊達尚宗であるが、この飯塚館を拠点としたとするならば、2~3町歩程の館は広いとはいえないにしても、一応の機能、施設をもっていたといえよう。堀 E がより幅広く深かったとするならば防御の態勢は更に強固になろう。

伊達氏の一族、伊達周防の居館とされる所は①沖の館(高畠町史)②糠野目館(米沢地名選)③糠野目東館(米沢鹿子)と諸説があるが、何れもその地を特定できるポイントはなかった。内、①については、米沢地名選では伊達周防とはかわりなく米沢矢の目地内としている。しかし、小字名としては米沢の地籍にはなく糠野目地内にある。從前より沖の館とされていた館跡は、実は南に隣接する沖の前(沖の前館)にあったことが地元の研究者によって確認されている。(昭和40年代に滅失)

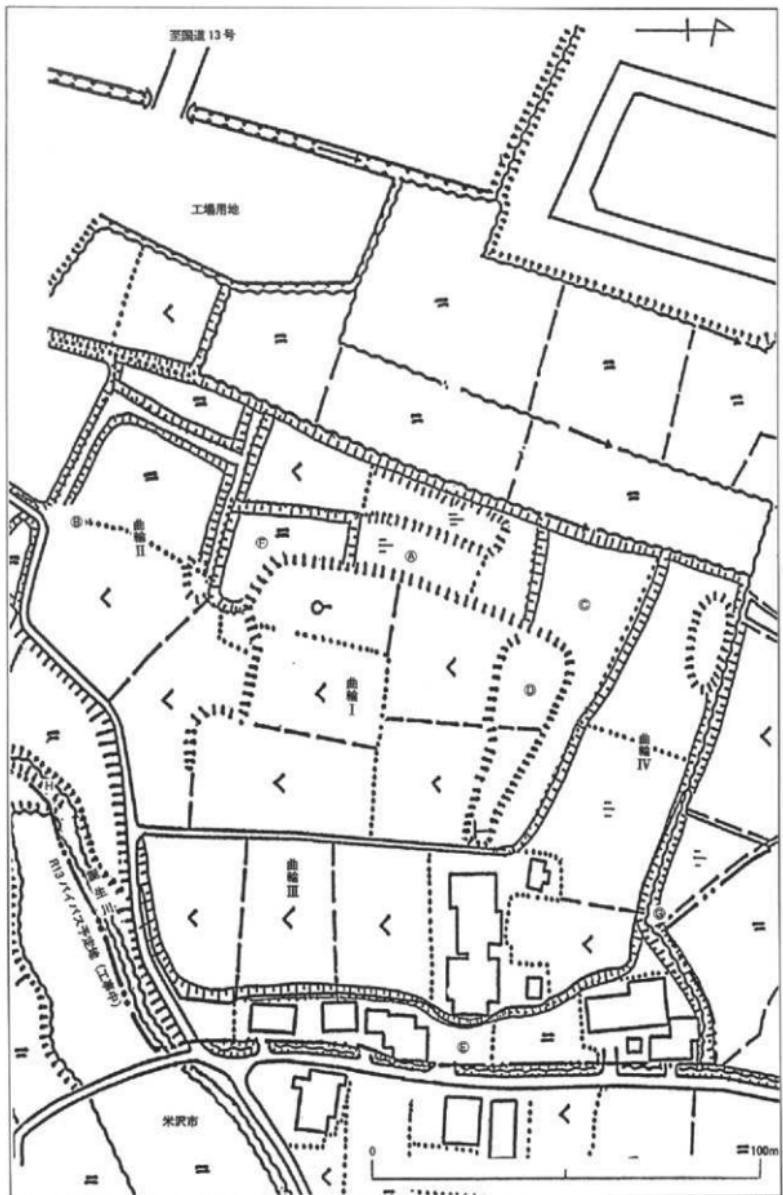
③の糠野目東館を沖の前館(仮に糠野目館として)の東とするならば、それに比定できるのは、現在の宮町の高場、岡の台館になるが、周防の居館としては規模が小さい。

「出羽諸城の研究」では、糠野目館を伊達周防の居館とし「米沢の北方 8km にある。以前は長井氏の一族が住した。東は松川に望んだ平城で西は約 2km をへだてて鬼面川がある。明応 3 年、伊達尚宗、穂宗が松川をはさんで戰った古戦場である」としているが、地形条件が一致しているのはこの飯塚館である。

松川の古戦場は、松川と天王川の合流点のやや北方、字「川中島」という、飯塚館から約 900m の所にある。

天文 22 年(1553) 睽宗公采地下賜録には「ぬかのへのかう」に、小栗川尾張守らの地頭領主の所領地として「飯塚在家」の名が見える。

(山崎 正 青木敏雄)



飯塚館略測図

1992.4

ときのまえだて
沖の前館

381-019

所在地 高畠町大字雜野目字沖の前

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『高畠町史』

概 要

「沖の館」を米沢地名遷では米沢矢野目地内としているが、地元の人が長い間沖の館としていた館跡は実は沖の前にあり、国道13号から西の小其塚方へ約400m、北へ100m程の所にあった。点線内の区域で50m四方位の小さな曲輪IのAに鎌倉期の板碑、Bに稻荷堂があり、土星C、Dの周りは狭い田（堀跡か）で囲まれていたという。現在は昭和40～60年代の基盤整備すべて滅失し、圃場

は大型化（3反）されたため遺構は全く残っていない。（図は字切図による）（山崎 正 青木敏雄）



沖の前館推測図

ときわふるやしき
時沢古屋敷

381-020

所在地 高畠町大字時沢字古屋敷

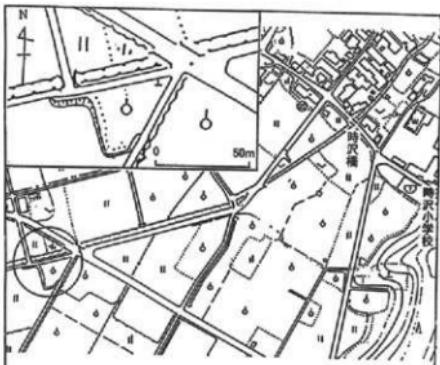
築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『山形県史資料篇 15上』

概 要

現況は果樹園になっていて、館跡とする遺構は段差のみであるが、伝承と石碑があり、字名、字切図は「古屋敷」とあるので、ほぼ特定はできる。付近は、大谷地の一角であるが、地盤が堅いので開拓の起点になった。碑文（昭和7年）に「高橋豈後之旧邸跡、正平年間（1346～）この地に住す、南朝の遺臣にして時沢の始祖云々」とある。天正13年（1585）伊達氏北条段錢帳に「北条之内時沢三百刈役に七拾五文請取申候」とあるのが初見。地頭領主の居館と思われる。



時沢古屋敷推測図

1993.4

7年）に「高橋豈後之旧邸跡、正平年間（1346～）この地に住す、南朝の遺臣にして時沢の始祖云々」とある。天正13年（1585）伊達氏北条段錢帳に「北条之内時沢三百刈役に七拾五文請取申候」とあるのが初見。地頭領主の居館と思われる。

（山崎 正 青木敏雄）

かしわぎめいけ
柏木目在家

381-021

所在地 高畠町大字柏木目字屋敷

廻

築城者 不明

築城時期 戦国期

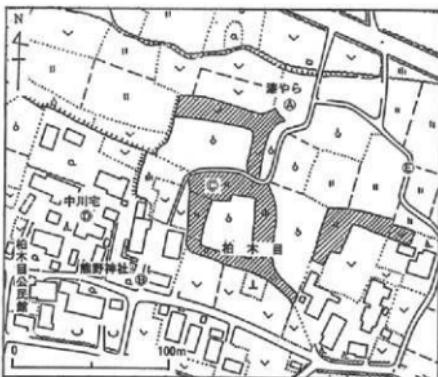
参考文献 『山形県史資料編 15 上』

概要

全体区域の特定はできないが、字屋敷廻の東、大字境に遺構が残っている。近世賃租の漆を植えていて地名となった「漆やら」 A の南から鎌倉期の龜型殿双立板碑がある B の間で、明治 21 年字切図と照合しても、田形（斜線・何

れも低湿地、誠反田）C と廻地の位置関係が、段差によって掘と土壘に想定できる。近世以前からの旧家という D 近りに地頭領主の居館があったのか、E は古くからの文殊道、大永 8 年（1528）安久津八幡例祭物取扱並支払帳に「百文口取老人柏木目在家」とあるのが初見。

（山崎 正 青木敏雄）



柏木目在家略測図

1983.8

あずさだて

小豆館

381-022

所在地 高畠町大字船橋字北原

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『歷代卿昔話』

概要

大字船橋の北西、字北原、後藤氏宅辺りが早くから館跡とされ、廻跡 A が残っていたが近年埋められた。その南に鍵形の廻跡とみられる田 B が続いており（斜線）地続きの字土井尻に、近世豪農の館掘であった田 C があり、前には字前田を配している。口碑によれば、伊達氏の時代、政宗の伯母にあたる「船橋御前」とよばれた人と、その子、船橋頼母重宗が住し、天正 19 年（1591）政宗に従って岩出山に移るという。（山崎 正 青木敏雄）



小豆館推測図

1983.11

いりょうだだく 〈にぎてゆきみ〉
入生田館（新館屋敷）

381-023

所在地 高畠町大字入生田字川南

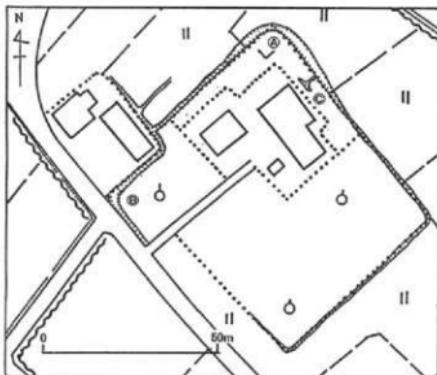
築城者 不明

築城時期（室町期）

参考文献「墨代郷昔話」

概要

伊達諸将の居館で防御上の特別な構えは見えない。入生田元康が寛正4年（1463）住し5代後天正19年伊達氏に追随し岩出山、栗川城に移ったと伝える。屋敷は4反程であったという。北東Aと南西Bにややふくらんで僅かながら水路が残っているが、明治初年



入生田館略測図

1990.11

まで掘跡が見られたという。屋敷北の湿地Cがそれか、南方に百間四方の家臣集落「藤吾在家」、北西の松川べりに、夏分、伊達氏逗留の地とか「御殿」という地名が残っている。（山崎 正 青木敏雄）

つゆふじにしやしき
露藤西屋敷

381-024

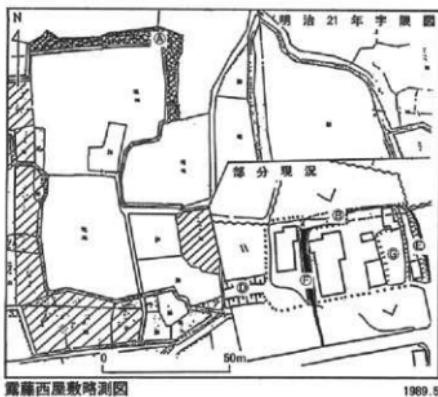
所在地 高畠町大字露藤字西屋敷

築城者 不明

築城時期 不明

概要

明治21年字切図で見ると、昭和50年代基盤整備事業前まで、Aはやや高めの畠地で土壠状になっていた。Bには幅2間程の堀があったが北を埋め西を残したという。蒂状の田形は掘跡ともみられ、現況のD、Eは土壠状の高場、Fは館堀、Gはやや低地になっている。



露藤西屋敷略測図

1980.5

露藤には他に上館、下館、小在家の地名があるが何れも遺構は見えず「晴宗公采地下題錄」の「や代露ひちの内富塚あふミ」の「露藤館」として特定することはできない。（山崎 正 青木敏雄）

なかじまだて 〔あんどうだて〕
中島館 (安藤館) 381-025

所在地 高畠町大字中島字館内

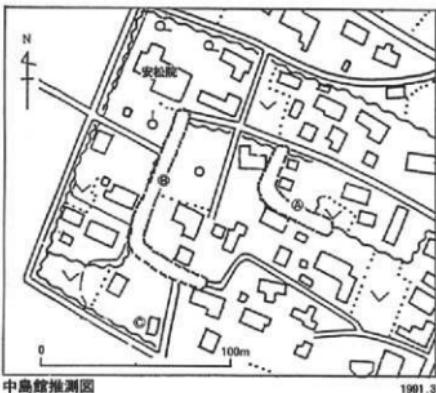
築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『高畠町史』『高畠町伝説集』

概要

中島は露藤村の枝村で「文禄3年(1594)露藤村検地帳中嶋分」に10戸の内20町歩高225石を持つ「三河」なる高持百姓が記されている。高畠町では、伊達氏領期の土豪在郷經營が行われていたのではないかとみている。安藤照



中島館推測図

1991.3

明が住し伊達尚宗の頃中島伝兵衛が再築したと伝えているが、現在は本丸堀跡というA、三の丸堀跡Bが口承により特定され、「おもて」と家名をもつCが残るのみである。Bの果樹園はやや高場で曲輪跡とみられる。

(山崎正 青木敏雄)

あいのもりむらにしだて
相森村西館 381-026

所在地 高畠町大字相森字村西

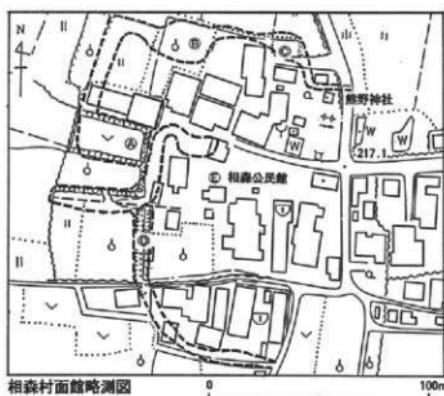
築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『高畠町史』『高畠町伝説集』

概要

相森には幾つか館跡をもつ屋敷があるが、その内、集落の村西の位置に所在するこの館跡は、幅15m程の堀跡Aを有し、戦後の基盤整備以前は、Aの連続と思われる規模のBや、馬洗いと称するか



相森村面館略測図

1992.12

なり深い淀Cもあった、より館跡らしい痕跡を残している。破線は堀跡を示し、E辺りにあったであろう居館をめぐっていたのではなかろうか。この館跡は、約150m四方で比較的規模が大きく、丑寅に神社を配し「前田」に接していることから「晴宗公采地下賜録・北相森在郷」の地頭領主の居館とみられなくもない。

(山崎正 青木敏雄)

あいのもりだて
相森館 881-027

所在地 高畠町大字相森字村南

築城者 不明

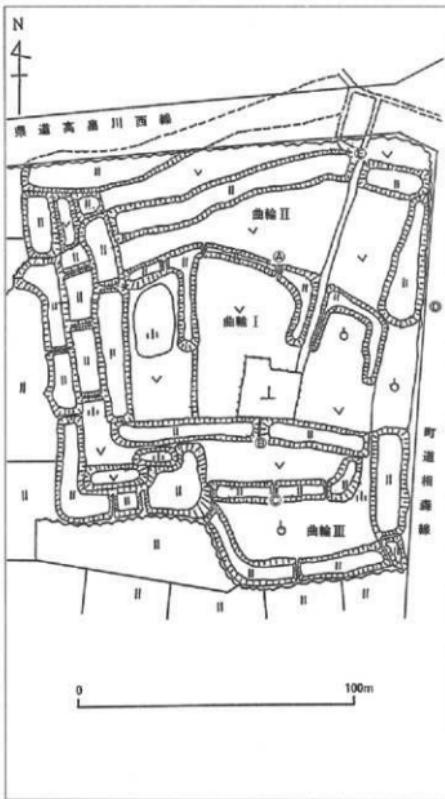
築城時期 戦国期

参考文献 『山形県史資料篇 15 上』

概要

高畠城と一本柳館の中程にあり、高畠の平地の館跡としては珍しく原形を保っている。更に、約方2丁で、ほぼ5角形の綱張も興味深い。明治21年字切図、昭和53年地籍図、昭和46年航空写真及び現況を比べてみると、県道等建設によって滅失した部分（破線）果樹園転用などの利用の違いを除けば田形は殆ど動いていない。現在の田形の配置は、共同墓地（昭27造成）になっている場所を中心に、その昔の「二重の堀形」に重なって見える。Iを主郭とし、北及び南に曲輪II、IIIを配した形で、それぞれ高場になっているが際立った段差はない。IからIIへ、また、IIIに到る土橋A、B、Cも存在したのではなかろうか。現在は字「村南」であるが、この辺りは、且つて「やぐらした」（矢倉下）とよばれていた。館跡の東の部分Dは滅失し北東の丑寅には阿弥陀堂（石堂）があったが、県道建設に伴い移転した。虎口Eは、旧道に接する、現県道から墓地に入る道の入口辺りかと思われる。総じて、曲輪Iを中心、二重、三重の堀廻しを備えた館跡といえよう。水利は、現在は屋代川から取水した「二の堀」が数本流れているが、天文22年（1553）晴宗公采地下水賜録に、相森に所領を安堵された地頭領主として「中村源三、佐竹越中」らの名が見える。また、大永8年（1528）安久津八幡例祭物取収並支払帳に「六拾文相森井上筑後殿」とあるところから、地頭領主が住し、幾つかの在家があって支配した、従って水利も確保されていたと考えられる。

（山崎 正 青木敏雄）



相森館略測図

1992.8

なかざとざいけ
中里在家

381-028

所在地 高畠町大字中里字浦田、道の下

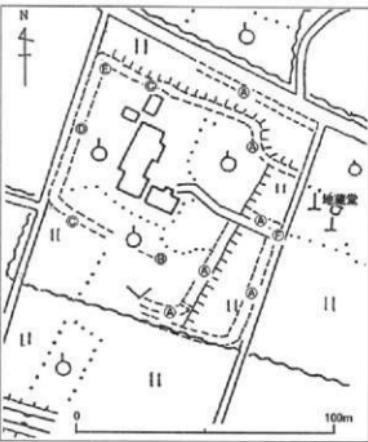
築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『高畠町史』

概 要

破線の A は明治 21 年字切図にある連続した田形で掘、土塁が付随していたと思われ、B も僅かに痕跡がみえることから、屢敷は二重の堀に囲まれていたと考えられる。C は、昭和 46 年高畠町都市計画図に見える館跡で、後年、地主によって埋められた。内 D は、館掘跡が窪地で、北西角の湿地 E は竹藪になっていたて堀であったことがわかる。近世の絵図では、約 100m 四方の屋敷廻りに板塀があ



中里在家略測図

1991.6

り、F が定口になっている。大永 8 年 (1528) 安久津八幡例祭物取扱並支払帳に「百文口取老人中里在家」とある。

(山崎 正 青木敏雄)

さざわだて
佐沢館

381-029

所在地 高畠町大字佐沢字館ノ内

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『和田村誌』

概 要

北東から東にかけ鍵形 A に幅 1 間程の堀と土塁が残っていたが明治の末に埋めたという。明治 21 年字切図には B が記されており昭和 50 年代に埋め同時に C を新設、現在家屋がある D に居館があったと思われる。地名 (家名) として「内城」の名が残っているが戦略的な構造は見られない。この地一帯の在家を支配した地頭領主の居館であろう。初見は永正 18 年 (1521) 「屋代莊佐沢郷」であり、晴宗公采地下賜録には瀬上中務の名がある。



佐沢館略測図

1992.8

(山崎 正 青木敏雄)

所在地　高畠町大字亀岡字川原山

築城者　不明

築城時期　南北朝期

参考文献　『高畠町史』『高畠町伝説集』

概　要

亀岡館は、文殊山から張り出した南西丘陵の末端部、標高 340.9m の、通称「館の山」にあり、標高差は山麓から約 120m である。文殊山の方向となる尾根に 3 条の堀切 A を配し、主郭 I となる山頂部を落曲輪で囲み不整形の主郭を形成している。

虎口は、北面の B と南面 C に開き、南面の虎口は西側に迂回して北虎口付近で樹形 D となって合流し北斜面を道路として山麓に続いていく。山麓には中央の道路を境に長方形状の曲輪 II が 3 基向かいあって存在する。これらは根小屋的施設とも考えられる。

高畠の山城（砦）の多くは、東の国境沿いに北から南にかけて点在している。構築の特徴、位置からみて、東からの侵入に備えた国境警備の砦とみるのが妥当であろう。従って、構築の時期は伊達氏領期以前と考えられる。伊達氏領期に入ってからの諸将の居住は「東への防備」とは考えにくい。しかしながら、伊達氏領期における、本城、支城としての米沢城、高畠城への鎌、のろし等の中繼点としては地の利を得ている。

急な南面に施設はないが、頂上付近に下り（登り）道がある。南麓に川があり、川に沿って旧道合津（ごうづ）道が通り、途中から頂上への登り道がついている。合津道は豪士峠を経て伊達氏が進軍したとみられる茂庭に続いている。西面は峯通りが比較的登り易いので備えは甘いとみみたい。

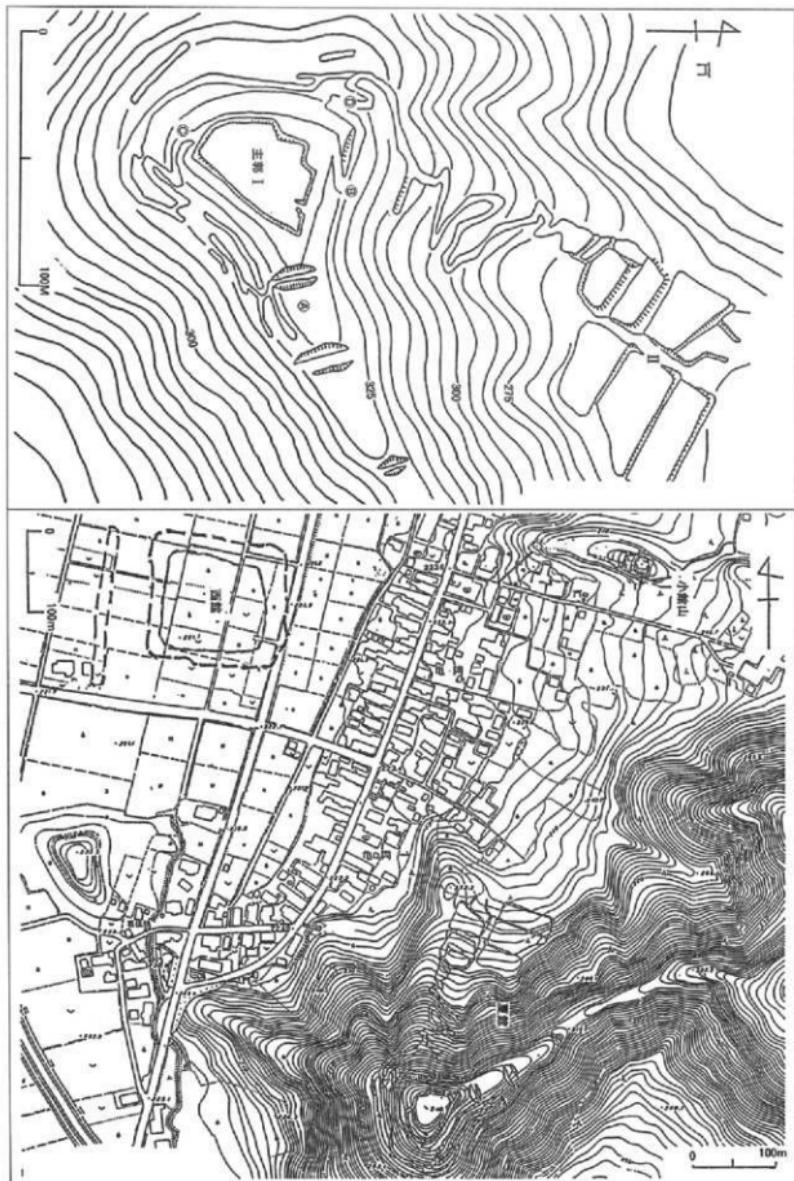
北西方向平坦地、約 400m に「西館」（にしだて）があり、東方の「小館山」（こだてやま）に山木氏（長井氏時代）が造営したという小社青麻（あおそ）神社がある。

地元では、亀岡館を「たての山、夏だて、にだて」とよんでいたが、夏館は有事の砦とみられ、従て夏の居住地ではなく、西館は冬の居住地ではなく、平時の居館と考えられる。西館は単郭式平城の形態をもち、周りに幅 30m 程の堀をめぐらしていたことが、昭和 46 年の航空写真で確認されている。また、西 50m に北へ 150m 伸びた外堀（か）はかなり深かったことを記憶している。広さは約 1 町歩位であったが、昭和 45 年の畠場整備によりその形は失われた。現在はやや高場の畠地に曲輪の面影をうかがうことができる。（破線が堀跡）

小館山は見た目の高さ 30m 足らず、南北に 50m 程の小丘であるが 3 個の段を巻いている。

口碑によれば、安元年間（1175～）より山木判官景隆ここに住するが、天授 6 年（1380）伊達氏に滅ぼされ、後、神岡茂広、飯坂藏人左衛門が領し、天正 19 年（1591）伊達氏と共に岩山山に去る、と伝えているがもとより定かではない。

（山崎 正 育木敏雄）



龟岡館略測図

1990.2

たかはたけじょう (やしろじょう・たかねがじょう)
高畠城 (屋代城・鐘ヶ城) 381-031

所在地 高畠町大字高畠字古城ノ内

築城者 (植爪五郎季衡)

築城時期 (平安末期)

参考文献 『東置賜郡史』『高畠町史』

概要

高畠城跡は「元禄の頃羽州高畠之図」及び「明治21年字限図」によりその位置を特定することができる。即ち、東西約300m、南北約200mの、西方が半円形をなした不正形長方形の「字古城ノ内」がその城であったことがわかる。内、本丸、二の丸の曲輪の広さは、東西約220m、南北約100mの約2.2ha程とみられる。その内、東3分の2は小学校、西3分の1は保育園と高校の敷地及び果樹園、水田、宅地等となっている。元禄古図にある寺院、堀堀など周辺の位置は全く動いていないので一部残存遺構は容易に照合できる。高畠城はその形が釣鐘に似ていることから鐘ヶ城ともよばれた。

高畠は平安の昔より、長門藤原氏、奥州藤原氏の莊園、支配地で、左大臣藤原頼長と奥州2代基衡との間に税をめぐるやりとりが頼長の日記にあるところから、高畠を中心とする屋代郡一帯は奥州藤原氏の一族（基衡の甥季衡という伝）が支配下の有力土豪が支配していたと思われる。

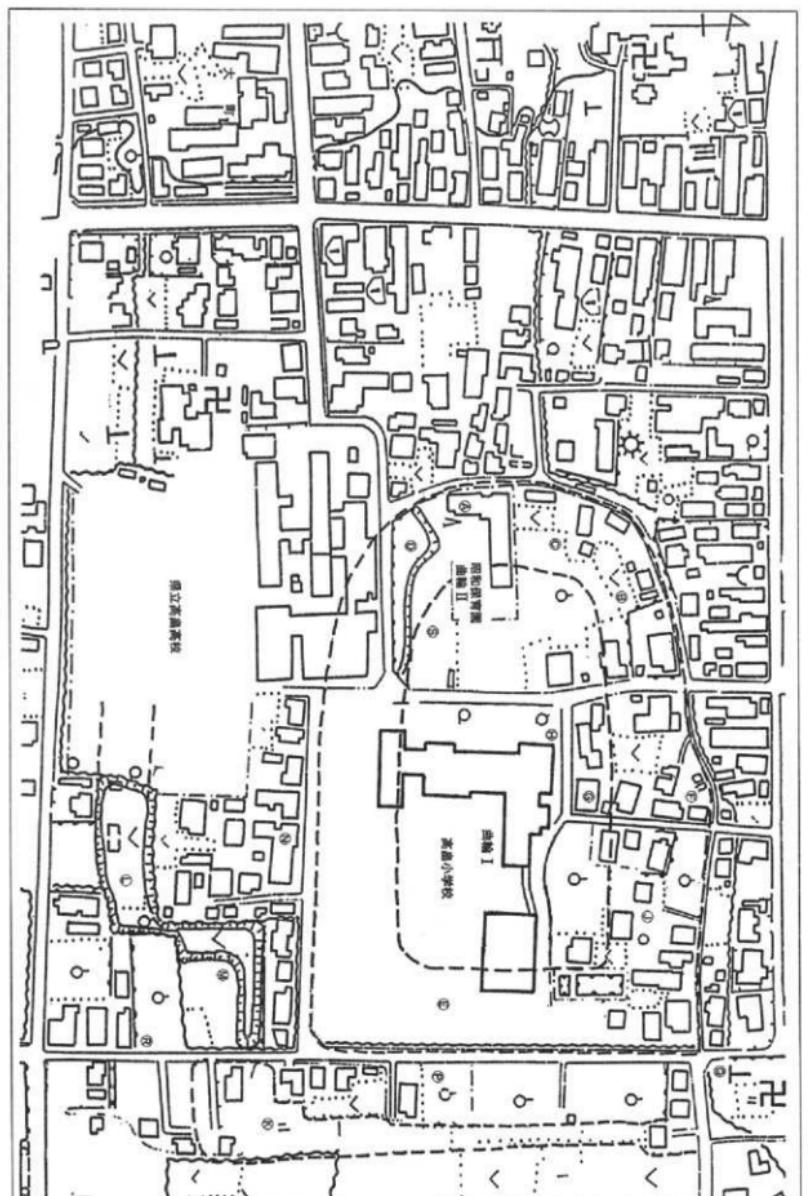
その館堀をめぐらした程度の居館であったらしいものを、天授6年（1380）に侵攻し長井氏を滅ぼした伊達宗連と9代政宗が置賜の本拠として修築、元禄図程度の規模となったと伝えられている。以後、伊達氏、上杉氏、幕府直隸、織田氏らの居城、居館、陣屋等となるが、直徴することはあれ、大きく増幅された記録はないので、遺構は戦国期を越す時代からのものとみてよいのではなかろうか。

図の曲輪I（本丸）をめぐり、曲輪IIの保育園正門辺りに大手門Aがあったとみられ、B及びCは堀形（元水田）がそのまま道路、宅地、果樹園として残っている。Dはただ一個所残っている堀跡でEの深田は現校舎改築（昭.54）前までは実習田として使われていた。以下、残存するのは、馬出の一部とみられる石橋F、北御門があったG、及び土墨の一部が僅かに残るH、元禄図とびたり一致する弁財天跡地Jの地下2mから最近、鳥居片が掘り出されている。ほか、外堀が埋められて田形として残り、水田、果樹園となったK、L、産地、畠となつたM等が昔の形を留めて残っている。また、家中屋敷があったN、Pは「お屋敷」という地名になった。

飲料水及び堀水は、北の屋代川から引き水をしていたものと思われる。Qの堀脇はその導入口とみられ、近年、Rから水管が掘り出されたが年代は不明である。また、曲輪IIの一角Sに井戸があり、石枠が残っていたが、屋代川の伏流水はこの辺りでの汲み上げは可能であることから、飲料水については必ず心配はなかったと思われる。

高畠城をめぐる屋代館、志田館、塩森館、亀岡館、館ヶ崎館等は、恐らく、高畠城を中心とする、長井氏時代からの東の伊達氏に対する備えで、伊達氏の時代に、諸将が増強して居館としたものと思われる。国境に到る屋代川扇状地の隘路口を護る要の拠点、降って、伊達氏置賜支配の本城であったと考えられる。図の破線内は、内堀、外堀の跡と想定され、広い所では、明治初年頃までは、幅30m土壁の一部は幅10m、高さ4m程であったと古者は伝えている。尚、古記録としては「晴宗公采地下水賜録」に「たかはたけのたてめくりのやしき並まちやしき小築川尾張守」とある。

(山崎 正 青木敏雄)



高昌城略图

100m
1983.4

こごりやまだて

小郡山館

381-032

所在地 高畠町大字小郡山字大幡

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『東置賜郡史』

概 要

置賜郡創設（和銅5年712）「3里（50戸）を小郡となす」の頃の郡衙址とみられている。西側水堀隅Aの幅は10m程で、北Bは空堀（湿地、萱野）になっている。外側は、南北に50m、東西に40mであるが、掘り上げられた石くれ



小郡山館略測図

1991.4

が多い曲輪Iとみられる高場の東を、南に折れた矩形であったとも思われる。大永8年（1528）安久津八幡例祭物取扱並支払帳に「六拾文小郡山丹波殿」天文3年（1534）伊達稙宗文書に「ここり山修理在家」とあるのが初見である。

（山崎 正 青木敏雄）

ひわたしがいけ

日渡在家

381-033

所在地 高畠町大字泉岡字日渡前

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『高畠町史』

概 要

破線は昭和43年頃のもので、屋敷門A、館堀B、C及び蓮池Dが残っていたが、後、埋立て地のため滅失した。遺構としては、屋敷の北西角Eに土壘、堀形の一部が見られるのみであるが、近世において、武田氏が大庄屋、割元であり、屋敷と館の位置は変わっていない。東の山の中腹に屋敷神があるので、館域はもっと山の方に拡がっていたものと思われる。大永8年（1528）安久津八幡例祭物



日渡在家略測図

1992.5

取扱並支払帳に「八拾文日渡在家」とあるのが初見。

（山崎 正 青木敏雄）

所在地 高畠町大字高安字馬越

築城者 不明

築城時期 不明

概要

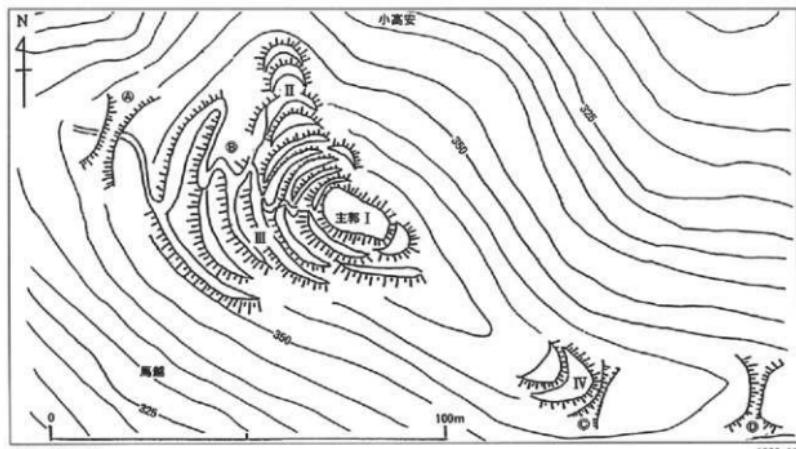
高安館は塙森館ほか高畠の山城とほぼ同じ形態の砦であるが「伊達諸将の居館」としては、文書、口碑には出てこない。また、地元の年輩の一部の人が「たてのやま」として知るのみであった。高安の集落から南へ約1km入った所に「上の堤」があるが、その東の字小高安と字馬越の境に北西に張り出した峯の山頂、標高約370m（麓の堤からの標高差90m）に高安館（砦）がある。

高安は「犬の宮、猫の宮」そして「高安犬」で有名であるが、南山麓の馬越から上和田に抜ける山道は早くから拓けていたらしい。

堤の下からほぼ直線の峯通りを約100m登った所にやや大きめの堀切Aがあり、虎口Bに続いている。つづら状の道の上には、北向きの峯に数個の段状の小さな曲輪IIがある。頂上の主郭Iは広さ200m²弱、狭いが遠方竹森を見おろすことができる。主郭Iから西方へ半月形の段IIIが数個あり、主郭から上の峯通りには、50m行った所に2個の曲輪IVと堀切C、少し離れて峯が狭くなった所に更に堀切Dがある。

しかし、主郭の東直下には何の施設もない。さて、伊達領茂庭から豪士井、上和田山道を通り、敵が高畠城を攻めることは十分に考えられるので、その防備のためとするならばこの砦は長井氏時代の築城といえるのではなかろうか。

(山崎 正 青木敏雄)



高安館略測図

1989.11

所在地 高島町大字元和田字館ヶ崎

築城者 不明

築城時期 南北朝期

参考文献 『和田村誌』

概 要

構造がかなり複雑である。広さは2.5町歩程であろうが、見た目の丘にしては相当盛り沢山である。主郭と思われる曲輪Ⅰは、288mの山頂であるが標高差(40m)もさほどなく狭隘で通常考えられるような曲輪の形態をなしていない。

北面に巻いて数段の帯曲輪群Ⅱがあり、それぞれ西南端が切れ、主郭に連絡している。麓に続く斜面に4本の歓状堀Aがあるが、これは山城の山腹に切られたものとは違い、山麓の川に連なる緩やかな斜面に存在する掘跡で、今は土や落葉で埋まっているが溝でそれぞれ30~50cmの深さのぬかるみになっている。その軍事的な意味は不明である。

北に伸びる中腹の尾根に、中央曲輪Ⅲから西へ4個の段状の帯曲輪Ⅳ、北へやや広がりのあるテラス状の曲輪Ⅴが空堀Bをはさんで2段東の川に迫っている。ここの大堀は、西に伸び、Cの小さな堀切を通って麓の根小屋に続いている。Dの大堀も同様に麓に向けて開いている。

この丘の、南北に走る峯通りの中央部に北曲輪VIがあり、北東に向かって腰曲輪が段状に下がり、山麓をめぐる川に落ち、川辺は道状の土壁を形づくっている。北へは3本の堀切Eがあるが、標高や地形からみてあまり有効な施設とは思えない。

曲輪VIから南に下がる道は山麓の根小屋に続いておりこの辺りが虎口F、大手ではなかろうか。一方、南西角も虎口Gとみられ、帯曲輪IIの切れ目から主郭Iに登りつめることもできる。但し勝手知りの非常口であろう。Iの南面は急で深い川に落ちこんでいるためか施設はない。南東の平坦地に続くHは裏虎口という見方もあり、見た目では大手より構えが大きい。曲輪VIIから主郭Iに到る経路は帯曲輪Ⅲが複雑にからみ迷惑状になっている。

西方、根小屋とみられる所には、鎌倉期の板碑數基Jがあり、また館堀Kがあったが、これは近年埋められた。更にその西は河岸段丘になつていて、館南の河岸段丘と南東から北西に流れる和田川は格好の自然要害といえよう。

さて、主郭Iから長手館が遠望でき、のろしの連絡ができたとしても、何故にこのような複雑な砦が造られたのか、また、その労働力を提供、或はかり出された農耕集落が、南方の六郎四郎在室(晴宗公采地下賜縁)のほかに幾つかあったのだろうか、この砦の築城時期を長井氏領期とみれば、複数の農耕集落成立以前と考えられるから、原形はもっと粗略なものであったに違いない。従って、伊達氏領期における諸将は、農耕の諸条件が満たされてきた多くの在室集落(人口も)を背景とした諸館に安堵され、砦が修築或は増強されたのではないか。

麓続きに、根小屋、馬場、的場という地名が残っているのは、明徳年間(1390~)に居館したという後藤孫兵衛一党の鍛錬の場であったのであろう。また、堀切CCの北西170mに館ヶ崎古墳があつたがこれは30年程前に滅失した。ほか、Cから北へ約300mの切通しに天文24年(1555)銘六面輪が建っている。

(山崎 正 青木敏雄)



館ヶ崎略測図

1991.4

所在地 高畠町大字塩森字前田・雨包

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『山形県史資料篇 15 上』

概要

塩森館は高畠の他の山城（砦）に見られない戦略的な構造上の特徴がうかがわれる。即ち、双方からせり出した山の狭隘部を結んだ第1防衛の土壘 A、B と水掘 C があり、120m 上がって第2防衛としての堀 D、E、更に本丸 F（居館）の前面に、釣場 G と称する小丘を構えている。また、本丸の奥へ1000m 程登った峯（文殊山の一峯）に山城を配している。当時の戦（いくさ）はいわゆる正々堂々の正面攻撃を常道としたか否か不明であるが、敵勢の正面突破に対する3段構えは、守備防戦、ひいては討死覚悟の戦法ではなく、いかにして時を稼ぎ、館主を脱出させるかを第一義とした戦略的な匂いを感じる。

標高 350m の山頂に造られた山城の主郭 I は標高差約 50m の山頂表面を限なく數条の帯曲輪 II で囲み、西方には 3 個の掘切 H を配している。北麓からの道は 10 条以上の階段状の帯曲輪の真中、即ち J を直線的に登って主郭 I に達している。約 100m の直線的な峯通りを登るには相当の力を要するがこの見せかけの道を登る敵勢を、左右の帯曲輪の伏兵が迎撃することもできよう。

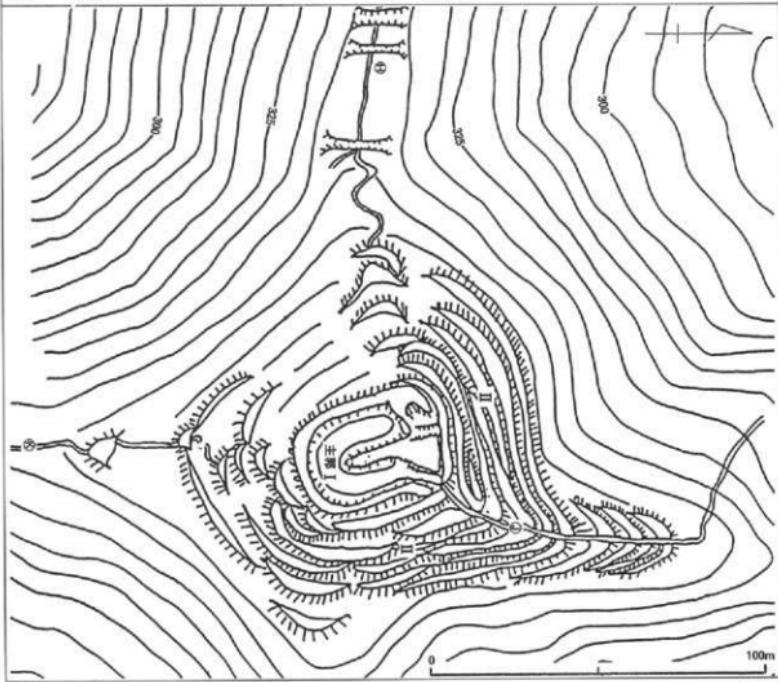
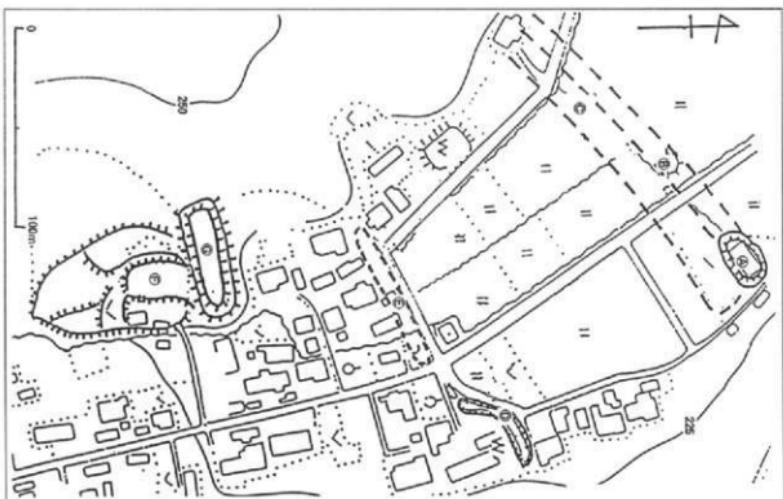
しかし、掘切のない反対方向、もししくは側面からたらやすく登れそうだし、山頂の主郭はいかにも狭隘で防戦には適さない。僅かに、弓矢、落石等の戦法で、ある程度はもちこたえられそうだから、密かに、間道を文殊主峯、その峯 K に繞く魚岡館に館主を逃すことは可能と考えられる。塩森という根小屋集落の僅かな兵团をもって防ぐにふさわしい戦略と思われる。

本丸 F は、山城の北山麓側のやや高場にあり、段差、川掘を有し、練兵場であろう的場 G からは四方が見通せる格好の位置にある。

塩森館の西方、東街道沿いの小峯上に数状の段をもつ「物見」があるが、これは高畠城に連絡する「のろし台」とも考えられる。

天文 7 年（1538）御殿銭古帳「十五貫仁百五十文志ほの森」天文 22 年（1553）晴宗公采地下賜緑「屋代庄塩森之郷牧野弾正左衛門五味在家」（所在不明）等とあり。口碑によれば、塩森氏は、はじめ長井氏に仕えていたが、天授 6 年（1380）伊達氏侵攻後家臣となり、天文年間には塩森兵庫の名が見える。後、天正 19 年（1591）伊達氏と共に岩出山に去り、栗原郡若柳城を領したという。

（山崎 正 青木敏雄）



塩森館跡測図

1980.11

おきつあかで

大津賀館 382-001

所在地 川西町大字西大塚字藏久

築城者 大津賀大炊助

築城時期 不明

史 料 大塚村史

概 要

8反（約8千m²）屋敷で五百石高といわれる。屋敷跡をみると東西90m、南北140m位である。宅地、畑、水田であり整地された。天正年間（1573～91）に菅原喜右衛門が移住してきたともいう。遺跡の東側は最上川の河岸段丘と思われる。（藤倉徳夫 高橋啓一）



はらのまえやしき (うめつやしき)

原前屋敷 (梅津屋敷) 382-002

所在地 川西町大字西大塚字原前

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

屋敷の北側に約50mの土塁が残っており、東西55m、南北90m程である。現況は宅地、畑、水田となっており、大津賀平次右衛門が古屋敷跡に寛文11年（1671）に移り住んだといわれている。

（藤倉徳夫 高橋啓一）

ねぎしたて

根岸館 382-003

所在地 川西町大字西大塚字根岸

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

詳しいことは不明だが字切図から見ると東西90m、南北180mの規模と見られる。現在圃場整備によって外郭ははっきりしないが宅地や水田である。

（藤倉徳夫 高橋啓一）

うめつたて
梅津館（梅津藤兵衛館） 382-004

所在地 川西町大字西大塚字岡6

築城者 梅津藤兵衛

築城時期 不明

史 料 大塚村史(1971.1)

概 要

慶長7年(1602)に治兵衛館から子が嫁いできたといわれている。5反(約5,000m²)屋敷、5百石といわれた。現在東西70m、南北80m位で現況は、宅地、畠地、水田である。(藤倉徳夫 高橋啓一)

たせいたて
田制館 382-005

所在地 川西町大字西大塚字堂前5

築城者 田制与兵衛

築城時期 天正年間(1573~91)に林崎より高田に移住

史 料 大塚村史(1971.1)

概 要

与兵衛が6反歩(6千m²)の屋敷を開き居住したという。石高は150石という。堀の一部が残るが大方は宅地や畠であり、東西60m、南北30~60mの規模を測る。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

すがわらたて
菅原館 382-006

所在地 川西町大字西大塚字松森4

築城者 菅原屋正

築城時期 戦国期

史 料 大塚村史(1971.1)

概 要

6反(6千m²)屋敷といわれ、東西55m、南北100m位ある。二百石高と伝える。現況は、宅地や畠である。(藤倉徳夫 高橋啓一)



くさやなで
朽谷館 382-007

所在地 川西町大字西大塚字朽谷

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

宅地化や道路の開削で館の面影はない。東西・南北各 70m 程度で殆どは宅地である。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

どうすたて
土臼館（胴臼館） 382-008

所在地 川西町大字西大塚字土臼館

築城者 不明

築城時期 戦国期

史 料 山形県百科辞典

概 要

居館として利用されたものと思われる。今は一部填墓となっているのみで、圃場整備以後大方は水田と化し面影を止どめない。東西 20~40m、南北 100m と細長いものである。(藤倉徳夫 高橋啓一)

じんがみねなで
陣ヶ峰館 382-009

所在地 川西町大字西大塚

築城者 不明

築城時期 平安期

概 要

今も一部建物跡と思われるところが見られるが詳しく述べは不明。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

なかおきなで
仲沖館（西館） 382-010

所在地 川西町大字西大塚字仲沖

築城者 平 寛英

築城時期 元亀年間 (1570-72)

史 料 大塚村史

概 要

昭和 37 年の圃場整備によってほとんどが消滅している。居館として利用したもので、越後国牛谷村の平寛英が移住して来たものという。東西 50~90m、南北 70~90m の規模を測る。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

おおづかじょう
大塚城（天神館） 382-011

所在地 川西町大字大塚字天神館

築城者 大塚因幡守親行

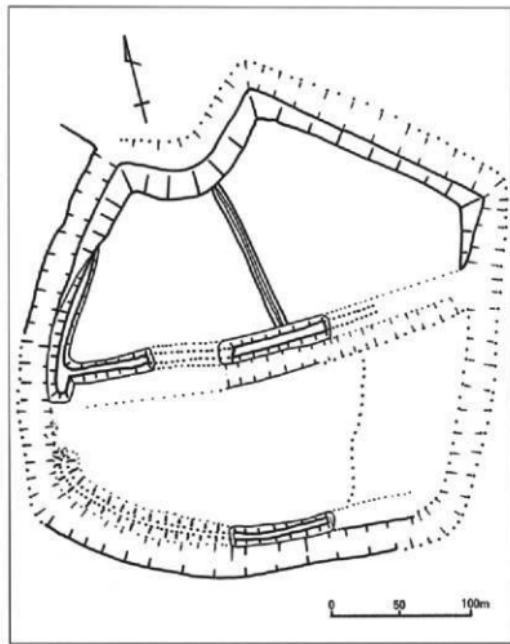
築城時期 錦倉期

史 料 大塚村史 川西町史 東置賜郡史

参考文献 『牛谷家の門』

概 要

天文の乱の功労者の一人に大塚將監という人物がいる。伊達晴宗がこの將監に知行を与えた時の証文に「大塚下總守名跡相続につき下總守天正十一年六月まで知行の通り少しも残さず下しおき候。すなわち林崎館めぐり共に前々の如く諸役さしおき候…」これによると、この年までは大塚下總守の知行であったが、その名跡を繼いだのでそのまま將監のものとして認め林崎館周囲の税などを免除するというのである。大塚氏は大塚因幡守親行の子孫で代々「置玉郡大塚城」に居てその14代目が大塚宗頼である。



大塚城略測図

1994.12

宗頼は伊達政宗代であるから將監はその前の伊達晴宗時代にあたり宗頼は將監の子にあたる。東西210m、南北280mと大きな城跡がわかり、土堀は2カ所に残っている。現況は、宅地、畠である。

（藤倉徳夫・高橋啓一）

じへきたて 治兵衛館 382-012

所在地 川西町大字西大塚字元宿

築城者 那須治兵衛

築城時期 戦国期

史料 大塚村史(1971.1) 川西町史(1978)

概要

深さ6m、幅4.5mの堀を周囲に巡らし、さらに西側は元宿川を要害としていた。(大塚村史)天正年間に屋敷1haを越すと言われ、石高は六百石であったという。東西120m、南北90mであろうか。口伝によると、大塚城の出城として西の守りにあたったという。昭和21年中学校用地となった。また昭和35年篠塙整備によって破壊された。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

うしやたて 牛谷館 382-013

所在地 川西町大字大塚字町12

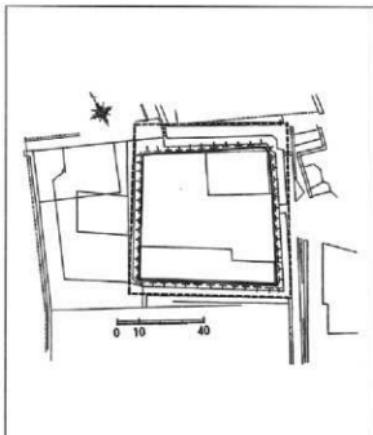
築城者 牛谷甚五右衛門

築城時期 戦国期

概要

牛谷氏は伊達政宗が仙台移封のとき帰農し、上杉藩では在郷馬上として地方の指導的役割を果たした。屋敷は6反8畝(約7,000m²)である。町指定の文化財「牛谷家の門」(指定昭和44年3月24日)は貞享3年(1686)大塚城から移転したものといわれる。また、堀内から阿弥陀板碑(年号不明)が見つかり屋敷内に祠っている。

(藤倉徳夫 高橋啓一)



とうないやしき 藤内屋敷 382-014

所在地 川西町大字大塚字町12

築城者 牛谷藤内

築城時期 不明

概要

牛谷館と同じ屋敷があり、甚五右衛門の百姓名である。屋敷2,000m²に堀の一部が残る。東西45m、南北50m程度である。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

たいらたて
平館（中館） 382-015

所在地 川西町大字大塚字町11

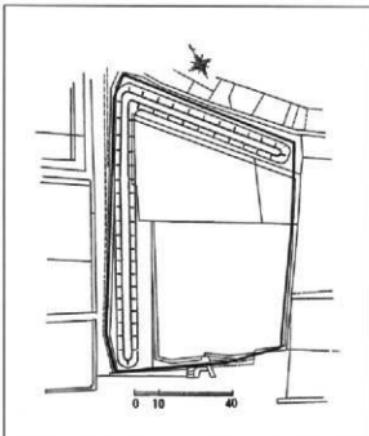
築城者 平藤兵衛

築城時期 不明

概 要

8,000 m²の屋敷、350石高、松の古木等もあり狹くなっているが塙の一部が残っている。東西75m、南北100mである。築城者は藤兵衛・清四郎と伝えられる。

(藤倉徳夫 高橋啓一)



まきいやしき
坂井屋敷（吉水屋敷） 382-016

所在地 川西町大字大塚字町10

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

古い屋敷跡との言い伝えがあり、また字切図にもそれが認められるが詳しく述べは不明。東西90m、南北100mの大きさがあるが、今は宅地化されその形は分からぬ。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

いせやしき
伊勢屋敷 382-017

所在地 川西町大字大塚字伊勢屋敷

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

坂井屋敷同様詳しいことは不明。屋敷跡としては東西70m、南北150mとこの辺では大きな屋敷跡であるが、今は面影はない。大塚城南堀のそばにあたる。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

くろさわたて
黒沢館 382-018

所在地 川西町大字大塚字町

築城者 黒澤万七

築城時期 戦国期

概 要

当初は屋敷を松川端に構えたがのち町に移したという。大塚氏の家臣であった。子の清助は天正年間村の振興に尽くしたという。東西約 90m、南北約 100m のいわゆる 1 町歩屋敷で 150 石高という。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

はやしききたて
林崎館 382-019

所在地 川西町大字大塚字林崎

築城者 不明

築城時期 室町期

史 料 東置賜郡史 史川西町史

概 要

東置賜郡史（上）によると、大塚村に字林崎という地名あり、天正以後伊達政宗の家臣の居るところであるという。岩瀬文書中に図面があり次の説明が加えられてある。「天正七年政宗公ヨリ被成下候御證文相見候林崎館之図也 右享保年中色摩翁助方政目にて大塚へ參候ニ付、間數改絵図にて描き候處に類之候て如比也 岩瀬半兵衛」これによって見ると享保ごろには館形も明瞭であったらしいが、今はその遺跡が判然としない。また館主の名も書いたものが見当たらない。あるいは前の大塚城跡を林崎館と称したのかも知れない。また川西町史には米沢藩の絵師岩瀬半兵衛が享保年中（1716-35）に書いた林崎館の図は松川との関係位置から見て、現在の大塚城跡と呼ぶ場所であることに間違いない。（中略）松川が現在の河床よりもはるかに南高徳寺のあたりを流れていない限り字林崎ということにはなり得ない。と結論づけている。だが地元の言い伝えや字切図から見ると館は存在したのではないか、と思われるのである。ただしこれは大塚城の前の段階の城を見てよいのではなかろうか。現在は寺地、宅地、畑、水田であり東西、南北各 300m と大きな館であろう。 （高橋啓一 藤倉徳夫）

かとうたて
加藤館 382-020

所在地 川西町大字大塚字町

築城者 加藤源兵衛

築城時期 戦国期

史 料 大塚村史

概 要

源兵衛は天正 3 年（1575）金山村より大津賀村へ移住したもの。東西 65m、南北 120m あり約 6,000 m 余の屋敷に居住、のち屋敷内に分家を出している。今も堀の一部が残る。 （藤倉徳夫 高橋啓一）

ちがえだて
寒河江館（源兵衛館） 382-021

所在地 川西町大字大塚字町

築城者 寒河江源兵衛（牛之助）

築城時期 戦国期

概 要

慶長元年（1596）に最上・寒河江村より移住し東西80m、南北60~80mの約6,000m²の屋敷に居住、500石高という。後200石高になった。家臣に青木十郎右衛門、高橋藤右衛門があり、一類に武七・善八郎・徳蔵などがある。徳川時代になるが慶長14~18年（1609~13）までの大塚堀の開削に多大の功績があった。大塚氏の家臣であった。3mぐらいに埋まっているが掘が少しのところ。帰農しそのまま居をかまえた。

（藤倉徳夫 高橋啓一）

しまつたて
嶋津館 382-022

所在地 川西町大字大塚字町

築城者 嶋津助左衛門

築城時期 不明

概 要

寒河江家より分家したというが詳しくは不明である。伝承などからこの地を選んだ。東西80m、南北60mの屋敷跡と思われる。今は殆ど宅地となっている。

（藤倉徳夫 高橋啓一）

みながわねだて
皆川館（皆川三右衛門館） 382-023

所在地 川西町大字大塚字町

築城者 皆川三右衛門

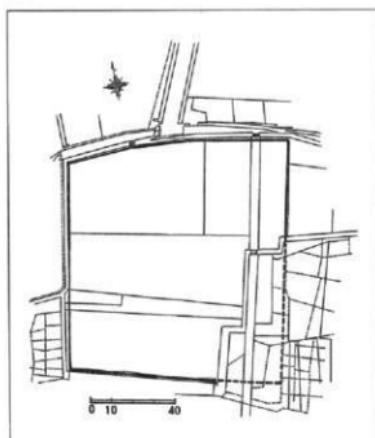
築城時期 戦国期

史 料 大塚村史（1971,1）

概 要

慶長3年（1598）越後より移住し関ヶ原の戦いに出陣したという。9反7畝（約1万m²）100石だが詳しくは不明である。江戸前期の明暦元年（1655）普請奉行として皆川堀を完成させた。現在長屋門が残っているが、これまたいつ建てられたものかは不明である。道構は東西100m、南北110m程とみられる。現況は、宅地、畠である。

（藤倉徳夫 高橋啓一）



てらじあたて 〈なかのなきよて〉
寺嶋館（中之他屋館） 382-024

所在地 川西町大字大塚字中之他屋

築城者 寺嶋喜右衛門

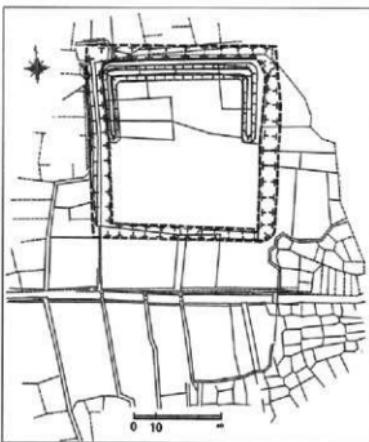
築城時期 戦国期

史料 川西町史（上・1978）

概要

寺嶋喜右衛門がこの地を開き、天和3年（1683）田屋守の船山勘助に譲り、享保年間に更に他へ渡る。幅5~6mの館堀に囲まれた5反6畝（約5,500m²）の屋敷であった。現在屋敷内に鎮守福荷明神の石鳥居などが残っている。造構は東西・南北各80mほどの屋敷跡で宅地、水田である。

（藤倉徳夫 高橋啓一）



かどのめたて
角之目館 382-025

所在地 川西町大字東大塚字越場

築城者 皆川平右衛門

築城時期 戦国期

史料 大塚村史（1971.1）

概要

本丸と目される所は今も館と呼ばれている。4反4畝（約4千m²）121石と言うのは江戸時代になってからのことであろう。東西85m、南北110mくらいの規模で宅地、雑地、畠などになっている。（藤倉徳夫 高橋啓一）



たまたて
玉館（平屋敷） 382-026

所在地 川西町大字下小松字玉館

築城者 不明

築城時期 不明

史料 川西町史（上・1978）長堀堰史 實曆絵図

概要

中世から続く地頭屋敷であるがその当時の記録は無い。上杉時代に入り代官渡部久右衛門信吉が元和年中（1615～24）に開発している。渡部は用人小守甚左衛門と土地の肝煎島貢源兵衛と協力して、白川の水を引き入れる計画をたてさせた。寛永15年（1638）の下小松村水帳には渡部久右衛門は田17町5畝（17ha）、畠1町4反6畝（1.4ha）あり、分付百姓は13名いる。東西115m、南北110mの屋敷が今もそのまま残る。

（藤倉徳夫 高橋啓一）

ねぎしやしき
根岸屋敷 382-027

所在地 川西町大字下小松字根岸

築城者 不明

築城時期 不明

概要

詳細は不明であるが現石田家は古くから続く家系である。明治期の道路改修によって遺構が破壊されている。東西80m、南北130m位の規模と思われ、現在は、宅地、水田などである。

（藤倉徳夫 高橋啓一）

うちたて
内館 382-028

所在地 川西町大字下小松字根岸前

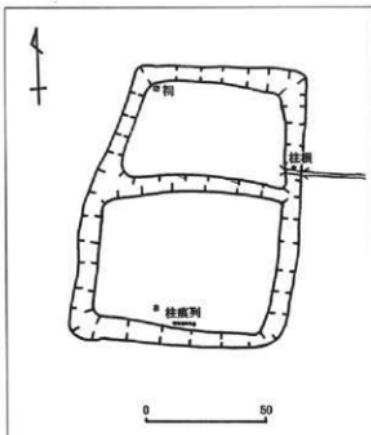
築城者 不明

築城時期 不明

概要

今も館と呼ばれている所で明治期の字切図によく残っている。宅地化によって遺構は破壊されているが、東西約80m・南北約115m程と思われる。現況は、宅地や水田となっている。

（藤倉徳夫 高橋啓一）



ふるたて 古館（西原館） 382-029

所在地 川西町大字下小松字古館

築城者 不明

築城時期 室町期

史料 遺伝遺跡調査報告書

概要

図場整備によって破壊されている。字切図で見ると東西 80~120m、南北 130m の屋敷跡が見られる。
（藤倉徳夫 高橋啓一）



まのやしき 佐野屋敷（島貴屋敷） 382-030

所在地 川西町大字下小松字佐野

築城者 島貴源兵衛

築城時期 鎌倉期

史料 長堀垣史

概要

堀（幅 4~5m）と土塁が南と西に残り概略が分かる。中世から続く家である。江戸時代前期の源兵衛は用水開発（長堀）に尽力している。屋敷は東西 70m、南北 90m で宅地や水田である。屋敷北には三宝荒神が祀られている。
（藤倉徳夫 高橋啓一）

まかじろ 招城 382-031

所在地 川西町大字小松字招城

築城者 不明

築城時期 不明

概要

堀の一部が残っているが詳しいことは不明。東西 50m、南北 50m 位の規模と見られ、現況は、宅地、水田などになっている。堀も幅は狭くなっているが少し残っている。
（藤倉徳夫 高橋啓一）



やちざいけ
谷地在家（北江口屋敷） 382-032

所在地 川西町大字小松字谷地在家

築城者 不明

築城時期 戦国期

史 料 川西町史

概 要

小松城主桑折氏の臣江口氏の屋敷であり現在も江口家がある。東、北側に幅4~5mの堀が残っている。東西130m、南北140m位の規模と思われる。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

こまつしまねきやしき
小松鳩賀屋敷 382-033

所在地 川西町大字小松字矢之目

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

堀や土塁が80m位残っているが詳細については不明である。土塁は幅5m、高さ1.5m程あり、堀も6~7mある。また江戸時代後期のものであろうが山岳信仰に使われる「行屋」が残っている。犬川の氾濫で造構は壊れているが東西130m、南北140m位と思われる。今も鳩賀家は続いているが13代以前は分からぬといふ。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

はせべやしき
長谷部屋敷 382-034

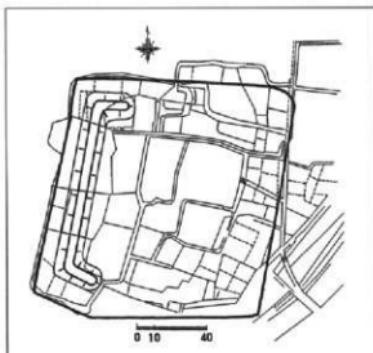
所在地 川西町大字小松字長谷部屋敷

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

小松城主桑折氏の臣長谷部氏の屋敷であるが、長谷部家は享禄年中(1530)頃に移転して来たようである。その後江戸末期に中小松に移転したといふ。今はその跡形は残っていない。長谷部家は18代前まで分かるといふが経緯については不明である。造構についてもはっきりしない。(藤倉徳夫 高橋啓一)



ひぐちたて
樋口館 382-035

所在地 川西町大字下小松字東留塚

築城者 不明

築城時期 鎌倉期

史料 川西町史（上、1978）

概要

堀跡や土塁が残っており古木も見られる。樋口家があり羅敷神のニワトリ神社が残っている。東西100m・南北200m程の規模であろう。幅10mの堀跡（水田）が残る。この土地を所領として与えられた地頭が居を構え、その中に土地を耕作する農民に住まいを与えた一つの在宅集落をかたどっている。（川西町史）

（藤倉徳夫 高橋啓一）

よそべいやしき
与惣兵衛屋敷 382-036

所在地 川西町大字高豆蔻字東河内

築城者 不明

築城時期 不明

概要

明治期まで高橋与惣兵衛家の者が住んでいたというが詳しいことは不明。東西70m南北60m程の規模と見られる。今は大方畠地となっている。

（藤倉徳夫 高橋啓一）

こうずくたて
高豆蔻館 382-037

所在地 川西町大字高豆蔻字館

築城者 不明

築城時期 戦国期

史料 采地下賜録（天文22年）

参考文献 伊達稙宗安堵状案（永正16,3,9）

概要

永正16年（1519）3月9日伊達稙宗安堵状に高豆蔻館を堀内方より大河原五郎左衛門に安堵する。また天文22年（1553）采地下賜録には「かうつく」郷内に所領を下賜された地頭領主は小島石見、安久津とうはく丸、岸けいちやう丸、同長門娘、樋口十郎右衛門である。彼らの所領内には西の在家、きくち在家、みとへ在家など見られる。現在は数戸の家が建っており、堀も若干残っているが、館についての具体的なことは分からぬ。東西150m、南北210m程の規模と推測される。

（藤倉徳夫 高橋啓一）

ひらがやしき（もとやしき）
平賀屋敷（本屋敷） 382-038

所在地 川西町大字黒川字本屋敷

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

現平賀氏の屋敷であるが圃場整備後遺構はない。平賀家は上杉家の家臣として米沢の地に移りその後ここに移ったという。古い屋敷があったものだろう。東西 80m、南北 100m の規模 (藤倉徳夫)

こうどうやしき
近藤屋敷 382-039

所在地 川西町大字黒川字近藤

築城者 不明

築城時期 鎌倉期

概 要

圃場整備後遺構はない。一之宮神社があり至徳年間(1385頃)の創建というがよく分からぬ。東西 110m、南北 160m 程の外郭と思われる。墳墓地や板碑がこっている。

(藤倉徳夫)



近藤屋敷推測図

きょうぶやしき
茗部屋敷 382-040

所在地 川西町大字黒川字坊中

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

明治以降墓地になっている。幅 4m の掘形は一部残っているが詳しいことは不明。福荷神社があるが弘治 3 年(1557)山城國より勅請という。東西 100m、南北 200m 程の規模を測る。(藤倉徳夫)

じゅうざえんやしき
十左衛門屋敷 382-041

所在地 川西町大字黒川字細谷

築城者 不明

築城時期 鎌倉期

概 要

昔から十左衛門屋敷と呼ばれて来たがその成り立ち等については不明。明治期の道路改修や圃場整備によって遺構は破壊されている。だがその際屋敷跡から多数の板碑が出土している。鎌倉期からの屋敷であったろう。東西 90m、南北 120m の外郭だが、中にもう一つ堀があったようである。

(藤倉徳夫)

ようかまちやしき
八日町屋敷 382-042

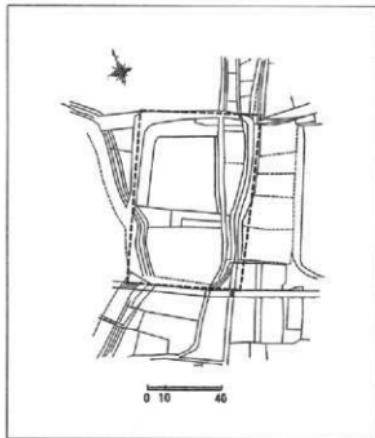
所在地 川西町大字黒川字八日町

築城者 不明

築城時期 鎌倉期

概 要

現在佐藤家の建っているところを呼んでい
るが、古い図面を見ると現屋敷の西に同じ大
きさの屋敷跡がもう一つ見られる。そしてそ
の屋敷跡の北側に墓地が残っている。つま
り、こちらが元の屋敷跡であり、それが川欠
の恐れから東に移動したものである。それら
についての文書はないので詳しいことは不明
である。大きさは共に東西 70m、南北 90m
である。堀は幅 4m あり東、西に残っている。



八日町屋敷推測図

はたけなかたて
畠中館 382-043

所在地 川西町大字高山字明神堂

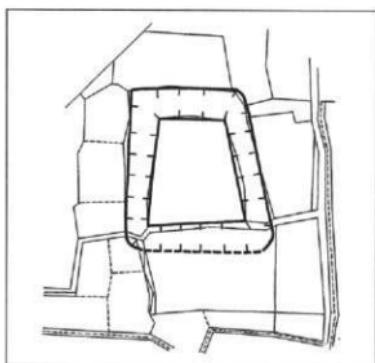
築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

圃場整備によって消滅している。現小関氏
屋敷である。字切図でみると東西 44m、南北
50m の規模を測る。

(藤倉徳夫)



畠中館推測図

つえもんやしき
津右衛門屋敷 382-044

所在地 川西町大字高山字白塙

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

圃場整備によって消滅している。東西 100m、南北 115m と見られるが今は南の堀端のみが確認できる。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

ふせなで
布施館 382-045

所在地 川西町大字高山字鹿小屋

築城者 布施信濃

築城時期 戦国期

史 料 川西町史（上 .1978）

概 要

布施信濃、布施助右衛門の居住地で両氏に伊達輝宗・政宗からあたえられた安堵状がある。1つは「下長井たか山の郷の内 志可こうやゆい志よの事 永代其身地主たるべき者 也仍為後日如件 天正 11 年 4 月 13 日黒印ふせの志なの」地頭としての権利を証したもので、布施信濃は土着の農民でありこの地方を開拓し治めた豪農であった。また「下長井之庄高山の郷之内 志可こうや在家年貢三貫文の所此内田越六百文引候 其外如前之地頭江無逃亂可相勧者也 仍如件 天正 14 年（1586）10 月 15 日政宗黒印布施助衛門とのへ」前の証文の 3 年後で、政宗からの税减免の書状である。この間に信濃から助衛門に家督が変わったものであろう。（川西町史）また「山形大学紀要 3 の 4」によると、布施家は江戸初期まで三百石の持高という。また慶長頃まで村の肝煎を務めた土豪であるという。東西 160m、南北 100m の星敷と思われる。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

ばばやしき
馬場屋敷 382-046

所在地 川西町大字高山字馬場

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

現淀野氏屋敷であるが詳しいことは不明。屋敷の大きさは東西 108m、南北 150m 程である。今は小川がその境界をなしている。

(藤倉徳夫)

林在家（又右工門屋敷） 382-047

所在地 川西町大字高山字林

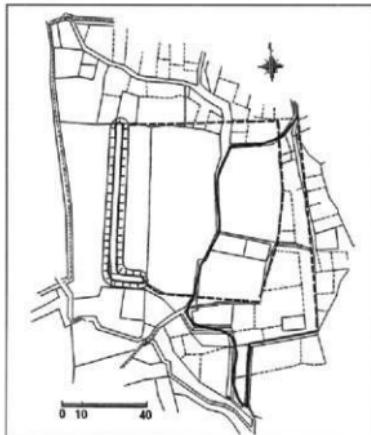
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

佐藤又右衛門屋敷であり今も佐藤家がある。詳細については不明であるが中世からの家系であることに間違いなかろう。屋敷の大きさは東西 50m、南北 90m であり、それに付随して水田が広がる。現在その外郭は分かならない。

(藤倉徳夫)



林在家推測図

青木館 382-048

所在地 川西町大字高山字中里

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

天正年代の屋敷跡守があり現青木氏屋敷である。幅 5m の堀跡が残っている。東西、南北約 50m 四方の外郭である。

(藤倉徳夫)

大河原屋敷 382-049

所在地 川西町大字高山字間之上

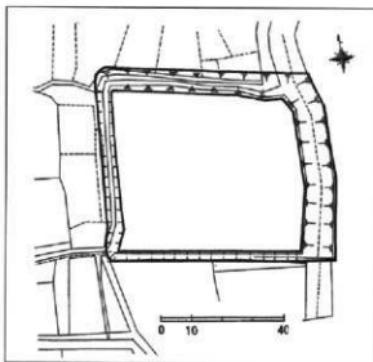
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

現大河原氏の屋敷であり幅 4m の館掘が残っている。千坪屋敷 (3,300m²) といわれるが詳細は不明。造構は東西 60m、南北 80m である。

(藤倉徳夫)



大河原屋敷推測図

たかやましまぬまやしき
高山島貴屋敷

382-050

所在地 川西町大字高山字前田

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

島貴家は他へ移住し現在は水田より一段高い畠が残っている。東西 60m、南北 70m 位の屋敷跡である。詳細は不明である。

(藤倉徳夫)



高山島貴屋敷推測図

ながさわやしき
長澤屋敷 (五郎兵衛屋敷館)

382-051

所在地 川西町大字高山字獅子舞塚

築城者 長澤五郎兵衛

築城時期 鎌倉期

史 料 中郡村史

概 要

千坪 (3,300 m²) 屋敷といわれ現在も長沢氏の屋敷であるが詳細は不明。だが獅子にまつわる伝説がある。幅 5m の堀の一部が残っている。道路改修や圃場整備で形は壊れている。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

いとうでんやしき
伊藤伝屋敷

382-052

所在地 川西町大字高山字伊藤傳

築城者 不明

築城時期 不明

史 料 中郡村史

概 要

現伊藤氏屋敷であるが詳細はよく分からぬ。だが地名として残っているところから見ても、鎌倉期にさかのぼる家であろう。中郡村史では所有地について調べている。東西・南北各 60m の屋敷である。堀は埋まり一部小川としてのこる。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

おかざきごてん
岡崎御殿 382-053

所在地 川西町大字高山字岡崎御殿

築城者 岡崎太郎義種

築城時期 鎌倉期

史料 中郡村史

概要

鎌倉期にさかのぼるものと言われるが文書は残っていない。現在は墓地になっている。屋敷の外郭は東西70m、南北100mほどと思われる。堀跡と思われる部分も見られるがその跡は壊れている。
(藤倉徳夫)



岡崎御殿推測図

すのしまからやしき
洲島唐屋敷 382-054

所在地 川西町大字洲島字唐屋敷

築城者 不明

築城時期 不明

概要

道路改修や圃場整備によって遺構は消滅している。規模は東西80m、南北90mあったようである。

(高橋啓一 伊藤成美)

にしへんごうたて
西本郷館（御倉屋敷） 382-055

所在地 川西町大字洲島字西本郷

築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

詳しいことは不明だが、本郷館と同様洲島館と密接につながっている。初めは富塙氏の家臣の屋敷であったろう。松川の川欠によって消滅した。東西・南北各70mの規模を測る。

(高橋啓一 伊藤成美)

ほんこううたて
本郷館（館屋敷） 382-056

所在地 川西町大字洲島字本郷

築城者 不明

築城時期 不明

概要

洲島城主湯目肥前守の甥の小島左馬允と言われるが、その前は小島蔵人とおもわれる松川の川欠によって一部流失、さらに堤防構築によっておおかた遺構は失われた。
(高橋啓一 伊藤成美)

がもうたて
蒲生館 382-057

所在地 川西町大字洲島字樋町3

築城者 蒲生飛驒守

築城時期 戦国期

概 要

洲島城主湯目氏の臣屋敷。東西 156m、南北 117m 現在八幡神社と長福寺が建っており元禄の頃この地に移ったという。堀跡(5~10m の幅)は水田となっている。西側には土塁も一部残っている。東西 156m・南北 117m の館跡である。

(高橋啓一)

すのしまなたて
洲島館(栖島城) 382-058

所在地 川西町大字洲島字館之内

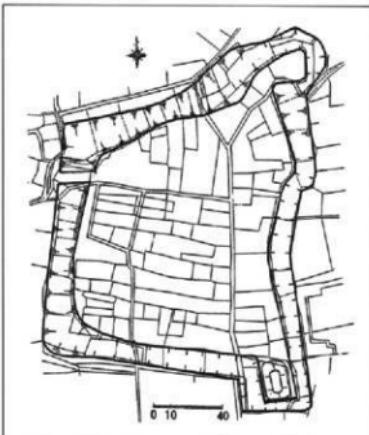
築城者 不明

築城時期 不明

史 料 川西町史

概 要

天文の乱までは富塚近江守仲綱(本拠地は伊達郡なので、当地には代官がいたのであろう。)の知行地。天文 22 年伊達晴宗の采地下賤錄では湯目雅楽允を城主としている。東西 120m、南北 150m 現在も館跡として残り畠・水田(幅 20m の堀跡)となっている。この館を中心中町、西町、鳥居町、坂町、樋町などの町が造られた。また近年までこの町中の道路の真ん中を小川が流れておった。



洲島館推測図

(藤倉徳夫 高橋啓一)

こせきたて
小関館 382-059

所在地 川西町大字洲島字ハッコ

築城者 小関和泉

築城時期 戦国期

概 要

湯目氏の下臣屋敷で現在は子孫の小沼氏が住む。サイカチの大木がある。東西 50m、南北 120m と思われる屋敷跡である。

(高橋啓一)

すのしましまらきやしき　孫右衛門屋敷　382-060

所在地 川西町大字洲島字谷地2

築城者 島貢孫右衛門

築城時期 平安期

史料 川西町史

概要

代々孫右衛門を襲名しており、この地に住んだのは平安期にさかのぼると言われている。中世の館跡として県の文化財に指定されていたが、掘の埋め立てや家の改築で指定解除となった(1983)。屋敷東南角にある梨の古木は樹齢8百年といわれる。東西130m、南北110mの屋敷跡がうかがえる。長福寺の創建が寛弘6年(1009)といい、その開基檀徒である。

(高橋啓一 藤倉徳夫)

しょうざえもんやしき　庄左衛門屋敷　382-061

所在地 川西町大字吉田字沼ノ上

築城者 淀野庄左衛門

築城時期 不明

概要

現在畠や屋敷地になっている。地蔵尊の屋敷神が残っている。東西40m・南北70m。河川改修などによって形は壊れている。

(高橋啓一 伊藤成美)

せへえもんやしき　瀬兵衛屋敷　382-062

所在地 川西町大字吉田字前之在家

築城者 不明

築城時期 不明

概要

現在淀家屋敷で掘の一部が残る。東西100m、南北70mの規模と思われる。堀は埋まりその形は分からぬ。

(高橋啓一 伊藤成美)

こうえもんやしき　孝右衛門屋敷　382-063

所在地 川西町大字吉田字東原

築城者 不明

築城時期 不明

概要

幅5mの堀跡が一部残る。東西50m南北70mの屋敷跡である。1960年代屋敷の西部を掘ったところ木の枠が出土したことがあった。これは屋敷に水を引いたものであろう。時代などは分からなかつたという。

(伊藤成美)

よしのざいけ
吉野在家 382-064

所在地 川西町大字吉田字吉野在家

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

現在畠地になっているが一部その形が分かる。東西・南北各 60m である。

(高橋啓一)

だいぼうやしき
大坊屋敷 (島貫又右エ門屋敷) 382-065

所在地 川西町大字吉田字大坊

築城者 不明

築城時期 平安期

史 料 川西町史

参考文献 『阿弥陀堂』『古瀬戸瓶子』

概 要

現島津氏屋敷であり平安期にさかのぼる家系で、屋敷から古瀬戸瓶子一対が出土し、昭和 35 年に県文化財に指定されている。阿弥陀堂があり中に祈禱壇も備えている。屋敷跡は東西 50m・南北 60m であり、幅 3m 程の堀が少し残る程度である。

(高橋啓一 藤倉徳夫)



まんじゅうろうやしき
三十郎屋敷 382-066

所在地 川西町大字吉田字西原

築城者 山吉次郎右衛門

築城時期 室町期

史 料 川西町史

概 要

堀(幅 4~7m) や土塁の古木が残る。東西・南北各 100m 程の規模である。新田義貞に従った武士で、義貞が尊氏に滅ぼされた後落ちのび大坊家を頼ってこの地に来たもので、その後島津姓を名乗ったという。

(藤倉徳夫 高橋啓一)

しょねいたて
主計館（仙右衛門屋敷） 382-067

所在地 川西町大字吉田字宝昌寺裏

築城者 佐藤左近

築城時期 元亀年間（1570-73）戦国期

概 要

系図からいうと左近一仙右衛門一玄蕃だという。土塹屋敷として造られたが、伊達家移封と共に宝昌寺も従ったため、自分の屋敷に宝昌寺を再興したという。東西 60m、南北 70m で掘幅は 2~4m である。

(高橋啓一)

せんのじょうやしき
善之丞屋敷（小在家） 382-068

所在地 川西町大字吉田字小在家前

築城者 不明

築城時期 錬倉期

概 要

屋敷跡は殆ど残っていない。だが板碑（年号不明）や石塔が残っている。東西 130m、南北 80m の屋敷跡である。

(高橋啓一 伊藤成美)

よしたたて
吉田館（和泉館） 382-069

所在地 川西町大字吉田字角之橋

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

大字の地名となった所であるが詳細は不明である。東西 60m・南北 90m 程の規模。近くに屋敷跡が数戸確認できるが言い伝えなどはない。圓場整備後館の面影はない。

(高橋啓一 伊藤成美)

えがえりやしき
江上屋敷 382-070

所在地 川西町大字下平津

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

現在須藤家四戸が建っているが伝えからするとその先祖の屋敷であろうと思われる。

東西 80m・南北 120m で堀の一部が残っている。屋敷の東に稻荷神社や一族の墓地がある。

(高橋啓一)

小田屋敷

382-071

所在地 川西町大字下平柳字小田屋敷

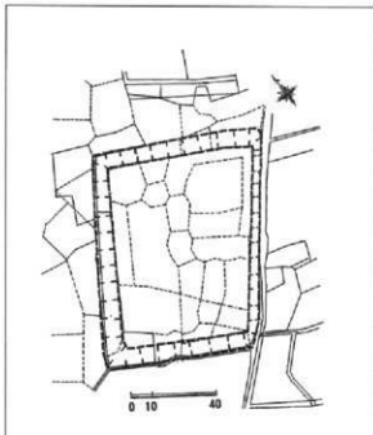
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

屋敷跡は圃場整備によって消滅している。
字切図から東西 70m、南北 100m の屋敷跡で
あったことがわかる。この辺一体を下屋敷と
呼ぶが、この屋敷がそれに当たるのか不明で
ある。

(高橋啓一 西山龍法)



小田屋敷推測図

坂水屋敷

382-072

所在地 川西町大字中小松

築城者 不明

築城時期 不明

史 料 山形県史 15 上

概 要

今ではどこが屋敷跡か分からぬ。現況は、宅地や畠となっている。ただここから北 1km 程の所が
下屋敷と呼ぶが、それに対してここが上屋敷であることは間違いない。牛頭天王や塚が残っている。
伊達家文書に永正 13 年 6 月 18 日伊達宗安堵状案に「小篠川又四郎よりの買地、上長井平柳郷之内、
坂水在家一字」が山岸長門守に安堵されている。(県史 15 上)

(高橋啓一 藤倉徳夫)

いのうえたて

井上館 (角大屋敷)

382-073

所在地 川西町大字中小松字八日町上

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

小松城の家臣の館。東西 75m、南北 50m 屋敷である。小松城のすぐ東にあり一帯にもっと多くの屋
敷があった訳だが不明である。古い図面では町中の道路の中央に川が流れている。

(藤田宥宣 西山龍法)

こまつじょう

小松城 382-074

所在地 川西町大字上小松

築城者 船山因幡守

築城時期 南北朝期

史料 川西町史（上）

概要

南北朝期は長井広房の臣船山因幡守がおり、伊達氏の進攻後大町修理亮貞繼とかわる。更に植明応3年（1494）に桑折氏になり、天文の乱（1542-49）後は宿老奉行牧野久伸に与えられた。元亀元年（1570）小松城の戦いがあり、また桑折氏に変わった。（川西町史）館之内として外郭は残っているものの、公園として整備され、また戦後は中学校敷地として利用されて来た所である。その都度道

小松城推測図

路拡幅や掘跡の埋め立てによって徐々に遺構は壊されてきた。平成4年に道路拡幅工事に伴い土塁跡の調査を行った所、土塁は2度にわたり大きく造築されたことが分かった。伊達時代に入って城としての機能強化を図ったのではなかろうか。東西100m、南北250m程と見られる。土塁も一部残る。

（藤田宥宣 高橋啓一）



ふなやまとて

船山館 382-075

所在地 川西町大字上小松

築城者 船山因幡守家重

築城時期 戦国期

史料 川西町史（上・1978）

概要

船山家重は元小松城主であったが、伊達の移封と共に城を明け渡し、この地に移り住んだものという。元々は土豪であり伊達軍と戦ったというものではない。

（藤田宥宣 高橋啓一）

はるだじょう
原田城（藤ヶ森館） 382-076

所在地 川西町大字上小松字平谷地

築城者 不明

築城時期 不明

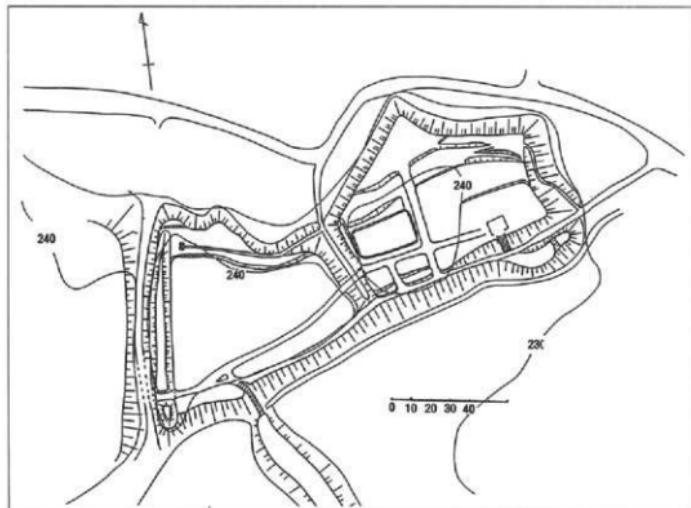
史 料 川西町史（上・1978）

概 要

はっきりしている居住者は原田氏である。ここに住んだのはその16代（原田大蔵）と17代（原田左馬介）である。伊達時代でも輝宗から政宗の代の22年間であろうと思われる。だが形態からみても更に古い屋形があったことは間違いない。丘陵を利用した城館で現在も本丸と二の丸の堀は深さ4m、幅10mに及ぶものである。

この城館一帯は置賜公園として整備されている所であるが、昭和36年にダリアを植えて公園とし、町の観光の目玉になっている。本丸跡にはグリヤ会館やステージが建設されているが、城址としての保存を考えると極めて残念なことである。二の丸跡は建物跡が推測できる。だがこれも東・北側は崩壊の危険があるため防止工事が予定され、時代と共に変わってゆくものであろう。造構は方形状の曲輪を並列した構造で、比較的低い舌状丘陵を選定して構築する山城で、全体的に丘城的な印象をうける。曲輪は尾根を縱断で切断し、土壁を配した主郭と対応の副郭には方形に区画した内部をさらに方形状のテラスを多様とするといった特徴がある。

（藤倉徳夫）



原田城略測図

1991.4

かねこやしき
金子屋敷 382-078

所在地 川西町大字上小松字金子屋敷

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

塩沢四所神社の北側、玉庭丘陵からのびる西側の麓に造られた屋敷跡である。

金子信濃守家良が文書を残しているが、それによると家良は同家 29 代という。現鷹狩神社宮司の旧屋敷である。東西 70m、南北 110m の規模を測る。

(藤田宥宣)

かたくらだて
片倉館 382-079

所在地 川西町大字上小松字片倉屋敷

築城者 金子小十郎家親

築城時期 室町期

史 料 川西町史

概 要

犬川の河岸段丘上、標高約 240m の平坦地に造られたものであるが、開田等で判然としない。

天文 13 年 (1544) 10 月 24 日伊達晴宗が片倉弥五郎に与えた安堵状に「このたび無類の働きであったので下長井の小松郷のうち片倉伊豆守の分太子堂の田年貢一貫五百文の土地と在宅 1 軒分を与えるが永代このことに相違はない」とあり、天文の乱の最中にその功績によって片倉伊豆から片倉弥五郎に変わった。片倉弥五郎とは小十郎景綱の叔父にあたる景広のことであるが、その以前に片倉伊豆守が晴宗から小松郷を与えられていたことになる。景広 (弥五郎) の父頼親 (景時) が伊豆守を唱え (小松伊豆と呼ばれていた)。天正 14 年に政宗は片倉景綱 (小十郎) にたいして洲島、吉田及びその一帯の惣成敗を与えている。また同年政宗は父輝宗の仇二本松畠山氏を滅ぼし、その領地処理のため小十郎を城番としている。処理後は信夫郡大森城主としている。二本松城主には伊達成実を配した。

(藤田宥宣 西山龍法)

はやまたて
羽山館 382-080

所在地 川西町大字下奥田ほか

築城者 不明

築城時期 戦国期

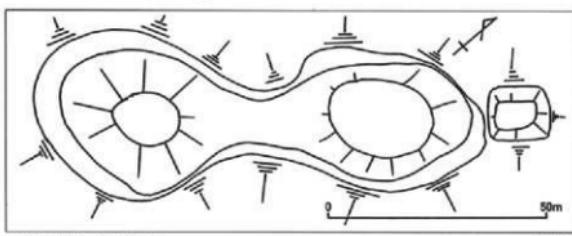
参考文献 『川西町埋蔵文化財調査報告書第9集』

概 要

東福寺の裏山で

あるが、その頂を
廻るテラスがみら
れ、頂上は平らに
整地されている。

東福寺は原田家の
菩提寺である。



羽山館略測図 382-80

1994.12

(藤田有宣 高橋啓一)

きただてみなかぎだて
北館南館 382-081

所在地 川西町大字下奥田字北館南館

築城者 北館 多勢清左衛門

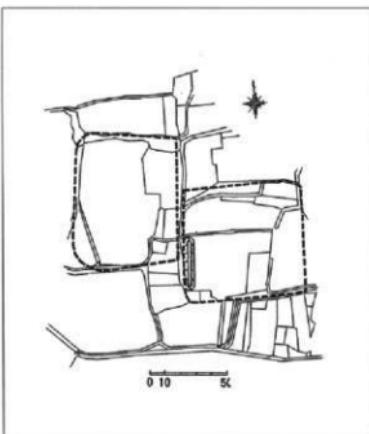
南館 斎藤勘兵衛

築城時期 戦国期

概 要

現在北館は水田となり館の様子は分からな
い。南館は宅地となり土塁や掘形が残ってい
る。旧図からみると南館は東西 150m、南北
120m 位の屋敷跡となる。

(西山龍法 高橋啓一)



北館南館推測図

わがたて
緒形館 382-082

所在地 川西町大字下奥田字金箭

築城者 不明

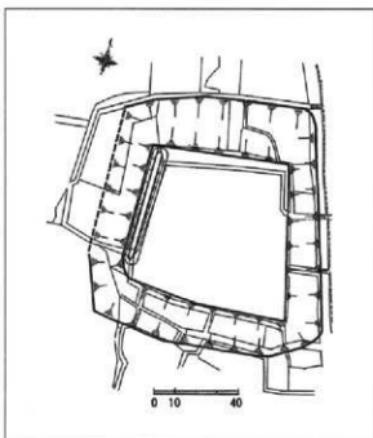
築城時期 不明

史料 中郡村史

概要

土塁や掘形が残り氏神（今は地域の社）も
廻られている。3,500m²の屋敷に5.5m～12m
幅の堀、更にその外側に幅5.5m・高さ1m
の土塁があった。土塁を含めて東西80m、南
北90mで約7,000m²屋敷となろう。江戸時代
後期であろうが長屋門が残されている。

(伊藤成美)



緒形館推測図

ばらなしやしき
茨虫屋敷 382-083

所在地 川西町大字下奥田字茨虫

築城者 不明

築城時期 不明

概要

園場整備によって形は分からぬ。しかし近辺には中世にさかのぼる屋敷が数戸残っている。

(西山龍法)

ひじりざかたて

飛尻坂館（から屋敷） 382-084

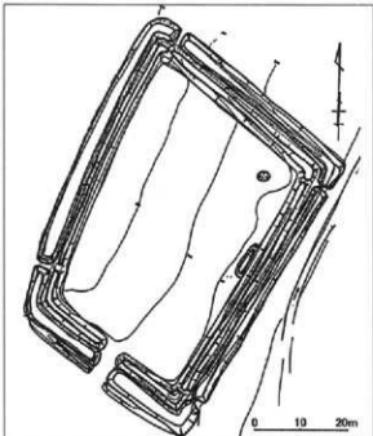
所在地 川西町大字下奥田字飛尻坂

築城者 不明

築城時期 鎌倉期

概 要

標高 230m の相馬山の北側の段斜面に造られた台形状の館跡である。方形に土塁がめぐり南方に大手が造られている。土塁は四方とも同様なつくりで、幅15m 余りあり、四隅に虎口が造られている。中央部試掘りの折り3間×4間の掘立柱建物跡が確認され、四隅の掘り方は40~60m の梢円形の掘り方であった。土塁の外側に、西方65m、北方48m、東方65m、南方幅約40m の堀をめぐらし、堀も台形状になっている。その後、遊園地として利用されている。（藤田宥宣 藤倉徳夫）



飛尻坂館略測図

ま せ ゆ し き

馬伏屋敷 382-085

所在地 川西町大字下奥田字馬伏

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

堀や土塁（幅4m、高さ2m）が南側や北側に残されている。周囲は園場整備がなされているが、屋敷跡は良く残されている。（西山龍法）

おきにしやしき
大西屋敷（須藤館） 382-086

所在地 川西町大字時田字大西

築城者 不明

築城時期 不明

史 料 「中郡村史」「置賜地方の豪族聚落」

概 要

3反2畝(3,200m²)の屋敷に3.5mから13mに及ぶ堀がある。現在の須藤家は上杉氏に従ってこの地に来たものという。しかし屋敷は中世にさかのぼるものであろう。堀を含めると東西60m、南北80mの屋敷である。

(藤倉徳夫 高橋啓一)



のぞきたて
菴館 382-087

所在地 川西町大字菴字館之内

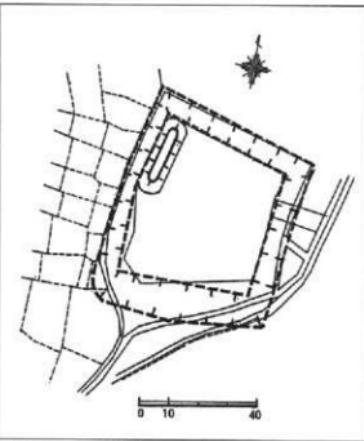
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

堀がほんの一部残っている。東西130m、南北200mに及ぶ規模であろう。詳細については不明である。今は宅地や畠地となっている。

(西山龍法 高橋啓一)



菴館推測図

たなかたて
田中館 382-088

所在地 川西町大字堀金字田中

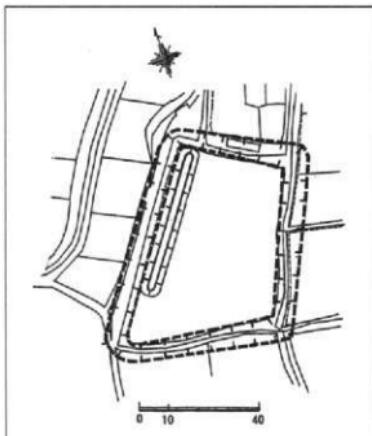
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

今では小さくなっているが堀や土塁が残っている。東西70m、南北140mの大きさである。堀は狭まり小川として今も利用されている。

(藤倉徳夫 高橋啓一)



だいもんやしき
大門屋敷 382-089

所在地 川西町大字堀金字大門

築城者 不明

築城時期 鎌倉朝

史 料 中郡村史

概 要

現在も残る西側の土塁は幅5m、長さ50m、高さ2.5mと大きなものである。大門という地名のごとく大きな地頭級のや屋敷であったろう。東西130m、南北150mに及ぶものである。

(藤倉徳夫 高橋啓一)



ぼりがれきて

堀金館 382-090

所在地 川西町大字堀金字館

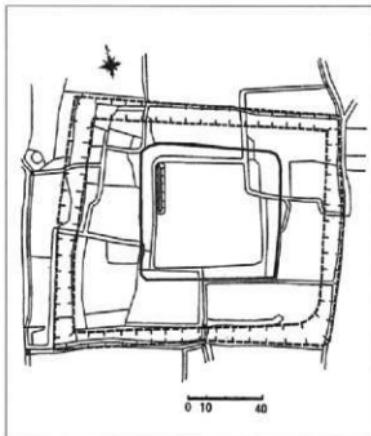
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

今は幅4~5mの堀跡のみが残るが近年までは二重の堀跡があったものだという。東西150m、南北120mの屋敷跡である。

(藤倉徳夫 西山龍法)



堀金館推測図

おがたやしき

小形屋敷（西小屋） 382-091

所在地 川西町大字尾長島字西小屋

築城者 小形伊織

築城時期 戦国期

概 要

文禄4年(1595)からこの地に住んだという。現在は堀跡(幅4m)・土塁(崩れて高さ50cm程度)やそこの古木が見られるが全体的な外郭は良くわからない。

(高橋啓一)

おなかじまからやしき

尾長島唐屋敷 382-092

所在地 川西町大字尾長島字唐屋敷

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

戦国期のみ使われたものか大分早くから形は無くなったようである。東西90m、南北60mの規模である。

(高橋啓一)

こうさかやしょ
香坂屋敷 382-093

所在地 川西町大字尾長島字香坂屋敷

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

道路改修や圃場整備によって無くなった。東西 70m、南北 90m の屋敷跡が分かる。堀跡の水田は幅 10m 近い。ここには館屋敷、唐屋敷とまとまって居る。だがその関係は不明である。 (高橋啓一)

ほしもとたて
橋本館（西館） 382-094

所在地 川西町大字尾長島字西館

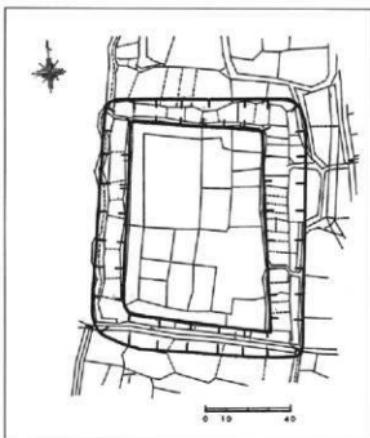
築城者 橋本藏人

築城時期 戦国期

概 要

伊達 48 館の中の 1 つに数えられている。
堀の 1 部が残るが埋まり 3m 程のものである。東西・南北とも 110m のほぼ正方形の館である。橋本藏人についての詳細は不明であるが、今でもこの辺一体を橋本と呼んでいる。

(藤倉徳夫 高橋啓一)



橋本館略測図

かながしまなで
尾長島館（原田館） 382-095

所在地 川西町大字尾長島字館

築城者 原田典膳

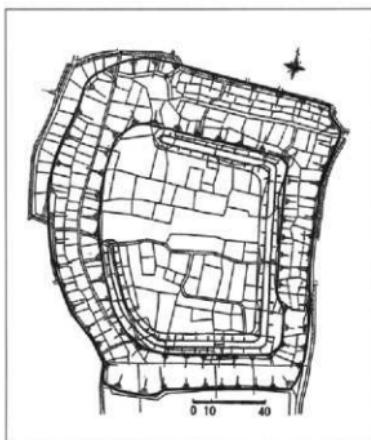
築城時期 殺国期

史料 川西町史 米沢事跡考 米府見聞記

概要

上小松の原田城との拘わりはどうなのか確としたことは不明だが、そちらへ移る以前の館とも考えられる。「米府見聞記」によると明応9年（1500）築城という。東と北側に堀跡が残っている。水田から見ると10mほどの幅があったようである。東西90m、南北120mの館地で、それに堀が加われば大分大きな館となろう。この館のすぐ近くに「宿」の地名もあり館を中心とした町があったと思われる。

（藤倉徳夫 高橋啓一）



尾長島館略測図

にしきどたて
錦戸館（古館） 382-096

所在地 川西町大字尾長島字古館

築城者 錦戸太郎

築城時期 鎌倉期

概要

早い時期の館跡であり圃場整備によって消滅している。東西・南北各150m程度と見られる。

（高橋啓一）

やなぎざわひたち
柳沢館 382-097

所在地 川西町大字上奥田

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

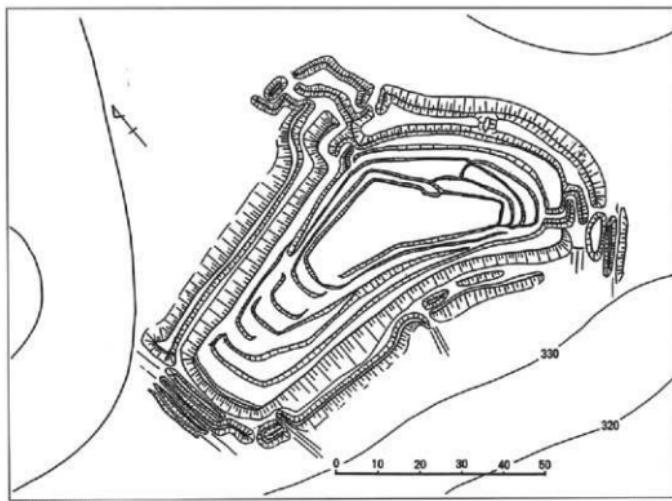
大舟を流れる黒川の西方に玉庭を界となす丘陵から延びる尾根を利用し築城したもので、標高335mにある東西120m、南北70m程の山城である。城主や築城者は不明であるが、遺構はよく残っている。

土塁と空堀を駆使した山城で、複数の樹形を配置するのを特徴としている。山城は、山の山頂から尾根を利用して構築したもので、南北の端に複数の堀切、左右に接続する土塁と空堀の組み合わせを側面防御の要としたながらも空堀の内部を掘底道としての機能を示している。

虎口及び樹形は、北側に二箇所、東側の堀切を利用して一箇所、南中央に一箇所、西側堀切の左右に二箇所の計六箇所を設けているが、土塁を「L」字状や「コ」の字状、複数の折を設置した北側の複合樹形が、大手からの入口で、東側の樹形が櫻手と理解される。

主郭は、東西四十五メートル、南北二十三メートルの不整三角形状に山頂を整形したものであり、北側の樹形から侵入し西方に向って走りながら食違いを有する連続腰曲輪を交互に進んで主郭に到達する構造となっている。主郭の北側から東側にかけては階段状の帶曲輪を連続させている。

(藤倉徳夫 高橋啓一 藤田有宣)



柳沢館略測図

1994.12

ほおざわなで

大舟館

382-098

所在地 川西町大字大舟字龍四

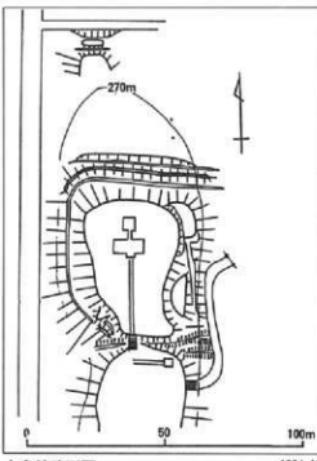
築城者 兵庫頭康長

築城時期 戦国期

概 要

平坦部を二分する大舟丘陵より北東延びる尾根の舌状の突端を利用して造られた平山城で、標高 270m、平坦部 20m の高さである。南北 80m、東西 40m あまりのほぼ楕円形を呈す。北側に二重堀をめぐらし、南側は掘切を行っている。伊達 48 館と言われる中の 1 つであり兵庫頭康長の城である。

(藤倉徳夫 高橋啓一 藤田宥宣)



大舟館略測図

ほおざわなで

朴沢館

382-099

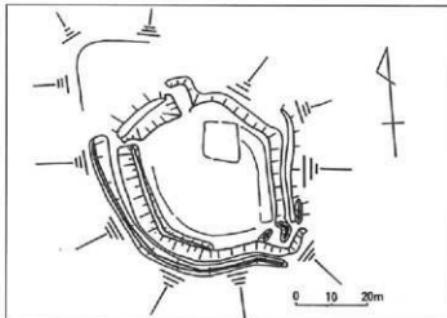
所在地 川西町大字朴沢

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

犬川と北沢川の合流する地点にあり、舌状地の先端部に位置する。標高 290m あまりで、山麓より、40m あまりの高さである。南北に二重の土塁がくの字状につくられ、樹形が東側と北側に造られている。規模は東西 60m、南北 60m である。



朴沢館略測図

(藤倉徳夫 高橋啓一 藤田宥宣)

またざわひで
北沢館 382-100

所在地 川西町大字朴沢字北沢

築城者 不明

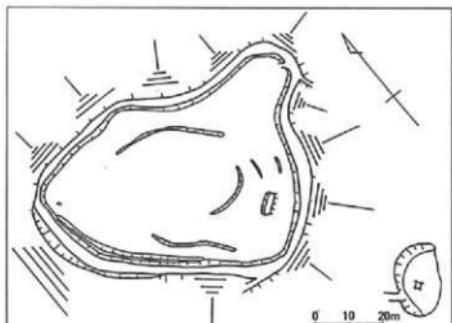
築城時期 鎌倉期

概 要

東西 90m、南北 70m 程度の規模で、玉庭丘陵よりのびる尾根の舌状地の頂き標高 343m に造られ、三方が開け、尾根と続く南西側に長さ 40m あまり、幅 2m、高さ 1m あまりの土塁がある。その外側が溝となる。土塁のない部分

は帶曲輪となり山城を一周する。東側と南側に虎口が見られるが、判然としない。曲輪内部は長さ 20m ほどの高さで、30~60cm の段が見られるが、方形に造られたものではない。沢と山城の高低差は 80m である。

(高橋啓一 西山龍法 藤田有宣)



北沢館略測図

1994.12

まつのきたて
松ノ木館 382-101

所在地 川西町大字朴沢字

松木

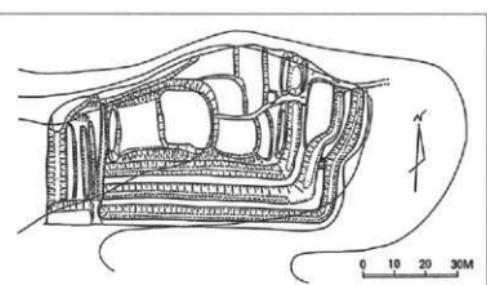
築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『下長井段鉄帳』

概 要

標高約 280m 玉庭丘陵より東側にのびる舌状地の先端部を利用し、西側に大小



松ノ木館略測図

1994.12

異なる堀切を造っている。館北側は急斜面で、麓を南ヶ沢と北ノ沢が合わさり流れ、犬川に合流する。館、東・南側には二重の堀が廻り、東側に大手が造られている。

保存状態は良く土塁・曲輪・土橋などが残る。だが城主は、下長井段鉄帳より松木主計と推測される。東西 100m、南北 60m の大きさを測る。

(藤田有宣)

きょうがもりだて
京ヶ森館

382-102

所在地 川西町大字玉庭字酒町

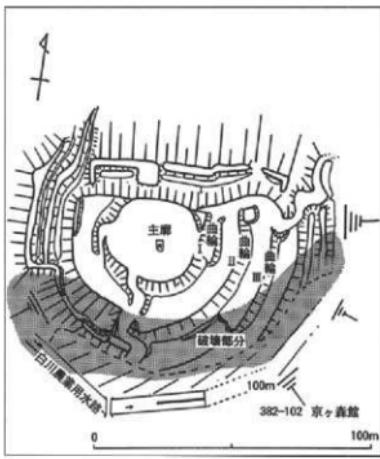
築城者 二階堂駿河守

築城時期 戦国期

概要

昭和 50 年ごろ国営水利事業によって相破壊され、今は曲輪など一部の構造と全体的な大きさを計り知るのみである。古館が平時の住まいとなり、戦時にはこの館に移ったものだろう。大きさは東西 100m、南北 60m 程度である。

(藤倉徳夫 高橋啓一)



京ヶ森館略測図

1994.12

にしばらたて

西原館（古館）

382-103

所在地 川西町大字玉庭字西原

築城者 二階堂駿河守

築城時期 戦国期

概要

犬川と松沢川の合流する北側にあり、南側には松尾神社が位置している。字切図より確認できるもので、新地整理後は、確認はむずかしい。

二階堂氏が居館として利用したものとみられるが確証はない。その後鮎川氏が上杉氏の家臣としてこの地に入り、慶長 6 年（1601）より居住したという。京ヶ森館の隣に羽黒神社が祠られているがこれは、越後国岩船郡村上城内に祠されていたものだが、上杉氏の信仰厚く、上杉景勝の米沢入部後その神主高橋刑部が京ヶ森に遷宮したものであると言われているがこれは鮎川氏との関係からと思われる。規模は東西 70m、南北 50m とそれほど大きなものではない。

(藤田有宣)

あらくらだて
新藏館 382-104

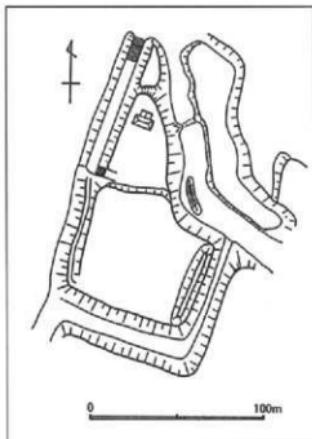
所在地 川西町大字玉庭字熊野沢

築城者 不明

築城時期 鎌倉期

概 要

玉庭の東側の丘陵よりのびる舌状地先端部に造られた標高 280m の館跡である。東側、南側に溝をほり、東側にのみ土塁があり、北側に沢を埋め土橋を設置した跡があることが指摘されている。大手は北側よりつくられ、館の西側半周するものである。中央部北側に神社が祭られ、この 100m 南側に平安中期の須恵窯があった。
（藤田有宣・高橋啓一）



新藏館略測図

1994.12

ふなやまやしき
舟山屋敷 382-105

所在地 川西町大字玉庭字笠松

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

館山の直下、東北側に位置する。周辺の水田面より敷地が 1m あまり高く、現在も舟山氏の屋敷である。周辺は畠場整備によって変わっているが概略は今もわかる。江戸時代後期の物と思われる山岳信仰で使われる「行屋」が残っている。規模は東西 50m、南北 80m 程度である。
（藤田有宣）

たなかざいけ
田中在家

382-106

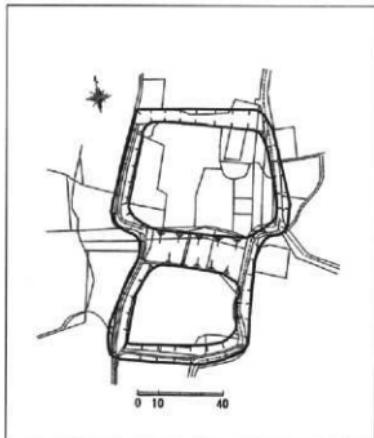
所在地 川西町大字玉庭字田中

築城者 不明

築城時期 桓国期

概 要

現在は宅地化され屋敷の遺構は無いが、字切図によく残っている。東西 60m、南北 110 m のおおきさである。いまは殆ど形はとどめない。
(高橋啓一)



田中在家推測図

しんめいて
神明館

382-107

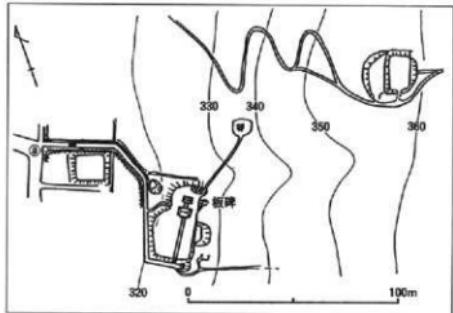
所在地 川西町大字玉庭字神明林

築城者 不明

築城時期 南北朝期

概 要

標高 400m の山の中腹（320m）に造られたものであり、米沢と中津川を結ぶ路線の旧越後街道にある。現在、神社地となっているが、東北の角に板碑が 2 基残されており、古い屋敷跡を物語る。現社の



神明館略測図

1994.12

上方に建物跡があり、それが古い社という。社の創建は、天文 20 年と伝えられている。参道（石段）脇にも建物跡がみられる。虎口は東北の角にあり、社から北に 30m の所に烽台と推察できる跡と、a 地点の鳥居前は通称大門先と地元の人々に呼ばれている。
(藤田宥宣 高橋啓一)

所在地 川西町大字玉庭字上和合

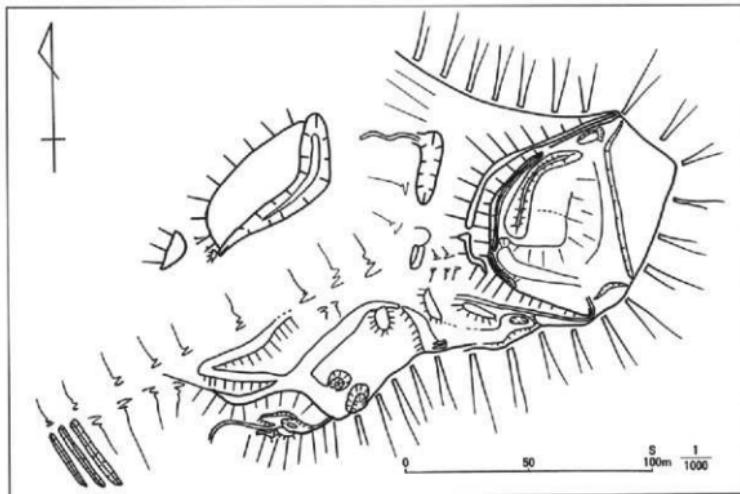
築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

犬川と三滝沢の合流する沢岐に延びた山の突端に造られた山城で、標高425mの山頂から山麓までの比高差は110mである。東、北、西の三方は断崖に近い傾斜面をもち、西方に土塁と堀が確認される。土塁南側に変形した樹形と東に虎口が造られているようであるが判然としない。主郭より南方250mに山麓から頂まで途中で一部が屈曲する三条の縦堀がある。また、南西にはテラスと階段に堤状の造構が確認される。

(藤田有宣 高橋啓一)



大館小館略測図

なでやかたて
館山館

382-109

所在地 川西町大字玉庭字館山

築城者 西大枝氏

築城時期 永正期

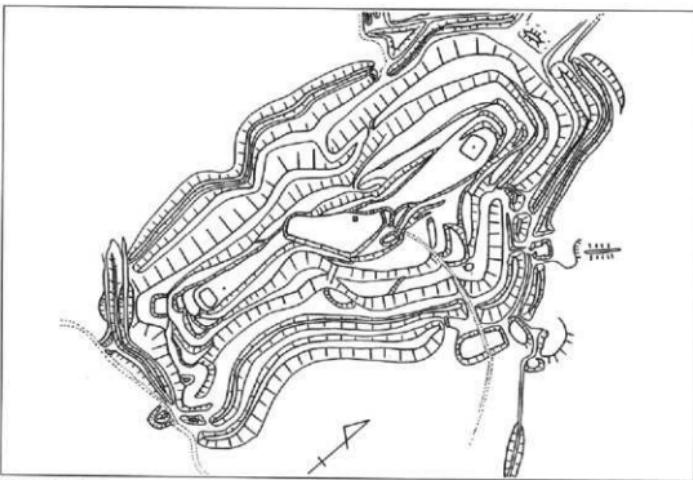
史料 伊達文書

参考文献 『天正初期の伊達氏着到帳の分析』 安部俊治

概要

西大枝氏についての詳細はよく分からぬが14代兵衛尉仲政は知行高五百貫文で、天文18年8月12日に65歳で病死したと伝えられる。山頂には標高433.6mの三角点がある。山麓から140mの比高差を測ることができる。館跡は玉庭兵庫より延びる尾根の単独状に高くなつた所に造られ、山頂を中心として南北150m、東西100mに遺構は分布している。主郭部より眺めると北側に高野沢川、東側に犬川が流れ合流している。主郭の東側と南側に複合の樹形が造られ、南西、北、北西に二重の堀切がある。また、東側に二重堀が造られている。主郭西側よりS字状の道が見られるが主郭まで続くものではない。主郭には伊藤氏の氏神様という虎空蔵様を参る祠がある。この山城の直下60mには天文21年創建の法泉院があり、門前を大門と称している。また、山城と寺院の中間に20m×10mの広いテラスがあり、金毘羅宮が参られている。烽火台及び物見の遺構と考えられよう。西大枝氏は別性伊藤氏の二つの名字を持っており、この山城周辺は、伊藤姓が多く残っている。寺院より200mのところに田中在家及び舟山屋敷があり、この一帯の集落が寝小屋部分にあたるものと思われる。天文初期と思われる着到帳によると西大枝氏の家臣の市川六衛門が馬上で參上したことが書かれているが、犬川在家中市川六衛門家が現存する。西大枝家は伊達家の譜代の家臣であり、17代義綱孫四朗は政宗公とともに岩出山へ移る。

(藤田宥宣 藤倉徳夫 高橋啓一 西山龍法)



館ノ山館略測図

1994

4 西置賜地区の中世城館の分布と特徴

西置賜地区の中世城館址の調査がひとまず、区切りがついた。四つの市町の調査員、担当の当局、職員の方にお礼申し上げたい。調査半ばで鬼籍に入られた、佐藤正四郎（長井市）、後藤正浩（飯豊町）、斎藤清源（白鷹町）の三人の元調査員にまことに報告して、ご冥福をお祈り申し上げたい。その分重い負担を背負われた、市と町の担当職員方々のご協力を多としなければならない。

さて、西置賜地区の中世城館址は、手元に集計された一覧表によると、総数は 142 を数える。もちろん、その中には今後の再調査の必要なものも含まれている。各調査員の方による、それぞれ担当の城館址について説明は、中には独創的な記述も見られ、また必ずしも統一がはかられたとは言えないが、それはそれとして現段階での到達点として尊重し、今後の手直しを待ちたい。残念ながら、もう一步の所で「城館址」としての証拠を固めることの出来なかったものもあるし、これから新しく加わる城館址も出てくることが予想される。それらは、当然ながら今回の数字には含まれていない。今回の調査によって報告された中から、特徴的なことを若干整理しておきたい。

[平地の「館」址]

まず、最初にあげなければならないことは、平地の館跡が半数以上を占めているということである。そして、今回の調査で明らかになったことの一つが、「館」関連地名と「館」址との密接な対応関係が確認できることである。表 1 でみると、この地区には、「館」地名が多い。ほとんどの大字単位に、一つ以上の「館」地名があるかのようである。明治以後の「大字は」の多くは、近世の「村」に系譜を持ち、「村」は、中世の「郷」（戦国大名伊達領国下では、天文 7 年の「御段錢古帳」や天正 12 年の「段錢帳」に記載された「郷」）に系譜を引いている。「館」地名の付近には、堀や土塁の一部を残している場合もある。昭和 40 年代からの圃場整備事業によって、消滅したものも多いが、現在の景観と明治初年の地籍図とを丹念に突き合わせることによって、堀跡や方形館址を復元できたものも多かった。「館」地名のあるところには、中世期に「館」が構築されていた、ということが確認できたわけである。特に、これまで実態がつかめなかつた宮村館（小桜城）の外郭が推定されたことは、大きな収穫であった。また、中には明らかに背後の山城とセットになった、いわゆる根小屋式の「館」集落の存在も確認された。「館」の規模は、1 辺が 50m 内外の単郭の方形館址から、300m を超える複郭式のものまで分布している。後者は、駄目城址や荒砥城址、萩生城址のように、「館」廻りに内町（家臣集住地）や大町・鶴町・上町（商人町）を持ち、その中間の 100m 内外の「館」には、酒（坂）町などが付近にあることが多くみられる。「宿」を抱えている「館」もみられ、平場の「館」と町場集落との関係は、平場の「館」と山城との関係と同じに、今後の課題として残ったことを指摘しておきたい。

「館」の構築された時期について、明確に断定できる材料に乏しいが、「館」地名付近の小字地名の中には、明らかに中世の伊達家文書の中に探すことの出来るものがあった。鎌倉後期の関東武士団の移住と開発にともなって、開発の拠点として自然堤防や段丘面を利用して築かれたものと考えられる。本（元・古）館と新（荒・稱）ないしは南・北・東・西館との関係からある程度の編年ができる。考古学的な発掘の行われたものも 2、3 みられるが、成立時代を決定する遺物の検出には到っていない。今後は、発掘を含めた総合的な調査が必要である。そのほか関連する「地頭屋敷」や「籠前屋敷」、さらには、「在家」地名など、明らかに中世までさかのぼりうる地名との関連や集落と耕地を含めた当時の景観の復元、中世の板碑の分布との関連など、今後に残された課題もまた明らかに

表 I 西置賜地区の『館』関連地名表（『山形県地名録』をもとに作成）

市・町 NO.	大字名	「館」地名	「町」関連地名	城 銘 坂
長井市 1	城南	東西南北館、古館・元(本)館、新館、荒館		
2	五十川	路、北館	新町、本前	成田館、新井館、新井北館
3	若狭	長井館、櫛御館		平伏館、神代館、長者館
4	川原沢	館		貴賀堂
5	草間	(館)、東西南北館、兩館	新町、新町	草間館
6	動道代	山館、史屋敷	新町	山館、今田館
7	白鬼	立道		南鬼館
8	守屋	古館、館越、立石岡	下町	守屋古館
9	九郎本	館の内、館、古館、館野、花立、石館、金城	西町、新町	正守寺館、金城館
10	平山	大館、本口	桜町	片瀬館
11	宮	登城町	大町、高野町	宮代館
12	小山	寅館、立(立)、雲立	御町、越町	寅館
13	今堀	路、越山		今堀路
14	泉	館、北館、館の越		奥羽館
15	時庭	館	雪舟町	時庭館
16	中伊佐沢	副町、大森	宿の内、西町、御町	雨町館、要調査
17	上伊佐沢	館、鷹山、船館、稻館、牛面殿		鳥居村、大石館、岩谷館、御館、中臣寺村
白瀧町 18	中山	館の越、柏立		中山道
19	荻野	絆石、焉城、上の越		村代城
20	越野	越の越、押立		
21	山口	館、花立、(要統)		要調查
22	高玉	館、本館、鉢屋敷、立石、善後館、小田館	雪舟町	高玉城、善後館、小田館、高玉本館
23	横田沢	東(西・南・北)館、立井、立寄	西町、下町	横田沢、横田北館
24	高瀬	越山		高瀬館
25	秋吉瀬	山館		要調查
26	大瀬	館、越石、越前		大瀬館
27	鬼塚	館の内、麻屋、立石	上町	鬼塚城、鬼延館
28	石畠田	中館、上館、船館、古城垣	上町	
29	十王	越の内	木原、新町	想田城
30	高岡	越山		高岡館
31	黒鶴	館の口		
32	瀬戸	立石		西瀬戸、高平館
33	駄良	坂館	大街、内町、谷町、新町、御町	駄良城
34	野藤	館の内、下館、定の下、越山	下町、新町	野藤館、釋迦下館、初代館
35	広野町	越	大街、下町	
36	換立	鉢屋敷、馬館、小屋然		浅立館、小屋然
新豊町 37	上原	越		上原館
38	渡谷	越、相地館		福地館、渡谷館
39	駄馬	越		駄馬館
40	岩倉	第の内		岩倉館
41	下原	館の内、館の沢		下原館
42	上原	折立沢		
43	広河原	越山、越の上		越山、城の上・下
44	小原	越の下		小原館
45	高崎	館、鉢屋敷		高崎館、高崎館伝説
46	小坂	新館、新坂		小坂新館
47	手の子	南館、西館、越の越	北町屋敷	手の子西館、手の子南館、町屋敷
48	黒沢	地、(北館)、越の宮、南館	来の町	黒沢(北・中・南)館
49	梅	古館、越の武	小者町	納古館、梅館
50	瓜川	古館、曾押館	下町	瓜川古館、瓜川館
51	萩生	館の北、立岩	内町、雪舟町、御町	萩生城
52	中	鬼塚	御町	中村館、中村萬蔵
小国町 53	市野々	城の口		城ノ口
54	河原角	城山		
55	大石沢	越の下		城ノ平
56	白子沢	越の下		白子沢城山
57	若山	越の下、越前		若山館
58	舟瀬	立平		要調查
59	小波	越の越		小波館
60	片貝	越の越		
61	中里	立井		
62	入折芦	ヲツ立		
63	小坂町		坂町	小坂館、小坂山城
64	兵庫館		古町、町	兵庫館
65	北	越分		北村館
66	驚	御館		驚城
67	村沢	城山		杉沢城山
68	花沢	城山、城下		長沢城ヶ峯
69	金目	内館		

なった。

[山城址]

もうひとつはっきりしたことは、特に山頂や山麓部の城館址（山城や砦跡と推定されるもの）のほとんどが、伊達家文書などの当時の、いわゆる「文献」の中で確かめることができない遺跡であるということである。特に山城の場合は、伝承すら残されていないものが多かった。まさに、調査員の熱意だけが頼りで発見された城館址や多かったのである。そのような状況の中でも、「文献」の中に登場する数少ない城館址をあげてみたい。

①小国町の大庭砦

この城館址そのものについては、厳密な意味で文献史料に明記されているわけではないが、伊達氏内部の“天文の乱”における激戦地のひとつと推定され、興味深い遺跡である。

天文 11 年（1542 年）6 月に起きた伊達稙宗（14 世）と晴宗父子の内乱は、伊達領国に広がり、白川以北においては稙宗方（最上氏、鮎貝氏、上郡山氏など）と晴宗方の抗争が繰り広げられた。その年の 11 月 14 日に伊達稙宗方の小国城主上郡山為家が、越後の黒川領実に宛てた、戦況報告によれば、最上義光を始めとする稙宗方が有利な戦況の中、手の子から小国にかけて一大勢力を保持する遠藤一族が、晴宗方として奮戦するが、10 月に入り小玉川の遠藤、舟山一族をひとり残らず討ち取られたということである。その合戦の跡と考えられる遺跡である。やがて戦況が変わり、天文 17 年晴宗の勝利に終わるが、乱後の「晴宗公采地下賜録」に遠藤上野守が記載されてくる。豊掘や空堀が山腹一帯に確認され今後の調査によっては、その城域がさらに拡大すると考えられる。

本報告の中には、“天文の乱”と乱後の「晴宗公采地下録」に関係した記述が多く見られるが、この時期が当地方の山城の発達の上での一つの画期と考えられ、今回は具体的な特徴まで指摘することはできなかったが、今後は乱後の“城割（破城）”や改修をともなった痕跡などに注意して調査する必要がある。また、鉄砲伝来直前のいわゆる弓矢と鎧を主体とした特徴を繩張り図の中に明確に検出することはできなかったが、その後慶長 5 年の最上合戦まで（場合によっては、近世の御役屋まで）何度かの改修が加えられたことによるものと考えられる。なお参考までに、置賜地方の城館址の展開を図式的にまとめ、代表的な城館址を挙げてみた。全体の城館址がすべて編年できるわけではないが、一つの試案として提示してみたものである。

②荒砥城址と鮎貝城址（白鷹町）

伊達輝宗が家督を継いだ永禄 8 年（1565 年）から、最上氏との関係が悪化していくが、それ以前と戦い方が決定的に変化してくる。それは、一つには新兵器＝鉄砲の導入によってもたらされた。周知のように、天文 12 年の伝来からまたたく間に各地に伝播したと考えられるが、伊達領国において「鉄砲」が史料的に確かめられるのは、菅原では天正 2 年 5 月の畠谷口での「鉄砲せめあいの後、鎧いくさ云々」（20 日、伊達天正日記）である。特に、荒砥と鮎貝の両城は境目の拠点であり、すでに 4 月 14 日に、荒砥の「御家人」が畠谷城の攻撃を命じられ、伊達氏の「御術」として因幡某が荒砥に派遣されていることから、戦術的にも専門的な指揮系統のもとに新しい組織が成立していたと考えられ、城館の位置や構造にも何らかの変化が予想される。

天正 12 年に伊達政宗が家督を継ぐと、またまた最上との緊張が高まるが、最上氏と呼応して天正 15 年に伊達氏に反旗を翻えた鮎貝氏は滅亡する。その時、鮎貝城は火炎に包まれた（鮎貝城

の項参照)。

天正 16 年になると、布施備後、原田宗時、屋代源六郎、などの武将が頻繁に鮎貝や荒砥に派遣されている。時には、「鉄砲足軽」や「隠野伏」も派遣されている。そういう中で、4月 20 日、鮎貝、荒砥両城に御代官衆が派遣されて、要害普請がおこなわれている。鮎貝には守屋、桑島、片平が、荒砥には鹿俣、大庭、大石の各将である。特に桑島将監は、前日まで伊達竺丸の御殿の普請奉行を勤めている、いわば専門家である。両城は、繩張りの上から決して同一ではないが、主郭部と町曲輪を含めた城郭全体を見た場合、明らかに統一の規準が伺える。細部にわたる検討は今後の課題として残しておきたい。

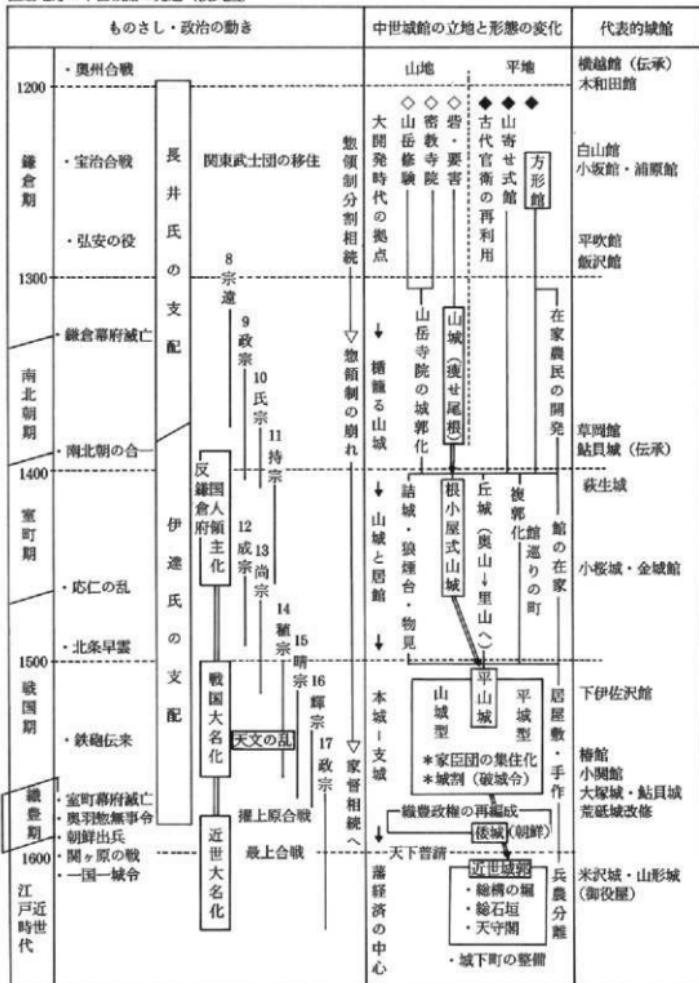
次に、城館址の構造や形態の上から特徴的なものを挙げておきたい。

- ① 突掘（空堀の中に突状の障壁がある）→椿館（飯豊町）、白山館（長井市）、愛宕山館（長井市）
- ② 突状の堀櫓→杉沢館（白鷹町）
- ③ それぞれの尾根が、堀切と堀櫓とで“ひとで”のように展開→愛宕山館（長井市）、塩田城（白鷹町）、小国城や薺城山、古田山城（いずれも小国町）なども同種と考えられる
- ④ ぶどうの房状に曲輪が展開→鮎貝城、黒藤館、高玉城（白鷹町）
- ⑤ 特徴的な虎口部を持つもの→金比羅砦（小国町）、戸根林館（長井市）

これらについて、時代的な特徴を表すものなのかどうか、今後の検討が必要である。

最後に、この度の城館址の調査については、各方面から物心両面にわたるご協力をいただいた。とりわけ、米沢市を始めとする東置賜の調査員の諸兄姉や、調査委員の手塚孝氏には、繩張りの測量から作図の仕方までご指導いただいたことを記して、感謝申し上げたい。

置題地方の中世城館の発達（模式図）



5 西置賜地区の城館遺跡の概要

はくさんもりだて

白山森館 209-001

所在地 長井市川原沢字白山森

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『長井市分布調査報告書』

概 要

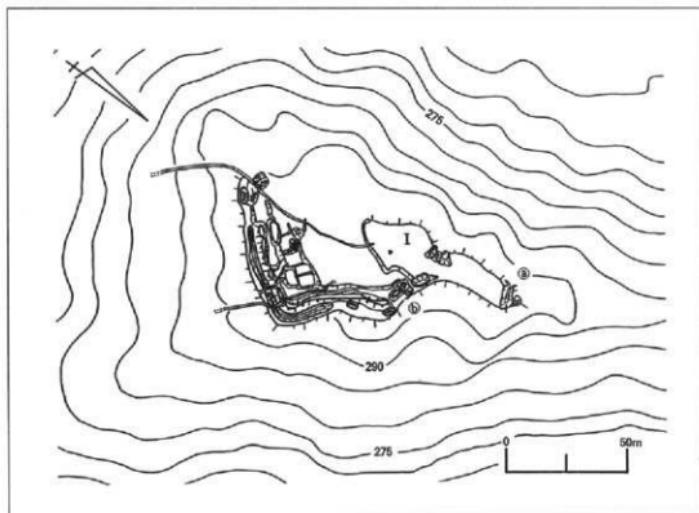
朝日山系の麓、標高 303m の白山森山頂に位置する。主郭部（I）から北に延びるテラスは掘切（a）で区切られる。

山頂東側を中心に「く」の字形に二重の空堀が巡り高いところでは 4m の高低差をもち幅は 3~6m を測る。北側（b）には欹状空堀が築かれ曲輪との高低差は 4m に達する。南斜面には方形に区割りされた平場が段々畳のように連なっている。南斜面は緩やかで、山腹には塹濠状の凹地が点在していたというが、一部表土層が削り取られているため、いまは見ることができない。それに比べて東と西斜面は急峻で天然の要害となっている。

平成 3 年に簡易リフト設置工事に伴い一部発掘調査を行った。白山森南斜面がスキー場なっているためである。開発側との協議で最小限の工事にとどまり、平場と土塁の一部が緊急発掘調査にかかった。その結果、土塁の断面の土の堆積状況から現在見られる土塁の下に新たな土塁と空濠が確認された。すなわち現在する館跡の下に一時期古い館跡が存在する可能性がある。

また本遺跡には径 2~3m の積石状の塚が 4 基存在している。史跡整備に伴なう調査を実施したところ四耳壺（中世陶器）が出土した。

（佐藤正四郎 岩崎義信）



白山森館略測図

1994.12

所在地 長井市勘進代字寺山

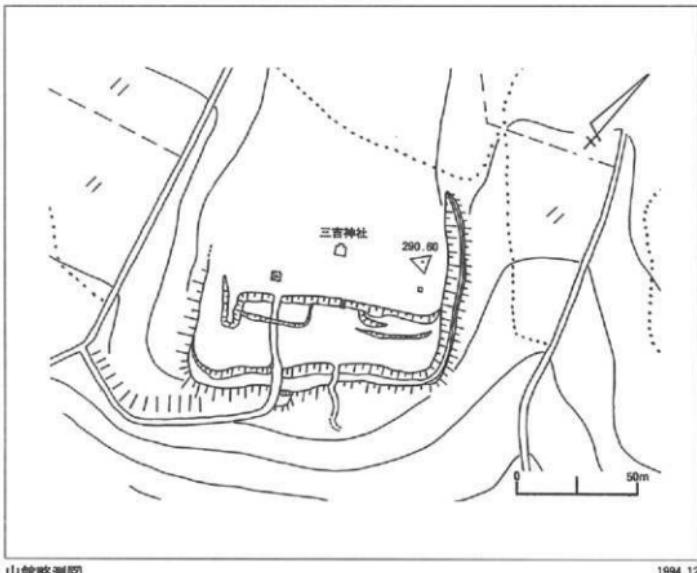
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

本遺跡は、長井市勘進代の通称「三吉公園キャンプ場」内にある館跡である。長井市西部の朝日山系のなだらかな丘陵地帯に位置し、東西約100m、南北約80mにも及ぶ広大な館跡が築かれている。遺跡は比較的原形をとどめており、館の前部にあたる南東側のテラスや、その下部の帶曲輪もはっきりと残っている。また、主郭部には、館の土台であったと考えられるテラスがあり、両端には、物見か狼煙台様の張り出しも確認できた。さらに、遺跡の北東には小川が流れており、濠の名残と考えられる。主郭部中央やや奥には三吉神社がある。もとは小さな祠だったものを、地元住民の寄進によって、大きな社殿にしたものである。建てられている場所は、本来、もう少し前庭寄りだったようで、この館主の鎮守だったものと考えられる。このほかに二ヶ所、小さな祠を確認したが、いずれも同様の信仰によって建立されたものであろう。また、社殿南には、日露戦争戦没者慰靈碑があるが、表面の刻字は埋められている。遺跡の南東側に比べ、西側にはあまり大きな遺構は確認できなかった。すぐ後ろに山麓部が控えているため、明確な境界を設定しなかったものと思われる。

(岩崎義信 神尾昭利)



山館略測図

1994.12

所在地 長井市草岡

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

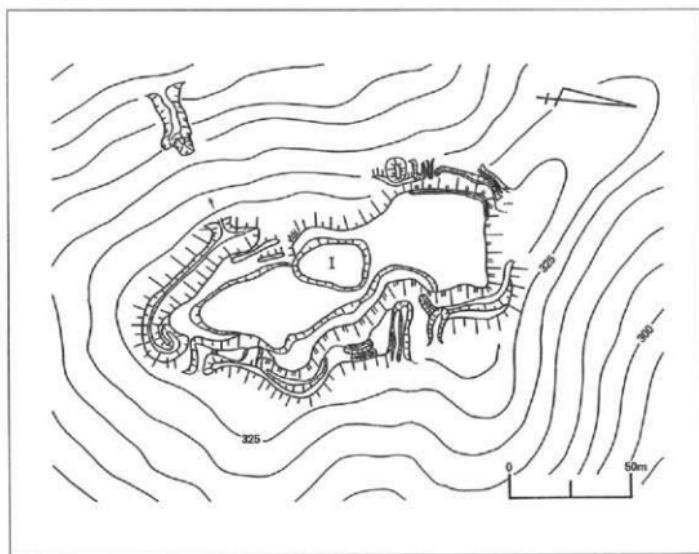
朝日山系の麓、戸根林館の山頂に位置する。ほぼ北西—南東方向に長軸をもつ館跡で、長軸約130m、短軸約80mを測る。館中央部に比高差50m程度のテラスを形成し、そこを中心北・南へそれぞれ緩く傾斜しており二段構築の山城である。

山の斜面が比較的緩やかであるため深く険しい空堀が築かれているのが特徴である。特に北から東側にかけ比高差4~5mを測り、堀底には長さ12m幅4mの畝状堅堀や、23m×5mの堅堀が見られる。曲輪の北西隅には小規模ながら長さ33m幅2m高さ0.5mの土塁が築かれ、斜面下の空堀との比高差は3mを測る。空堀南端部には小規模な土塁1基と堅堀2条が築かれている。また北西に延びる尾根には長さ14m幅3mの堀切がある。

遺跡南端には土塁と空堀が「の」字形に形成される箇所がある。虎口にあたる箇所と思われる。そこから続く空堀の底を通り抜け(→)、山を下ると南西に開いた堅堀に通ずる。2つの遺構が組み合った平面形をもち上場と下場の比高差は3~4mに達する。長さ30m幅6~13mと規模も大きい。

以上のように主郭部(1)を中心に空堀や帯曲輪で囲んだ大規模な山城ができる。

(佐藤正四郎 岩崎義信 神尾昭利)



戸根林館略測図

1964.12

かねだだて
金田館 209-004

所在地 長井市大字勘進代字荒屋敷

築城者 金田氏

築城時期 室町後期

史料 金田家文書

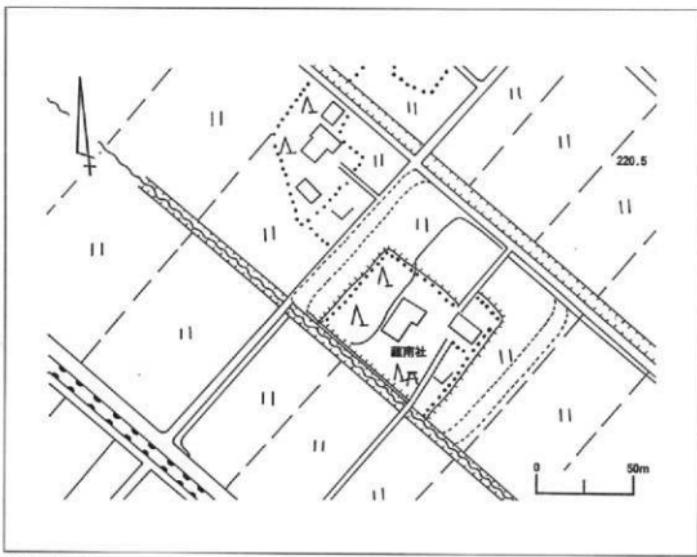
参考文献 『長井市史第一巻（古代・中世編）』

概要

伝承では元慶2年（878）に秋田の蝦夷の挙兵を鎮めるため出羽に来た藤原保則が、娘すみを事情あって数人の家来と共に新屋敷に残っていたが、その家来の一人が金田家の先祖だと言い伝えている。現在も目通り4.62mの檼の大木と保則を祀る¹⁴²⁶ 蔿南社が屋敷内にある。館屋敷は長井へ鮎貝を結ぶ西山山麓沿いの道路にあり、館の周辺の勘進代は鮎貝氏の所領が入組み、その北の鮎貝領には伊達持宗が享徳2年（1453）に瑞龍院を建立し鮎貝対策の拠点としていた。金田氏は伊達・鮎貝の両勢力の錯綜する中にあり、1450年以前に館構えの屋敷を作ったのであろう。

天正19年の伊達氏の岩出山移封のとき、西大塚の地頭大津賀（大塚）氏の中監物だけが同行せず、金田氏を離ぎ金田監物と名乗り、慶長5年（1600）の直江兼続の最上陣に郷土として参加し、畠谷で討死し、子孫は500石を開発して50石取りの郷土とし存続した。昭和になっても館の内1町3反の屋敷が3間館堀と土塁にかこまれ、典型的な館屋敷の形を残していたが、昭和45年の土地改良で現在は西側と南側が開田で平坦化され、破壊されている。

（竹田市太郎）



くさおかだて
草岡館（桐町館） 209-005

所在地 長井市大字草岡字桐町

築城者 松木伊賀

築城時期 室町前期

参考文献 『長井市史第一巻（古代中世篇）』『伊達世臣家譜』

概 要

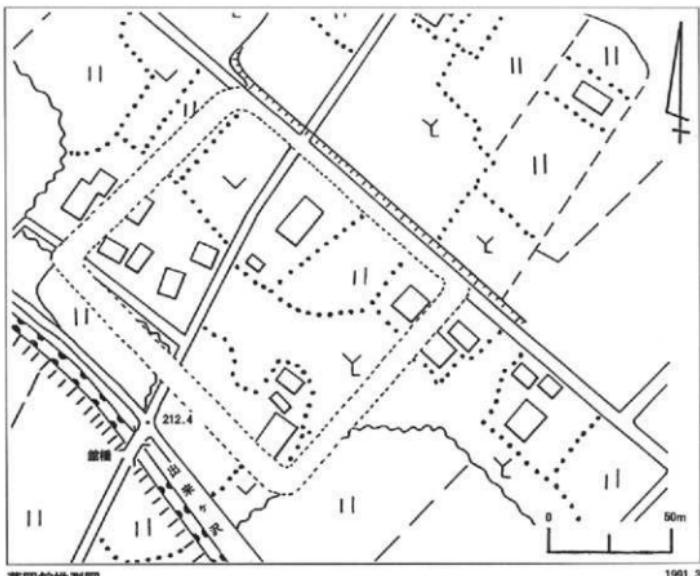
桐町館は西根村のほぼ中央草岡の西山山麓に近い平地にある。館の内は町2区の広さで、昭和30年頃までは、北西側に8×45mの堀が、南東には5×44mの堀が残っていた。館の北西1000mの所に戸根林間館があり、それに通ずる古道に狸口、火ノ口、北口の三道があったと言い伝え、この桐町館と戸根林山館はセットになる。

館主松木氏は伊達氏の古くからの長井譜代の臣であるといい、応永年間（1394～）の頃に桐町館が築かれたという。

天文の乱では鈴貝氏に味方して力戦し、晴宗方を苦しめたので、晴宗の執政中野宗時が本領安堵刈田三沢郷加恩の条件で晴宗につかせた。

天正19年の伊達氏岩出山移封に同行し、廃城となった。

（竹田市太郎）



草岡館推測図

こんごうさんとうで

金剛山砦 209-006

所在地 長井市白兎字金剛山

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

本遺跡は、長井市白兎と白鷹町高玉の境界近く、葉山森林公園内にある金剛山山頂にある砦跡である。山頂の主郭（I）部を中心に、南北にやや細長いテラスがあり、その周囲を帯曲輪が巡っている。また、西に伸びる尾根にもテラス（A）が張り出し、帯曲輪が巡っており、その北西には二重の堀切が築かれている。山頂部のテラスからは白鷹町方面を広く見通すことができ、また、西側の尾根を堀切で遮断していることから、北方警戒の為の砦と考えられる。

（岩崎義信 神尾昭利）



金剛山砦略測図

1964.12

みなみかもいしだて

南鶴石館 209-008

所在地 長井市寺泉字南鶴石

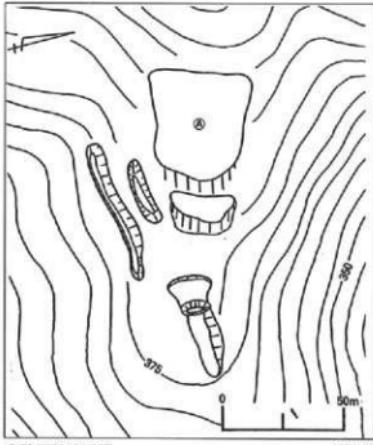
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

本遺跡は、長井市寺泉の南端、置賜野川を右手に、上郷スキー場を左手にした山頂付近にある砦跡である。山頂からやや東寄りに一段低く、テラス（A）がある。山頂にはテラス状の広がりがないことから、ここが遺跡の中心部分にあたる。テラスの南側や下には二重の帯曲輪が築かれている。南東にやや離れて、台形状のテラスがあるが、遺跡の規模としては小さいもので、置賜野川に沿って、主に南東側を警戒していたと考えられる。

（岩崎義信 神尾昭利）



南鶴石館略測図

1994.12

てらいざらるるだて
寺泉古館 209-009

所在地 長井市大字寺泉字古館

築城者 赤間氏

築城時期 戦国期

参考文献 『長井市史第一巻（古代中世篇）』

概要

明治末年までは土塁も南半分残り、北の土塁も薈場として残り、船遺構は把握できたが昭和45年の土地改良で消滅した。古館の赤間氏は寺泉の古くから郷士で、大永年間に館を築き、赤間備中は天文の乱の功績で晴宗の安堵状を受けている。それによれば、寺泉郷の瀬の山、ふつ田、切田、館の屋敷、桜の町に、外に九野本、時庭の3か郷に所領があることがわかる。天正19年の伊達氏の岩出



寺泉古館推測図

1993.12

山移封に同行。明治末年まで南半分の土塁は残っており、北半分の土塁の位置も明治8年の字切図で確認できる。

（竹田市太郎）

こさかだて
小坂館 209-010

所在地 長井市大字平山字小坂

築城者 志賀善太夫

築城時期 鎌倉前期

史料 平山改座文書

参考文献 『長井市史第一巻（古代中世篇）』

『平野村郷土誌』

概要

野川が西山から平地に出る谷口に位置する。土塁だけが現存し、幅6m、高さは1.7mで、明治8年の字切図では原型がよく残されている。嘉祐2年（1226）の平山改座文書の筆頭年寄志賀善太夫の築いた館屋敷で、室町時代には段階請負人として年貢徴集、治安等の役目を果していた。天文の乱では晴宗党として活躍しているので、西に隣接する小豆沢山館も志賀・片倉氏によって築かれたものであろうと推定される。



小坂館略測図

1992.10

（竹田市太郎）

あづきざわたて
小豆澤館

209-011

所在地 長井市平野字小豆澤

築城者 不明

築城時期 戦国期

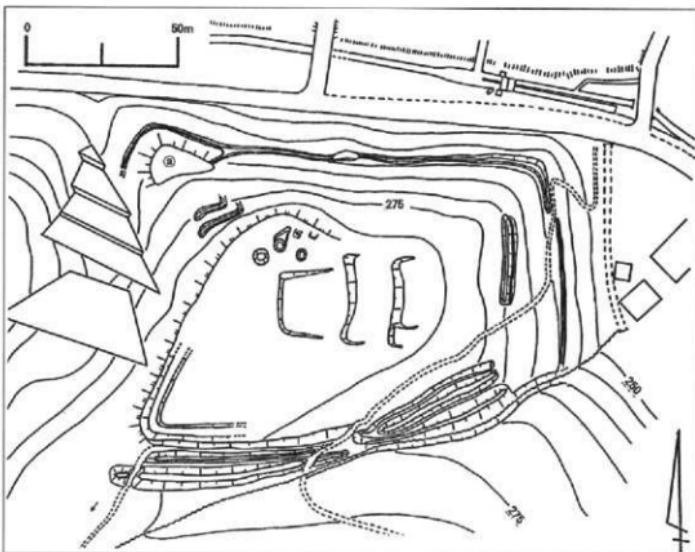
概 要

本館は置賜野川の右岸、道照寺平スキー場東側の小高い山の頂に位置する。山頂付近は東に傾く緩斜面で、数ヶ所の曲輪が見られるが西側は急峻な斜面となる。北側も等高線の間隔からも窺われるよううに、急峻な斜面となって残っている。中腹には幅1~2mの帯曲輪が築かれている。また北西隅には2箇所のテラスも見られる。東斜面は下位に帯曲輪、上位に帯曲輪と土塁が築かれ、その間を縫うよう熊野神社に向かう参道(→)が通っているが、遺構を再利用した可能性もある。南側には深さ2~3mの沢があり、隣接する山との境界線の役割を果たしているかのようである。また、沢と平行して幅約2~4mの2条の帯曲輪と土塁が併走し、その高低差は4mにおよぶ箇所も見られる。

以上のことから、本遺跡は野川によって形成された東に開く扇状地の頂部に位置し、西に急峻な朝日山系を背景にし、北には東西に流れる野川を配し自然の地形をうまく利用した館跡ということができる。付近には周囲に堀を巡らした平地の館跡が2~3箇所確認されており、本館跡との関わりが注目される。

また平成5年に、館跡の北側を通る県道の拡幅工事に伴ない遺跡の北側が緊急発掘調査が行なわれ、テラス部分(a)から柱穴や土台石も見つかった。

(岩崎義信)



小豆澤館略測図

1994.12

ふかざわだて

深沢館 209-012

所在地 長井市白兎字深沢

築城者 不明

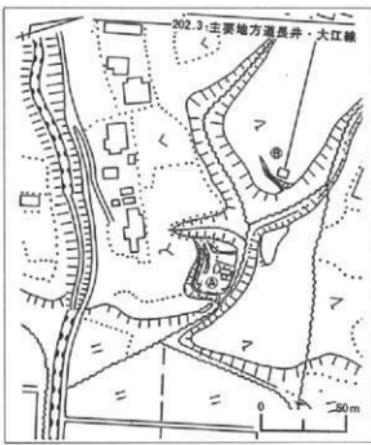
築城時期 不明

概 要

長井市の北部、白鷹町と隣接する白兎地区の深沢に位置する。一帯は最上川の河岸段丘を東西に流れる小河川が走っており、舌状台地の形態を呈している。小河川に入れ込むように二条の堀が築かれており、深いところでは比高差4mにも達する。堀に囲まれるように曲輪(A)が築かれ、その内側に土塁も見られる。比高差4mに達する最上川の段丘上にあるため視界も良い。付近に貴船神社(B)が祀られており、船運との関連も考えられ

る。

(岩崎義信 神尾昭利)



深沢館略測図

1994.12

しかまだて

色摩館 209-013

所在地 長井市大字五十川（旧小字名色摩在家）

築城者 色摩七之丞

築城時期 戦国期

参考文献 『五十川村誌』『長井市史第一巻
(古代中世篇)』

概 要

天文の乱で伊達晴宗と戦った鍋貝氏をおさえるため、蚕桑境に近い袋に色摩七之丞をおいて備えさせた。天正12年の段錢請負人に志釜丹波の名があり、色摩氏は以前から北部五十川郷の有力者で、それを補強するためである。一族を北の家、西の家、東の家に配置し霍雀野で兵馬の訓練をしたと言い伝えている。

天正の岩出山移封に色摩七之助が従っているが、弟門兵衛は土着し残っている。現在宅地化し、土塁、館堀共に破壊されている。



色摩館推測図

1991.3

長者館

209-015

所在地 長井市大字五十川字長者館

築城者 太賀豊後

築城時期 戦国期

参考文献 『長井市史第一巻(古代中世篇)』『伊達世臣家譜』

概要

洪積台地を最上川の支流が南西、南、東を削り取ってできた比高差3mの舌状台地を利用して作った館屋敷である。南と東は河岸段丘を利用し、東は川を利用して館堀としていた。北と西側は館堀をほり土塁をめぐらしていたが、現在は平坦化されてしまったが、網張りの原形はとどめている。太才(齊)豊後は伊達累世の臣で「永井御譜代」と称し、段銭21貫642文を納める土地持ち(約77町歩)で、総領家の本拠は米沢周辺である。

天正12年(1584)の段銭帳には太才信濃守が五十川に800刈の所領を持ち段銭請負人になっていて、五十川村では最も大きい土豪である。「長者館」の名称は当時の太才信濃守の勢威を示して名付けられたものであろう。豊後は信濃守の祖父にあたりるので、長者館は太才氏一族の領有地支配と年貢徵集のための行政の拠点として築かれたものと思われる。

天文の乱では晴宗党として、鮎目氏の勢力圏にありながら活躍した。天正19年の伊達氏の岩出山移封に従っており、その時に廃城となつたが、名子の佐藤、別部、菊地の三家がそれを継承し今日に至っている。

(竹田市太郎)



長者館略測図

1989.11

おおやしき ひらぶきだて
大屋敷、平吹館（西館） 209-016,017

所在地 長井市大字五十川字西館、長井市大字五十川字若柳

聚城者 手塚藤右衛門、手塚源右衛門

築城時期 鎌倉後期、平安中期

史料 手塚家墓碑銘

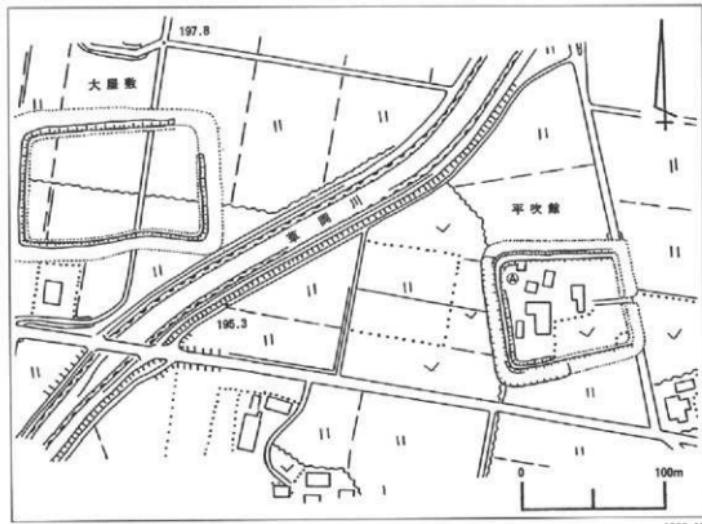
参考文献 『長井市史第一巻（古代中世編）』『五十川村誌』

概要

手塚家には「将蠶院殿職昭源永居士（天安2年死去）」（858）の墓碑があり、藤原姓を名乗り平安初期に五十川の大土居、野際に定住し周辺を開拓して土豪となつた。一説には33代藤右衛門が手塚姓を名乗り、文明15年（1483）に一町歩の手塚屋敷を補強したとも言つてゐる。分家の手塚源右衛門は西館に五反歩屋敷を作つて居住してが、正応2年（1289）の板碑が存在するから、鎌倉初期には独立したのであろう。両手塚共に鮎貝氏の臣で、手塚館、大屋敷、西館、掃部館、山口館の四館が西から東へ一直線に接近して並んでいて、南から攻撃に備えている。

天文の乱では鮎貝方に組し、天正19年の伊達政宗の移封の後はその地に土着した。西館の源右衛門は承応年間（1652）に堀の木垣の開削の時、四ツ掘の漏水で困っていた時下女のおせきが人柱になつた事件で刑死し、家も断絶した。手塚館は明治以前から原形破壊がすんでいたが、西館には1787年に平吹市之丞が入り、市之丞は経済的にもゆとりがあり、五十川の有力者でもあったため館屋敷は昭和45年まではほぼ完全に近い形で残つてゐる。特に長屋門、庭園、正応2年の板碑（A）がこの館の歴史を物語る資料となつてゐる。

（竹田市太郎）



平吹館・手塚館略測図

かもんだて（ひがしだて）、やまぐちだて
掃部館（東館）、山口館 209-019,020

所在地 長井市大字五十川字掃部館、長井市大字五十川字山口

築城者 松木伊賀、松木与七郎

築城時期 戦国期、戦国期

参考文献 『長井市史第一巻（古代・中世編）』

概 要

松木は姓藤原、その祖伊賀守の時に子図書に 800 石の土地を羽州長井（草岡）に賜ったと伝えている。五十川・勘進代・草岡・河原沢・寺泉に所領があり、一族も多く栄えた。

天正 12 年（1584）の下長井段鉄轍に出てくる段鉄請負人松木掃部が、松木の支流で掃部館の館主である。段鉄高 1 貢 400 文である。東の山口館は松木掃部の庶流小島代次郎が天文の初期に築いた館であるが現在は、わずかに土塁の一部らしきものが残っているにすぎない。

天文の乱（1542～）では草岡の松木式部を中談に一族ごぞって鉢貝方に味方し、晴宗方を苦しめたので、天文 16 年（1547）に晴宗の執政中野宗時以下六人が松木内記に本領安堵・刈田郡三沢郷の加恩を条件に晴宗方につかせた程強力な存在だった。

掃部館も山口館も平地の中の一町歩程の館で、防禦上強力な館とはいえないが総領式部の築いた戸根林山館と連繋し根強く抵抗したのであろう。

松木一族は天正 19 年の伊達の岩山山移封に従い居館はそのまま名子に譲られたためか、明治初年には土塁も館補佐堀も丹田畑開発のため取くずされ、山口館の西側の土塁だけが原型のまま現在も残っている。
（竹田市太郎）



掃部館・山口館推測図

1989.12

いいざわだて（たてのうち）、いいざわきただて
飯沢館（館の内）、飯沢北館 209-021,022

所在地 長井市大字成田字館の内、長井市大字成田字北館

築城者 飯沢氏、飯沢氏庶流

築城時期 鎌倉末期、戦国期

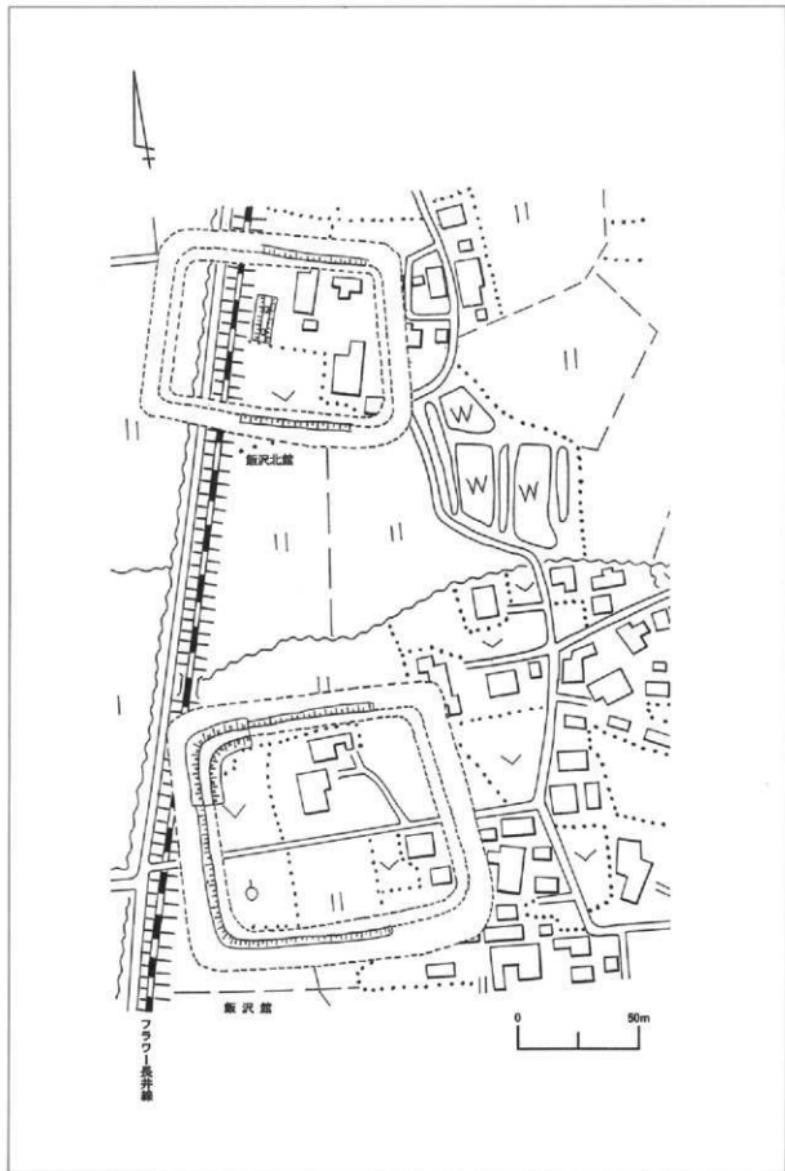
史料 飯沢文書

参考文献『長井市史第一巻（古代中世篇）』

概要

飯沢館、北館共に長井線の線路にそって120mの距離をおいて存在する。両館共に明治8年の字切図では土塁は山林や草地として、館堀は水田として鮮明に残っていたが、大正5年の長井線工事で線路が北館にかかったため原型を失い、更に昭和45年からの野川土地改良区事業で、土塁の一部をのぞいてかなり原型を破壊している。飯沢館は5反4段3歩、北館は4反2段のいづれも方形館址である。現存する飯沢館址に残る土塁は高さ3m、基底で6m幅である。

飯沢氏は鮎貝氏の家臣である。鮎貝氏は伝承によれば、天治元年（1124）に藤原清衡をたよって奥州に下向した京都公家藤原安親の子孫で、松川西郷（最上川以西、野川以北）の庄官となり、平泉藤原氏の滅亡後の鎌倉時代には長井氏に、室町時代には伊達氏の重臣として勢威を保ってきた。飯沢氏は文和4年（1355）の成田八幡宮の神職ゆずり状を所有しているので、鎌倉時代末には鮎貝氏の家臣として成田に居住し、有力な土豪に成長していたと思われる。嘉吉3年（1443）には飯沢専伊太夫が鮎貝宗盛の命で越後の長尾陣に使者として従軍し、所領を加増されているので、鮎貝家中での有力者だったろう。又宗盛・宗朝・盛宗の三代にわたり所領増加・梗役諸役免除の5通の文書を所有している。北館は飯沢氏の庶流が天文の初期に独立して築いたものである。天文14年に伊達晴宗方が宮村館の片倉伊賀守を先陣として、野川を越えて北に攻め入ったとき、鮎貝方の最前線にあった飯沢氏は破れ、成田を放棄して北に後退している。天文の乱の末期には、晴宗方の劣勢や最上義守の援助がなくなった事から鮎貝氏は晴宗方につき、天文の乱の論功行賞では鮎貝氏の旧領の存続がみとめられ、飯沢氏も成田にもどったが、晴宗は飯沢館での居住は認めず、その東の大門に新しく住居をえた。飯沢館には片倉の臣安部右馬之助が入った。しかし飯沢氏が成田村の有力土豪であったことには変りはない。天正19年（1591）の伊達氏の岩出山移封の時、飯沢氏は成田に残った。その年検地（太閤検地）が実施され、「成田村、庶子分まん所の畠、前代よりの筋目と言、今度天下様御検知の上、いよいよ田畠、山林、野河原相違なく之を申すべく候。よこわい誰人も申分これある間敷く候。并田島小作にあづけ候とも、其方たるべく候者なり。仍て件の如し。追て庶子総領問答いたさず、郷中をまかない申すべく候」という文書が飯沢三の九郎に与えられている。この頃飯沢家では総領と庶子の間で土地争いがかなり激しく不仲だったのだろう。江戸時代も飯沢氏は成田の有力百姓として存在した。平成6年に、遺跡を東西に通る市道の改良工事に伴う、緊急発掘調査が行なわれたが、堀跡と鍛冶場跡と見られる遺構が確認された。その他に、内耳土器や漆器、古銭等も出土している。（竹田市太郎）



飯沢館・飯沢北館略測図

1994.12

こざくらじょう
小桜城（宮村館・卯の花の館）

209-024

所在地 長井市大字宮字大町

築城者 宮村殿（実氏名は不明）

築城時期 室町後期

参考文献 『長井市史第一巻（古代中世篇）』

概 要

伊達氏が1580年に置賜を占領した時、旧勢力の鈴貝氏は旧鈴貝、蚕桑村を守護不入の地とした半独立の形で伊達氏の家臣に属したので、伊達は絶えず鈴貝氏を警戒し、その境界線に近い野川の南岸に宮村館を築いてこれに備えた。野川の自然堤防状の微高地を区切って作った館之内3町2反歩程の正方形の館である。後に天文の乱や天正の鈴貝攻め等の伊達・鈴貝の衝突では常に宮村館がその拠点となつた。宮村館は1591年の伊達氏の岩出山移封で廃城となっているが、江戸中期までは濠も土塁も残っていたことが、鈴木二流の「ふたり笠」に卯の花館を訪ねた記録にこされている。

伝承によると、1051年の前九年の役で、安部貞真が源義家の攻撃に備え、娘の卯の花姫を宮村に遣し、卯の花の館を築かせたと称している。遍照寺の僧妙澄に鞍馬訓練成就の祈願をさせたこと、馬頭観音像を奉納したこと、最後の義家との戦いに破れ、三渦に投身して自殺した等々の伝承が残っている。1380年に伊達氏が長井氏を追放して置賜を占領した時以来の土着旧勢力鈴貝氏と伊達氏との関係は前述の通りで、鈴貝氏を警戒した伊達氏は、野川南岸の卯の花館の跡地を修復して宮村館を築いて有力な家臣をおいた。それは1450年頃のようである。1509年に伊達尚宗が越後の上杉定実を援けるため領内の地頭に出入兵の督促を行った文中に「宮村殿=100～250人の武頭」となっている。宮村殿の実氏名は不明であるが、おそらく片倉一族であろう。

天文11年（1542）に伊達稙宗・晴宗父子が争う天文の乱がおこると、稙宗方の鈴貝兵庫頭は最上義守の支援をうけて南下し、晴宗方の地頭を破ったが、宮村館の片倉伊賀守を中心に力をもりかえし、天文14年には野川をこえて鈴貝方を攻め、成田の飯沢館、五十川の諸館を攻め落し、鈴貝勢を旧蚕桑村境まで追い返した。晴宗の喜びは一通りでなく、その年の10月に「今般の忠節により宮一円、小出一円、火神台一円三か所を之に下賜す。永代相達あるべからざるものなり」と安堵状を与えていた。片倉伊賀守の数度の鈴貝氏攻撃には晴宗が東置賜の軍兵を率いて宮村館に逗留したので、館の東の大宿、館の北の十日町を含む一帯を防備するため、もう一重の土塁・濠が築かれ、二重の郭となつてゐる。

1553年には宮村館に片倉家總領筋の片倉毛岐守景觀が入り、1591の岩出山移封の時、景觀は之に従つて移住し、宮村館は廃城となつた。明治以後は市街地の中央にあつたため、次々と破壊され現在は土塁の一部が残つてゐるだけである。

（竹田市太郎）



小桜城推測図

1994.12

よつやだて
四ツ谷館

209-014

所在地 長井市大字五十川字四ツ谷

築城者 前田河越中守

築城時期 戦国期

参考文献 『長井市史第一巻(古代中世篇)』

『伊達世臣家譜』

概要

前田河氏は郡山市 66 邑を支配する土豪だったが、越後守が永正年間(1504~)に伊達に臣服した。天正 12 年の段錢帳に、孫左衛門の名で歳久・宮内・蘿南・きくい・灿の下の段錢を請負っている。領有地支配、年貢徵集のための行政支配の拠点だった。又この地は、葉山権現の聖地とされた所で、現在は土塁の一部だけ残っている。戦前まで三間巾



四ツ谷館略測図

1990.8

の館堀が残っていて木材を沈めて垂み止めに使っていた。

(竹田市太郎)

うららだて
浦原館

209-025

所在地 長井市大字平山字浦原

築城者 小浦佐助

築城時期 鎌倉前期

史料 平山改座文書

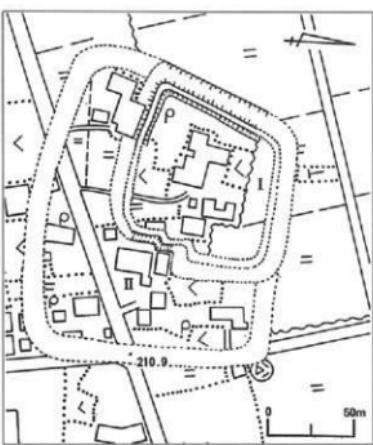
参考文献 『長井市史第一巻(古代中世篇)』

『平野村郷土誌』

概要

野川南岸の複郭式方形館址、現存する西側の土塁は基底で幅 6m、高さ 1.8m、館堀は幅 4.3m、深さ 1m で、土塁の削取り館堀の土砂の堆積は甚しい。嘉承 2 年(1226)の平山改座文書で小浦佐助が筆頭年寄で浦原館の内郭(I)は彼によって築かれた。天正の段錢帳では平山おとな中が年貢の徵集を行っている。

外郭(II)は天文の乱の時築かれたものであろう。



浦原館略測図

1992.10

(竹田市太郎)

所在地 長井市大字平山字木口

築城者 片倉右京

築城時期 戦国期

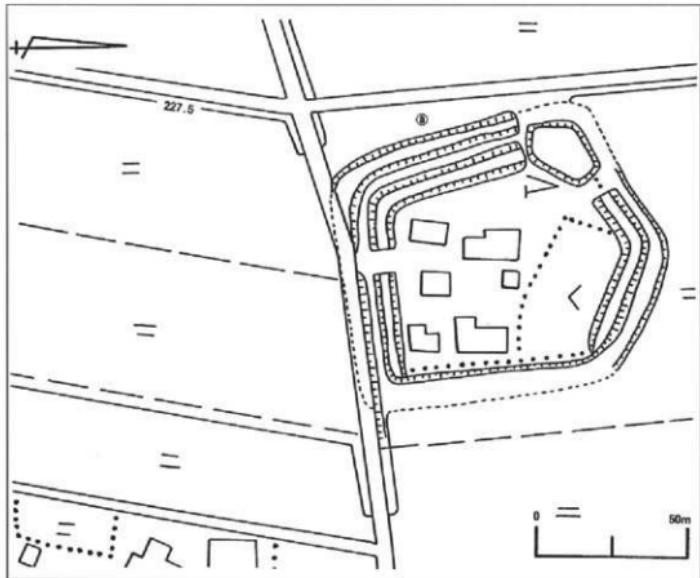
参考文献 『平野村誌』『長井市史第一巻（古代中世篇）』

概 要

野川南岸にある片倉一族の館屋敷である。將模型の館址で、比較的原型を良好な形で残しており、東側だけが土地改良で館堀と土塁がなくなっている。館堀は堀の上面で 5.5m で通称三間堀といつものに一致している。土塁は堀の内側だけでなく外側にも築かれているのがこの館の特色で、堀底から内側土塁の上面まで 2.5m あり (a)、土塁の基底は約 8m である。永正 6 年 (1509) の伊達尚宗の出兵督促状の宛名に片倉右京の名があり、片倉館はこの年より以前に築かれたものであろう。

1542 年におこった天文の乱では、子の片倉図書介が宮村館の片倉伊賀守に協力して晴宗党として駄貝軍と戦い、大きな功績をあげ、天文 16 年に晴宗より「平山のうち、遠藤居屋敷在家、窪の在家、彦四郎在家、法藏居屋敷等」1 貫文の土地を加増されている。乱後の論功行賞では天文 22 年に子修理亮が「平山の内、かみ将監分、斎藤新左衛門在家一軒、同切田五百刈外」を加増されている。

天正 19 年の伊達氏の岩出山移封では、修理亮は同行するが、その支族の清次が館屋敷に残り、土着して百姓になっている。
(竹田市太郎)



片倉館略測図

1991.12

しょうとうじだて 〈たてのうち〉
正福寺館（館之内） 209-027

所在地 長井市大字九野本字館之内

築城者 大町家繼

築城時期 南北朝期

参考文献 『平野村誌、伊達世臣家譜』『長井市史第一巻（古代中世篇）』

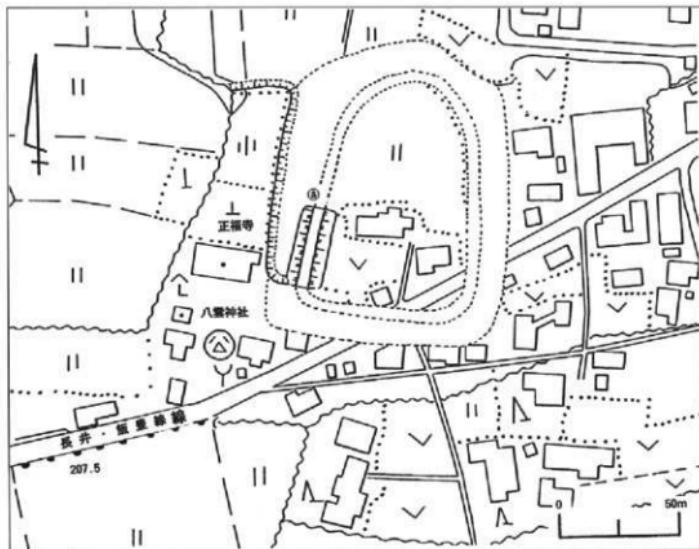
概 要

明治 8 年の字切図では館の土塁も館堀も極めて鮮明に復元できる。館の内 6 反の屢敷で周辺は渥田であり、西に菩提寺・屋敷鎮守とみられる正福寺・八雲神社がある。野川南岸にあり、野川以北に勢力をもつた外様土豪鈴貝氏に備えて築かれたものであろう。現在残っている西側土塁（a）は高さ 2.5m、基底で 9m という大きなものである。

大町氏は伊達行朝以来の伊達譜代の臣で、大町家繼は伊達宗遠の置賜攻略の時功績あり、長井庄内に知行地を与えられたという。文明 2 年（1470）には置賜郡栗之本の雜役免除の特権を与えられているので、館屢敷の造成はこの頃であろう。

天正 12 年（1584）の役銀帳では大町氏の九野本村における所領は 58540 刈、広さにして 59 町歩、千石分の土地であり、正福寺館はこの広大な所領の管理と年貢徵集の重要な拠点であった。大町氏の總領は刈田郡三沢郷大町館に本拠を持っていたが、正福寺館には天文の頃大町三河七郎頼明が在館している。大町三河は天文の乱で宮村館の片倉伊賀守と共に鈴貝兵庫頭と共に戦い、戦功をあげている。

（竹田市太郎）



正福寺館略測図

所在地 長井市大字九野本字金城

築城者 梅津越後守将監

築城時期 室町後期

参考文献 『平野村郷土史』『長井市史第一巻(古代中世篇)』

概要

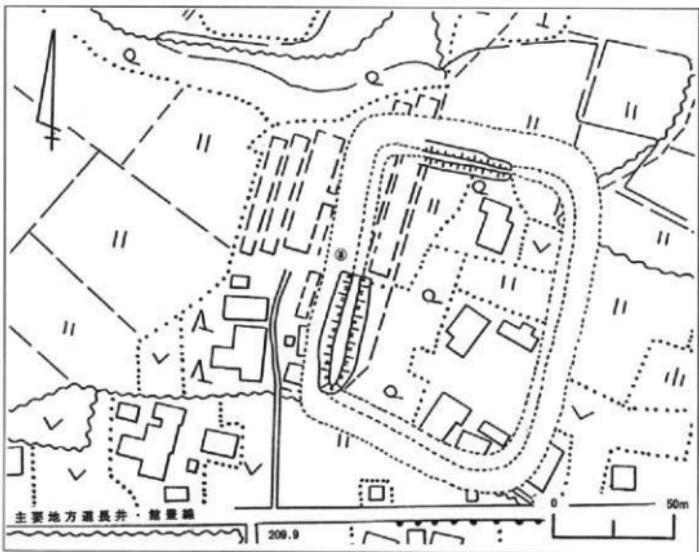
野川の南岸長井～手ノ子街道に沿って正福寺館の西約500mの所に存在する館の内約1町1反の方形館址である。宅地化され土塁館堀はかなり破壊されているが、西側と北側の土塁が半分程残存する。西側の土塁(A)は高さ2m、基底で15mあるが東側は崩れた土であろう。

館主梅津越後守将監は11代天海公伊達持宗の頃からの家臣で、1440年頃に九野本村金城に館屋敷を作った。持宗は長禄元年(1457)に観音寺を建立し、米沢高岩寺の大光乗賢を開山の一派とした。

又、梅津氏の惣領筋は梅津備前で梁川の桜館に住し、種宗の時に同郡沢田舟生で砂金を採取し伊達の軍備に貢献した。梅津備前は勘進代にも所領をもっていた。梅津将監の子孫の掃部助は天文の乱のとき晴宗方として點貝氏と戦い、その功績で乱後松岡藤右衛門の所領九野本の遠藤屋敷賀外加恩されている。

天正19年の伊達氏の岩出山移封の時、金城の梅津掃部助は同行せず、九野本に居残り、越後守の弟左馬助は北辻に分家している。左馬助は信仰心の厚い人で観音寺の有力な越後者としてその維持存続に努めた。

(竹田市太郎)



金城館略測図

1991.12

所在地 長井市大字館町

築城者 大須賀長光

築城時期 鎌倉前期

史 料 長遠寺縁起、大須賀長光 長任の位牌名

参考文献 『長井市史第一巻(古代中世編)』

概 要

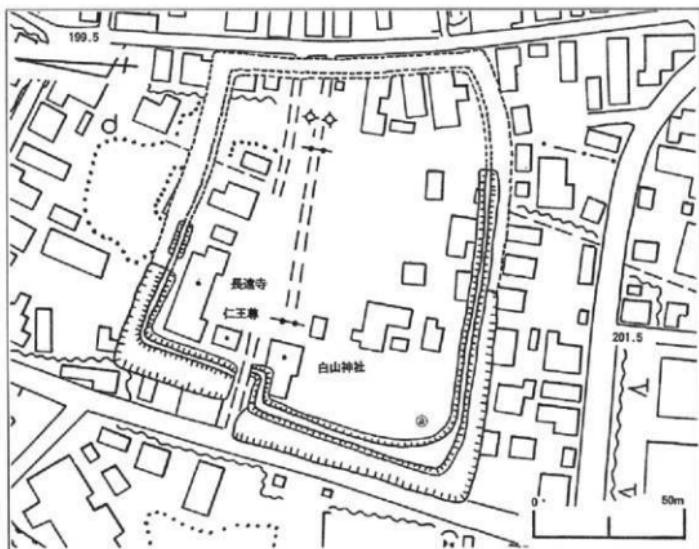
鎌倉時代の初期、長井庄が長井庄の郷地頭として関東から置賜に入った時、その五男泰茂の家臣大須賀長光が利根川下流の大須賀郷から移住し、小出村荒館に居館を築いたのは1230年頃である。館の内は東西117m南北80mで1町2反の方形館址である。昭和45年まで西側と南側西半分の土塁と館堀が残っており、南西角の土塁(a)は高さ2.5mと一段と高い物見台になっていた。

大須賀氏の居館は村地頭として行政支配の役所的性格を持ち、館跡には現在も屋敷鎮守であった白山神社と目通り5.8mの大櫓が残っている。

子孫大須賀長任は正平(1341~)年間に出来として義昌を名乗り、長遠寺を建立した祖先の菩提を弔っている。南北朝の争乱期に長いこと戦争に参加し、世の無情を感じての出家であろう。

室町時代に入って伊達の支配下に入ると、天文の頃は片倉伊賀守、中野常陸、桑島将監(伊佐沢)へとかわり、何れも小出村に居館を持たず、「小出村おとな衆」が年貢を徴集して納め、小出白山神社を鎮守として村の団結の中核にすえ、行政を執行してきた。

(竹田市太郎)



白山館略測図

1986.12

所在地 長井市宮字八幡山

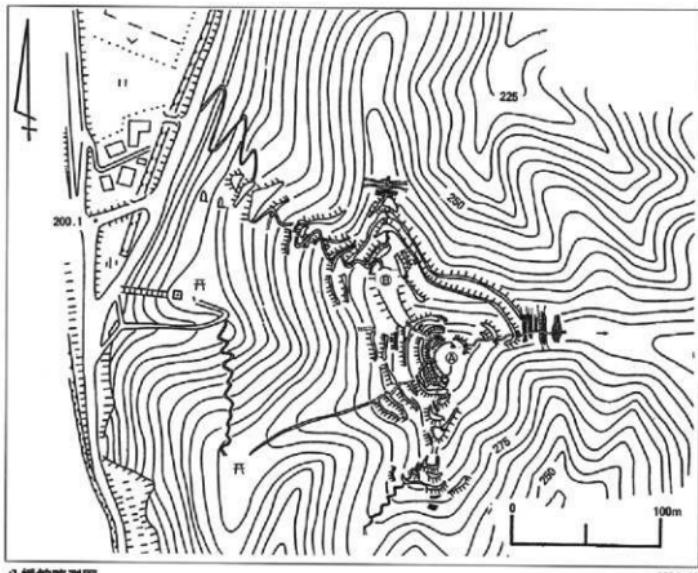
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

本遺跡は、長井市街の東、長井市宮字八幡山、通称「戸田山」にある砦跡である。戸田山は、正面の石段を登ると八幡神社の石碑（以前は社殿だった）があり、春は一面の桜が見事な景勝地でもある。年間を通じて訪れる人も多い。この神社裏から山頂にかけては、山頂にある祠に参拝するための参道が通じている。山頂（A）までは幾重にも帯曲輪が築かれているが、参道は、一部、この曲輪を利用したと考えられる。山頂部からは尾根に沿って、台形状のテラスや帯曲輪が築かれている。東端には大小五重の堀切が築かれ、東側（伊佐沢方面）からの備えとなっている。尾根道はさらに、東と北に分かれ延びている。（→）山頂部から北側に一段下がったところには広大なテラス（B）が広がっている。山頂やこのテラスから北西側への眺望はすばらしく、遠く西根方面から白鷹方面までが一望できる。さらに、北側や北西は、尾根に沿ってテラスや帯曲輪が伸びている。北端には、二重の堀切が築かれ、また、北西は、テラスや曲輪を通路でつなぎながら、最上川東岸の街道へと続いている。全体を見ると、200m四方にも及ぶ広大な遺跡であり、単なる砦というよりも、山城としての機能を十分に果たし得る規模を持つものであったと考えられる。

（岩崎義信 神尾昭利）



八幡館略測図

1994.12

かめがもりとりで
亀ヶ森砦 209-031

所在地 長井市成田字亀ヶ森

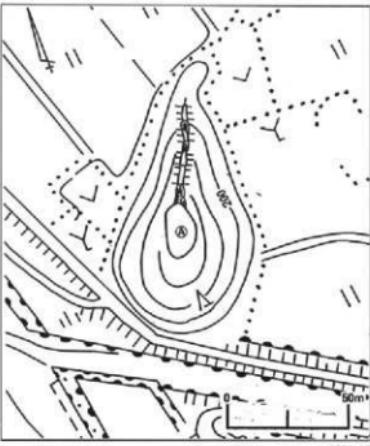
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

本遺跡は、最上川東岸にある残丘、通称「亀ヶ森」に築かれた砦跡である。山頂部に南北方向に梯円形のテラス（A）を設けている。また、北東方向の尾根に沿って、台形状の曲輪が四重に築かれていることが確認された。山頂部のテラスからは、四方を見渡すことができ、また、北東に延びる曲輪の東端からは、最上川東岸沿いの街道が眼下に広がる地形であるため、最上川東岸における北側防衛の最前線だったと考えられる。

（岩崎義信 神尾昭利）



亀ヶ森砦略測図

1994.12

こくぞうとりで
虚空藏砦 209-032

所在地 長井市大字五十川

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

最上川の右岸、通称東五十川の柏林地区から入る林道沿いに位置している。南に張出した尾根の頂は平坦に削平され、その上には南東方向に「凸」形のテラスが突出し、虚空藏尊が祭られている。南側にはテラスから通じる道形が見られる。尾根に沿って振り込むように築かれ断面が「U」字形を呈している。この道形は現在の農道に続いており森地区に同じ、館跡が密集している上伊佐沢大石地区に至る。本砦に関する文献は伝っていない。

（岩崎義信 神尾昭利）



虚空藏砦略測図

1994.12

よるおかしきとりで
古お屋敷跡 209-033

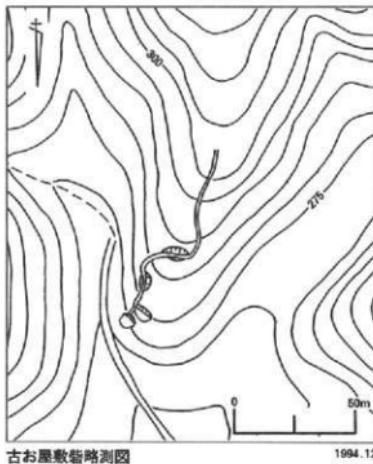
所在地 長井市森字古お屋敷

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

本遺跡は、長井市森地内の山腹に広がる砦跡である。付近の林道からやや上ったところに堀切の下端があり、その前部に台形状の小さなテラスが二重、確認された。堀切は、尾根を断ち切るように築かれているが、同時に通路としても用いられていたのか、尾根の反対側から上に延びている。通路は、尾根が水平に近くなるあたりで尾根の上に出て、途中でその痕跡を消している。本遺跡下を通過する街道を警戒したものと考えられる。



古お屋敷跡略測図

(岩崎義信 神尾昭利)

なかやしきだて
中屋敷館 209-035

所在地 長井市上伊佐沢字中屋敷

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

本遺跡は、長井市上伊佐沢地内大石地区にある砦跡である。廻館遺跡のすぐ北側に位置する遺跡は、北の尾根沿いに台形状のテラス(A)と帶曲輪状の通路が伸び、尾根道が現在も確認できる。また、南側の帶曲輪は、山頂部から東西に分かれた二つの尾根の間をつなぐ形で築かれしており、遺跡下部へと続いている。また、街道からの取付付近には、広いテラスが二段、築かれている。最高部からは、東側の旧道を見渡せることから、この街道を警戒していたと考えられる。



中屋敷館略測図

(岩崎義信 神尾昭利)

所在地 長井市上伊佐沢字廻館

築城者 不明

築城時期 暗国期

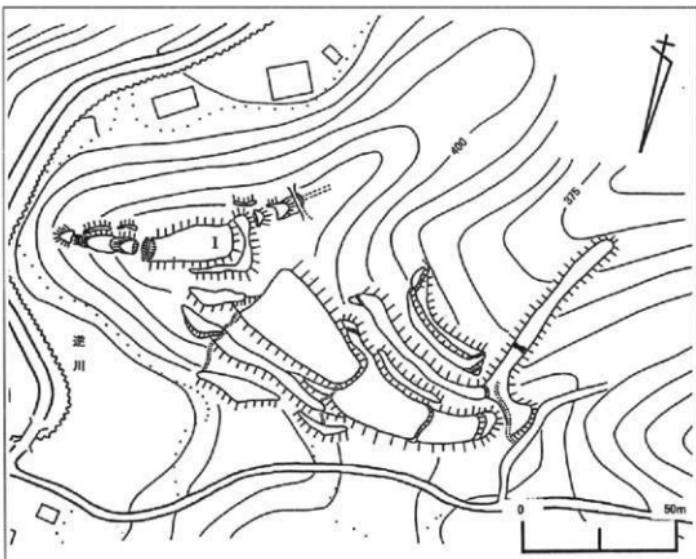
概 要

逆川右岸、通称「廻館」と呼ばれる山頂に館が築かれている。館址の東側を通り道路は明治時代になってから開通したもので、それ以前は館の北側の道路が主要道であったという。大石の洞雲寺をはじめ人家の石垣が当時の繁栄ぶりをしのばせており、街道の軍事的拠点のひとつと考えられる。

標高420mの山頂の主郭部(1)には「く」の字型に帶曲輪が巡り、東西に張出した尾根には幅7m、比高差2~3mの堀切が築かれている。北東に張出した尾根は旧街道と並走し、台形状の曲輪が3基連なっている。それぞれ1.5m~50cmの段差がついている。曲輪の長軸に沿って2~4重の帶曲輪が巡っており、長いものでは長さ50m幅5mを測り比高差も3mに達する。特に東側の沢に面したところでは、帶曲輪の規模が大きくなり数も大小さまざまになる。また旧街道に面した帯廓には、曲輪から通じる道路が見られ「連絡路」のような役割を担ったものであろう。

周辺には大峠砦、中屋敷館、大石館、岩館、馬頭曲輪と直径2kmの範囲に5つの城館址が密集しており、ここ大石地区が軍事的・政治的に主要な地域であったことがうかがわれる。

(岩崎義信 神尾昭利)



廻館略測図

1994.12

あおいしだて

大石館 209-037

所在地 長井市上伊佐沢

築城者 全田次右衛門

築城時期 戦国期

参考文献 『伊佐沢村郷土誌』『長井市史第一卷（古代中世篇）』

概要

大石は米沢から最短距離で越えて荒砥にぬける旧街道の峠の南下にある要地で、山稜が逆川に向って突出する鞍縫を三段に区切って平地化した山館である。上段1反1畝、中段1反3畝、下段9畝、計3反3畝の館屋敷で、両側は谷で急斜面になっている。享禄年間（1528～）に大石の土豪全田次右衛門が築き、近くの山館若館、廻館もその支城である。

う。谷北向いの洞雲寺は次右衛門が建立した菩提寺である。

（竹田市太郎）



大石館略測図

1993.10

いわだて

岩館 209-038

所在地 長井市上伊佐沢字岩館

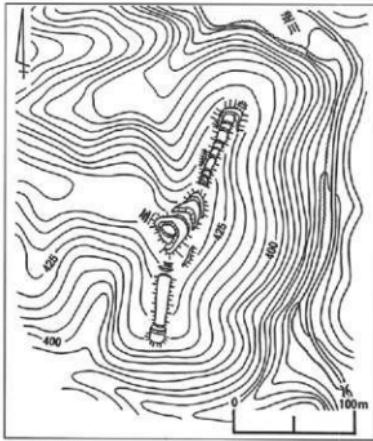
築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

逆川右岸の山頂に位置し、北東から南西に張出した尾根に長軸220m、短軸60mの範囲に造構が築かれている。中心部は標高441.8mを測る尾根の最高部に構築され、一見すると二段塙の形状を呈する。そこから北東方向に10基の庵が細長い段々畑のように連なっている。比高差は0.5～1mとさまざまである。中心部の北と南西部には幅約8m深さ1mの掘切が見られる。逆川に囲まれた急峻な斜面をもつ山城である。

（佐藤正四郎 岩崎義信 神尾昭利）



岩館略測図

1994.12

うまかくしきるわ
馬隱曲輪 209-039
所在地 長井市上伊佐沢字馬隱場

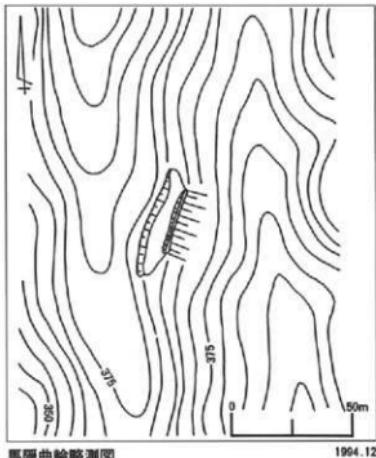
築城者 不明
築城時期 不明
概 要

逆川の右岸、上伊佐沢大石地区と上地区の中間部の山腹に位置する。現在下大石地区と上地区を通る道路は明治時代につくられたもので、以前は本遺跡の北西部の沢沿いの道が主要道であったという。

南に張出した尾根の東斜面には長さ45m、幅4~8mの平坦地が整かれ、谷側には長さ28m幅3m高さ1mの土壁が見られる。

尾根を登りつめた山頂は見明山とよばれ尾根道が残ることから山館の付属施設と考えられる。

(佐藤正四郎 岩崎義信)

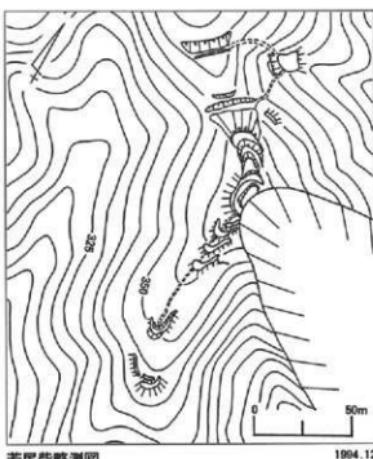


馬隱曲輪略測図

じょくじりとりで
若尻砦 209-041
所在地 長井市上伊佐沢字若尻
築城者 不明
築城時期 不明
概 要

本遺跡は、長井市上伊佐沢地内の土砂採集場付近にある砦跡である。土砂採集場の拡大に伴って、遺跡東側の広い部分が滅失している。南部は、尾根沿いにテラスが幾重にも延び、通路で結ばれている。北部には、小規模な帯曲輪のあと、大規模な堀切が二重に築かれている。堀切の西側は切り落としてあるが、東側では二つの延長部を帯曲輪(通路)とし、谷底をテラスとしている。全体像としては、かなり大規模な山城であったと考えられる。

(岩崎義信 神尾昭利)



若尻砦略測図

くわしまなで 桑島館（館の内） 209-043

所在地 長井市上伊佐沢

築城者 桑島将監

築城時期 戦国期

参考文献 『伊佐沢の郷土史』

概 要

河岸段丘上にあり長軸100m 短軸80mのほぼ方形を呈する館跡である。北東面は比高差2mの段丘面からなり西隅には幅5~10m深さ1.5mの堀が見られる。また東隅にも浅い堀跡が残っているが、以前は南に統いていたことから堀と段丘面に囲まれた方形の館と考えられる。本館は伊達の家臣桑島将監の館と伝えられ近くには将監が妻子の供養ため建立した玉林寺がある。また西方には妻子の供



桑島館略測図

1994.12

養で植えたと伝えられる久保ザクラ（国指定）がある。

（佐藤正四郎 岩崎義信）

あらまちだて
桐町館 209-044

所在地 長井市中伊佐沢

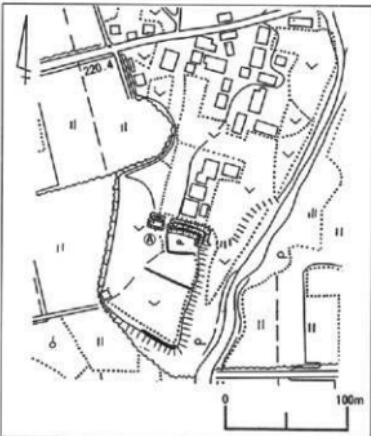
築城者 山田主殿

築城時期 戦国期

参考文献 『伊佐沢の郷土史』

概 要

河岸段丘の地形を活用し、三方を中小河川に囲まれた方形を呈する館跡である。南半分は耕作により原形を失っているが曲輪は三段構築を呈する。北側には幅5m長さ30mの堀と、長さ15m幅4mの土塁が築かれ両者の比高差は4mに達する。入口はさんで西側にも同様の堀と土塁があるが、耕作のため一部破壊している。また南側にも規模は小さいが段丘端に沿って土塁が残存する。



桐町館略測図

1994.12

西側の土塁上には稻荷神社（A）が祭られている。

（佐藤正四郎 岩崎義信）

あたごやままで
愛宕山館 209-045

所在地 長井市中伊佐沢

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『長井市埋蔵文化財調査報告書第8集（1993年）』

概 要

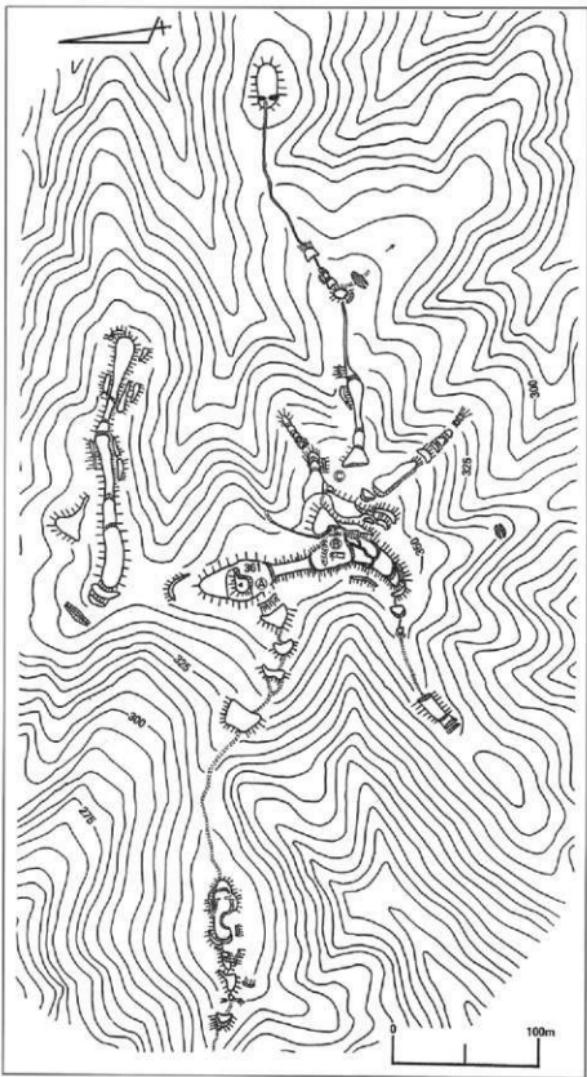
長井市の南東部に位置する伊佐沢地区は、出羽丘陵の南端部にあたり、東側は南陽市と接している。南に開けた平坦地は南北に広がり、大石沼に源を発する逆川は平地の中央部を南に流れ下伊佐沢地区で最上川と合流する。

愛宕山館は伊佐沢地区の南西部、愛宕山の山頂付近に位置し、遺跡西側を最上川が「く」の字形に北流する。丘陵の南端部にあたるため長井市内はもとより、北は白鷹町、西は飯豊町、南は米沢市まで山頂から展望がきき、山館の立地条件としては絶好な条件を備えた場所ということができよう。また、周辺の山々にも大小さまざまな規模の山館に係わる遺構が見られ、当地域が領土攻防のうえでいかに重要な場所であったかをうかがい知ることができる。しかし館跡に関する文献資料などはなく詳細は不明である。

館跡に係わる遺構は、標高 361m の三角点が打たれている高台（A）を中心に南北 310m 東西 700m の範囲に散在し、尾根に沿って遺構が築かれているところに特徴がある。そんななかで三角点から南に連なる尾根は平らに削平され、曲輪が段々畠状に築かれている。現在曲輪の中央部には愛宕神社 B が祭られて地域の人々の信仰を集めている。また、神社の東側（C）は曲輪が入組ん形成されており虎口と考えられる。ほかにも南西部から東側にかけて尾根沿いに曲輪や帯曲輪、それに尾根を立てるようになされた堀切が築かれ山麓部の「別府大館」地名に出る。三角点の北側に位置する東西に延びる尾根にも遺構が見られる。長さ 10~50m 幅 5~13m の曲輪が東西方向に 200m も連なって築かれている。それらの曲輪に沿うように長さ 10~20m 幅 2~5m の帯曲輪が築かれている。三角点の西 230m の地点にも遺構が見られる。比較的平坦な尾根上には壇状の曲輪とそれを囲むような帯曲輪から構成された一群で、他と異った趣を呈する。本地点から最上川までの距離は直線にして 60m である。

平成3年、愛宕山館の三角点から北西に 600m の地点が開発区域内に組込まれたため試掘調査を行った。山道に沿って空堀と土塁が南北方向に長さ約 200m 幅 8m の範囲に見られたため、1m×10m のトレンチを 3ヶ所設定して試掘調査したところ、土壁の断面から粘土に砂を混ぜた土質が交互に叩き締められた土質すなわち版築を確認した。尾根に沿って渡れば愛宕山館までは充分に行き来できる距離であるが本館跡に関わる遺構であるかは今後の課題である。いずれにしても愛宕山館は現在確認されている長井市内の山城としては最大規模のものである。

（岩崎義信 神尾昭利）



愛宕山館略測図

1964.12

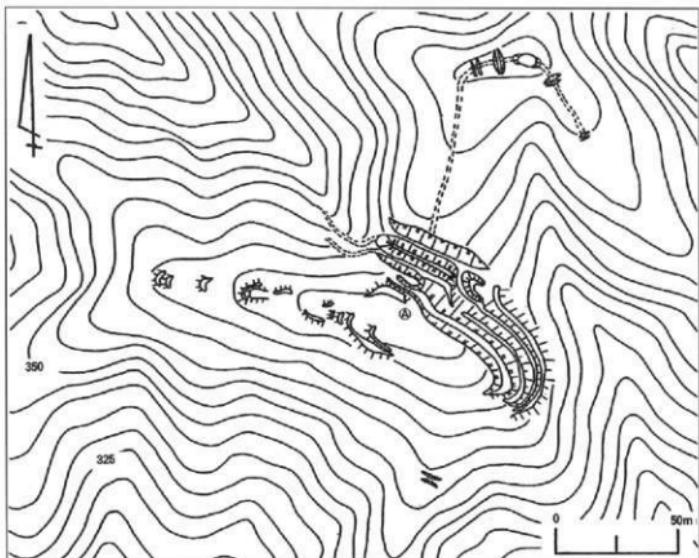
所在地 長井市上伊佐沢字御林

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

本遺跡は、長井市芦沢地内から同上伊佐沢地内へ通じる旧道沿いの通称「御林」と呼ばれる山にある砦跡である。山頂部（A）は、ややなだらかになっているものの、テラスというほどの平坦地ではない。北部の尾根の先端には大きな掘切が二重に築かれ、その先に通路が伸び、終端を幾重もの堀切で断ち切っている。西側の尾根は、やや平坦な尾根沿いに帯曲輪がいくつか築かれ、見通しの良い場所に曲輪を築いて終端としている。遺跡の中心部分にあたるのは、山頂部を中心に東西約70m、幅約20mほどの土壘状の地形であろう。北東側のゆるいU字型の谷間に四重の帯曲輪を配しているが、このうち、上から二つ目と三つ目の帯曲輪の北西端は、遺跡中心部北側の二重の堀切底部の東端につながっている。また、中心部分から南に向かってやや離れたところにも、堀切のようなものが見られる。全体を見ると、東西約150mにも及ぶ大規模な遺跡で、特に東側に対して厚い守りの塔であり、遺跡南側を通る街道（主に現在の南陽市方面）を警戒していたものと考えられる。（岩崎義信 神尾昭利）



御林館略測図

1994.12

所在地 長井市大字時庭字波化

築城者 安久津修理助の祖

築城時期 室町後期

参考文献 『長井市史第一巻（古代中世篇）』『伊達世臣家譜』

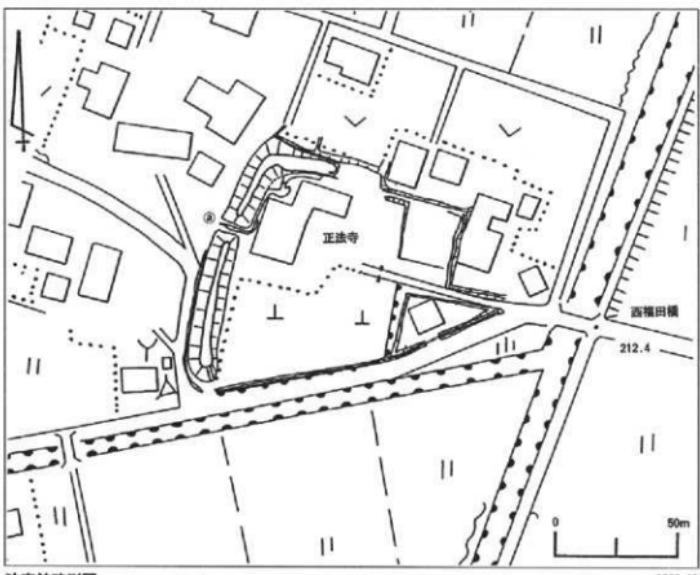
概要

現在も西側と北側の一帯に土塁が残っており館屋敷は南東角が昭和 50 年の道路改修で取崩された外は長方形の形で明確に確認できる。西側土塁（a）は基底 7m、高さ 3.65m で市内の館の中では最も高い。塹は埋めたてられて道路、畑、田に変っているが、明治 8 年の字切図では西と南の館堀がはっきり記録されていた。館の内は 7 反 2 丈で、周辺より 1.6m 高い。

館の地域内に建つ曹洞宗正法寺は文和 3 年（1354）に道叟道慶禪師の開山である。館主安久津氏は伊達家米沢御譜代と称しているから伊達宗達が置賜を侵略し全地域を掌握した 1384 年を少々下った時代に時庭館が築かれたのであろう。天正 12 年（1584）の設錢帳には安久津修理助が時庭窓の在宅外 4 町歩の土地持になっており、天文の乱が終わった天文 22 年には安久津孫二郎が晴宗より旧領安堵状をうけている。歌丸本郷の歌丸若狭守は安久津氏の庶流で、始めは安久津姓を名乗ったが、父又七の時地名を姓とし歌丸を名乗った。

天正 19 年の伊達政宗の岩出山移封に同行し、時庭館は正法寺の境内、墓地として現在に至っている。

（竹田市太郎）



時庭館略測図

ちゅうすだて
茶臼館 209-048

所在地 長井市河井字東前

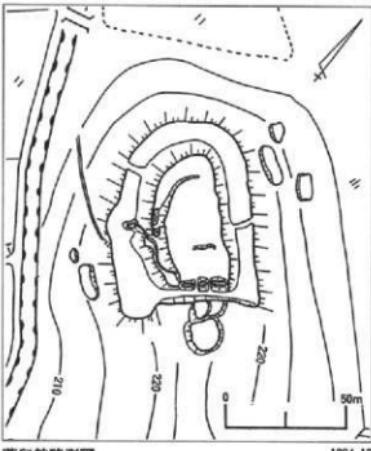
築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『長井市史第一巻』

概 要

本館址は最上川と白川の合流地点付近の丘陵先端部にあり、山腹には長軸約80m 短軸約60m 幅5~15m の帯席が巡る山城である。館の南端部には高低差約4m の堀切が丘陵を垂直に切るように築かれている。また西側斜面が緩やかで、通路が蛇行し平坦地まで続いているのに対し、東側は急峻な斜面が最上川緑まで続き、川縁の緩斜面には塀壇状の凹地が築かれていることから、この館は水運を意識して構築された館と考えられる。



(佐藤正四郎 岩崎義信)

げんとくばらだて
源徳原館 209-049

所在地 長井市河井字若宮前

築城者 菅井内記直国

築城時期 戦国期

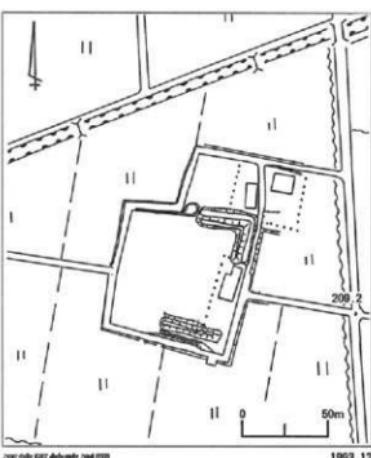
参考文献 『長井市史第一巻 (古代中世篇)』

『伊達世臣家譜』

概 要

館屋敷全体は山林原野としてそのまま残っており、北東角と南に土壘・館堀が残っている。土壘は高さ4m、基底幅5mで、館堀は上底で4.1m、深さ1.7mで、その外側に土壘がもう一つあって二重になっている。

天文の初(1532)今泉館主菅井内記直国が出城として駄貝戦に備えて築き、一族の者をおいた。更に北東の河井山の先端に茶臼館を



築き、白川を第一次の防線として軒に備えた。天正19年内移封で廃城。

(竹田市太郎)

しもいもさわだて 〈たてのうち〉
下伊佐沢館（館之内） 209-050

所在地 長井市大字下伊佐沢字沢（旧小字名は館之内）

築城者 目々沢丹後守常清

築城時期 戦国期

参考文献 『長井市史第一巻（古代中世篇）』『伊達世臣家譜』

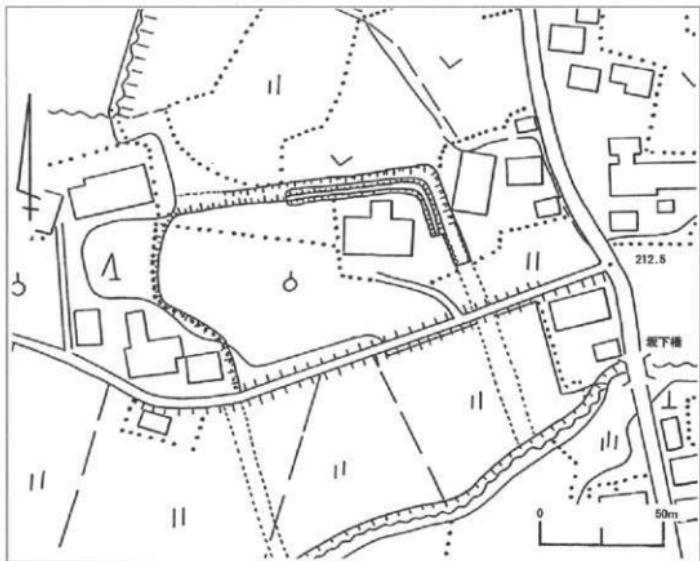
概 要

伊佐沢盆地の溝口にあり、荒砥への旧街道に沿う要衝である。

ほぼ縦長の長方形の館で、南辺は高さ 2.5m の河岸段丘で、中央部を東西に 3m の河岸段丘が走り、上段と下段に分れた館の内 1町 2 反歩の館屋敷である。北と東の土塁、館堀が残っており、土塁の幅は基底で 7m、高さ 3.2m、館堀は幅 6m、深さ 3m で、かなり大がかりな仕様である。附近には「馬場」の小字名もあり、愛宕山館もこの館とセットになる山館であろう。

館主目々沢氏は、もと相馬氏の家臣であったが、目々沢丹後守常清のとき伊達稙宗の家臣となり、1520 年頃下伊佐沢館を築いた。天正 12 年（1584）の段鉄帳では段鉄 3 貫 310 文で約 46 町歩の所領をもち、その子目々沢隼人清高の時、天文の乱で晴宗党として戦功をたてた功績で「ま所在家・大石の内あら屋敷・手塚みやつま屋敷」等を加増され、伊佐沢村の公領をのぞく 3 分の 2 を領有する有力地頭になった。

予定常は伊達政宗に仕し、天正 19 年の岩出山移封に同行して桃生郡に移り、下伊佐沢館は廃城になつた。
(竹田市太郎)



所在地 長井市大字下伊佐沢字中西

築城者 小関修理義勝

築城時期 戦国期

参考文献 『伊佐沢村郷土誌』『長井市史第一巻（古代中世篇）』

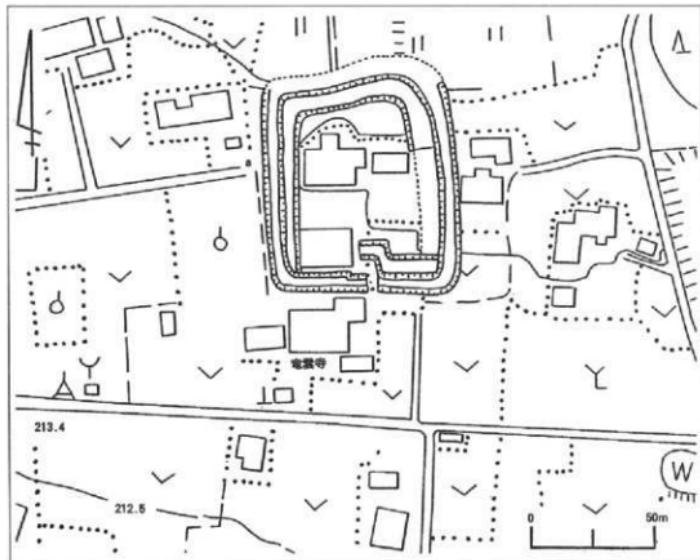
概 要

堀の内5反7畝の方形館址で、環濠武家屋敷の原型をかなり忠実に残している。西側の館堀（a）の幅は9~10m、東側の館堀は8mでほぼ館堀の標準に近い姿を残している。北側の堀は土地改良で埋められているが大正末までは完全に四隅が館堀と土塁で囲まれていた。

永禄6年（1563）に美濃国の地頭小関修理義勝が相続く戦乱をさけ、伊達氏を頼って下伊佐沢に移り住み、伊達の家臣としてこの館を築いた。

天正19年の伊達氏の岩出山移封には同行せずこの館に残った。蒲生・上杉と領主が変わり、直江兼続が最上攻めを慶長5年（1600）に行ったとき、地足絆200人家臣10名を率いて馬上で出陣した。在郷郷士としての既得権益を新領主上杉氏に認めてもらうためである。

江戸時代には下伊佐沢の有力な郷士として「免許百姓」を名乗り、肝煎をつとめ、寛文8年（1668）には東隣りに菩提寺電雲寺を小関伝左衛門の時に建立している。代々先祖の武士であったことを誇りとしていたためか、館屋敷は殆どわざず守り通し、今日の姿で残っている。（竹田市太郎）



所在地 長井市芦沢字安城沢

築城者 不明

築城時期 不明

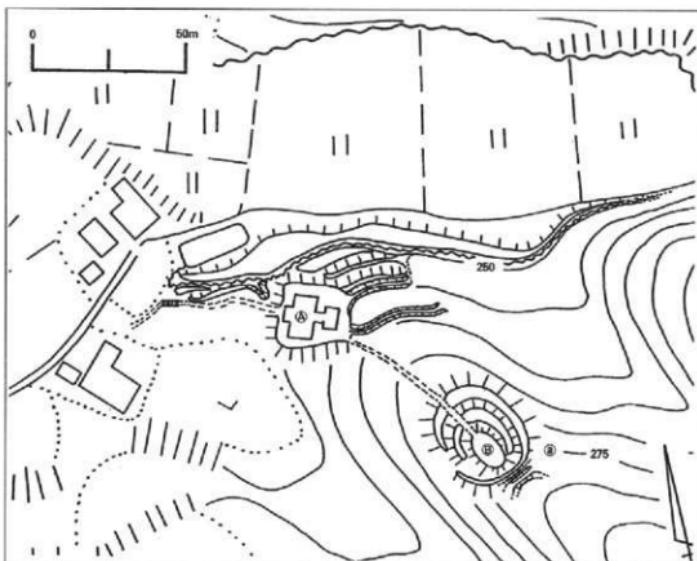
概 要

芦沢地区の東、南陽市に隣接した丘陵の西端部に、築かれた館である。尾根上には下から稻荷神社、葉山神社の社が建っているが、現在の地形からすると廟や帶廻の跡地を再利用して建てられたものである。

中腹にある葉山神社（B）は長軸 13m 短軸 8m の廓の中央部にあり、長さ約 20m 幅 4m の浅い空廻が巡り、さらにそれを囲むように長さ約 35m 幅約 5m の空廻が巡っており、下から見ると二段構築の壇状を呈する。造構の東端は二重の堀切（a）が尾根を垂直に切っている。

ふもとの稻荷神社（A）は近年新築されたようで造構の一部にまで敷地がおよんでいる。この神社の北側に造構が集中して見られる。すなわち神社本殿裏側には長さ 20～30m 幅 4～6m 帯曲輪が二重に巡り、一部土塁を形成する。拝殿から参道にかけ長さ 13～25m 幅 2～3m の帯曲輪が 3 条あり、その中間には長さ 7m 幅 5m の堅堀が築かれている。さらに遺跡の北半分を囲むように長さ 150m 幅 2～10m の帯曲輪が小河川に沿って巡っている。

本館址の周辺には礼堂という地名や中世の塚が残っていること、稻荷神社や葉山神社が遺跡に奉られていたことから、城跡・修驗の両遺跡の性格が考えられる。（佐藤正四郎 岩崎義信 神尾昭利）



裏山館略測図

1994.12

うたまるだて 《ほんごうだて》
歌丸館 (本郷館) 209-053

所在地 長井市歌丸字本郷・窟

築城者 安久津氏

築城時期 戦国期

史料 歌丸村全地字限図 (明治八年製)

参考文献 『長井市史』

概要

本遺跡は、長井市歌丸の本郷・窟地区にまたがる館跡である。周辺一帯は、以前から「環濠集落」と呼ばれ、家々の周間に濠がめぐっている特別な集落として、関心を集めている。明治八年の字切図によると、集落の中心にあたる豪農高石安右エ門家(A)には、屋敷の周囲のほか、前田部分にまでびた三重の濠が存在し、この環濠集落の中核部と見ることができる。この屋敷は、元は室町時代の土臺である安久津氏の手によるもので、その広さは 50a ほどもある。戦国時代の習いで、その居館の周間に濠を堀き、外敵からの備えとしたものが、この環濠であると考えられている。現在は、生活排水や農業用水用の側溝として機能している。また、地元の古老によれば、堀跡 a・b においても以前は水濠であったが、現在は土地改良や水量の減少などによって、空濠になっている。濠の周間に土壠の形跡はないが、取り払われたものか、もともと築かれなかったものかは定かでない。いずれにしても、長井市内において、これだけ旧来の状態を現在に伝えている遺跡は少なく、その意味でもたいへん貴重なものということができる。

(岩崎義信 神尾昭利)



歌丸館略測図

1994.12

所在地 長井市大字今泉字館

築城者 菅井藤右衛門常国

築城時期 戦国期

参考文献 『伊達世臣家譜』『長井市史第一巻（古代中世篇）』

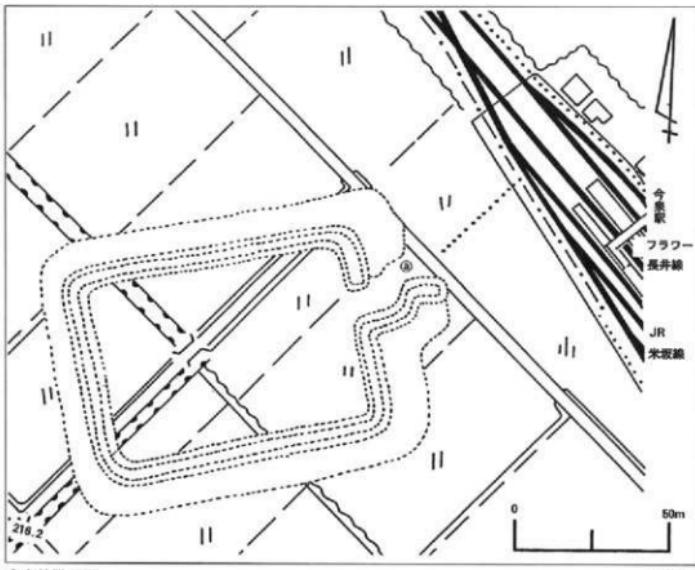
概要

今泉館は戦前まではかなり原型を保っていた。明治8年の字切図では土塁も館堀も鮮明に復元できる。明治、大正に館堀は少しづつ埋め立てられたが、温田由田の畔からまだ確認できた。完全に破壊されたのは昭和47年の土地改良事業によってである。土塁の基底幅は標準的な所で11m、館堀幅は13~20mに及んでいる。館の内は1町4反で虎口aは食い違い土居になっている。

菅居氏は重國の時伊達宗遠に仕し、景国は尚宗の軍奉行となり、子の藤右衛門常国は精宗の時戦功により置鶴郡長井庄を所領として与えられ、今泉に館屋敷を構えた。それは大永年間（1525~）頃である。常国は伊達郡松原の城で常陸衆を破り、伊達郡中の目に15町歩を加増されている。子内記直国は天文の乱では晴宗党として善戦して貼貝氏を北に後退させ、晴宗は、國の采地の諸役を免除している。菅井氏は貼貝戦に備え、一族のものに源徳原館を今泉館の北方に築かせ、更にその北東にある河井山の先端に茶臼館を築かせている。今泉は長井盆地と米沢盆地の接する地軸にあり戦略上の要地であった。

天正19年の伊達氏の岩出山移封では同行し今泉館廃城になっている。

（竹田市太郎）



今泉館推測図

1993.11

おどろくくじやま (とどろきだて)
驚城山 (轟館)

401-001

所在地 小国町大字驚

築城者 遠藤宗寿

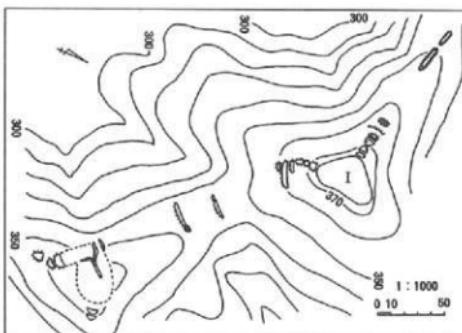
築城時期 不明

史料 「米沢地名選」

参考文献 『小国町史』

概要

小国の北部大字驚地区にある根小屋式山城で、曲輪・空堀・土塁・テラスなどの遺構が比較的良好に残っている。主郭と思われる曲輪(1)は、南北40m、東西30mの大きさで、東南側



驚城山略測図

1994.12

にはテラス、西側にはテラスと空堀がある。さらに、主郭から峰を東南方向に下ると30m四方ほどの曲輪があり、その手前には土塁も見られる。また、主郭の西側に峰と平行な空堀が2つ確認されており、大変特徴的な遺構であるといえる。

文化6年八幡忠明著『米沢地名選』によれば、轟館は伊達政宗の異母弟遠藤宗寿の居城となっているが、虚実は不明である。

(松山茂)

ながさわじょうがみね
長沢城ヶ峯 401-002

所在地 小国町大字長沢

築城者 不明

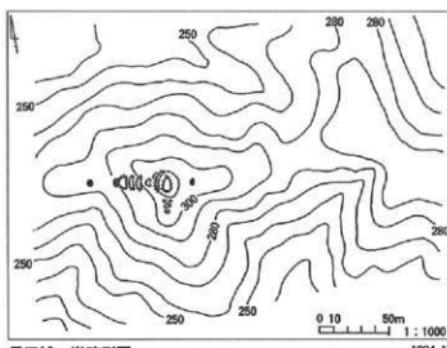
築城時期 不明

概要

本遺跡は、小国町大字長沢、荒川右岸に連なる山麓にある。標高約310mにある主郭を中心に、西・南に張り出した山脚に空堀、テラスが配置されている。山麓の西側に「城ノ下」という字名とともに、城下(じょうした)という屋号の家が現存していたことや、

北側には「寺があった」と地元で言い伝えられていることなどから、平坦地に居館があり、戦時においてたてこもる砦であったものと思われる。

(松山茂)



長沢城ヶ峯略測図

1994.12

ふるたやまじろ
古田山城 401-004

所在地 小国町大字古田

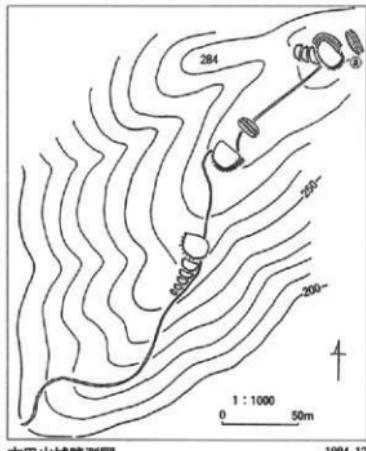
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

本遺跡は、小国町大字古田、金目川左岸に張り出した尾根にある。西側に面した急峻な斜面上を上ると、約270m付近から平坦地となる。そこより尾根づたいに空堀、曲輪、段状テラスなどがあり、標高330m付近には主郭と思われる平坦地がある。この平坦地の北・東・西側には土塁が築かれており、北側につながる尾根には、大きな空堀(a)が作られている。主郭からは古田・若山集落が一望できることや、付近に「城下」、「ミツケマタ」と

いう字名があることなどから、戦時において立てこもる砦として利用されたものであろう。(松山 茂)



古田山城略測図

1994.12

わかやまたて
若山館 401-005

所在地 小国町大字若山

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献『小国の信仰』

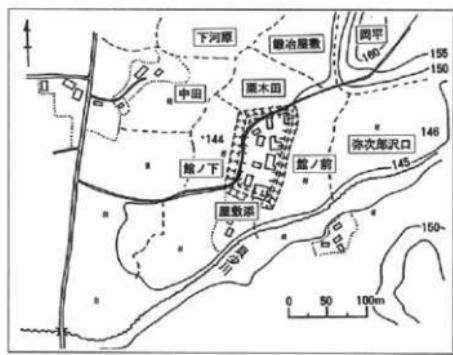
概 要

本遺跡は、小国町大字若山地内にある。貝少川が丘陵性の山地を侵食し、荒川の堆積平地に出ようとする地点で、低位な河岸段丘上に位置している。この地域には、戦国時代に塙原兵庫などの開拓領

主がいたことが、沖庭神社の棟札によって明らかになっている。

明治時代の字切図で西側には堀があった事が確認されるほか、主郭であると思われる平坦地を囲む曲輪が現在も残されている。平坦地に八幡神社が勧進されていることから居館であったものであろう。

(松山 茂)



若山館略測図

1994.12

おでにじょう
小国城（御役屋） 401-008

所在地 小国町大字小国小坂町地内

築城者 上郡山民部大輔盛為

築城時期 天文年間

参考文献 『米沢里人談』『小国町史』

概 要

『代官集前編』に「小國は越後口、米沢より十五里十三町七間、伊達領の時、上郡山民部丞居之、浦生領之時、佐久間久左エ門安次居之、慶長三年より御領分、御役屋付給人、御扶持方等三十人、足輕二十八人、同年某月小国城代松本助義、庄内大浦城代に転じ三瀬左近長能代わって城代となる」とあるが、伊達時代には栗生田（二代）上郡山（三代）の居城であった。上杉領になってから城代の制が設けられ、慶長三年奈良沢主殿が初代城代に任じられたが、間もなく信夫（福島県）に転勤したので松本伊賀助義に代わった。松本は上杉御国替の節、越後萩野城主から当城に来たのであるが、更に同年中に庄内大浦城に転勤した。このあと城代は久しく続いたが元禄五年二月、城代は役屋将と改められた。奈良沢が小国に赴任する際、木島理修、長岡喜兵衛、香板新左エ門、馬場次右エ門、東次右エ門、西沢無手左エ門の諸氏が随行して小国城を守ることになった。奈良沢は僅か三ヶ月足らずで転勤することになったので、後任に松本伊賀が任命され、小国城の整備もはかられたものと考えられる。

松本伊賀の庄内転出後一時城代が欠員だったので、かつて越後上関城主であった三瀬左近、女川城主であった垂水左エ門及奥山大膳、平田主膳、松村源四郎の五氏を加えた所謂十二騎馬上に一時城番を仰付けられたが慶長六年八月三瀬が城代に任命されたので随って他の者は城番を除かれた。享保十年十一月御役屋将佐藤孫兵衛の書状の写しによれば御役屋の大きさは、東の方 42 間（南北の長さ約 76.44m）、西方 41.5 間（南北に約 75.53m）、南方 52.5 間（東西に約 95.55m）、北方 48 間（東西に約 87.36m）、土塁は東方、高さ 12 尺（約 3.6m）、敷 6 間半（約 11.83 m）、三方の堀は東方長さ 26 間（約 47.32）、巾 12 間（約 21.84 m）、深さ 10 尺（約 3m）、南方長



小国城（享保7年）絵図

1994.12

さ 85 間（約 154.7m）、巾 12 間（約 21.84m）、深さ 6 尺（約 1.8m）、西方、長さ 44 間（約 80m）、巾 12 間（約 21m）、深さ 3 尺（0.9m）、北方は断崖に臨んでるので柵木を巡らしている。建物の総坪は 190 坪、付属建物として長屋 1 棟、長屋折廻り、土蔵 2 棟とある。

（松山 茂）

わくにやまじろ
小国山城（城山） 401-009

所在地 小国町大字小国小坂町地内

築城者 藤原小国太郎俊衡

築城時期 不明

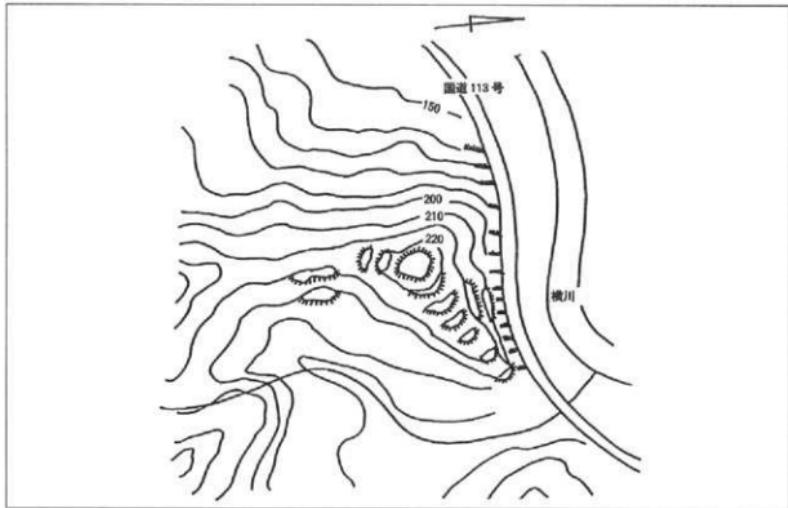
参考文献 『小国町史』『米沢里人談』『米沢地名選』

概要

小国山城は通称城山と呼ばれ、横根山（527m）を背にし、横川畔にある半独立性の山（240m）である。眼下に盆地を見下ろし、数段の曲輪と一條の空堀を備えた要害で構造は、最高所の 1 殿、東南に土塁を巡らした帯状の曲輪群から構成されている。西の掘切りは堅掘状に巡っている。根小屋式山城に属すると思われる。長井時代（1189 年～1380 年）には、長井備中守秀房が北村館に入って、この地を治め天授 6 年（1380 年）伊達氏の所領になると、栗生田備後を入れて、のち上郡山氏が安芸、盛為、為家、景為と 4 代約 140 年間、小国を支配した。

これらの城主は平素は山麓の館にあって、有事の際にこの山城に立て籠もる「詰めの城」である。米沢里人談によると初代城主は平泉藤原基衡の弟清綱の子小国太郎俊衡の居城と伝えられている。

（松山 茂）



小国山城略測図

1994.12

ひょうごだて
兵庫館 401-010

所在地 小国町大字兵庫館付近

築城者 不明

築城時期 不明

史料 明治初期の地図

概要

小国町大字兵庫館付近は、現在住宅地になっているが、中世には塙原兵庫の居館跡と伝えられてきた。明治初期の地図を元に復元すると、東と南は大沢川と横川に



兵庫館略図

1994.12

囲まれた、東西・南北それぞれ

200m をこえる、環濠集落的な方

形館址であることがわかる。大沢川は、昭和42年の羽越水害の時も氾濫しており、北側と内部について明確に復元することが出来なかったが、南側については、土塁の一部と堀跡を確認することができた。

(松山茂)

すぎさわしらやま
杉沢城山 401-011

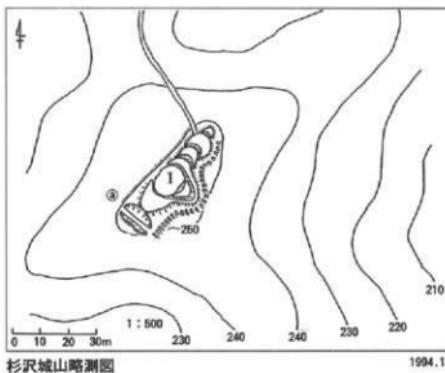
所在地 小国町大字杉沢

築城者 不明

築城時期 不明

概要

小国町・杉沢地区にある山城。造構は、山頂の曲輪を囲むように段状のテラスがあり、南西端には空堀(a)を有している。遺跡そのものは全長50mほどでさほど大きくはないが、わりと良好な状態である。



杉沢城山略図

1994.12

主郭部(1)の大きさは10m×

8mで、楕円形をしている。周りのテラスは、曲輪の北東に4つあるが、そのうちの1つが南西まで巻いていて、南東にはそのテラスと曲輪の間に1つテラスがある。空堀の長さは10m、高さは曲輪側で4mもある。

(松山茂)

こんびらとうじで
金毘羅砦 401-012

所在地 小国町大字町原

築城者 不明

築城時期 不明

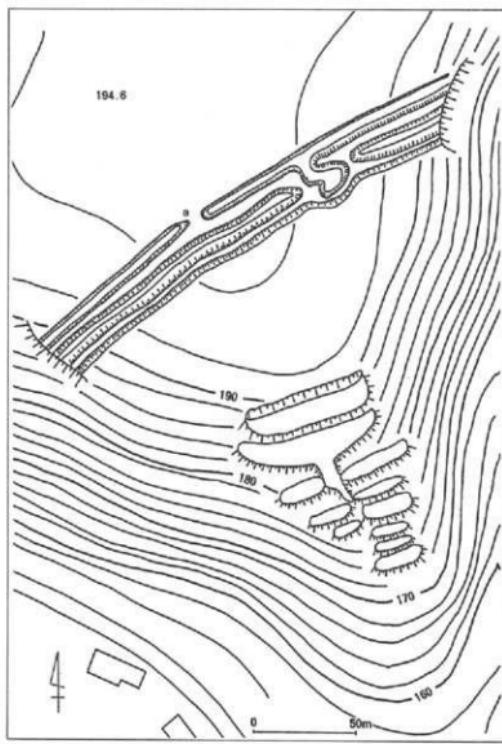
概 要

本遺跡は、小国町大字町原の東方、標高約200mの山脚にあり、南西側は合向沢に、そして北東側は約20mの断崖によってそれぞれ隔てられている。

合向沢西側に突き出た山脚から頂上に向かって、11箇所に段状のテラスがある。このテラスを越え、主郭と思われる平坦地(20×30m)の手前には、東西約120mにわたって高さ1mの土塁、そして深さ(最深)2m、幅1mの堀が二重に作られている。さらに、この遺跡には、本町で唯一確認できた「虎口」と思われる遺構が残されており(a)、比較的良好な残存状況となっている。

平坦地には、これ以外の遺構は確認できないが、南西側からは眼下に横川、対岸の杉沢から大滝集落が一望できる所にあり、騒乱時に立てこもる砦として築かれたものであろう。

平坦地から北東に続く峰に金毘羅宮が祀られている。
この神社の創建については不祥であるが、文政7年(1824)に、地元の八木九郎右衛門らが、金毘羅権現の堂宇を建立したことだけが伝えられている。地元では、この金毘羅神社にちなんで、この遺跡を金毘羅砦と呼ぶようになったといわれている。(松山茂)



金毘羅砦跡測図

しらこざわしらやま
白子沢城山

401-017

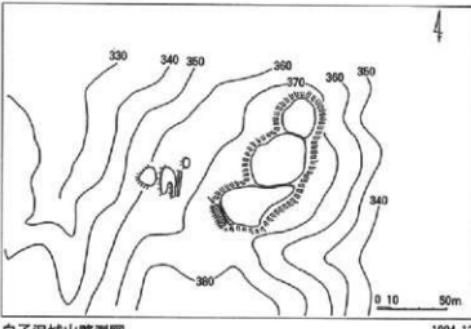
所在地 小国町大字白子沢字

築城者 遠藤家

築城時期 不明

概要

小国町の東部・白子沢地区の集落から高松・森残方面に向かう途中にある山城で、曲輪・土塁・空堀が比較的良好に残っている。曲輪は3つに分けることができて、南北に100m、東西



白子沢城山略測図

4

50m ほどの大きさである。長さ

15m の土塁・空堀は曲輪の西

南側にあり、また曲輪から西側へ 20m ほど下ると、テラスと思われる造構を 4 つ確認できる。

近くに「館ノ下」・「古屋敷」・「的場」という小字名があるので、居館は下方にあった可能性もある。

(松山 茂)

じょうのひも
城の平 401-020

所在地 小国町大字大石沢

築城者 不明

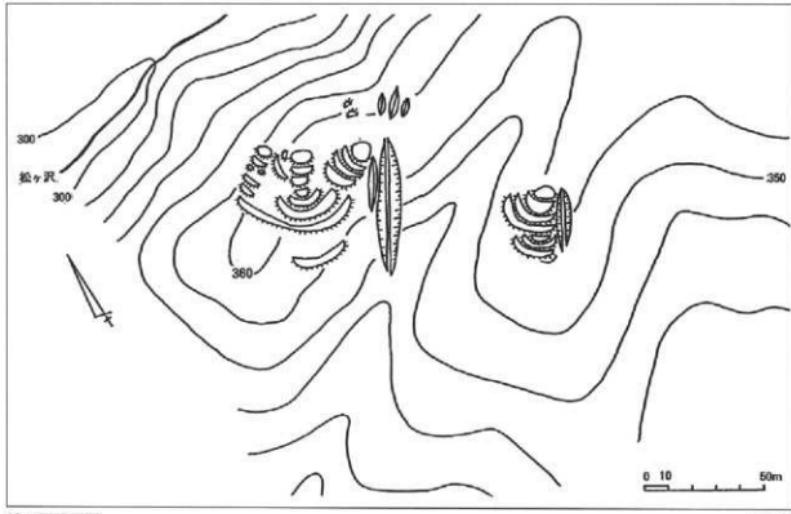
築城時期 不明

概 要

本遺跡は、小国町大字大石沢地内、大石沢川の左岸に位置する白毛山（582m）の山脚が南西に張り出した標高約360m付近に築かれた山城である。北側は松ヶ沢まで落ち込む急崖で、南は緩やかな斜面となっている。

遺跡は東西約150m、南北80mに広がる範囲の中に二箇所に設けられた主郭と思われる曲輪を中心には、空堀、テラスなどが配置され、比較的良好な残存状況になっている。この遺跡について、地元には「この城主は藤田刑部という者であったが、高橋次郎太に負けて南小国に逃げた」という言い伝えが残されている。この中に出てくる藤田氏は、上杉家十一将の一人である藤田能登守信吉の一族と言われている。

この遺跡の山麓に形成されている大石沢は、文禄4年の邑鑑によると戸数35戸（人口141人）で、小国町の東部方面では一番大きな集落として栄えていたことが記録されている。これは、同集落が、越後街道の支道・中津川街道の通路となっていたことなどがその理由と考えられる。したがって、戦略的にも要害の地として、その防備に努めたものであろう。
（松山茂）



えんどうやかな
遠藤館 401-021

所在地 小国町大字小玉川

築城者 不明

築城時期 不明

史料 黒川文書

参考文献 『小国町史』

概要

天文の乱において、穂宗側に組した小国城主上郡山為家が、晴宗側の遠藤平兵衛を打ったという記録が黒川文書に残されている。本道跡は、この遠藤平兵衛の居館といわれ、これまでも遠藤を名乗る一族が所有してきている。小国町大字小玉川の内川河段丘上にあって、両側は谷によって隔てられる。東側に土塁と堀があったことを地元の古老が確認しているが、現在は形跡を止めていない。

(松山 茂)

おおくぼとうで
大窪砦 401-022

所在地 小国町大字小玉川雨乞山地内

築城者 遠藤平兵衛尉

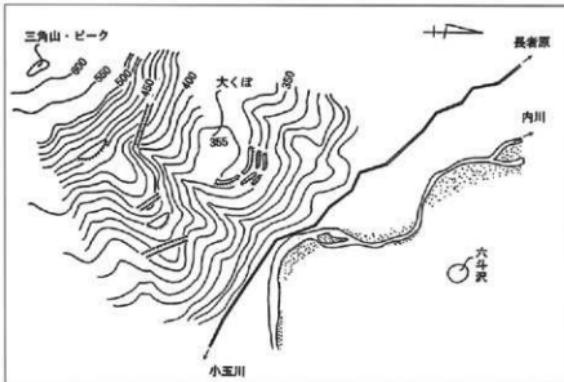
築城時期 天文年間

参考文献 『小国町史』『黒川文書』

概要

三角山のほぼ中腹に大窪と呼ばれる広いくぼ地があり、その前方には段丘と思われる平坦な丘が前山のようである。大窪の背面山地には、山裾より約20m ぐらゐの間隔に3本の空塹をめぐらし、その上方に高さ約3m、長さ約30mの石垣が築かれている。伊達家内部騒動(天文の乱)の際に穂宗党である上郡山為家に対して、晴宗党である小玉川城主遠藤平兵衛尉を討つることを命じた。上郡山は小玉川の遠藤屋敷はじめ大窪砦に放火し攻め込み、遠藤をはじめ一類郎党ひとり残らず討ち取ったことを越後の黒川に報告している。その際報告にあった砦と推測される。

(松山 茂)



にしむかいでて
西向館 402-002

所在地 白鷹町大字深山字西向

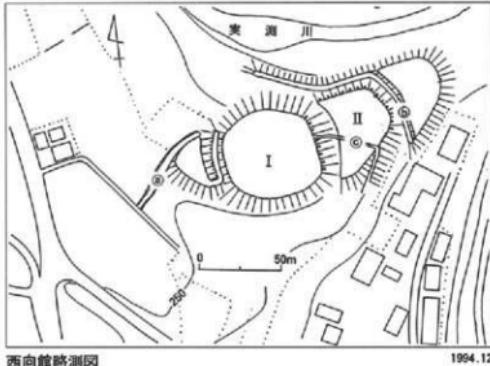
築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『白鷹町史』

概要

標高約250m、最上川支流の実瀬川右岸に位置し、その河岸段丘を利用して構築された館址である。台地の東西に堀(a、b)が形成され、特に東側の堀(b)は落差も大きく、北側へとまわっている。



1994.12

墓碑等が建つIIの曲輪を通って、Iの曲輪に入るcの道路は虎口と思われる。比較的単純な形態のこの館は、当時の主要道路の近くに位置し、見張り台的な意味を持つものであったと推測される。

(大木健一、斎藤清玄)

たかおかでて (たてやまだて)
高岡館 (館山館) 402-003

所在地 白鷹町大字高岡字館山一

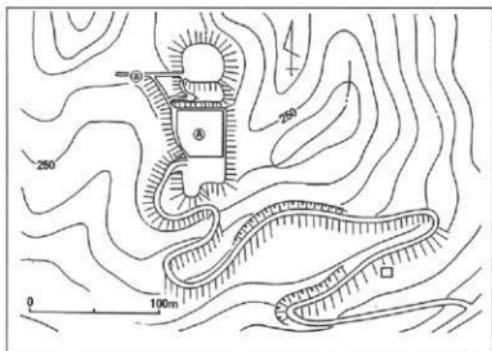
築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『白鷹町史』

概要

最上川と実瀬川の合流点の北西で、標高約270m付近の山頂に位置する。特別な遺構はないが、町の上水道配水施設(A)の建設時に破壊されてしまったと考えられる。おそらく、現在施設の建っている所もひとつ



1994.12

曲輪に当たり、しかも数段に分かれ、その間には空堀なども存在した館であったろうと推測される。

尾根伝いに山頂に通じる道路(a)があり、町内が一望できることからして、見張り台的な役割をもっていたと思われる。

(大木健一、斎藤清玄)

所在地 白鷹町大字鮎貝字桜館ほか

築城者 鮎貝氏

築城時期 戦国期（改修は天正 16 年）

史料 「伊達家文書」「明治初年の地籍図」

参考文献 「白鷹町史」「日本城郭大系 3」「出羽諸城の研究」

概要

最上川の左岸、標高約 200m の舌状に突き出た比高約 20m の河岸段丘を巧みに利用して構築された複郭式の平山城で、応永 3 年（1396）鮎貝成宗の築城と伝えられる。

鮎貝氏は成宗の後、宗盛一定宗一盛宗一宗重一宗信と相続するが、戦国大名として成長してきた伊達氏の支配に属してからも、鮎貝郷を中心に一円所領を有する国人の在地領主として自立性を保っていた。天文の乱（1542～48）で破れてもなお、晴宗から「一家」として処遇され、依然として周囲の草岡や勘進代などの郷を含めて所領を安堵されている。

天正 15 年（1587）10 月 14 日、鮎貝宗信は、最上義光と結んで伊達政宗に謀反を企てる。しかしその時政宗は、「町曲輪ニ押詰メ」、「所々ニ火ヲ放」って落城させ、鮎貝氏は滅亡となる。その後鮎貝城には、伊達氏の在番制のもとで有力武将が派遣され、伊達領国全体の攻撃＝防衛の一つの拠点（特に対岸の荒砥城との連携を密にした最上境の要害）とするため、翌年 4 月 20 日には、守屋、桑島、片平ら「御代官衆」の手によって「要害普請」が実施され、荒砥城と同一の時期に、伊達氏の直接的な改修の手が加えられている。

天正 19 年の伊達氏移封の後は、蒲生氏の家臣・高井、村田が、さらに上杉氏の支配に入ってからは、中條、築地、下條、春日ら諸将が在番、その後御役屋が本丸の背後に築かれ、寛文 5 年（1665）からは、本庄氏が御役屋持として明治まで居住している。

鮎貝城は、周囲の「西口」「桜館」「内町」「割町」などの小字地名や、明治初年の地籍図などから復元すると、町屋集落も含む総構えの城郭と考えられる。江戸時代の絵図には城郭の様子が描かれ、現在、八幡神社（A）境内地の I が主郭部（本丸）と考えられるが、江戸時代には御役屋が築かれたり、明治 29 年には八幡神社の移築により、主郭部分は改修されていることが予想される。しかし、北西部のかき型に曲がる水堀（a）や南西部には、隅櫓跡と考えられる土塁（b）、そして b から社殿西側に連続する土塁（c）などは、当時を忍ばせてくれる。「折れ」と板を組み合わせた虎口（d）部分には、枠形が確認され、板を上ってくる攻め手には巧みに横矢をかけることができる。また、一部水を湛えた深い堀（e）に囲まれたⅢの曲輪は、Ⅱの曲輪に設置された櫓と連携を取りながら、寄せ手を煽動する施設と思われる。西口付近では、f と g の堀が接近し、本丸に対する二の丸に相当すると思われる。

最上川を挟んで、地形的にも荒砥城がより攻撃的な城郭であるのに対し、鮎貝城は防御機能に優れた城郭といえる。また、曲輪がブドウの房のように連なる特異な構造を持っており、北は谷町付近の小谷を外堀に、段丘状を連続して連なる城郭群を形成している。今後の詳細な調査・検討が必要である。

（大木健一、斎藤清玄）



鶴貝城略測図

1964.12

よこごしきだて

横越北館 402-006

所在地 白鷹町大字横田尻（西横田尻）字北館

築城者 佐野氏

築城時期 戦国期

史 料 「明治 26 年調製絵図」

参考文献 『白鷹町史』『蚕桑郷土史』

概 要

横越館の北東約 1km、標高約 210m の所に位置し、平地では町内で最も良好な状態で残る中世の館跡である。北・西・南側にそれぞれ土塁 (a) と堀 (b, c) があり、北側には本田沢が流れる。南北に伸びる台上を b, c の堀で区切っているのが特徴である。

横越館との関係が予想されるが、「蚕桑郷土誌」によれば、佐野伊勢十郎左エ門の館跡として紹介されている。

(大木健一、斎藤清玄)



1994.12

はちせんだて

八幡館 402-008

所在地 白鷹町大字高玉（西高玉）字三面峯

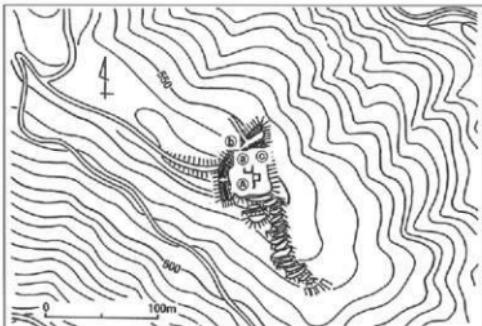
築城者 不明

築城時期 <平安末期>

参考文献 『白鷹町史』

概 要

標高約 560m、葉山中腹にある舌状部の突端を利用したもので、前面の急傾斜地には何段にもわたる曲輪が存在し、尾根続きのところには二重の空堀 (a, b) があり、c は館への虎口と思われるが、現在はテレビ中継塔



八幡館略測図

1994.12

(A) の建設によって破壊を受けており、空堀も管理用道路によって寸断されている。館の名称から、

八幡太郎義家（源義家）と結び付いた伝説も残っているが、真偽の程は定かではない。

(大木健一、斎藤清玄)

所在地 白鷹町大字横田尻（西横田尻）字中館ほか

築城者 〔藤原安親、ふじわらのやすちか〕

築城時期 〔平安末期〕

史 料 「明治 23 年調製絵図」「晴宗公采地下賜録」

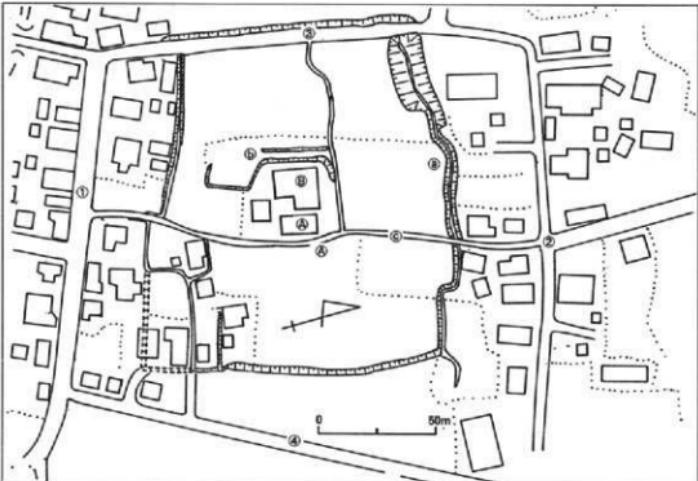
参考文献 『白鷹町誌』『鮎目歴史』

概 要

東西に 140m、南北に 130m ほどの規模で、原形こそとどめないが四方に堀（a）と土塁をまわし、外周には南小路①北小路②西館③の屋敷地、前方には東町④として町家を置く方形館址で、居館地の中央部を南北に道路（c）が横切っている。なお高徳寺（A）の背後には、かろうじて土塁（b）が残存している。

平安時代末期、永久から大治年間（1113～1130）の頃、京都の「藤原安親」が平泉・藤原氏を頼って下向し、横越の地で「横越太郎」を名乗り、約 250 年間下長井庄白川以北の治政に当たったと伝えられている。後に横越氏は鮎貝に城を築き、「鮎貝氏」を称したといわれるが、横越氏についてを語る物は、横越館西北の毘沙門堂近くに残っている層塔の残片（半次の層輪）程度で、ほかは何もない。横越氏が鮎貝に移った後、江戸時代初期の高徳寺建立までの横越館の用途は不明だが、天文 22 年「晴宗公采地下賜録」によれば、大立目衛門への安堵状の中に「下長井の庄、横越の惣成敗、横越知行の通り棟役、田錢、諸公事これを遣し候」とあり、文面から推定すれば、大立目衛門の居館が、横越郷にあったとも考えられる。

（大木健一、斎藤清玄）



横越館跡略図

1994.12

たかだまもとだて

高玉本館

402-009

所在地 白鷹町大字高玉（西高玉）字腰越はか

築城者 不明

築城時期 戦国期

史 料 「明治 26 年調製絵図」「伊達家文書」ほか

参考文献 『白鷹町史』『西高玉本館遺構試掘報告』

概 要

昭和 52 年の圃場整備により館としての形跡は矢なわれたが、字腰越を中心にして約 108m の周囲に堀をまわした方形館址で、西側と南側は二重構造の堀と、北側は小船貝沢が天然の外堀になっていたと推定される。なお、圃場整備前に行なった発掘調査では、柱根、土器、木器、鉄器等のほか堀跡も確認され、館の存在が裏付けられている。

様々な文献等から推測すると、この館は大永 2 年（1522 年）以前のものであり、高玉氏の居城した高玉城の前身とも考えられている。

（大木健一、斎藤清玄）

びんごなで

備後館

402-010

所在地 白鷹町大字高玉（西高玉）字備後館

築城者 （村上備後守、むらかみびんごのかみ）

築城時期 戦国期

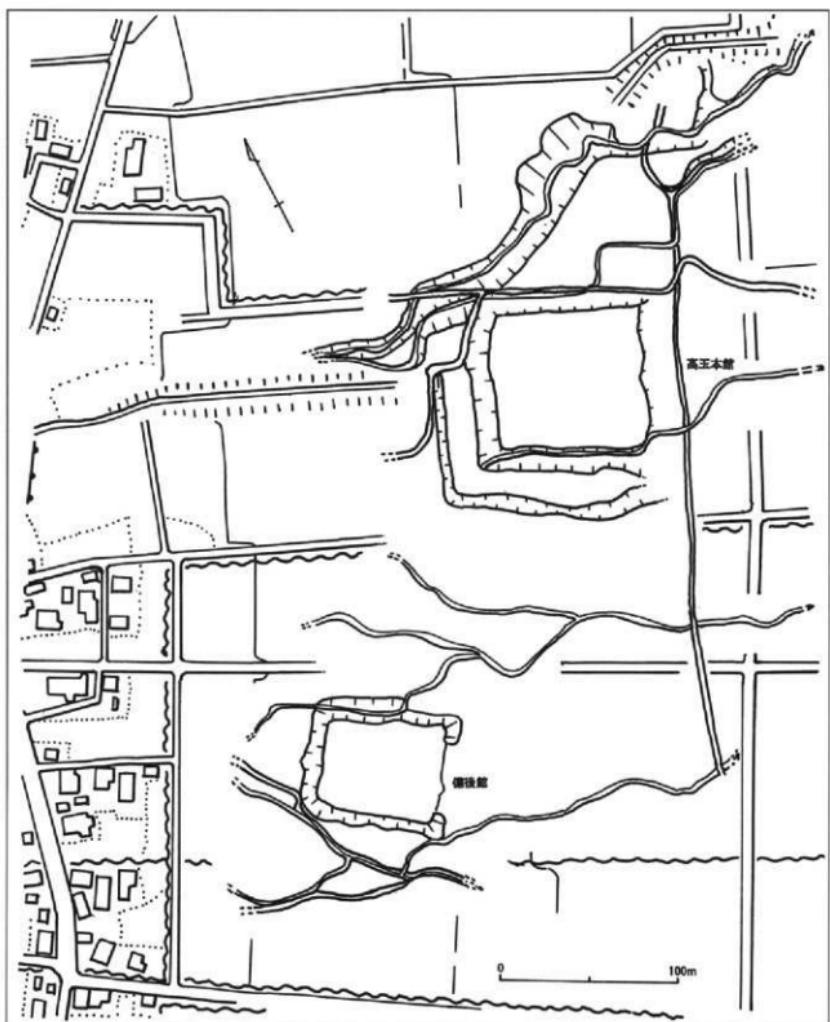
史 料 「明治 26 年調製絵図」「伊達家文書」

参考文献 『白鷹町史』『蚕桑郷土史』

概 要

大規模な圃場整備により現在は跡形もないが、明治 26 年調製絵図によれば、南北に約 60m、東西に約 80m で周囲に堀をめぐらし、堀の内側には土塁を構築した方形館址であったと考えられる。大永 2 年（1522）伊達宗が舟生右馬助に出した安堵状には、隣接する『鮎ノ目』の地名や、地頭・村上備後守の名も見えることから、備後館には伊達の家臣・村上氏が居館していたものと考えられている。

（大木健一、斎藤清玄）



高玉本館、佛後館推測図

1994.12

おだなて

小田館 402-011

所在地 白鷹町大字高玉（東高
玉）字小田館、館廻り
(たてまわり)

築城者 不明

築城時期 戦国期

史料 「明治 26 年調製絵図」

参考文献 『白鷹町史』

概要

フラー長井線蚕桑駅の西
北で現在は圃場整備事業により
消滅してしまったが、「小田館」
が存在した。このことは、明治



26年調製絵図により明らかで、実際の館址は「館廻り」が主体になると考えられる。「館後館」に類似し、約70mの周囲に堀をめぐらした小規模の方形館址で、南側は堀が二重になっていたものと思われる。また、図面には畦畔の様子も描きこまれており、堀の内側には土塁が築かれていたものと考えられる。

（大木健一、斎藤清玄）

たかだまじょう 〔たかだまだて〕
高玉城 (高玉館) 402-012

所在地 白鷹町大字高玉 (東高玉) 字館ほか

築城者 (鮎貝盛宗、あゆかいもりむね)

築城時期 戦国期

史 料 「伊達家文書」「晴宗公采地下賜録」

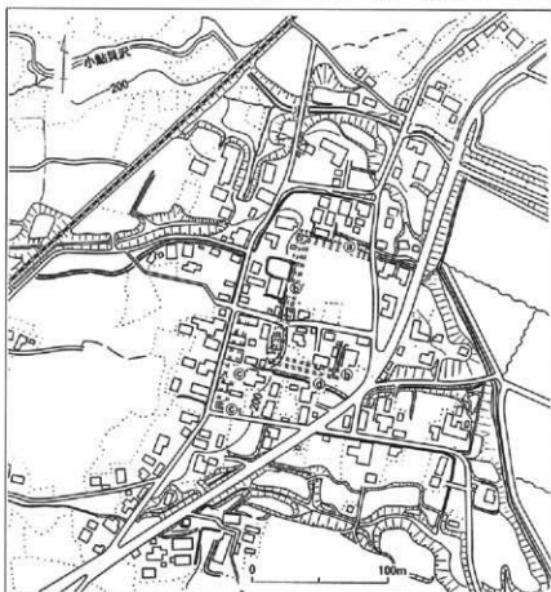
参考文献 『白鷹町史』

概 要

高玉城は最上川左岸の標高約200mの河岸段丘上にあり、約1町歩(ha)の敷地とこれをめぐる堀(a、d)と土塁(b'、c')、さらに西・南・北小路の住家をそれぞれ配置し、外周には自然の河川を利用した外堀をめぐらす城(館)である。残存状況は不良だが、かろうじて現在も土塁の一部(b、c)が形跡をとどめている。

「伊達世臣家譜」によれば、「日傾斎(鮎貝宗重)の弟・茂平が下長井高玉城に住み、高玉氏を称し四世にして亡ぶ」とあり、高玉城は茂平の父・鮎貝盛宗の築城と考えられている。天文22年(1553)の「晴宗公采地下賜録」において高柳(玉)兵部大輔は、高玉郷の一部のほか、五十川、寺泉郷の一部も与えられ、諸役(税)は免除。高玉郷の一部は、それまで伊達氏の有力地頭・舟生式部の所領であった所であり、これがおそらく高玉氏であると考えられる。

高玉城は鮎貝城の支城とも伝えられているが、高玉郷の西には曹洞宗の巨刹・瑞龍院があって威を張り、郷内には数名の伊達家臣の所領もあって、その中における高玉城の鮎貝城の支城的価値はどの程度あったか疑問である。



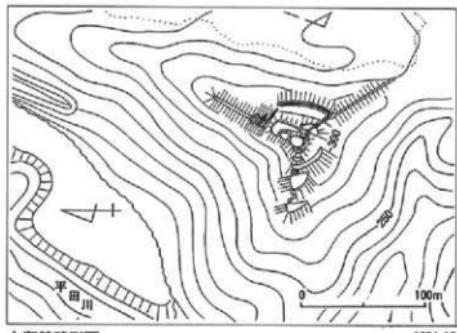
高玉城略測図

(大木健一、斎藤清玄)

おおせだて
大瀬館 402-013
所在地 白鷹町大字大瀬字館ほか
築城者 不明
築城時期 戦国期

概 要

標高約310m、三角形状の尾根を利用して構築された館址で、北側に尾根を寸断する三条の堀切と堅堀があり、そのまま堅堀は下に伸びて東側に一条の空堀を形成している。西側には尾根伝いに帯状



大瀬館略測図

1994.12

のテラスが6段形成され、その両側は急傾斜となっている。

東方に昔の街道が存在するこの場所は、村山と置賜の郡境であり、上杉・最上の戦の際に兵が待機した場所として言い伝えられ、重要な地点であったと考えられる。

(大木健一、斎藤清玄)

しょうぶだて
菖蒲館 402-014
所在地 白鷹町大字菖蒲字館山ほか
築城者 不明
築城時期 戦国期

概 要

国道287号線沿いの東側の丘陵部、標高約240m付近に位置するこの館址は、北西方向に張り出す舌状の尾根を利用して形成されたものであり、数段の腰曲輪と一条の堀切を有している。北側の斜面はかなりの急勾配で、谷伝いにa



菖蒲館略測図

1994.12

の道路を通って麓から進入したものと考えられる。街道の側であること、荒砥城の北側に位置し「陣内山」の地名もあることから、支城または、監視の役目を負うものであったと考えられる。

(大木健一、斎藤清玄)

なかやまだて

中山館 402-019

所在地 白鷹町大字中山字館之

越はか

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

標高約400m、館の南方に東から西に流れる沢があり、その河岸段丘を利用して形成されている。約40~50m四方の規模な館址であるが、北側に土塁

(a)と空堀(b)、土塁は真中で

中山館略測図

1994.12

分断され、虎口が設けられてい

る。

地元の伝説によると、館は南向きに構築されているが、もともとは最上領にあり、最上合戦の際に上杉氏にその領土を奪われたものであるというが定かではない。

(大木健一、樋口利夫)



とらいしやまだて

虎石山館 402-020

所在地 白鷹町大字中山字

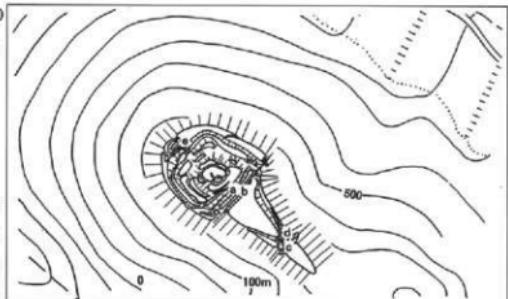
毫下八森

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

標高約530mのこの丘陵は、虎の形をした岩がある事から通称『虎石山』と呼ばれ、その丘陵の舌状に張り出した尾根を利用して構



虎石山館略測図

築された館址である。a、b、cの3つの空堀と土塁(d)を有し、西側には中央部を囲むように帯曲輪が存在する。特にa、bの空堀は約40m位に及び、eには樹形虎口も設けられている。たいへん眺望の良い所で、監視の役目を果たしたものであろう。

(大木健一、樋口利夫)

はくさんだて (ほんじん)
白山館 (本陣) 402-015

所在地 白鷹町大字針生字北の入

(大木健一、斎藤清玄)

ねこやだて
根子屋館 402-016

所在地 白鷹町大字針生字東水

(大木健一、斎藤清玄)

どうろくじんたて
道六神館 402-017

所在地 白鷹町大字針生字道六神

(大木健一、斎藤清玄)

かじやまとだて
鍛冶山館 402-018

所在地 白鷹町大字針生字鍛冶山

築城者 (いずれも) 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『山形県史』『日本城郭大系』

概要

「白山館」は標高約400mの台地上にあり、北方の道路に続く所はホップ畑になって破壊されているが、数段の曲輪を持って構成され、後方に土塁(a)と堀(b)を持ち、cの物見台的な性格の遺構も持っている。Aの曲輪には、白山神社(現在は焼失)がまつられ、針生集落の中心地に位置するこの館は、地元で「本陣」とも呼ばれている。

白山館から北東約700m、標高約500mの舌状に張り出したところには尾根を利用した「根子屋館」がある。北側に尾根を寸断する堀切(a)と数段の腰曲輪があり、bの道路はこの館へ通じる虎口と考えられる。館の名称通り、「根子屋式山城」の意味を持つ館であったと考えられる。

一方白山館から南東の方角には約600mほど離れた標高約400mのところには「道六神館」がある。2条の堀切と西側の斜面に沿って腰曲輪を有し、四方をうかがう事ができる。また道六神館からみて南西方向、中山集落へ通じる道路を挟んで向い合う山には、「鍛冶山館」が存在する。道六神館から約400m、白山館からは約800m離れた標高約450mのところで、一重の帯曲輪と空堀(a)を有している。

道六神館、鍛冶山館共に、針生から他地区へ通じる道路の分岐点に位置しており、道六神館の北側は水本方面、両方の館の間を中山方面へ通じる道路があり、これらの道路を監視し、本陣である白山館に情報を伝達するための施設であったと考えられる。特に鍛冶山館から山裾を白山館まで続く道路があり、本陣への連絡を一層密にしていたと思われる。

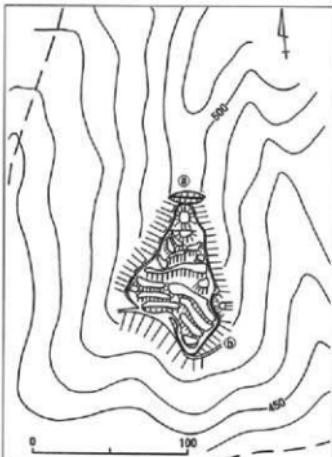
針生地区は、昭和30年に西村山郡宮宿町より分村し、白鷹町に合併した村である。つまり、藩政時代は松山藩左沢領・酒井氏の所領であり、また元和8年(1622)までは最上氏の所領であった。いずれにしても、沢を隔てた隣村の中山は米沢領になり、領土の境界に位置した両方の村は、常に緊張した状態におかれていしたものと考えられる。最上合戦の際ににはこの地でも派手な戦が行われたという伝

説もあり、また死者を葬ったとされる「千人塚」も道六神館の近くに存在する。しかし、いつ、誰が築いたものかは、明確な資料がなく不明だが、本陣の白山館、根小屋の根子屋館、監視のための道六神館、銀治山館と、それぞれが密接な関係を持ち、そしてそれぞれ重要な塊目の城郭であったと考えられる。

(大木健一・斎藤清玄)



白山館略測図



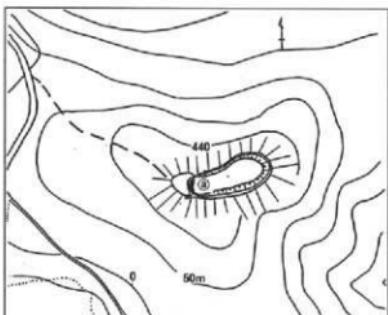
根子屋館略測図

1994.12



道六神館略測図

1994.12



鎌治山館略測図

さきしょあと
関所跡 402-022

所在地 白鷹町大字荻野字関所ほか

築城者 不明

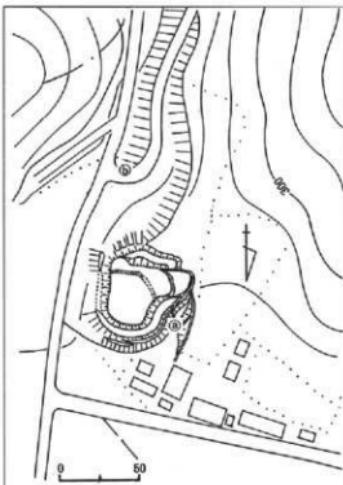
築城時期 戦国期

概要

県道・山形～白鷹線沿いに、河岸段丘が舌状に北方へ張り出し、標高約280mの小丘陵になっている。その丘陵斜面を利用して二重、三重の帶曲輪をまわす直径70m程度の小規模な円形館址である。現在も使用しているaの道路は、この館への虎口と考えられる。

b地点には境界の標と考えられる金剛庚申塔があり、また南方には塙田城も存在することから、北側との境界を監視するための施設であったろうと考えられる。

(大木健一、斎藤清玄)



関所跡略測図

1994.12

しおだじょう (しおだなて、たてやまじょう)
塩田城 (塩田館、館山城) 402-023

所在地 白鷹町大字十字塩田山ほか

築城者 不明

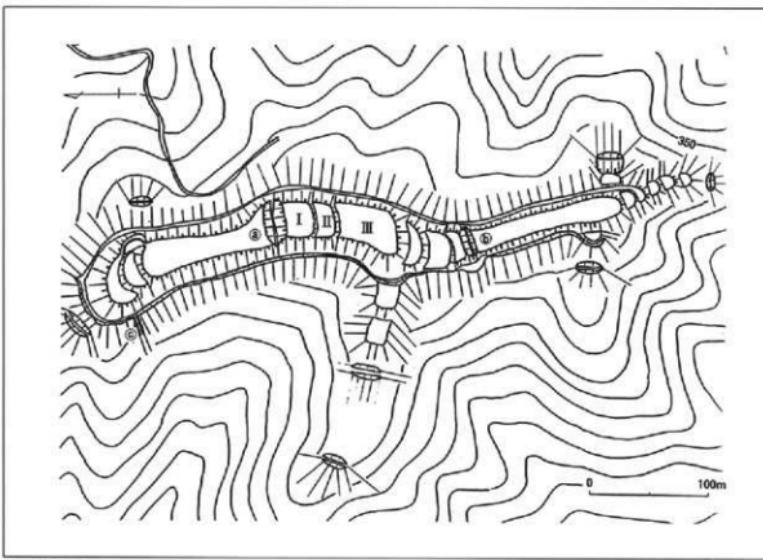
築城時期 戦国期

参考文献 『流野誌』『白鷹町史』

概要

標高約400mの独立した丘陵で、主郭(I)を中心にⅡ、Ⅲの曲輪があり、南北に伸びる尾根をa、bの掘が寸断し、さらに随所に尾根を寸断する堀が存在している。また、北側には豊堀(c)も存在し、その豊堀は城全体を囲むようにつながっている。山全体の尾根を利用した比較的規模の大きなものといえる。

地元の伝承に「慶長5年(1600)館山城菊地兵庫落城す」というのがあり、また昭和25年頃には直径7.8cm、金ちらし象嵌の古い刀の柄も発見されており、菊地氏なるものが居城していたのではないかと推測できる。しかし、そのほかには確かな伝説や記録もなく、いつ、誰の築城なのかはわからない。ただ、当時この地方は米沢勢力(伊達・上杉)の配下で、下長井郷(西置賜地区)はもちろん、萩野・中山方面まで、全体をくまなく見わたすことができる要地にあり、館の構築状況や孤越・小滝越の両街道の中間地点に位置することなどから判断すると、最上勢力に向けて構築された重要な館であったのではないかと考えられる。また、山麓部には『屋敷』『在家』の地名があり、平時の居館も予想され、「根小屋式山城」と考えられる。今後の精査が必要である。
(大木健一、斎藤清玄)



塩田城略図

1994.12

所在地 白鷹町大字荒砥甲八幡ほか

築城者 不明

築城時期 〈鎌倉前期〉（改修は天正 16 年）

史料 「伊達家文書」「明治初年の地籍図」「長岡文書」

参考文献 『白鷹町史』『日本城郭大系 3』『出羽諸城の研究』

概要

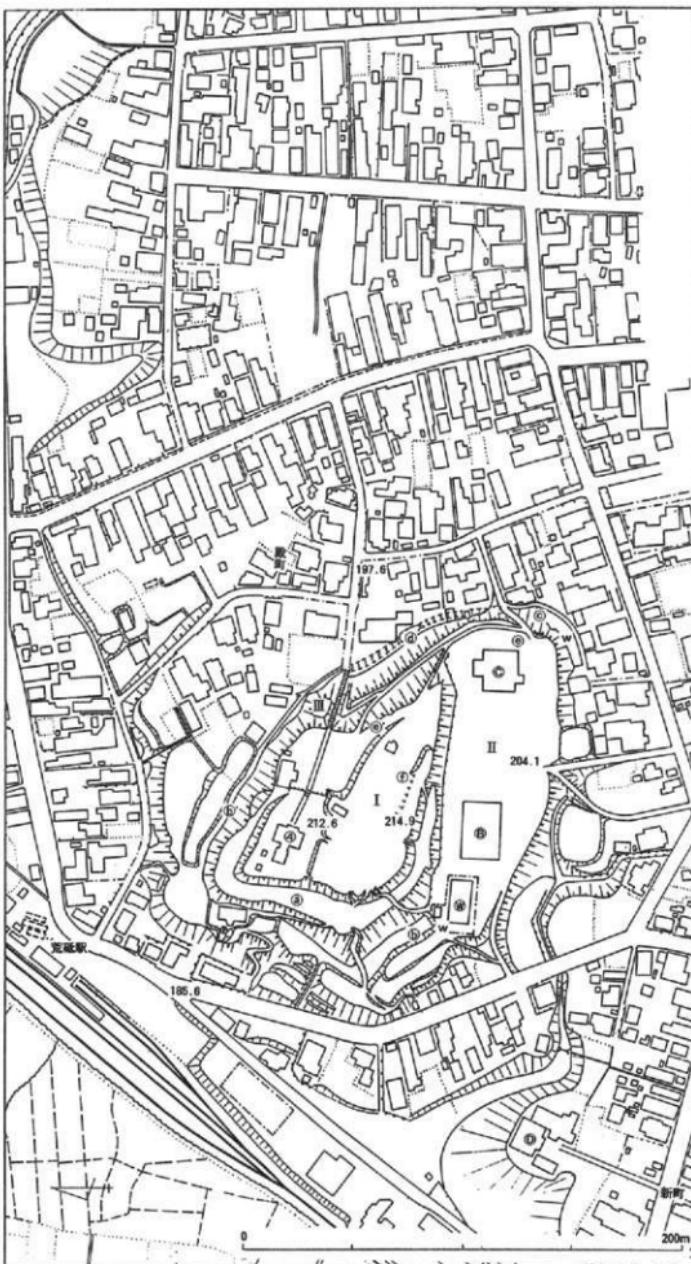
最上川の右岸、河岸段丘と白鷹山丘陵の末端につながり、標高約 210m、比高約 30m の独立丘を利用した平山城で、別称を「八乙女城」とも呼ぶ。A は八乙女八幡神社で、寛治元年（1087）源義家が京都の石清水（いわしみず）八幡宮を勧請し、石灘監物が建立したものと伝えられている。その後、荒川次郎清泰が永長年間（1096～97）に城を築き、南北朝末期の元中年間（1384～92）には馬場守監が堀をめぐらし、城郭として整備したものとされている。

伊達家文書によれば、戦国期の荒砥郷には荒砥、桑島、松岡、大立目ら各豪族の所領があったが、荒砥城主としては大立目氏が確認できる。置賜と村山の境界に位置する荒砥城は、最上領に接する伊達領国の大要害として史料にも度々現れ、天正 2 年（1574）から始まる最上義光との本格的な戦いでは、一時伊達輝宗の本陣も設けられている。天正 16 年 4 月 20 日には、鹿俣、大窪、大石らの伊達家「御代官衆」の手によって「要害普請」が行われており、戦国末期になると在番制による城将が派遣されていたものと思われる。

天正 19 年の伊達氏の移封後は、蒲生氏郷の家臣・水野三左衛門が在城し、また慶長 5 年の上杉氏と最上氏の合戦においても、直江兼続らの上杉勢の主力は、荒砥城を兵站（へいたん）基地として畠谷城を攻め、山形方面へと向かう作戦であった。東方の金剛山館や最上川対岸の鶴貝城とも連携して、ますます要害としての機能を高めたものと考えられる。主郭部（I）は、南北に約 100、東西に約 150 m で最頂部と八幡神社の境内地とに二分され、虎口と思われる e、e' から入城したものと考えられる。南側の f は土塁の名残とも思われる。a の帶曲輪と b の空堀は周囲をめぐり、西側は急峻な切岸で防衛されている。東側の c、d は水堀の名残と思われ、破線部分は水堀か泥田堀と考えられる。現在、公民館（B）や老人福祉センター（C）として利用されている II の曲輪は、江戸時代は荒砥御役屋として、明治以降は荒砥小学校の敷地として拡張されているが、長岡文書から推定すると、もともとは a と b が南側にまで伸び、城全体を帶曲輪と堀で囲んでいたものと思われる。III の小曲輪には「蛇井戸（じゃいど）」と呼ばれる井戸があるが、有事の際にはそこから水が溢れて空堀を水で満たし、城を守ったという伝説も残っている。

明治初年の地籍図や、付近に見られる「殿町」「古城廻り」「仲町」などの地名から、家中侍屋敷地のいわば三の丸と町屋も含めた縦構えの城郭であったと思われ、東から北側にかけては、草木沢川が外堀の機能を果たし、D の金鐘寺付近にも堅固な櫓などの施設があったものと思われる。「上町」「新町」まで含めれば、東西 750m、南北 500m の規模となり、さらに現在県立荒砥高校や町立病院の建つ、南側の丘陵部にも城館址を想定すれば、貝生川を南の外堀とする広大な城域になり、今後の調査に期待したい。

（大木健一、斎藤清玄）



荒砥城跡測図

1994.12

くろふじじもとて
黒藤下館 402-027
所在地 白鷹町大字畔藤字下館ほか

(大木健一、斎藤清玄)

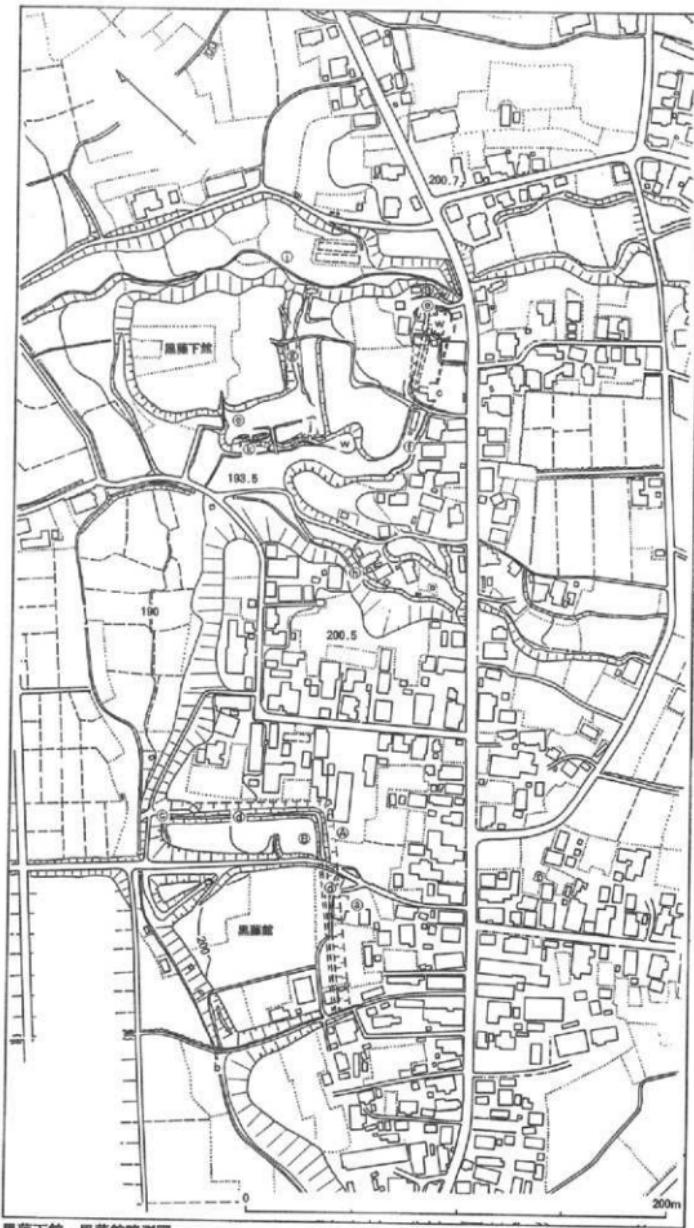
くろふじじもとて
黒藤館 402-028
所在地 白鷹町大字畔藤字館ノ内ほか
築城者 不明
築城時期 戦国期
史料 「晴宗公采地下賜錄」「下長井段鉄帳」「熊野神社棟札写」
参考文献 『白鷹町史』『黒藤館跡発掘調査説明資料』『山形県史』
概要

国道 287 号と畔藤農免道路の間で、対岸の地区まで眺望できる標高約 200m 地点で最上川右岸の河岸段丘上を利用して、南に「黒藤館」、北に「黒藤下館」が存在する。

「黒藤館」は、東・南・北側にそれぞれ a、b、c の空堀と北側から東側にかけては、土塁 (d) が形成されている。特に b の空堀については『流し堀』と呼ばれ、水で土砂を下流に流し、形成したものと伝えられている。破線部分は、地元の古老の話によると昭和初期頃までは土塁が存在していたということから、推定で記したものであるが、平成 5 年度に県道・南陽～白鷹線の道路改良工事に伴う、緊急発掘調査が実施された際に、A 地点において堀跡と杭も検出され、このことが裏付けられている。このほかにも発掘調査では、B 地点から据立柱建物跡 3 棟、柱穴群、井戸跡 4 基の遺構、近世陶磁器、塗挽、木槌、木製容器底板を想定する楕円形の板、井戸枠の横桟、石臼の遺物も検出されていることから、江戸時代までは何者かがこの地に居館していた事が明らかとなった。また、縄文時代の遺構や古墳時代の方形周溝墓 3 基のそれ以前の遺構も検出されている。

現在、一部が雷 (らい) 神社の境内に利用されている「黒藤下館」は、国道に沿って土塁 (e) と堀 (f、現在は防火用水として利用) が残存し、当時の面影をのぞかせている。館跡は西側の段丘面に広がり、西側には曲輪、中央部には空堀 (g) がかぎ型に入り込み、南北の両側には自然の地形を利用した深い堀 (h、i) が段丘を区切っている。特に南側については、f、g、h の堀が二重、三重の構造となっている。また、堅堀 (j) や物見台 (k) の要素を持つものもあり、1 の道路は大手ではないかと考えられる。天文 22 年 (1553) の「晴宗公采地下賜錄」の中では、黒 (畔) 藤郷の桑島三郎左エ門は亘理 (わたり) 分、松岡紀伊守 (まつおかきのかみ) 分、松岡持監分を除いた外全郷についての所領を与えられ、そのほか馬 5 匹を有している。また永禄 4 年 (1561) には、熊野神社を再興した人物とされ、黒藤館に居館していた地頭と考えられている。黒藤下館には、從来より畔藤郷の「け (花) とう在家、宮在家」を所領する伊達家でも有力な地頭・松岡紀伊守が関係があると考えられ、天正 12 年 (1584) の「下長井段鉄帳」では、下館に隣接したと考えられる「西原在家、花とう在家仁間」より 829 文の段鉄を納入している。しかし、畔藤館の桑島氏にしても、畔藤下館の松岡氏に至っても推測の域を越えない。付近には、『宿』や『小路』『在家』『新町』等の地名が残っており、この周辺一帯がひとつの『町場』を形成していたことも考えられ、隣接する両館は町場集落と密接に関連し合って存在したものであろう。

(大木健一、斎藤清玄)



黒潮下館・黒潮館略測図

1994.12

ここにうるさんみて (じゅうおううたて)
金剛山館 (十王館)

402-025

所在地 白鷹町大字十王字野長

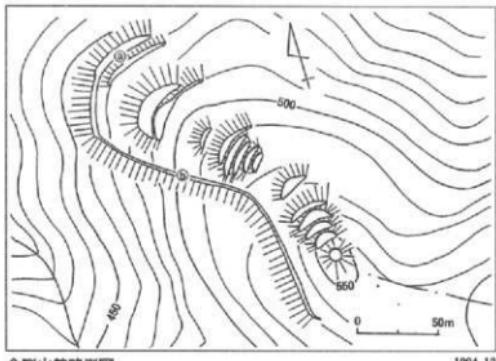
築城者 不明

築城時期 〔平安末期〕

参考文献 『白鷹町史』

概 要

標高約 550m の金剛山の山頂から、斜面に沿って小規模な曲輪が数段にわたって設けられている。また最後の曲輪(a)は、帯曲輪状に細長く、そこから山頂に向かって道路(b)が伸びている。未確認で



金剛山館略測図

1994.12

はあるが、この道路は麓まで続き、通称「七曲り（ななまがり）」と呼ばれる道路だという。山頂には古峯原社（こぶはらしゃ）がまつられ、また源義家の奥羽征討の伝説もあるがこの館の歴史を明らかにするものは残っていない。

(大木健一、斎藤清玄)

こ や た て
小屋館 402-030

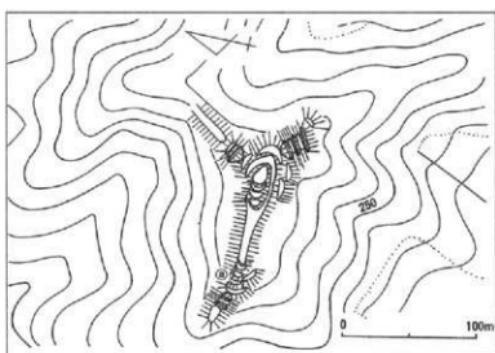
所在地 白鷹町大字浅立字小屋館

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

浅立と畔藤の境界、標高約 290m の丘陵で三角形状に広がる尾根を利用して形成されたものであり、北東、南東、西の三方向に、それぞれ曲輪と堀切が構築されている。特に西方に伸びる尾根の先端には、4段



小屋館略測図

1994.12

の脛曲輪と2条の堀切が構築され、4段の曲輪はaの道路で連結されている。麓を通る街道を馬に乗った侍がいつも監視していたという伝説があり、監視の役割を持つ館址であったと考えられる。

(大木健一、斎藤清玄)

すずきわだて (たてやまと) 杉沢館 (館山館) 402-029

所在地 白鷹町大字畔藤字館山

築城者 不明

築城時期 (平安末期)

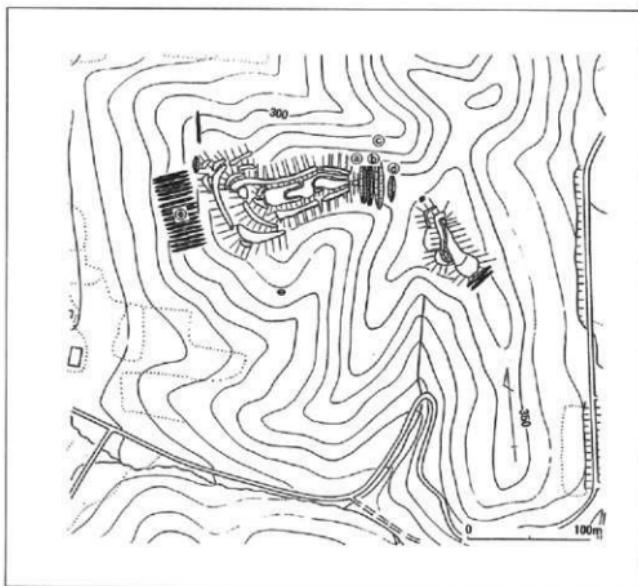
参考文献 『白鷹町史』『日本城郭大系』

概 要

県道・南陽～白鷹線に沿った東山で、標高約350mの丘陵の尾根を利用して構築された山城である。西向きに張り出した尾根をa～dの4条の堀切が寸断し、その先に数段のテラスが形成されている。また尾根の両側にも曲輪が設けられ、その外側は急傾斜となっている。a～dの堀切を挟んで東側の尾根にも曲輪と2条の堀切が確認され、館址全体の規模は、東西に約340m、南北に約120m程度にまで及ぶ。また西側の斜面には、当地方では稀な施設である17条の畝状堅堀(e)も確認され、敵の横方向への動きをおさえる役目のこの施設は、西側からの攻撃を防いだものと考えられる。

杉沢地区を通る南陽～白鷹線は『一里塚』の地名も残る街道で、地区には大同年間(806～809)の創建と伝えられる『杉沢觀音堂』もある。思川下流地区は『町下』と呼ばれることから、思川上流部にあたるこの地区は、古くから開けた『町』であったのではないだろうか。館址に関して、八幡太郎義家(源義家)の伝説が語りつがれているが、付近には『沖田屋敷』や『仲小路』の地名もみられ、麓の『町下』集落とセットの根小屋式城館址と考えられる。

(大木健一、斎藤清玄)



杉沢館跡測図

1994.12

なかむらあらだて
中村荒館 403-001

所在地 飯豊町大字中字荒館

築城者 (中村日向守)

築城時期 室町期

史 料 伊達家文書

明治初年の地籍図

参考文献 『飯豊町史(上)』

(後藤 正浩(樋口 忠一))

なかむらあらだて
中村館 403-002

所在地 飯豊町大字中字酒町

築城者 (長岡親人)

築城時期 室町期

史 料 明治初年の地籍図

参考文献 『飯豊町史(上)』

概 要

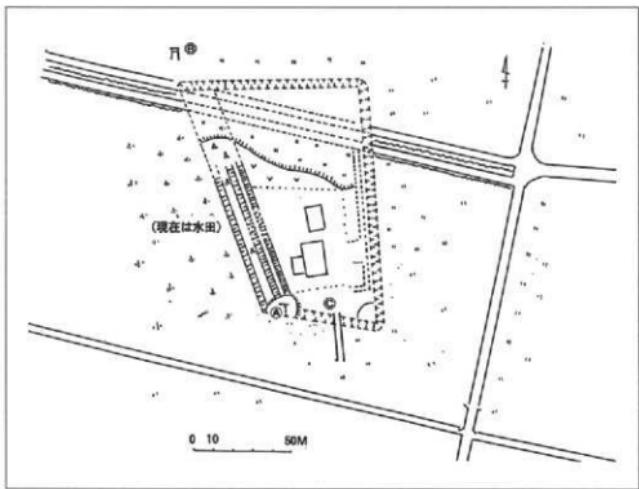
飯豊町の北東部、長井市大字九野本に接する位置に、「荒館」地名がある。付近は、集落の宅地になつたり、昭和45年の土地改良事業にともなう基盤整備などによって水田になっているが、「外の内」「丹後屋敷」「佐内屋敷」などの中世に遡る地名が残っている。古老に語り継がれてきた伝承を、明治初年の地籍図と、現地に残る微地形を手がかりに調査すると、二つの方形館跡が復元できる。

大字中一帯は、近世の中村、中世には、中村郷であった。伊達家文書によれば、永正6年(1509年)伊達尚宗の知行判物の中に「下長井庄中村郷云々」と出て来るのが初見。同年8月、越後出兵を目前にして伊達尚宗が出した軍勢催促状の中の長井被官衆の一人に「中村肥前守」の名がみえる。岩松寺の開基で、荒館の館主と伝えられる「中村日向守」との関係は不明であるが、当地方と関係のある伊達氏の有力家臣と考えられる。

荒館遺構は、宅地の西側に長さ71mにわたって、幅10m、深さ1.5mの空堀が残り、内郭部に上梯部2m、高さ1.2mの土塁が確認される。土地改良前までは、周囲にも土塁が残り、内郭部の土塁は、Bの鬼子母神の手前まであったという。Aには物見台があったといわれ、現在は松尾明神社が建立されている。山王原に続く西側は原野であり、南側のCが虎口であったという。

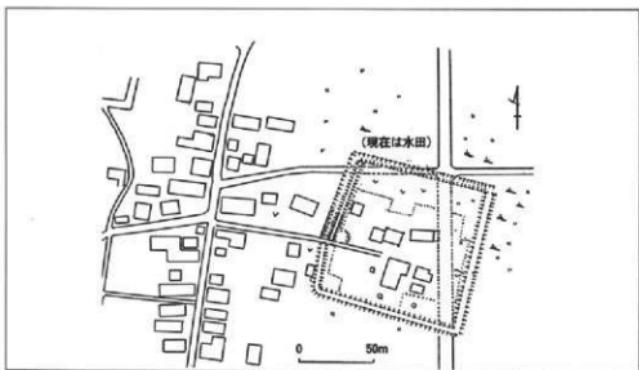
字酒町地内の、通称「館(または1町歩屋敷)」と呼ばれている付近は、伊達氏の家臣長岡親人の屋敷跡と伝えられ、水堀の一部と堀跡が確認される。古老は、「柿の古木は、スズ堀を埋めた所で、南側に土塁があった。」という。現在は、東側に県道、北側にも町道が切られ、遺構は水田の中に埋没してしまった。

(後藤 正浩(樋口 忠一))



中村荒館略測図

1994.12



中村館略測図

1994.12

はぎゅうじょう
萩生城 403-004

所在地 飯豊町大字萩生内町一帯

築城者 伊達氏の家臣 国分氏

築城時期 南北朝期

史料 伊達家文書、国分文書

参考文献 『飯豊町史上』『山形県地域史研究19号（萩生城址と国分氏について）』

概要

飯豊町大字萩生は、近世の萩生村、中世は萩生郷で、天文7年（1538年）の御段鉄古帳によれば、「國分方萩生」と「萩生南方」に二分されていた。南方は、伊達氏の家臣浜田氏一族の所領が有り、天文の乱後は、浜田左馬助が本領分を安堵されているのに対し、国分領は、國分民部少輔が本領安堵を受けている。その他に、中野常陸介以下数名の地頭領主の所領が散在することになるが、萩生城は、代々の国分氏一族の居館と考えられ、萩生郷の半分を一円的に支配していたものと考えられる。

国分氏は、伊達政宗から嘉慶2年（1388年）に「長井庄萩生郷」を、応永9年には「刈田郡平沢郷（現宮城県）」に知行分配をうけているが、南北朝の末期に伊達氏が長井氏を攻略して置賜地方に侵攻した直後にあたる。萩生国分氏は、系図によれば、その2代前に「萩生郷に住した」政信をもって初代としている。その後、国分氏は伊達信夫、最上などの広範な地に所領を拡大していることや、永正6年の伊達尚宗の軍勢催促の命を受けて、下長井の被官衆に回状を発している國分平五郎胤重の存在などから、伊達氏に対しても自立性の高い国人領主であったと考えられる。

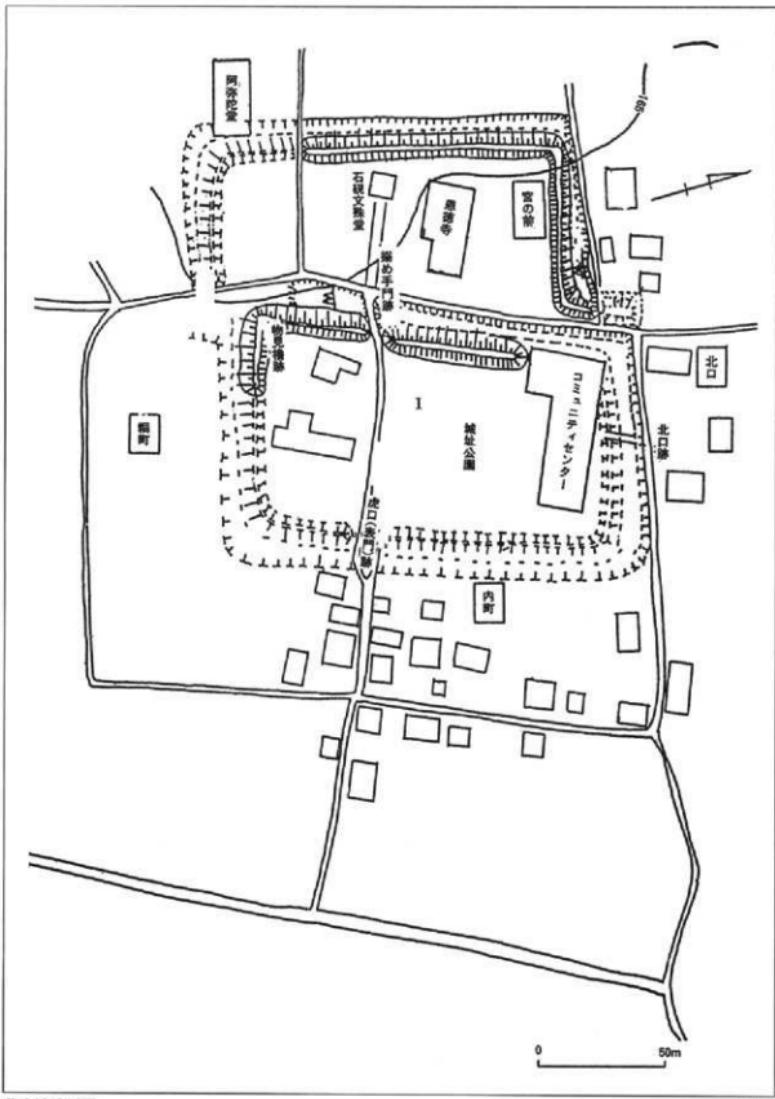
萩生城址は、現存する景観と明治8年の地籍図などから、主郭部と出丸をもつ複郭式の平城と、それを中心にした原城下町的な町割という、国人級武将の居館跡が比較的良好に復元できる遺跡である。主郭部（I）は、南北145m、東西77m、面積はおよそ1,116平方メートル（1町1反6畝歩）で、現在は、城址公園とコミュニティーセンターと民家の敷地となっている。東側と南側及び北側の堀跡は、水田となってわずかに昔の姿を偲ばせる程度であるが、西側は、幅10mの水堀を巡らした跡が現在も明瞭に残っている。内部を囲む土塁は、現在西側の大部分と南側の一部が残っているが、幅10mあり、高さは3~5mで、一番高いところでは18mを数える。特に、西南隅には物見櫓があったと伝えられている。東側と北側に虎口が設けられていたとみられ、大手口に当たる東側からは、家臣团集落である「内町」を通り「精町」、「雪舟町」などの商人町へとつながっている。大手門跡には、昭和20年頃まで樹齢500年以上の杉の巨木が2本あって、地元の人から“門杉”と呼ばれ親しまれていた。南方にも南門があったと伝えられている。

主郭部の西方には、南北147m、東西64mの出丸跡（II）がある。水堀と土塁に囲まれているが、内側の土塁は、高さが3~4mで、北側で幅13m、西側と南側ではそれぞれ10mである。さらに北側の堀には、現在も水を満々とたたえ貯水池として利用されている。西側は、現在草地などになっているが、地形的には泥田堀であったと考えられる。出丸跡には、応永年間に移転し伝えられる恩徳寺と石碑文殊堂が建立されて、その境内地になっている。さらに、域内を中心にして西方に阿弥陀堂、靈訪神社が位置し、北方には国分氏の菩提寺である吉祥寺と稻荷馬場があり、当時の姿がしのばれる。

国分氏は、天正19年の伊達氏の陸奥岩出山移封に伴って当地を去り廃城になった。

なお、萩生城址は、昭和62年に飯豊町の文化財として史跡に指定されている。

後藤 正浩（樋口 忠一）



荻生城略測図

1994.12

くろさわきただて
黒沢北館 403-005

所在地 飯豊町大字黒沢

築城者 不明

築城時期 室町期

史 料 明治初年の地籍図

参考文献 『飯豊町史(上)』

(後藤 正浩(緑口 忠一))

くろさわだて
黒沢館 403-006

所在地 飯豊町大字黒沢

築城者 不明

築城時期 室町期

史 料 明治初年の地籍図

参考文献 『飯豊町史(上)』

(後藤 正浩(緑口 忠一))

くろさわなかだて
黒沢中館 403-007

所在地 飯豊町大字黒沢

築城者 不明

築城時期 室町期

史 料 明治初年の地籍図

参考文献 『飯豊町史(上)』

(後藤 正浩(緑口 忠一))

くろさわみなみだて
黒沢南館 403-008

所在地 飯豊町大字黒沢

築城者 (大立目氏)

築城時期 室町期

史 料 伊達家文書

黒沢村名寄帳

渡辺氏家譜

参考文献 『飯豊町史(上)』

概 要

飯豊町大字黒沢地内には、平地に4箇所の「館」址がある。一帯は、近世の黒沢村、中世では、伊達領國下の黒沢郷にあたる。天文7年(1538年)の御段錢古帳では、「段錢30貫800文、うち2貫は御中館引き云々」とあり、伊達氏の直轄地も含まれていたことが分かる。天文の乱後の「晴宗公采地下賜録」によれば、安久津孫二郎・同とうはく丸・湯村国松・同羅左衛門・桑島三郎左衛門以下12名の地頭領主が安堵されているが、だれがどこに居館をっていたかは不明である。また、天正12年

(1584年)の下長井段銭帳によれば、安久津修理助、佐藤藏人主、大立目右衛門とともに、黒沢郷「おとな中」や「おとな」百姓として、鈴木小一郎の名前が記載され、段銭を請け負っている。戦国末期における有力農民=地侍層の存在を示すものとして興味深い。彼らの居館と4箇所の「館」址との関係は、残念ながら不明である。

北館跡は、北東部に約18mの堀跡が確認され、北西部Aの熊野神社につながる土塁やBの低地を手がかりに明治初年の地籍図から復元すると、東西120m、南北150mの復郭式の方形館跡が浮かび上がる。

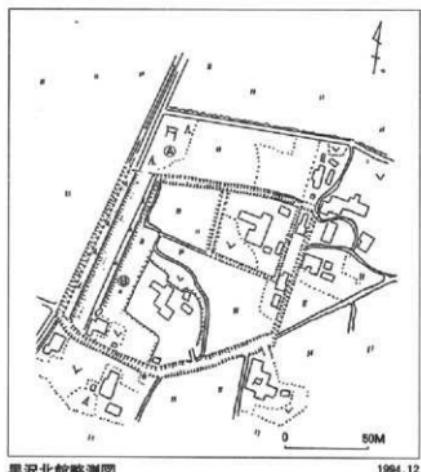
黒沢館跡は、北東部から北側にかけて堀跡と土塁が残り、方形館跡が復元できる。北側のCの稻荷神社は、物見台跡に建立されたと伝えられている。

黒沢中館跡は、高伝寺境内を中心とした地域で、この寺はもともと北館にあって、慶長年間に現地(鈴木原の廢寺跡)に移されたという。鈴木原は、馬場跡とも伝えられている。南西部から西側にかけて102mの堀跡と土塁が残り、おおむね方形をなしているが、復郭式館跡の可能性も残る。西側の堀跡は、幅7m、深さ1.7m。

Dは、稻荷神社や庚申塔などが建立されている丘で、館が廃絶する以前からの里敷鎮守であったと推察されている。

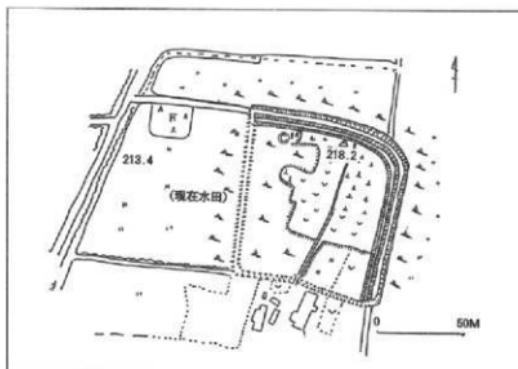
南館跡は、伊達氏の家臣大立目氏の居館跡と伝えられ、西側に約35mにわたって堀跡と、土塁が残っている。虎口Eの東側Fは、テラス状の丘になっており、館主の母屋跡と考えられる。

(後藤 正浩(樋口 忠一))



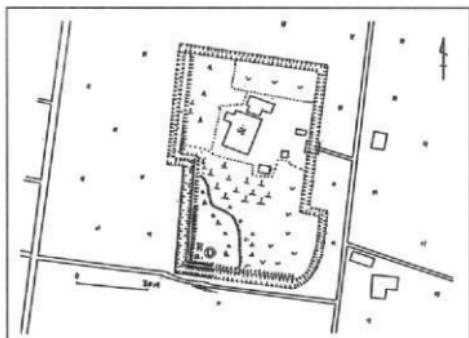
黒沢北館略測図

1994.12



黒沢館略測図

1994.12



黒沢中館略測図

1994.12



黒沢南館略測図

1988.9

つばきよるだて
椿古館 403-010

所在地 飯豊町大字椿

築城者 不明

築城時期 室町期

史料 明治初年の地籍図

参考文献 『飯豊町史(上)』

(後藤 正浩(樋口 忠一))

つばきよるだて
椿館 403-011

所在地 飯豊町大字椿

築城者 不明

築城時期 室町期

史料 伊達家文書

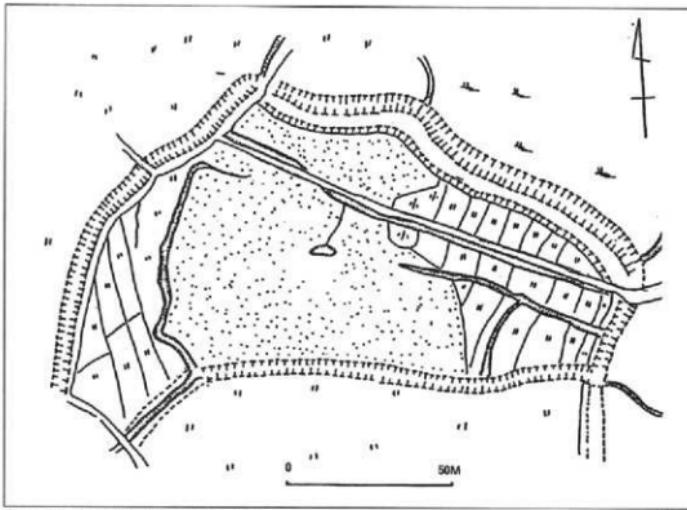
参考文献 『飯豊町史(上)』

概要

飯豊町大字椿は、近世の椿村、中世の椿郷と考えられているが、伝承や史料に乏しかった。伊達氏の天文の乱(1542~48年)後、下郡山因幡・同石見・同三郎左衛門分が、湯目稚楽丞、中野常陸、牧野彌正左衛門等の有力武将に安堵替えされているところから、伊達領国の中でも重要な所領であり、乱の以前は、下郡山一族の居館があり、一帯を支配していたものと考えられる。小字地名に「古館」「小者町」「番匠町」「在家」「館ノ沢」などの中世に遡る地名が残っており、明治初年の地籍図などをもとに現地調査を進めた結果、ほとんど水田の下に消滅してしまったが、幅25m、長さ200mの堀跡が復元され、西側丘陵の山城との関係が伺える。

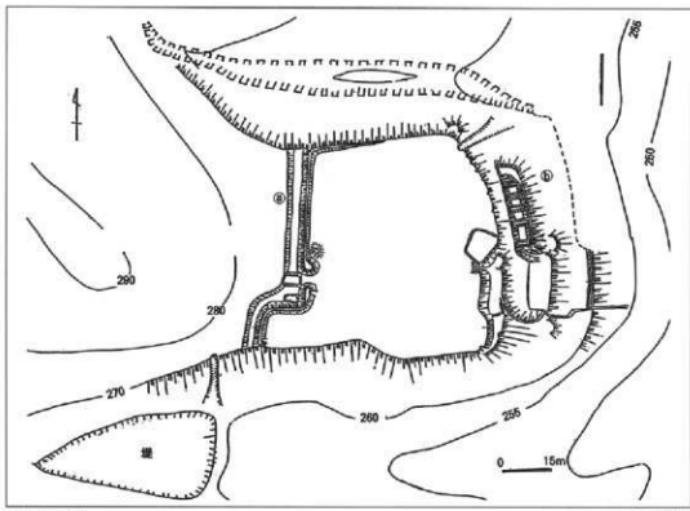
椿館は、伝承その他はまったくなく、天文の乱終結後に破城になったものの一部か、その後修復され再利用されたものかは不明であるが、丘陵を断ち切るクランク状の空堀(a)や、堅堀、虎口から主郭部に向かう通路を防備する「敵堀」bや椿跡がよく残っている。特に空堀の中にさらに障壁を築く「敵堀」状の構造は、当地方では珍しく、關東の後北条氏領国に典型的に発達した築城技術(ないしは技術者)の伝播が伺える興味深い遺跡である。全体の地形から推して、現在の役場舎一帯を含む大規模な城域が想定されるが、庁舎建設や野球場の整地などで確認できなくなった。また、飯豊中学校の改築移転に伴う緊急発掘がおこなわれ、虎口付近に人口的に、にぎり状のものを加えつき固めた古道や、中世陶器片が縄文時代の石器片と一緒に検出されたが、遺跡の全体像を明確にすることはできなかった。

(後藤 正浩(樋口 忠一))



椿古館略測図（字切図による復元図）

1994.12



椿館略測図

1988.8

そえがわふるだて 添川古館 403-012

所在地 飯豊町大字添川

築城者 不明

築城時期 室町期

史 料 明治初年の地籍図

参考文献 『飯豊町史（上）』

『添川村史』

『飯豊史話』

（後藤 正浩（樋口 忠一））

そえがわだて 添川館 403-013

所在地 飯豊町大字添川

築城者 大立目氏

築城時期 室町期

史 料 伊達家文書

参考文献 『飯豊町史（上）』

『添川村史』

『飯豊史話』

概 要

飯豊町大字添川一帯は、最上川の支流白川沿いの河岸段丘上に位置し、近世は添川村、中世の添川郷であるが、館主と伝えられている大立目宮内少輔の所領が天文の乱後の「晴宗公采地下賜録」には表れない。地形を活かした古館と添川館の二つの方形館跡が確認される。

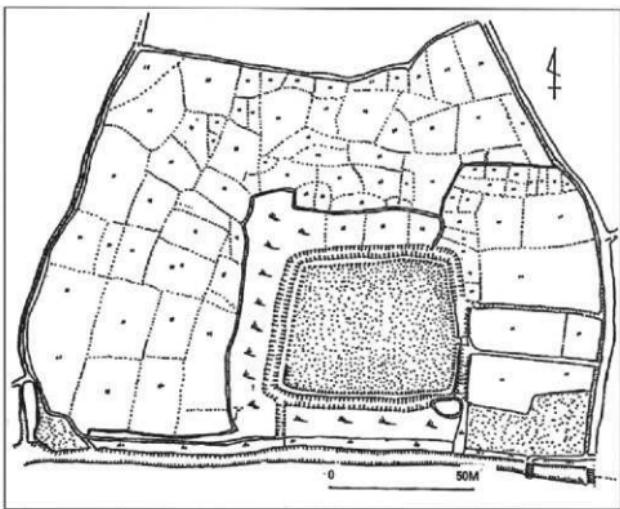
古館跡は、昭和 55 年の圃場整備事業によりほとんど水田の中に消滅してしまったが、明治初年の地籍図を手がかりに復元すると、南西と東の一部の礎跡と、内側に高さ 1m の土塁が確認できる。

添川館跡は、南北 130m、東西 150m を越える堂々たる複郭式の方形館跡で、主郭部（I）の A に櫓が築かれていたと伝えられている。東の B の虎口部に高さ 4m、上部 5m の土塁が 30m にわたって残り、空堀跡も推定される。外堀と内堀との間に重光院 C と愛宕神社 D が建立されている。

館主の大立目氏は、荒砥城主でもあり、その枝城として天文の乱後に築城されたものと考えられている。荒砥城からは遠隔の地でもあり、代官を派遣したものとも考えられるが、越後街道沿いの要地でもあり、居館部と町場とが一帯となった城域が推測される。

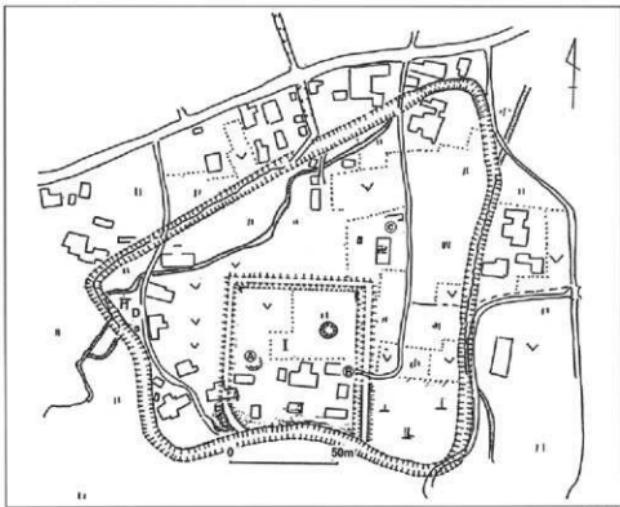
元亀元年（1570 年）の中野常陸らの乱により、添川の館は取り潰され、無主となり、手の子の速藤氏や萩生の国分氏の支配の元に置かれたとも伝えられている。

（後藤 正浩（樋口 忠一））



添川古跡略測図

1994.12



添川館略測図

1994.12

てのこじしだて
手ノ子西館 403-014

所在地 飯豊町大字手ノ子

築城者 (遠藤氏)

築城時期 戦国期

史料 伊達家文書

参考文献 『飯豊町史(上)』

『飯豊史話』

(後藤 正浩(樋口 忠一))

まちやしき
町屋敷 403-015

所在地 飯豊町大字手ノ子

築城者 不明

築城時期 室町期

史料 明治初年の地籍図

参考文献 『飯豊町史(上)』

(後藤 正浩(樋口 忠一))

てのこみなみだて
手ノ子南館 403-016

所在地 飯豊町大字手ノ子

築城者 不明

築城時期 室町期

史料 明治初年の地籍図

参考文献 『飯豊町史(上)』

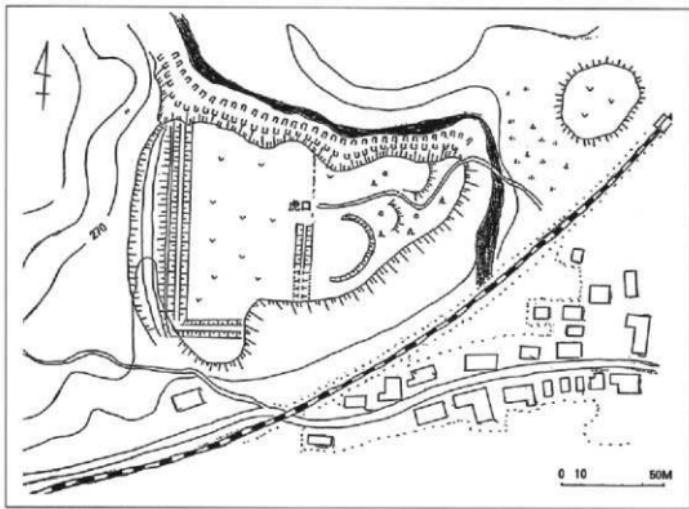
概要

大字手ノ子一帯は、白川の谷口部に位置し、近世は手ノ子村、中世は手ノ子郷で、越後街道上の要地があった。伊達氏の家臣、遠藤氏一族の本拠地であり越後街道の「惣成敗」権を安堵された、遠藤上野守の居館があったと伝えられ、天文の乱後の「晴宗公采地下賜縁」によれば、西高峯在家、市野々在家、叶水在家、箱の口在家を安堵されている。また、塙原弥九郎も同三郎左衛門の名称を相続して、居屋敷その他を安堵されているから、いずれかの居館があったと考えられる。また、伊達氏の直轄所領(下館分)も存在していた。市野々在家、叶水在家、箱の口在家は、現在の小国町地内の大字にある。

西館跡は、白川左岸のJR米坂線手ノ子駅の南西約100mのところの、虚空藏山の自然地形を利用して築城されている。西南端の裾部に底部1.5m前後の空堀が100mにわたって残り、郭内に2.6mの土塁が築かれ、その上部は7mの人口の切岸になっている。北・東の外縁は急斜面で、北側は、「沢の入」や「ガン沢」などの白川の小支流が外堀の機能を果たしている。

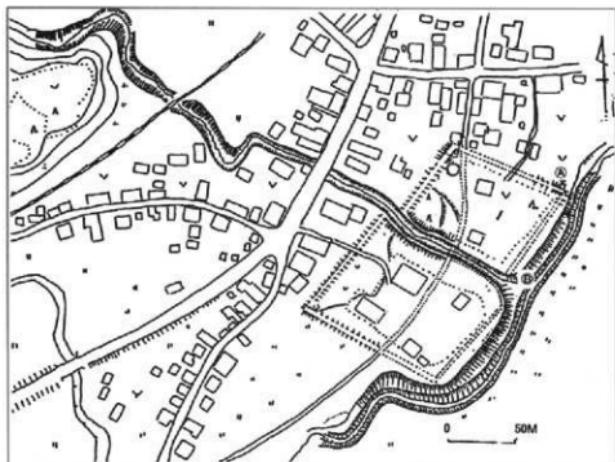
「南館」地名は、「ガン沢」の出口にあり、遺構はほとんど確認されないが、地籍図をもとに復元すると、北東と南西部に土塁跡と、南側に堀跡が推測される。西館を戦闘用の詰城と考えれば、平時の居館部と考えられ、町場集落を配した根小屋式の城郭が浮かび上がって来る。

町屋敷は、「ガン沢」を挟んで南館の対岸にあり、北東部から北西部にかけて高さ3mの土壠が残り、藩政時代は上杉家の臣家、西山氏の藩館があったと伝えられているが、それ以前の遺構の再利用とも考えられる。土壠上のAは、古くから祭られてきた山宝荒神で、Bは河原の「仕置場」と伝えられている。現在は、八幡神社と福荷神社、それに郷倉の跡地になっている。(後藤 正浩(緑口 忠一))



手ノ子西館略測図

1988.8



手ノ子南館・町屋敷推測図

1994.12

うつとりで

宇津砦 403-017

所在地 飯豊町大字手ノ子

築城者 不明

築城時期 室町期

参考文献 『飯豊町史(上)』

概要

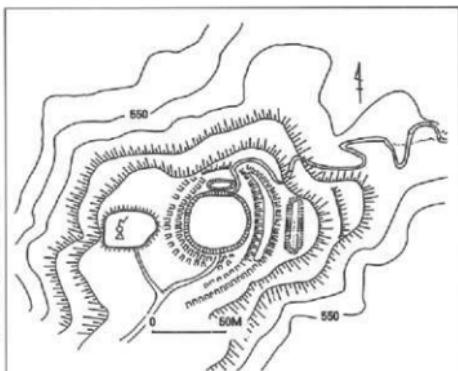
標高 594.2m の宇津峠頂上部に、階段状に空堀と人工斜面が築かれている。空堀は、現在 10m 程度残っているが、人工の切岸は高さは 4m から 5m で、最大幅 12m の帯曲輪状の平地も認められる。

最上部にある曲輪は、南北 35m、

東西 35m で、居館等の建物があったと推定される。

近くに元源訪大明神跡があり、ここにも堀跡が確認され、入口付近の清水を利用した「馬洗場」があったといわれている。越後街道の要地であり、麓集落の手ノ子の館と関連した軍事的施設と考えられる。

(後藤 正浩(樋口 忠一))



宇津砦略測図

1994.12

あかいわだて

赤岩館 403-019

所在地 飯豊町大字高峰

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『飯豊町史(上)』

概要

本館址は、ふたつの舌状台地を利用して構築されている。舌部先端部を深さ 1m、幅 2m の薬研堀状の堀切ではほぼ同じ大きさの二つの曲輪をつくる。二つの曲輪は、南北 41m、東西 36m で、回りは断崖になっている。

曲輪内からは、縄文土器も出土し、空堀には河原石が敷き詰められていることから、地元ではチャシ跡と伝えられてきたが、詳細については不明である。

(後藤 正浩(樋口 忠一))



赤岩館略測図

1988.7

かみねたてしょ

高峰館屋敷

403-020

所在地 飯豊町大字高峰

築城者 不明

築城時期 室町期

史料 明治初年の地籍図

参考文献 『飯豊町史(上)』

概要

高峰地内を流れる白川の右岸の河岸段丘上に中世の館屋敷と伝えられる遺跡があり、土壘の一部と井戸跡が残っている。

明治初年の地籍図を手がかりに復元すると、南北90m、東西60mの方形館址が確認される。西南に残る土壘は、高さ1.4m、基底部の幅4.6mである。また、南北と東側の土壘の外側には堀跡が確認され、現在は道路として利用されている。



高峰館屋敷略測図

1994.12

(後藤 正浩 (樋口 忠一))

やおちとりで

矢洞砦

403-021

所在地 飯豊町大字高峰「ほか」

築城者 不明

築城時期 平安後期

参考文献 『飯豊町史(上)』

『米沢古誌類纂』

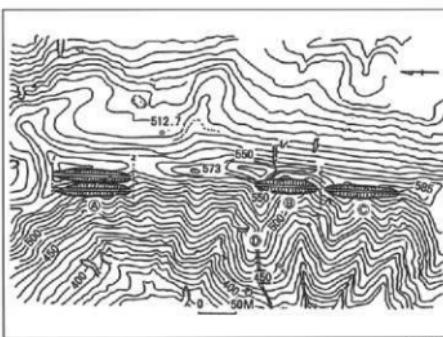
概要

本遺跡は、白川の右岸、標高560mの尾根に自然の斜面を巧みに利用して、空堀が構築されている。

字当道地内には、106mに渡って二重の空堀(A)、字館の越地内

には70m(B)、字大清水地内には100mを越える空堀(C)が断続的に残っている。堀の深さは斜面の変化にともなって、2m~9mの差がある。

麓の矢洞集落は、白川ダム建設とともに全戸移転したが、山腹の金比羅宮跡(D)まで道路がある。



矢洞砦略測図

1994.12

(後藤 正浩 (樋口 忠一))

はしまんだて
八幡館 403-022

所在地 飯豊町大字小坂

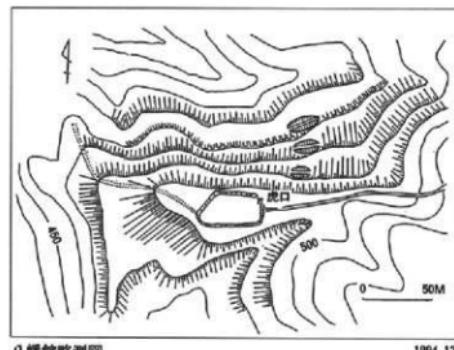
築城者 不明

築城時期 南北朝期

参考文献 『飯豊町史(上)』

概 要

飯豊町と小国町との北境、小国側に西流する盛残川の右岸の標高530mの山頂に構築されている。頂上部に南北20m、東西40mの削平された曲輪があり、その北東隅に八幡宮が祭られている。陥しい自然地形を利用しながら、山腹部には3段からなる横堀状の空堀があり、越後に通ずる古道を監視する軍事的施設と考えられる。



八幡館略測図

1994.12

(後藤 正浩 (樋口 忠一))

こさかあらだて
小坂新館 403-024

所在地 飯豊町大字小坂

築城者 不明

築城時期 鎌倉後期

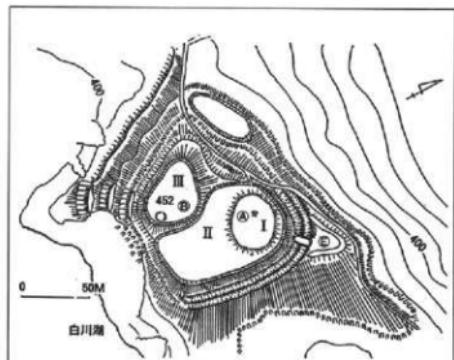
参考文献 『飯豊町史(上)』

『村史なかつがわ』

『大館之録』

概 要

白川の左岸の山頂部に連郭式的に三つの曲輪(I、II、III)がある。その東側に幅2m前後の長さ100m、43mの空堀が二つ並んでいる。北西部には、高さ20m前後の人工の急斜面がある。Aは、八幡宮の祠で、古老によれば、八幡館から移した八幡神社と伝えられ、IIIの曲輪内のBに、物見櫓が建てられていたという。



小坂新館略測図

1994.12

伝承を裏付ける史料はないが、越後へ抜ける古道沿いの交通の要所に位置した山城址と考えられる。

(後藤 正浩 (樋口 忠一))

うわばらだて
上原館 403-026

所在地 飯豊町大字上原

築城者 中津川伯耆守

築城時期 室町期

史 料 伊達家文書

明治初年の地籍図

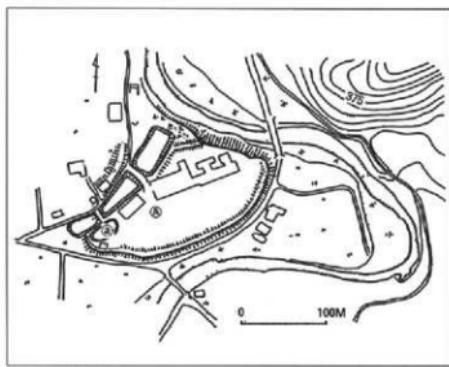
参考文献 『飯豊町史(上)』

『村史なかつがわ』

概 要

本館址は、白川の左岸の海岸段丘上にあり、西部を除いてほとんど20m余の断崖である。北部に20mにわたって土塁が残り、崖上まで延びていたものと考えられる。Aは、館橋と呼ばれている。

西部に高さ4m、幅5mの土塁が50mにわたって残り、その内郭部に三つの縄堀があり、南西の端には眺望のきくテラス状の丘が構築され、aの虎口を防衛したものと考えられる。現在は、中津川中学校の敷地になっているが、当時からの交通の要所であった。
(後藤 正浩(繩口 忠一))



上原館略測図

1988.6

いわくらだて
岩倉館 403-032

所在地 飯豊町大字岩倉

築城者 不明

築城時期 室町期

史 料 明治初年の地籍図

伊達家文書

参考文献 『飯豊町史(上)』

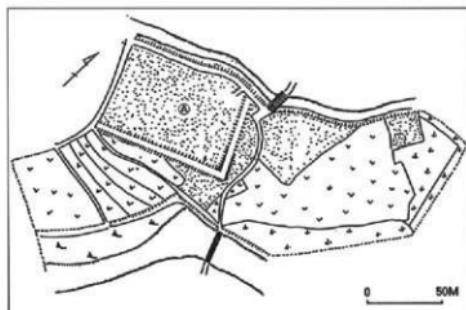
『村史なかつがわ』

概 要

本館址は、白川の左岸、標高400mの河岸段丘上に構築されている。Aは、現在の岩倉神社の境内になっており、地籍図を元に復元すると方形館址であったことが伺える。

土塁は、東北端に確認され、水防をかねて構築されたものと思われる。

伊達家文書によれば、天文の乱のさなかの天文14年(1545年)、小国城主による討入を「岩倉」で防いでいるか、軍事的にも内陸との中継地として要衝に位置していたと思われる。近世期に入ってからは、伊達家が館主を継いだと伝えられている。
(後藤 正浩(繩口 忠一))



岩倉館略測図

1994.12

たてやま
館山 403-033

所在地 飯豊町大字広河原

築城者 不明

築城時期 南北朝期

参考文献 『飯豊町史(上)』

概要

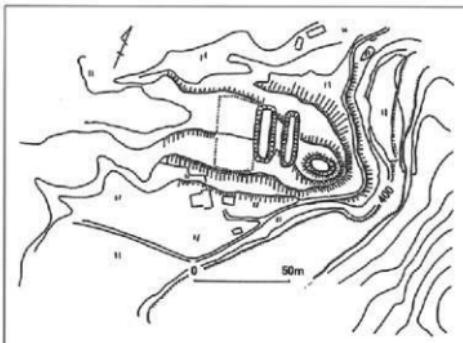
白川の上流部左岸、標高450mの舌状台地状にあり、城砦であつたと伝えられている。

遺構としては、舌状部の先端にテラス状の丘があり、見張り台跡と伝えられている。内郭に添つて、幅13mの空堀が30mにわ

たって残り、その内側に並列して高さ7mの土塁が確認される。

舌状部の奥に、南北90m、東西45mの曲輪があり、館跡として伝えられている。先端部は、道路と接し、断崖になっている。

(後藤 正浩(樋口 忠一))



館山略測図

1988.7

こやどて (たてのぐし)
小屋館 (館のぐし) 403-035

所在地 飯豊町大字小屋

築城者 不明

築城時期 室町期

参考文献 『飯豊町史(上)』

『村史なかつかがわ』

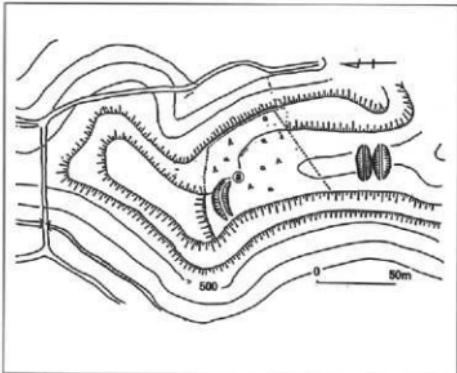
概要

白川の支流、小屋川の左岸標高450mの舌状台地上に位置する。根小屋式の城郭であり、古老は、居館跡といい伝えてきた。

遺構としては、舌状部に幅3.3mの空堀が二重に、20mにわたりて確認される。

aの虎口と推定される部分に土橋があり、現在は雜木林になっているが、そこを中心に、基梯部が100m、上梯部が70mの台形状の館跡が推定される。

(後藤 正浩(樋口 忠一))



小屋館略測図

1994.12